

大阪府堺市・南河内郡美原町所在

ひ き しょう 日 置 莊 遺 跡

—近畿自動車道松原すさみ線および
府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—

分析・考察編

1995.3.

大阪府教育委員会
(財)大阪文化財センター



第V部 基礎分析

目 次

第V部 基礎分析

第1章 陶邑周辺部における須恵器生産点描	江浦 洋
第1節 序説	1
1. 本稿の目的と前提	2. 日置莊遺跡検出の古墳時代遺構概観
第2節 III調査区須恵器窯L-1の基礎的検討	3
1. 須恵器窯L-1出土遺物の基礎分析	
第3節 IV調査区須恵器窯P-1の基礎的検討	16
1. 遺構の概要と分析の前提	2. 須恵器窯P-1床面I出土遺物の基礎分析
3. 陶邑窯跡群におけるヘラ記号資料	4. 須恵器窯P-1をめぐる工人組織
第4節 総説	33
1. 陶邑窯跡群の拡大とその背景	2. 需要と供給に関する予察
第2章 日置莊遺跡IV調査区出土埴輪の基礎分析	森屋美佐子
第1節 はじめに	37
第2節 分類基準	37
1. 数量	2. 円筒埴輪の諸特徴
第3節 分類結果	41
1. 塩輪窯P-1出土埴輪の諸特徴	2. 灰原出土埴輪の諸特徴
第4節 まとめ	49
第3章 日置莊遺跡出土瓦の分析	市本芳三
第1節 製作技法	53
1. 軒丸瓦・丸瓦の製作技法	2. 軒平瓦・平瓦の製作技法
3. 道具瓦の製作技法	
第2節 変遷	60
1. 軒丸瓦	2. 軒平瓦
3. 丸瓦	4. 平瓦
5. 雁振瓦	6. 塙
7. 鬼瓦	
第3節 日置莊遺跡出土瓦の分布	70
1. 出土量の計測方法	2. 分布状況
第4節 まとめ	82
1. 軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ	2. 瓦からみた日置莊遺跡

第4章 平安時代以降の遺物について	鈴柄俊夫
第1節 はじめに	87
第2節 時期別検討	87
1. 9~11世紀	2. 12~13世紀
3. 14世紀	4. 15~16世紀中頃
第5章 II調査区の景観復原	鈴柄俊夫・亀井 聰
第1節 屋敷地配置の変遷	95
第2節 14世紀におけるII調査区村落の存在形態	107
1. 出土資料の個体数分析	2. 出土資料の内容構成
第6章 日置荘遺跡の遺構変遷	鈴柄俊夫
第1節 はじめに	119
第2節 I・III調査区	119
1. I調査区	2. III調査区
第3節 時期別変遷	121
1. 11世紀以前	2. 12世紀
3. 13世紀	4. 14世紀
5. 15~16世紀中葉	
第4節 まとめにかえて	124
第7章 日置荘遺跡I調査区B地区東部出土遺物の基礎分析	中村淳穂 126
第VI部 自然科学的調査	
第1章 自然科学的調査の概要	(江浦) 137
第1節 自然科学的調査の経過	137
第2節 自然科学的調査の概要	138
1. 年代測定	2. 胎土分析
3. 環境分析	4. その他の分析
第2章 画像解析による出土瓦の布目圧痕とその製作年代の相関関係の抽出	
	中谷幸太郎・森脇耕介
第1節 はじめに	143
第2節 画像処理手順	143
1. 前処理	2. 1次元高速フーリエ変換
第3節 画像解析結果	146
第4節 まとめ	146

第3章 日置莊埴輪窯P-1および大阪府下埴輪窯出土埴輪の化学特性について	三辻利一
第1節 はじめに	147
第2節 分析方法	148
第3節 分析結果	148
第4章 日置莊遺跡関連埴輪胎土分析	井上 嶽
第1節 X線回折試験及び化学分析試験	157
1. 実験条件	2. X線回折試験結果の取り扱い
第2節 塩輪類の分析	159
1. X線回折試験	2. 化学分析
第3節 まとめ	162
1. X線回折試験結果	2. 化学分析結果
第5章 日置莊埴輪窯および大阪府下埴輪窯出土埴輪の流通について	パリノ・サーヴェイ株式会社
第1節 重鉱物分析による検証	171
1. はじめに	2. 試料
3. 分析方法	4. 分析結果
5. 考察	6. 重鉱物分析の課題と今後の展開
第2節 薄片観察による検証	179
1. はじめに	2. 薄片試料
3. 分析方法	4. 観察結果
5. 考察	
第3節 塩輪窯と古墳から出土した埴輪の関連性	187
第4節 まとめ	187
1. 鉱物片の特徴	2. 岩石片の特徴
3. 推定焼成温度	4. 各遺跡の埴輪の胎土の特徴と関連性
5. 今後の展開	
第6章 日置莊遺跡関連須恵器胎土分析	井上 嶽
第1節 X線回折試験	193
1. 方法	
第2節 分析結果	193
1. タイプ分類	2. Qt(石英)-P1(斜長石)の相関について
第3節 化学分析	193
1. SiO ₂ -Al ₂ O ₃ の相関について	2. Fe ₂ O ₃ -MgOの相関について
3. K ₂ O-CaOの相関について	

第4節 まとめ	196
第7章 日置荘遺跡中世瓦・土器胎土分析	
第1節 瓦類の分析	井上 嶽 201
1. X線回折試験	2. 化学分析
3. まとめ	
第2節 土器類の分析	205
1. X線回折試験	2. 化学分析
3. まとめ	
第8章 日置荘遺跡周辺の原土分析	
第1節 X線回折試験	井上 嶽 217
1. 方法	
第2節 分析結果	217
1. タイプ分類	2. Qt(石英) - Pl(斜長石)の相関について
第3節 まとめ	220
1. 原土の組成	2. Qt(石英) - Pl(斜長石)の相関
第9章 日置荘遺跡で検出された埴輪窯および須恵器窯の考古地磁気研究	
	前中一晃・伊達宗泰
第1節 はじめに	223
第2節 考古地磁気の原理	223
第3節 遺構の概要	224
第4節 残留磁気測定装置	225
第5節 残留磁気測定結果	225
第6節 考古地磁気年代推定	229
第10章 日置荘遺跡の液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定について	
	山田 治
第1節 はじめに	231
第2節 ¹⁴ C年代測定の原理	231
第3節 ¹⁴ C年代測定の方法	232
1. ¹⁴ C年代測定の方法	2. 結果の読み方
第11章 日置荘II調査区検出の中世遺構採集土壤の花粉・珪藻分析	
	パリノ・サーヴェイ株式会社
第1節 はじめに	237
第2節 F地区における花粉・珪藻分析	238
1. 試料	2. 硅藻化石群集からみた各遺構内の堆積環境

3. 花粉化石群集からみた古植生	4. おわりに
第3節 G地区における花粉・珪藻分析	245
1. 珪藻分析	2. 花粉分析
3. まとめ	

第12章 日置荘Ⅳ調査区採集土壤の花粉、珪藻、プラント・オパール分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節 目的	251
第2節 試料	251
第3節 珪藻分析	251
1. 分析方法	2. 結果および考察
第4節 花粉分析	258
1. 分析方法	2. 結果
3. 考察	
第5節 プラント・オパール分析	263
1. 分析方法	2. 結果と考察
第6節 まとめ	266

第13章 日置荘遺跡出土遺物の分析調査

大澤正己 269

第VII部 考察

第1章 大阪府南部の瓦質土器生産（1）	鶴柄俊夫
第1節 はじめに	289
第2節 研究史抄	290
第3節 分類	292
1. 壺	2. 捶鉢
3. 羽釜	
第4節 編年	297
第5節 まとめにかえて	299

第2章 丹南地域における近代以降の窯業生産

市川秀之

第1節 はじめに	303
第2節 瓦生産	303
第3節 煉瓦生産	305
第4節 土器生産	306
第5節 まとめ	308

第3章 河内萩原寺考

藤澤一夫

1. はしがき	320
2. 日置莊町原寺という地	320
3. 萩原神社の祭神と氏族	320
4. 萩原神社脇の須恵器窯	319
5. 萩原神社の祭祀の氏族	318
6. 萩原寺即ち大聖寺の性格	317
7. 萩原寺の遺物たる屋瓦	317
8. 屋瓦から見た萩原寺史	315
9. 萩原寺創立時の流動性	315
10. 法燈網ぐ近世の大聖寺	314

挿 図 目 次

— 第V部 基礎分析 —

V-1-図1	日置莊遺跡周辺の須恵器窯分布図	2	V-1-図16	須恵器窯P-1	
V-1-図2	須恵器窯L-1			床面I出土のヘラ記号蓋杯(1)	24
	出土須恵器の器種構成	3	V-1-図17	須恵器窯P-1	
V-1-図3	須恵器窯L-1出土器の分類	4		床面I出土のヘラ記号蓋杯(2)	25
V-1-図4	須恵器窯L-1		V-1-図18	床面I出土	
	出土甕口縁部の法量分布	4		ヘラ記号蓋杯の法量分布	27
V-1-図5	蓋杯の同心円紋スタンプ	5	V-1-図19	床面I出土無記号蓋杯の法量分布	28
V-1-図6	須恵器窯L-1		V-1-図20	MT206-1号窯	
	出土蓋杯の属性分類	6		窯体内的須恵器出土状況	29
V-1-図7	桜井谷2-17窯跡の器種構成	8	V-1-図21	須恵器窯P-1	
V-1-図8	蓋杯のヘラ記号	10		床面I共有工人の構成推定図	31
V-1-図9	須恵器窯L-1と小阪須恵器窯		V-1-図22	口縁端部に刻み目を有する	
	出土須恵器の器種構成	10		須恵器の分布	34
V-1-図10	異形杯	17	V-2-図1	日置莊遺跡N調査区埴輪窯P-1	
V-1-図11	須恵器窯P-1			出土の円筒埴輪の透かし位置	41
	出土須恵器の器種構成	17	V-2-図2	日置莊遺跡N調査区埴輪窯P-1	
V-1-図12	須恵器窯P-1出土須恵器拓影	18		出土円筒埴輪断面図1	42
V-1-図13	蓋杯のヘラ記号	19	V-2-図3	日置莊遺跡N調査区埴輪窯P-1	
V-1-図14	須恵器窯P-1			出土円筒埴輪断面図2	43
	床面I出土須恵器の器種構成	20	V-2-図4	日置莊遺跡N調査区埴輪窯P-1	
V-1-図15	須恵器窯P-1			出土円筒埴輪の諸特徴出現頻度	45
	床面I須恵器出土状況	23	V-2-図5	日置莊遺跡N調査区埴輪窯P-1	
				出土埴輪変遷図	51・52

V-3-図1	瓦の部位名称	53	V-5-図4	10m方眼による 遺物の重量集計(3)	98
V-3-図2	丸瓦凹面吊り紐模式図	55	V-5-図5	10m方眼による 遺物の重量集計(4)	99
V-3-図3	瓦觀察表・觀察ポイント	56	V-5-図6	10m方眼による 遺物の重量集計(5)	100
V-3-図4	軒平瓦顎形態模式図	59			
V-3-図5	雁振瓦分類模式図	60	V-5-図7	10m方眼による 遺物の重量集計(6)	101
V-3-図6	軒丸瓦変遷図(1)	62	V-5-図8	10m方眼による 遺物の重量集計(7)	102
V-3-図7	軒丸瓦変遷図(2)	63	V-5-図9	10m方眼による 遺物の重量集計(8)	103
V-3-図8	軒平瓦変遷図(1)	64	V-5-図10	10m方眼による 遺物の重量集計(9)	104
V-3-図9	軒平瓦変遷図(2)	65	V-5-図11	土釜の重量にみる分布の変遷	105
V-3-図10	軒丸瓦・丸瓦各部位の法量変化	68	V-5-図12	戸井分布図	106
V-3-図11	軒平瓦・平瓦各部位の法量変化	69	V-5-図13	II調査区の集落変遷(1)	109
V-3-図12	II調査区軒丸瓦分布図	72	V-5-図14	II調査区の集落変遷(2)	110
V-3-図13	I調査区軒丸瓦分布図	73	V-5-図15	土器の容積・体積の 計測方法模式図	113
V-3-図14	II調査区軒平瓦分布図	74	V-6-図1	I調査区の遺物出土分布図	120
V-3-図15	I調査区軒平瓦分布図	75	V-6-図2	日置庄村落の変遷	122
V-3-図16	II調査区丸瓦分布図	76	V-7-図1	I調査区B地区東部 土器種類分布図	127
V-3-図17	I調査区丸瓦分布図	77	V-7-図2	I調査区B地区東部	
V-3-図18	II調査区平瓦分布図	78	V-7-図3	主要遺構土器分布図(1)	130
V-3-図19	I調査区平瓦分布図	79	V-7-図4	I調査区B地区東部	
V-3-図20	II調査区鬼瓦・ 雁振瓦・熨斗瓦分布図	80	V-7-図5	主要遺構土器分布図(2)	131
V-3-図21	I調査区軒瓦地区別出土量比率	80	V-7-図6	I調査区B地区東部	
V-3-図22	I調査区鬼瓦・ 雁振瓦・熨斗瓦分布図	81	V-7-図7	主要遺構土器分布図(3)	132
V-3-図23	II調査区軒瓦時期別出土量比率	81		I調査区B地区東部	
V-3-図24	軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ	83		主要遺構土器分布図(4)	133
V-3-図25	萩原神社境内出土瓦	84		I調査区B地区東部	
V-4-図1	平安時代以降の遺物変遷図(1)	88		主要遺構土器分布図(5)	134
V-4-図2	平安時代以降の遺物変遷図(2)	89		I調査区B地区東部	
V-4-図3	遺物の出土分布図(1)	90		主要遺構土器分布図(6)	135
V-4-図4	遺物の出土分布図(2)	91		I調査区B地区東部	
V-4-図5	遺物の出土分布図(3)	92		主要遺構土器分布図(7)	
V-5-図1	重量集計用の 10m方眼と調査区の位置	95		遺構別器種構成比(1)	
V-5-図2	10m方眼による 遺物の重量集計(1)	96		遺構別器種構成比(2)	
V-5-図3	10m方眼による 遺物の重量集計(2)	97			

—— 第VI部 自然科学的調査 ——

VI-2-図1 用いた布目圧痕サンプル	143	VI-3-図17 新池群と日置莊群の相互識別	152
VI-2-図2 布目圧痕サンプルに押しつけた 布の画像	143	VI-4-図1 三角ダイヤグラム位置分類図	158
VI-2-図3 古代中世瓦の布目圧痕の 画像解析結果(1)	144	VI-4-図2 長方形ダイヤグラム位置分類図	158
VI-2-図4 古代中世瓦の布目圧痕の 画像解析結果(2)	145	VI-4-図3 Qt-Pt図	160
VI-2-図5 古代中世瓦の布目圧痕の 画像解析結果(3)	146	VI-4-図4 SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	160
VI-2-図6 古代・中世瓦製作年代と 布目圧痕との相関関係	146	VI-4-図5 Fe ₂ O ₃ -MgO図	161
VI-3-図1 K因子の比較	148	VI-4-図6 K ₂ O-CaO図	161
VI-3-図2 Ca因子の比較	148	VI-5-図1 試料の重鉱物組成(1)	175
VI-3-図3 Fe因子の比較	148	VI-5-図2 試料の重鉱物組成(2)	176
VI-3-図4 Rb因子の比較	149	VI-5-図3 試料の重鉱物組成(3)	177
VI-3-図5 Sr因子の比較	149	VI-5-図4 脱土分析試料	
VI-3-図6 Na因子の比較	149	— 菅田白鳥窯輪窓埴輪	189
VI-3-図7 菅田白鳥窯出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-6-図1 Qt-Pt図	194
VI-3-図8 土師の里窯出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-6-図2 SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	194
VI-3-図9 新池窯出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-6-図3 Fe ₂ O ₃ -MgO図	195
VI-3-図10 日置莊・梅町窯出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-6-図4 K ₂ O-CaO図	195
VI-3-図11 ニサンザイ古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-7-図1 Qt-Pt図	202
VI-3-図12 御廟山古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-7-図2 SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	202
VI-3-図13 源エ門山古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-7-図3 Fe ₂ O ₃ -MgO図	204
VI-3-図14 塚廻り古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図	150	VI-7-図4 K ₂ O-CaO図	204
VI-3-図15 新池群と土師の里群の相互識別	152	VI-7-図5 Qt-Pt図	206
VI-3-図16 菅田白鳥群と日置莊群の相互識別	152	VI-7-図6 SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	206
		VI-7-図7 Fe ₂ O ₃ -MgO図	208
		VI-7-図8 K ₂ O-CaO図	208
		VI-8-図1 Qt-Pt図	218
		VI-8-図2 サンプリング地点位置図	219
		VI-9-図1 西日本での伏角・ 偏角永年変化曲線	223
		VI-9-図2 塚廻り古墳出土埴輪の 須恵器窯焼土試料の 直交座標交流消磁図	226
		VI-9-図3 試料採取場所	224
		VI-9-図4 須恵器窯焼土試料の 直交座標交流消磁実験に 伴う残留磁化方位の変化	227

VI-9-図5	埴輪窯焼土試料の 直交座標交流消磁図	228	VI-12-図1	O地区土壤試料採取位置図	252
VI-9-図6	偏角・伏角変化曲線図	230	VI-12-図2	P地区土壤試料採取位置図	252
VI-11-図1	F地区土壤サンプリング位置図	237	VI-12-図3	河道P-2B	
VI-11-図2	F地区主要珪藻化石群集層位分布	240	VI-12-図4	河道P-2B試料における 主要珪藻化石群集変遷	255
VI-11-図3	F地区花粉化石群集層位分布	242	VI-12-図5	河道P-2B試料における 花粉化石群集変遷	261
VI-11-図4	G地区土壤サンプリング位置図	245	VI-12-図6	溝O-18・落込O-1試料	
VI-11-図5	7Gトレンチ試料における 主要珪藻化石群集層位分布	246	VI-12-図7	プラント・オパール産出割合	265
VI-11-図6	6Gトレンチ溝G-119試料における 花粉化石群集分布	248	VI-12-図7	河道P-2B試料	
VI-11-図7	7Gトレンチ落込G-5試料における 花粉化石群集分布	248	VI-13-図1	プラント・オパール産出割合	266
VI-11-図8	7Gトレンチ土坑G-493試料における 花粉化石群集分布	249	VI-13-図2	炉壁溶融スラグのコンピュータープログラム による高速定性分析結果	272
VI-11-図9	8Gトレンチ溝G-352試料における 花粉化石群集分布	249	VI-13-図2	溶融スラグのコンピュータープログラム による高速定性分析結果	272

—— 第VII部 考察 ——

VII-1-図1	甕分類図	293	VII-1-図4	羽釜分類図(2)	297
VII-1-図2	擂鉢分類図	294	VII-2-図1	丹南地域周辺地形図	307
VII-1-図3	羽釜分類図(1)	296			

表 目 次

—— 第V部 基礎分析 ——

V-1-表1	同心円紋スタンプ集計表	8	V-1-表7	須恵器窯P-1	
V-1-表2	須恵器窯L-1			床面I出土須恵器集計表	19
	出土須恵器の破片数集計表	8	V-1-表8	須恵器窯P-1	
V-1-表3	須恵器窯L-1			床面I出土のヘラ記号蓋杯一覧表	21
	出土須恵器の重量集計表	9	V-2-表1	IV調査区出土埴輪數量表	37
V-1-表4	須恵器窯L-1		V-2-表2	IV調査区出土円筒埴輪の 基礎分析表	40
	出土須恵器の口縁残存度集計表	9	V-3-表1	四隅計測法による出土数量	71
V-1-表5	蓋杯のヘラ記号集計表	10	V-3-表2	出土瓦重量	71
V-1-表6	大阪府下における口縁端部に刻み目状 調整を有する須恵器一覧表	15	V-3-表3	I調査区軒瓦地区別出土比率	80

V-3-表4	II調査区軒瓦地区別出土比率	82	V-5-表4	種類別比重（第四紀・井上）	114
V-3-表5	日置在遺跡出土軒瓦		V-5-表5	出土土器の時期別個体重量一覧	114
	同范・同紋・同系関係表	85	V-5-表6	比重計測用資料一覧表	117
V-5-表1	屋地（区画）別重量集計	111	V-7-表1	I調査区B地区東部	
V-5-表2	出土土器の時期別体積一覧	114		土器器種構成表	128・129
V-5-表3	種類別比重（計測分）	114			

—— 第VI部 自然科学的調査 ——

VI-1-表1	自然科学分析一覧表	137	VI-7-表3	中世土器化学分析表（1）	211
VI-2-表1	解析を行った古代・中世瓦一覧	143	VI-7-表4	中世土器化学分析表（2）	212
VI-3-表1	分析値（1）一日置庄窯・日置莊西町窯・ 百舌鳥梅町窯・土師の里窯	154	VI-7-表5	中世土器化学分析表（3）	213
VI-3-表2	分析値（2）一晉田白鳥窯	155	VI-7-表6	中世土器胎土性状表（1）	214
VI-3-表3	分析値（3）一新池窯	156	VI-7-表7	中世土器胎土性状表（2）	215
VI-3-表4	分析値（4）一百舌鳥古墳群	156	VI-7-表8	中世土器胎土性状表（3）	216
VI-4-表1	化学分析表（1）	163	VI-8-表1	胎土性状表（1）	221
VI-4-表2	化学分析表（2）	164	VI-8-表2	胎土性状表（2）	222
VI-4-表3	化学分析表（3）	165	VI-9-表1	須恵器窯焼土試料の 自然残留磁気測定結果	226
VI-4-表4	化学分析表（4）	166	VI-9-表2	須恵器窯焼土試料の 消磁前及び消磁後の平均磁化方位	227
VI-4-表5	胎土性状表（1）	167	VI-9-表3	埴輪窯焼土試料の 自然残留磁気測定結果	227
VI-4-表6	胎土性状表（2）	168	VI-9-表4	須恵器窯の残留磁気測定結果	229
VI-4-表7	胎土性状表（3）	169	VI-9-表5	埴輪窯の残留磁気測定結果	229
VI-4-表8	胎土性状表（4）	170	VI-10-表1	¹⁴ C年代試料一覧表	235
VI-5-表1	試料の分析処理結果状況	173	VI-11-表1	珪藻の生態分類	238
VI-5-表2	試料の重鉱物組成一覧表	174	VI-11-表2	淡水生種の 各生態性に対する適応性	238
VI-5-表3	薄片観察試料一覧表	180	VI-12-表1	O地区分析試料一覧表	251
VI-5-表4	試料の鉱物・岩石比の量比	181	VI-12-表2	O地区採集土壤試料花粉分析結果	258
VI-5-表5	分析試料一覧表（1）	190	VI-12-表3	河道P-2B採集土壤試料 花粉分析結果	259
VI-5-表6	分析試料一覧表（2）	191	VI-12-表4	河道P-2Bにおけるイネ属比率	260
VI-5-表7	分析試料一覧表（3）	192	VI-12-表5	溝O-18採集土壤 プラント・オバール分析結果	265
VI-6-表1	化学分析表（1）	197			
VI-6-表2	化学分析表（2）	198			
VI-6-表3	胎土性状表（1）	199			
VI-6-表4	胎土性状表（2）	200			
VI-7-表1	中世瓦化学分析表	209			
VI-7-表2	中世瓦胎土性状表	210			

VI-12-表6 落込O-1採集土壤	VI-13-表1 供試材の履歴と調査項目	270
プラント・オパール分析結果	VI-13-表2 供試材の化学組成	271
VI-12-表7 河道P-2B採集土壤試料		
プラント・オパール分析結果		266
<hr/> —— 第VII部 考察 ——		
VII-1-表1 分類対照表	VII-2-表1 狹山村の瓦生産	304
VII-1-表2 中世後半期の土器様相		298

写 真 目 次

<hr/> —— 第VI部 自然科学的調査 ——		
VI-13-写真1 梗形状鉄滓の顕微鏡組織	顕微鏡組織	279
VI-13-写真2 梗形状鉄滓と羽口先端溶融	VI-13-写真8 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	280
ガラス質滓の顕微鏡組織	VI-13-写真9 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	281
VI-13-写真3 梗形状鉄滓と羽口先端溶融	VI-13-写真10 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	282
ガラス質滓の顕微鏡組織	VI-13-写真11 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	283
VI-13-写真4 羽口先端溶融ガラス質滓の	VI-13-写真12 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	284
顕微鏡組織	VI-13-写真13 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	285
VI-13-写真5 不定形鉄滓と	VI-13-写真14 送風管と炉壁溶融スラグの	
炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	顕微鏡組織	286
VI-13-写真6 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	VI-13-写真15 炉壁溶融スラグの特性X線像	287
VI-13-写真7 炉壁・羽口先端溶融スラグの	VI-13-写真16 送風管溶融スラグの特性X線像	288

<hr/> —— 第VII部 考察 ——		
萩原寺址出土端丸瓦1および端丸瓦2	311	萩原寺址出土端平瓦1・2
萩原寺址出土端丸瓦3および端丸瓦4	311	および原寺村寺社御改帳
		310

第1章 陶邑周辺部における須恵器生産点描

江浦 洋

第1節 序説

1. 本稿の目的と前提

本稿は大阪文化財センターが行った日置荘遺跡の調査成果を中心とし、陶邑周辺部における須恵器生産の様相を明らかにするために必要な基礎データを総括的に提示することを目的とする。

なお、個別具体的な問題点については、必ずしも充分な検討を加えることができないが、III調査区の須恵器窯L-1出土須恵器については、器種構成の検討とそれに基づく分類、さらには数量的・技法的特徴についての検討を行う。また、IV調査区で検出した須恵器窯P-1については、床面Iから出土した須恵器を対象として、ヘラ記号を基軸とした分析を行い工人組織についても言及する。

したがって、本稿において分析の対象とする遺構はいずれも6世紀代の須恵器窯であるIII調査区の須恵器窯L-1およびIV調査区の須恵器窯P-1である。

いずれも狭義の陶邑窯跡群¹⁾からははずれるものの、それとは無関係であったと考えられない位置に展開する須恵器窯である。以下、出土した須恵器を基軸として分析を加えていくことにしたい。

2. 日置荘遺跡検出の古墳時代遺構概観

日置荘遺跡における古墳時代の遺構分布は濃密とはいえないものの、IV調査区検出の埴輪窯跡をはじめとして重要な遺構を検出している。その位置については図1に示した通りであり、須恵器窯が密集する陶邑窯跡群の中心部からははずれ、その北側約4kmに位置している。以下、各調査区検出の古墳時代の遺構・遺物の概略を列記しておく。

I調査区 西除川左岸部のA地区において古墳時代に帰属すると考えられる掘立柱建物跡5棟とその東側から土器集積遺構である土器群A-1を検出している。土器群A-1では須恵器と土師器が混在して出土しており、時期は6世紀前半である。土師器甌を含む点や須恵器では大型杯のほかに高杯が目立つなどの点が特徴的であり、焼成不良や焼き歪みのある須恵器が僅かに含まれることなど、単なる廃棄の結果とは考えがたいものである。

II調査区 古墳時代に帰属する遺構は少ないが、溝G-119および谷J-2から6世紀代の須恵器蓋杯が出土している。

III調査区 L地区検出の開析谷東岸から6世紀後半の須恵器窯跡1基を検出している（須恵器窯L-1）。上部を大きく削平されているが、窯体下半部以下の構造は比較的良好に遺存している。遺物の詳細については後述するが、器種や技法面で特徴的な須恵器も出土している。また、発掘調査対象とはなっていないが、西側の今池西岸でも同時期の須恵器窯1基を確認している（劍池西窯跡²⁾）。

IV調査区 P地区において検出した開析谷西岸から6世紀後半の須恵器窯P-1および埴輪窯P-1を検出している。当該地は従前の調査で埴輪窯跡（日置荘西町窯）³⁾が確認されていた部分に該当しており、今回検出の窯跡も一連のものと考えられる。埴輪窯P-1では3時期の操業面が検出されており、それぞれから多数の埴輪が出土している。灰原からは人物・家などの形象埴輪も出土しているが、窯体内からは円筒埴輪のみが出土している。6世紀代の円筒埴輪としては大型であることを特徴とする。



V-1-図1 日置荘遺跡周辺の須恵器窯分布図

須恵器窯P-1からは2時期の操業面の存在が報告されており、そのうちの床面Ⅰでは厳密には原位置を保っていないものの、同一ヘラ記号をもつ蓋杯がまとまりをもって出土している。

そのほか、両窓跡の東側谷部で検出した河道P-2からは須恵器生産に関わる叩き板2点と当て具3点が出土している。

第2節 III調査区須恵器窯L-1の基礎的検討

1. 須恵器窯L-1出土遺物の基礎分析

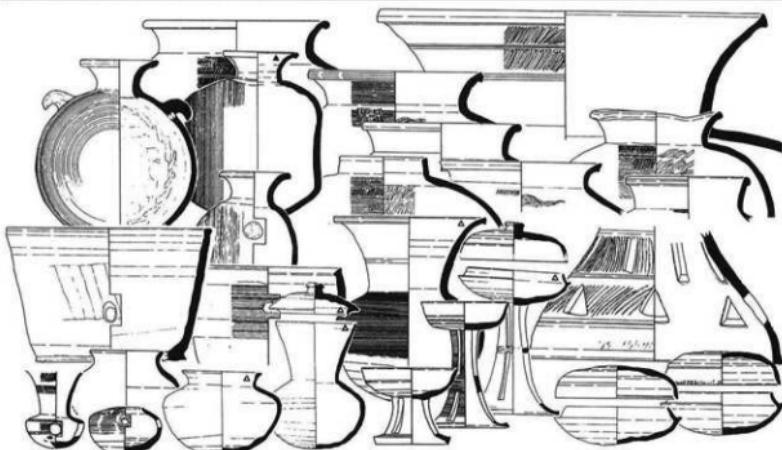
須恵器窯L-1からは破片数にして36,935点、重量にして941.45kgの須恵器が出土している。灰原からは數点の土師器も出土しているが、その大多数は須恵器である。出土した須恵器については当窯における須恵器生産の具体相を明確にし、陶邑窯跡群およびその周辺地域における須恵器生産体制究明のための基礎データを提示することを目的としてすべての出土遺物を観察してデータ化を行った。

作業は、基礎作業として先学の分類に準拠するかたちで、形態による細分作業および技法的特徴の属性分類作業を起点として行い、それを基準として破片数、重量、口縁残存度を計測した。さらに、最も出土数の多い蓋杯のうち、特徴的な技法を有するものをピックアップして個別に検討を加えた。

A 出土須恵器の器種構成

出土した須恵器の器種構成は、その多寡に関わらず列挙すると以下のようになる（図2）。

蓋杯（杯身・杯蓋）、高杯（有蓋短脚高杯・有蓋長脚高杯・無蓋短脚高杯・無蓋長脚高杯）、高杯蓋、甌（有頸甌・無頸甌）、器台、壺（短頸壺・直口壺・広口壺）、壺蓋、提瓶、横瓶、甕、鉢（すり鉢・バケツ形鉢）



V-1-図2 須恵器窯L-1出土須恵器の器種構成
(無印は日置莊須恵器窯L-1、▲はTK85号窯、△は一須賀古墳群出土資料)

灰原出土資料という制約を考慮するならば、生産されていた須恵器のすべてを表出しているとは限らないが、器種構成は同時期の須恵器窯と基本的に類似している。

ただ、当須恵器窯で特徴的な点は、ごく一般的な形態と認知されている須恵器の器種のほかに、バケツ形の鉢⁴⁾や無頸甕⁵⁾などの特異な形態を呈する須恵器もわずかであるが出土していることである。

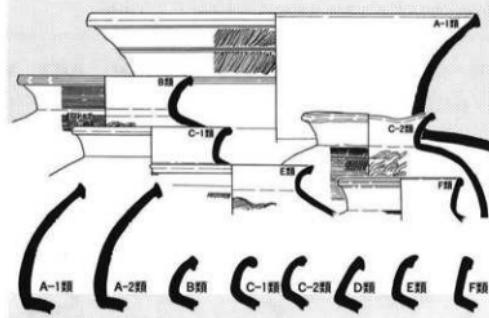
B 須恵器窯L-1出土須恵器の分類

当窯から出土した須恵器の器種は前項で示したように基本的には当該期の須恵器窯出土須恵器の器種構成と大きく変わるものではない。したがって、その分類にあたっても既応の研究⁶⁾に基本的に準拠しており、とくに必要と認められる甕の口縁部形態による細分と蓋杯の技法的特徴による細分作業のみを行っている。ただ、甕の口縁部形態による分類作業については図3に示したような細分を行っているが、これは数量化に際しての作業を進める上での分類作業であり、本稿では略述するにとどめる。

一方、蓋杯の技法的特徴による分類作業については後項で個別具体的な検討を加えることにしたい。なお、本稿において細分作業を行ったもの以外の須恵器については基本的に先学によって規定された器種分類および呼称を用いる。

a. 口縁部形態による甕の分類

出土須恵器の観察および数量化を行うにあたって、その前操作として須恵器甕の口縁部形態を基軸

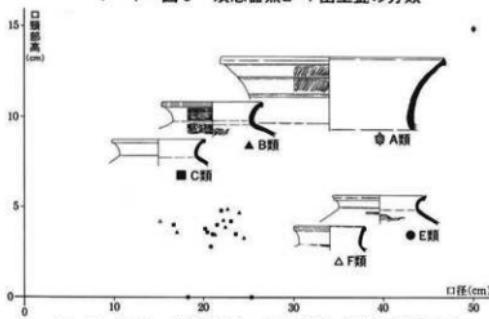


V-1-図3 須恵器窯L-1出土甕の分類

として分類した(図3)。紙幅の関係もあり、その具体的な内容についてはここでは触れず、全体の傾向のみを略述しておく。

当窯から出土した須恵器甕はその口径からは直径50cm前後を測る大型の甕と直径20cm前後を測る甕とに大きく2分することが可能であり、後者の一群ではさらに細分される可能性をもつが、計測した資料が少ないで留保する(図4)。

とくに大型の甕は口縁形態でA類(細部の特徴で2種に細分)としたものが該当し、後者には複数の口縁形態を有する甕が存在する。ここでは個々の記述は控えるが、大型の甕はA類としたもののみで構成され、口縁部外面を2条の凹線によって3段に区画し、斜線紋を有するものである。また、直径20cm前後の一群では複数に分類が可能であるが、カキメ以外には何ら紋様をもたない甕が大勢を占めている。ただし、C類は



V-1-図4 須恵器窯L-1出土甕口縁部の法量分布

玉縁状の口縁端部の形態をもつものであるが、単純に丸くおさめるものをC-1類、強いナデ調整によって面を生じているものをC-2類とした。

b. 製作技法による須恵器蓋杯の分類

須恵器窯L-1出土の須恵器中にあってその大半を占めている蓋杯は、形態面ではきわめて普遍的なものであるが、技法的特徴では留意すべき点が多い。

出土した蓋杯では特徴的な技法をもたない普遍的なものも圧倒的に多いが、外面にヘラ記号を有するもの、内面に同心円紋スタンプを有するもの、杯蓋では口縁端部外面に刻み目状の調整を施すものが、少量ながらも確認され、当該期の須恵器生産を検討する上では軽視できないものである。その分類と細分については図6に示した通りであり、ここでは簡潔に要点のみをまとめておく。

同心円紋スタンプを有する蓋杯 古墳時代を中心として須恵器蓋杯の内面に同心円紋スタンプの押捺が行われているものが存在することはすでに周知されている。筆者は過去に兵庫県明石市鴨谷池遺跡出土の須恵器の報告に際して蓋杯内面に残る同心円紋スタンプを検討する機会を得、不十分ではあったが全国的な集成作業を経て分析を行った¹⁾。その結果、蓋杯内面に残る同心円紋スタンプは内面中心部付近に1回もしくは2回の押捺を行うもの（A類）と押圧範囲が広範でしかもその回数が多いもの（B類）とする分類を提示し（図5）、その製作技術についても言及した。

なお、当塗から出土した蓋杯内面に残る同心円紋スタンプは、その多くが中心部付近に2回の押捺を行うものであり、先の分類のA類に該当する。

ヘラ記号を有する蓋杯 須恵器窯L-1において出土した蓋杯のうちヘラ記号を有するものは破片数にして600点を超えており、ここでは図6に示したA類～H類の8種類のヘラ記号を確認している。分類の基準については図に示した通りであり、ここでは詳述しない。

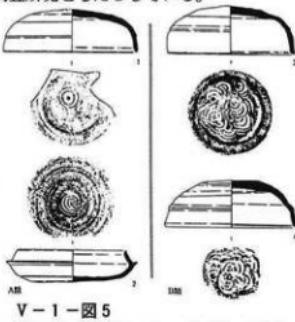
全体的傾向としてはA類が多く、これにD類、B類、H類、C類が続いている。

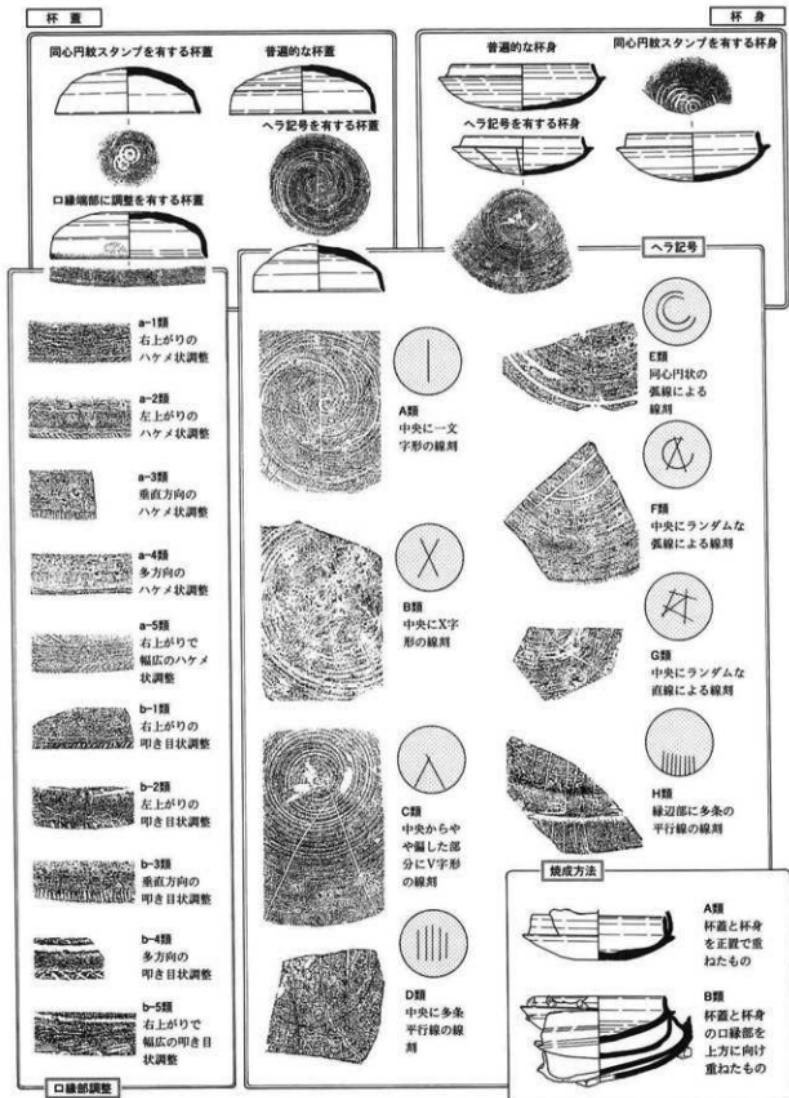
なお、後述する須恵器窯P-1出土蓋杯のヘラ記号では、すべての資料を網羅的に観察したわけではないが、A類、B類、C類、D類、G類の他、須恵器窯L-1では確認できない鳥足形のヘラ記号を有する一群（I類）が出土している。

須恵器窯L-1の場合においてはヘラ記号をもつ蓋杯はいずれも灰原からの出土であり、遺構との関係を把握するには至らないが、須恵器窯P-1では窯体内において複数のヘラ記号をもつ蓋杯の一群がまとまって出土しており、ヘラ記号の意味を考える上で重要な調査所見をもたらしている。

口縁端部に刻み目状の調整を有する杯蓋 須恵器窯L-1から出土した杯蓋にはわずかであるが、口縁端部外面に刻み目状の調整を施したもののが確認される。

この調整は例外なく杯蓋の口縁部外面に限定されており、杯身口縁部に施されることはない。なお、この調整は細部の特徴から口縁を上方に向かって一次成形の段階になされたもので可能性が高い。出土点数は300点弱であり、蓋杯全体からみると少量である。しかしながら、調整技法は多様であり、大別してハケ調整に類似する技法によって残されたもの（a類）と叩き調整に類似する技法によって残されたもの（b類）に分類される。その内訳をみるとa類とb類の出土比率は10：1前後でa類が





V-1-図6 須恵器窯L-1出土蓋杯の属性分類

圧倒的に多い。大勢を占めるa類を刻み目の方向を基軸として細分し、これをそのままb類にも適用している。ただし、この細分については必ずしも有意な分類とはいえないが、製作工人の同定にあたっては意味をもつものであると考える。

c. 焼成方法による須恵器蓋杯の分類

須恵器窯という性格上、出土した須恵器の中には溶着資料も少なからず含まれている。とくに溶着資料のうち、蓋杯を見ると杯身に杯蓋をかぶせた合口の状態で焼成しているもの（A類）と、杯蓋・杯身にわざわざ縁部を一定方向に向けて重ねて焼成されたもの（B類）に分かれることが確認できる。ちなみに須恵器窯L-1ではB類で焼成された蓋杯が多く、IV調査区で検出された須恵器窯P-1の床面Iから検出した蓋杯ではA類の焼成方法が大勢を占めていることが看取される。

C 須恵器窯L-1出土須恵器の数量的検討

須恵器窯L-1に関連して出土した須恵器は先に示した分類を基軸として、そのすべてを対象に観察を加え、破片数、重量、口縁残存度のカウントを行った。その結果は表2~4に掲げた通りである。

なお、前提となる計測方法を以下に略述しておく。

破片数の計測は、個々の破片を1点と数え、接合資料においても接合した破片の一つずつをカウントした。また、重量の計測は最少目盛り5gの秤を使用して、10g以下を四捨五入し、10gを最少単位とした。なお、計測に際しては遺構ないしは登録番号単位で同一器種複数個を同時に計量することを基本とし、1点ごとの個別計量は行っていない。

口縁残存度は須恵器の口径に応じた複数の同心円とそれを放射状に32等分した作業台を用いて行い、1~32までの数値で表記し、それを加算している。また、それ以下の数値については目測による四捨五入を行っている。表4に示した数値はこの方法によるものであり、口縁残存度32をもって計算上の1個体であることを示している。

以下では、器種構成などの検討を具体的に行っていくが、1基の須恵器窯における出土量や器種構成の検討のためにいたずらに紙幅を費やすことを避け、時期のあるいは異なる地域の須恵器窯との比較検討を通じて、時期的、地域的な須恵器生産について検討を行うことにしたい。

なお、小阪遺跡H地区須恵器窯灰原出土資料（以下、小阪須恵器窯と略称）にはTK216型式からTK10型式までの3時期の須恵器が含まれることが報告されており、その結果、2基以上の窯体の存在が指摘されている¹⁾。なお、出土資料の数量計測についての詳細は報告に記されている通り、すべての出土資料を対象としたものではなく、統計的手法に基づいて任意に抽出した242コンテナを対象としたものである。時期幅をもった複数の須恵器窯によって形成された灰原であるという状況を考えると報告书中で提示された数量的なデータの扱いも慎重にならざるを得ないが、ここでは須恵器窯L-1に先行する須恵器窯における器種構成を比較するための参考資料として俎上にあげる。

また、桜井谷窯跡群2-17窯跡（以下、桜井谷2-17と略称）については2時期にわたる操業が確認されており、第1次窯がTK10型式の新しい段階からTK43型式であり、第2次窯は一部で第1次窯と重複する時期の遺物を含んでTK209型式までの須恵器を含んでいる²⁾。したがって、当該窯は須恵器窯L-1の造営年代と重なりながらもやや新しい段階まで存続する須恵器窯といえる。陶邑とは異なる生産体制の中に位置する須恵器窯との比較からその類似点と相違点の検討を可能な限り行ってみたい。

a. 破片数（表2）

破片数は全体で36,935点を数え、その68.5%を蓋杯、29.8%を甕が占めている。それに対して、左記

の器種以外の高杯・甕・器台・壺・提瓶・横瓶・鉢・高杯蓋・壺蓋は合計しても2%に満たない数値となっている。一部で壺類の胴部や有蓋高杯の杯部をそれぞれ甕・蓋杯としてカウントしていることがあるなどといった点を考慮しても、その誤差はわずかなものと推測する。

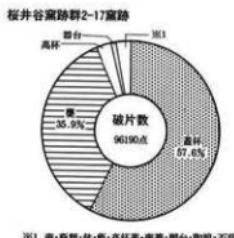
なお、小阪須恵器窯をみると蓋杯が56.1%で過半数を占め、甕が25.1%で続くという点では共通するが、須恵器窯L-1では僅かであった他の器種が18.8%と5分の1近くを占めている点で相違する。

また、桜井谷2-17における破片計測データをもとに作成したグラフをみると総数96,190点に対して、蓋杯の占める割合が57.6%、甕が35.9%であり、両者が9割以上を占めるという点で須恵器窯L-1に近似した状況が看取される。ここでは重量ならびに口縁残存度による計測は行われていないが、破片数による器種構成比率が須恵器窯L-1に近似している点は留意される。間接的ではあるものの器種構成の実態を須恵器窯L-1の検討によって類推できる可能性をも示唆している。

b. 重量 (表3)

出土した須恵器は総重量941.45kgをはかり、当然の結果として個体重量が他器種を大きく凌駕する甕類が50.8%という値を示し、46.1%の蓋杯を超えている。この場合においても他器種の占める割合は僅少であり、わずか3%を占めるにすぎない。

なお、小阪須恵器窯では重量比において甕が4分の1前後と、破片数での構成比と大きく変化していないが、これは甕の破片一片当たりの重量が須恵器窯L-1のもの2倍近い重量を有していることに起因している。したがって、基本的に破碎した状態で出土することが多い甕の場合においては、破片の大きさが多様であり、全体の器種構成を推定する上においては優位なデータとはなりえないようである。



V-1-図7
桜井谷2-17窯跡の器種構成

V-1-表1 同心円紋スタンプ集計表

器種	遺構	床面					合計
		L-34	L-35	L-36	L-12	灰塵	
甕	2	13	7	8	1	3	34
甕身		8	3	1		3	15
蓋杯不明	2	27	15	7	5	63	119
高杯						6	6
高杯蓋						4	4
合計	4	48	25	16	6	79	176

V-1-表2 須恵器窯L-1出土須恵器の破片数集計表

器種	持続的特徴	床面					合計				
		土塗	土坑	土坑	溝	灰塵					
甕	通常	58	381	282	108	164	81	3148			
甕	通常+埋	22	118	33	3	76	1	1280	1535		
口縁付み日	2	31	11	1	10			240	295		
同心円紋	2	13	7	8	1			0	31		
口縁付	48	27	12	1	1			120	211		
口縁付	2	42	11	1	1			18	21		
合計	0	84	425	361	130	292	7	3	4710	8171	
通常+埋	20	255	181	76	77	6		1742	3554		
通常直口	22	110	115	23	106	5		1928	2309		
同心円紋	8	3	1					0	15		
口縁付	48	27	12	1	1			120	211		
口縁付	2	18	14	1	1			21	21		
合計	1	44	400	331	106	186	12	0	3477	4792	
通常形	131	569	484	139	365	7	2	12048	13745		
ヘラ形	4	11	13	8	18			420	480		
同心円紋	2	27	15	7	5			63	119		
合計	0	137	807	512	154	368	7	2	12537	14344	
甕	通常	1							0	1	
甕	通常+埋	1							0	1	
口縁付	1	22	5						171	200	
口縁付	1	1	1						7	10	
合計	0	2	24	6	1	1	0	0	190	224	
高杯	通常	1							0	0	
高杯	つまみ	0	0	1	0	0			14	15	
高杯	C縁	0	2	7	1				7	10	
高杯	脚	0	1	1	1				23	26	
合計	0	0	4	7	1	0	0	0	36	40	
合計	0	2	0	1	0	0	0	0	5	6	
甕	通常	5							0	5	
甕	通常+埋	1							1	1	
甕	口縁	1	1	1	1	1			15	15	
合計	0	1	0	10	11	1	0	0	161	209	
甕	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	
甕	C縁	1	1	1	1				4	7	
甕	脚	2	8	21	14	2			134	180	
合計	0	2	9	22	15	2	0	0	140	180	
甕	0	0	1	0	17	0	0	0	17	18	
合計	0	0	1	0	17	0	0	0	17	18	
甕	0	5	12	13	7	5	0	0	47	53	
甕	A-1型	0							57	63	
甕	A-2型	2							15	17	
甕	脚	6				4	1	14	25	25	
甕	G-1型	1	9	20	1				169	200	
甕	口縁付	1	2						5	5	
甕	E縁	1							15	15	
甕	F縁								9	9	
甕	その他								11	11	
甕	脚	16	320	258	409	187	1	1	9470	10671	
合計	0	17	337	284	414	191	2	1	8773	11070	
甕	合計	1	294	2920	1697	846	1027	26	0	31176	36993

c. 口縁残存度

口縁残存度の計測については先に記したような方法を用いており、残存度32をもつて計算上の1個体としている。すでに記してきたように破片数、重量ともに破片の大ささに左右されやすいが、それに対して口縁残存度による個体数推定は存在していた最少個体の数量を推測する上においては最も有効な方法といえる。ただ、器種によっては口縁部を全く遺存しないものもあるが、全体からすれば、こういった資料はごくわずかである。したがって、大勢を占めている蓋杯と甕、さらにはそれ以外の器種との構成比を検証する上においては大きな影響を与えるものではないといえる。

ちなみに須恵器窯L-1における口縁残存度からみた器種構成をみると蓋杯が91.9%で全体の9割以上を占め、甕が6.0%、それ以外の器種は1.9%にすぎない。

須恵器窯の灰質出土須恵器という資料上の制約を考慮する必要はあるものの、その数は数万点を超えるものであり、そこで生産されていた須恵器の器種構成比の実態をかなり反映しているものであると判断する。陶邑窯跡群の中心部からはやや距離をおいてはいるが、岡山県瀬戸内海沿岸地域における6世紀後半代の須恵器生産の具体相を示す基礎データとして提示しうるものと考える。

また、同様に陶邑窯跡群の周辺地域に位置し、日置荘遺跡の須恵器窯L-1からは東南東約4kmに位置する小阪遺跡と比較しておくことにしたい。

小阪須恵器窯灰原出土の須恵器の口縁残存度による器種構成をみると蓋杯が65.3%で過半を占める点は共通するが、甕は9.1%と少なく、10.1%を占める高杯を下回っている。個々の比較は避けるが、全体として甕の構成比にはさほど大きな差がないも

V-1-表3 須恵器窯L-1出土須恵器の重量集計表

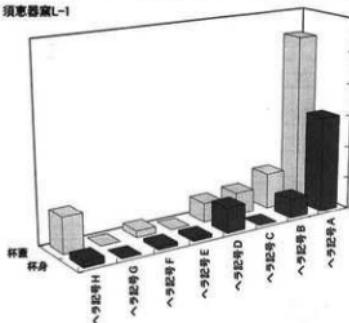
器種	社法的特徴	画面1	土L-34	土L-35	土L-36	土L-37	土L-38	土L-39	土L-40	土L-41	土L-42	土L-43	土L-44	土L-45	土L-46	土L-47	土L-48	土L-49	土L-50	土L-51	土L-52	土L-53	土L-54	土L-55	土L-56	土L-57	土L-58	土L-59	土L-60	土L-61	土L-62	土L-63	土L-64	土L-65	土L-66	土L-67	土L-68	土L-69	土L-70	土L-71	土L-72	土L-73	土L-74	土L-75	土L-76	土L-77	土L-78	土L-79	土L-80	土L-81	土L-82	土L-83	土L-84	土L-85	土L-86	土L-87	土L-88	土L-89	土L-90	土L-91	土L-92	土L-93	土L-94	土L-95	土L-96	土L-97	土L-98	土L-99	土L-100	土L-101	土L-102	土L-103	土L-104	土L-105	土L-106	土L-107	土L-108	土L-109	土L-110	土L-111	土L-112	土L-113	土L-114	土L-115	土L-116	土L-117	土L-118	土L-119	土L-120	土L-121	土L-122	土L-123	土L-124	土L-125	土L-126	土L-127	土L-128	土L-129	土L-130	土L-131	土L-132	土L-133	土L-134	土L-135	土L-136	土L-137	土L-138	土L-139	土L-140	土L-141	土L-142	土L-143	土L-144	土L-145	土L-146	土L-147	土L-148	土L-149	土L-150	土L-151	土L-152	土L-153	土L-154	土L-155	土L-156	土L-157	土L-158	土L-159	土L-160	土L-161	土L-162	土L-163	土L-164	土L-165	土L-166	土L-167	土L-168	土L-169	土L-170	土L-171	土L-172	土L-173	土L-174	土L-175	土L-176	土L-177	土L-178	土L-179	土L-180	土L-181	土L-182	土L-183	土L-184	土L-185	土L-186	土L-187	土L-188	土L-189	土L-190	土L-191	土L-192	土L-193	土L-194	土L-195	土L-196	土L-197	土L-198	土L-199	土L-200	土L-201	土L-202	土L-203	土L-204	土L-205	土L-206	土L-207	土L-208	土L-209	土L-210	土L-211	土L-212	土L-213	土L-214	土L-215	土L-216	土L-217	土L-218	土L-219	土L-220	土L-221	土L-222	土L-223	土L-224	土L-225	土L-226	土L-227	土L-228	土L-229	土L-230	土L-231	土L-232	土L-233	土L-234	土L-235	土L-236	土L-237	土L-238	土L-239	土L-240	土L-241	土L-242	土L-243	土L-244	土L-245	土L-246	土L-247	土L-248	土L-249	土L-250	土L-251	土L-252	土L-253	土L-254	土L-255	土L-256	土L-257	土L-258	土L-259	土L-260	土L-261	土L-262	土L-263	土L-264	土L-265	土L-266	土L-267	土L-268	土L-269	土L-270	土L-271	土L-272	土L-273	土L-274	土L-275	土L-276	土L-277	土L-278	土L-279	土L-280	土L-281	土L-282	土L-283	土L-284	土L-285	土L-286	土L-287	土L-288	土L-289	土L-290	土L-291	土L-292	土L-293	土L-294	土L-295	土L-296	土L-297	土L-298	土L-299	土L-300	土L-301	土L-302	土L-303	土L-304	土L-305	土L-306	土L-307	土L-308	土L-309	土L-310	土L-311	土L-312	土L-313	土L-314	土L-315	土L-316	土L-317	土L-318	土L-319	土L-320	土L-321	土L-322	土L-323	土L-324	土L-325	土L-326	土L-327	土L-328	土L-329	土L-330	土L-331	土L-332	土L-333	土L-334	土L-335	土L-336	土L-337	土L-338	土L-339	土L-340	土L-341	土L-342	土L-343	土L-344	土L-345	土L-346	土L-347	土L-348	土L-349	土L-350	土L-351	土L-352	土L-353	土L-354	土L-355	土L-356	土L-357	土L-358	土L-359	土L-360	土L-361	土L-362	土L-363	土L-364	土L-365	土L-366	土L-367	土L-368	土L-369	土L-370	土L-371	土L-372	土L-373	土L-374	土L-375	土L-376	土L-377	土L-378	土L-379	土L-380	土L-381	土L-382	土L-383	土L-384	土L-385	土L-386	土L-387	土L-388	土L-389	土L-390	土L-391	土L-392	土L-393	土L-394	土L-395	土L-396	土L-397	土L-398	土L-399	土L-400	土L-401	土L-402	土L-403	土L-404	土L-405	土L-406	土L-407	土L-408	土L-409	土L-410	土L-411	土L-412	土L-413	土L-414	土L-415	土L-416	土L-417	土L-418	土L-419	土L-420	土L-421	土L-422	土L-423	土L-424	土L-425	土L-426	土L-427	土L-428	土L-429	土L-430	土L-431	土L-432	土L-433	土L-434	土L-435	土L-436	土L-437	土L-438	土L-439	土L-440	土L-441	土L-442	土L-443	土L-444	土L-445	土L-446	土L-447	土L-448	土L-449	土L-450	土L-451	土L-452	土L-453	土L-454	土L-455	土L-456	土L-457	土L-458	土L-459	土L-460	土L-461	土L-462	土L-463	土L-464	土L-465	土L-466	土L-467	土L-468	土L-469	土L-470	土L-471	土L-472	土L-473	土L-474	土L-475	土L-476	土L-477	土L-478	土L-479	土L-480	土L-481	土L-482	土L-483	土L-484	土L-485	土L-486	土L-487	土L-488	土L-489	土L-490	土L-491	土L-492	土L-493	土L-494	土L-495	土L-496	土L-497	土L-498	土L-499	土L-500	土L-501	土L-502	土L-503	土L-504	土L-505	土L-506	土L-507	土L-508	土L-509	土L-510	土L-511	土L-512	土L-513	土L-514	土L-515	土L-516	土L-517	土L-518	土L-519	土L-520	土L-521	土L-522	土L-523	土L-524	土L-525	土L-526	土L-527	土L-528	土L-529	土L-530	土L-531	土L-532	土L-533	土L-534	土L-535	土L-536	土L-537	土L-538	土L-539	土L-540	土L-541	土L-542	土L-543	土L-544	土L-545	土L-546	土L-547	土L-548	土L-549	土L-550	土L-551	土L-552	土L-553	土L-554	土L-555	土L-556	土L-557	土L-558	土L-559	土L-560	土L-561	土L-562	土L-563	土L-564	土L-565	土L-566	土L-567	土L-568	土L-569	土L-570	土L-571	土L-572	土L-573	土L-574	土L-575	土L-576	土L-577	土L-578	土L-579	土L-580	土L-581	土L-582	土L-583	土L-584	土L-585	土L-586	土L-587	土L-588	土L-589	土L-590	土L-591	土L-592	土L-593	土L-594	土L-595	土L-596	土L-597	土L-598	土L-599	土L-600	土L-601	土L-602	土L-603	土L-604	土L-605	土L-606	土L-607	土L-608	土L-609	土L-610	土L-611	土L-612	土L-613	土L-614	土L-615	土L-616	土L-617	土L-618	土L-619	土L-620	土L-621	土L-622	土L-623	土L-624	土L-625	土L-626	土L-627	土L-628	土L-629	土L-630	土L-631	土L-632	土L-633	土L-634	土L-635	土L-636	土L-637	土L-638	土L-639	土L-640	土L-641	土L-642	土L-643	土L-644	土L-645	土L-646	土L-647	土L-648	土L-649	土L-650	土L-651	土L-652	土L-653	土L-654	土L-655	土L-656	土L-657	土L-658	土L-659	土L-660	土L-661	土L-662	土L-663	土L-664	土L-665	土L-666	土L-667	土L-668	土L-669	土L-670	土L-671	土L-672	土L-673	土L-674	土L-675	土L-676	土L-677	土L-678	土L-679	土L-680	土L-681	土L-682	土L-683	土L-684	土L-685	土L-686	土L-687	土L-688	土L-689	土L-690	土L-691	土L-692	土L-693	土L-694	土L-695	土L-696	土L-697	土L-698	土L-699	土L-700	土L-701	土L-702	土L-703	土L-704	土L-705	土L-706	土L-707	土L-708	土L-709	土L-710	土L-711	土L-712	土L-713	土L-714	土L-715	土L-716	土L-717	土L-718	土L-719	土L-720	土L-721	土L-722	土L-723	土L-724	土L-725	土L-726	土L-727	土L-728	土L-729	土L-730	土L-731	土L-732	土L-733	土L-734	土L-735	土L-736	土L-737	土L-738	土L-739	土L-740	土L-741	土L-742	土L-743	土L-744	土L-745	土L-746	土L-747	土L-748	土L-749	土L-750	土L-751	土L-752	土L-753	土L-754	土L-755	土L-756	土L-757	土L-758	土L-759	土L-760	土L-761	土L-762	土L-763	土L-764	土L-765	土L-766	土L-767	土L-768	土L-769	土L-770	土L-771	土L-772	土L-773	土L-774	土L-775	土L-776	土L-777	土L-778	土L-779	土L-780	土L-781	土L-782	土L-783	土L-784	土L-785	土L-786	土L-787	土L-788	土L-789	土L-790	土L-791	土L-792	土L-793	土L-794	土L-795	土L-796	土L-797	土L-798	土L-799	土L-800	土L-801	土L-802	土L-803	土L-804	土L-805	土L-806	土L-807	土L-808	土L-809	土L-810	土L-811	土L-812	土L-813	土L-814	土L-815	土L-816	土L-817	土L-818	土L-819	土L-820	土L-821	土L-822	土L-823	土L-824	土L-825	土L-826	土L-827	土L-828	土L-829	土L-830	土L-831	土L-832	土L-833	土L-834	土L-835	土L-836	土L-837	土L-838	土L-839	土L-840	土L-841	土L-842	土L-843	土L-844	土L-845	土L-846	土L-847	土L-848	土L-849	土L-850	土L-851	土L-852	土L-853	土L-854	土L-855	土L-856	土L-857	土L-85

の、高杯・壺などの器種がほぼ4分の1を占めている点で須恵器窯L-1における須恵器器種構成比に顕著な相違点を見いだすことができる。

先述の通り、当該須恵器窯は須恵器窯L-1にやや先行する時期を中心とするものであり、ここでの器種構成の相違は年代的に異なる須恵器生産の特質を顕在化したものであると考える。

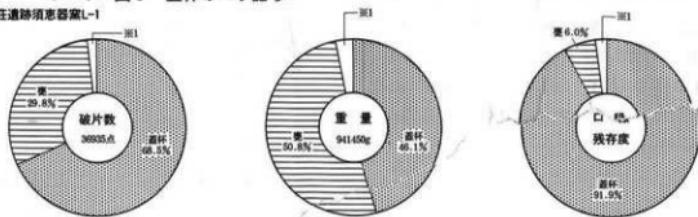
d. 数量的検討の展望

以上、破片数・重量・口縁残存度という3種の異なる方法によって須恵器窯L-1出土須恵器の数量的検討を行い、すでにデータが提示されている堺市小阪須恵器窯と桜井谷2-17窯跡との比較を行った。結果的に破片数、重量に器種構成比では何らの加工も行わな
須恵器窯L-1

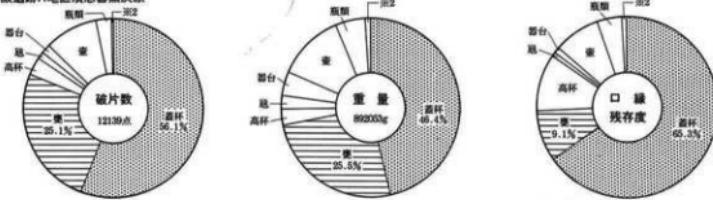


V-1-図8 蓋杯のヘラ記号

日置在跡須恵器窯L-1



小阪跡H地区須恵器窯灰原



V-1-図9 須恵器窯L-1と小阪須恵器窯出土須恵器の器種構成

いデータの提示では誤差が大きく、最少個体数の推定による器種構成比の検討には口縁残存度の計測が最も有効な手段となっている。

しかしながら、破片数および重量の計測が全く無意味なことであるかというとそうではない。桜井谷2-17窯跡では出土した須恵器のように破片数の計測データのみが提示されているものもあり、これが先述のように日置荘須恵器窯L-1における破片数による器種構成比と近似した状況を示しているのである。このことは間接的ではあるものの、最少個体数の構成比も近似したものであった可能性を示唆している。

現段階では一般化できるものではないが、参考程度に日置荘須恵器窯L-1および小阪須恵器窯出土の須恵器蓋杯および壺の破片数と口縁残存度によって推定される個体数との関係を示す。なお、須恵器窯L-1の灰原は本文中にも記したように一部2次的に自然流路に流出して細かく破碎しており、ここでは比較的原位置を保って出土した土坑L-34、35、36、溝L-12出土資料を対象として、小阪須恵器窯と比較するのが適当と考え、上記の遺構出土資料のみを抽出して合計している。

須恵器窯L-1 蓋杯破片数 4,144点 → 推定個体数 253.81点

壺破片数 1,226点 → 推定個体数 12.06点

小阪須恵器窯 蓋杯破片数 6,816点 → 推定個体数 511.3点

壺破片数 3,044点 → 推定個体数 71.6点

上記の関係をみると須恵器窯L-1では、計算上においては1点の蓋杯は平均して16.3片に破碎していることになる。一方の小阪須恵器窯では13.3片をもって計算上の1個体となっている。

同様のことを壺でみると前者では1個体当たり101.7片、後者では42.5片と倍以上の開きを生じている。壺の場合、個体の大きさなどに左右されやすく、破片の大きさが一律ではないという事実を追認させられる。それに対して、蓋杯の場合には時期的に若干の形態差はあるとはいえ、法量に大差なく、1個体当たりの平均的な破片数は比較的近い数値を示している。

先にも記したように、わずかな資料のみの検討でもあり、現段階では一般化しうるものではないが、蓋杯に限っていえば、破片数に一定の係数を乗することによって、推定個体数をある程度まで絞り込むことが可能であるともいえる。

上記の2例のみで平均化することには無理があるが、須恵器窯L-1の場合では蓋杯破片数に0.061を乗ると推定個体数となり、小阪須恵器窯の場合、0.075を乗ることによって推定個体数の値となる。したがって、現状では確度の高い係数を提示することはできないが、須恵器窯の灰原出土資料の場合、蓋杯破片数に0.061から0.075を前後する数値を乗ることによって得られた答えが個体数に近似した数値であるといえる。

残念ながら、壺の場合には破片であっても個体ごとの法量の格差が破片・重量に大きな影響を及ぼしており、破片数のみの計測による器種構成比では、実際の個体数をはるかに上回る比率を占めることが多く、目の数値に惑わされて実像を見失う結果となる。破片数比・重量比による単純な器種構成比の算出は控えねばならない。

D 須恵器窯L-1 出土須恵器の技法的特徴

以上、須恵器窯L-1出土須恵器の数量計測を基軸として、他遺跡の須恵器窯との比較検討を行った。わずかな類例をもって一般化することはできないが、今後、須恵器生産の地域的・時代的特性を解明する上で器種構成や生産量の推定は重要な基礎材料となるものと考える。

しかし、これ以外に生産された須恵器にみられる製作上の技法的特徴も、須恵器生産の地域性・時代

的特質を考える上で重要かつ不可欠な要素といえる。

ここでは、当窯跡から出土している須恵器のうちでも最も出土点数が多く、しかも顯著な技法的特徴を有している蓋杯を俎上にあげて検討を行うことにしたい。なお、蓋杯のうちでも特筆すべき技法的特徴を有するものについては、前提となる分類作業の過程でその特徴を一瞥しておいた。ここでは、個別具体的に技法的特徴についてみていくことにしたい。なお、以下では須恵器窯L-1を基軸として記述を進めるが、技法的特徴に類似するものが多いⅣ調査区の須恵器窯P-1出土須恵器との比較検討もあわせて行うこととする。

a. ヘラ記号を有する蓋杯の検討

須恵器窯L-1からはヘラ記号を有する蓋杯が、破片数にして620点出土しており、その一覧は表5に示している。ただ、これらの中には破片資料も多数含まれており、部分的に残存していた場合には先に示した分類中のいずれに該当するかを判断するのが困難な場合も多い。しかも、細片の場合ではヘラ記号の全容を知りうることは困難であり、細片で1条の線刻のみが確認される場合には、いずれもA類をしている。細片での出土が多い、灰原資料においてA類が多いのはこのような状況に起因しており、これが必ずしも実態を示しているものではないことを明記しておく。

しかしながら、完形品を含む残存状態の良好な資料のみをピックアップした場合においても先に示した8種類のヘラ記号の存在は確実であり、A類が他類を凌駕することも事実である。

上記のように当窯出土須恵器蓋杯に残るヘラ記号はその絶対数にはやや問題を残すものの、その傾向を示すと、A類・B類・D類が多く、それにH類およびC類が続くという状況を示している。なお、表5には遺構別の出土点数も示しているが、いずれにしても灰原を構成する遺構からの出土であり、特筆すべき状況を見いだすことはできない。

それに対してⅣ調査区の須恵器窯P-1では窯体の床面Iからは厳密には原位置を保ってはいないものの、同一ヘラ記号をもつ杯身・杯蓋がセットで、しかもまとまって焼成されていた可能性が明らかとなっている。これはヘラ記号のもつ意味を考える上において非常に重要な情報を提供しているものであり、この点については後述する。

b. 同心円紋スタンプを有する蓋杯の製作技法

蓋杯の内面に残る同心円紋スタンプについてはすでに多くの先学が注目し、その検討を行っている。基本的に蓋杯製作技術の一工程の痕跡を示すものとして捉えるという点では共通しているが、その痕跡がいかなる過程で残されたものかという点に至っては必ずしも見解は一致していない。

この問題については過去に検討を加えたものがあるので、ここでは詳述しないが、これまでの見解を一瞥すると、おおむね以下のようになる。

同心円紋當て具シッタ代用痕跡説（田辺昭三・植野浩三・八賀晋）

田辺氏は蓋杯内面に残る同心円紋當て具の痕跡がヘラ削りのシッタの代わりとして同心円紋當て具を利用した結果、生じた痕跡であるとする¹⁰。加えて、粘土紐を巻き上げて作成した粗形を同心円紋當て具で押圧してロクロ盤上に固定して、回転ナデをはじめとするロクロ成形を行った際の痕跡である可能性を指摘している。時期的には仕上げ工程の省略の著しい6世紀以降の蓋杯にその痕跡を残すものが多いことを指摘する。

植野氏は同心円紋スタンプの痕跡を残す蓋杯について、より詳細な検討を行い、その痕跡が杯身・杯蓋の外側のヘラ削りの際にシッタの代用として用いられた同心円紋當て具によるものであるとし、基本

的に田辺説を支持している¹¹⁾。時期的にはTK47型式の段階に出現し、TK43型式の段階に消滅することを指摘する。

八賀氏も基本的には田辺・植野両氏の説と同様にシッタの代用として同心円紋当て具を用いた結果、生じた痕跡であるとする¹²⁾。

同心円紋当て具内面平滑痕跡説（中村 浩）

中村氏は須恵器の製作復元実験を踏まえた上で、蓋杯内面に残る同心円紋スタンプの痕跡を蓋杯内面に施される仕上げナデの手法と同様に、ロクロ調整後の中心部に残る粘土の高まりを調整するためのものとする¹³⁾。

粘土板・粘土紐ロクロ上固定痕跡説（白石耕治）

白石氏は陶邑窯跡群谷山池地区の窯跡群の調査によって出土した須恵器蓋杯の観察を通して、同心円紋スタンプが回転ナデに先行するものとし、植野氏らの指摘するシッタ代用説に対して否定的な見解を提示する¹⁴⁾。すなわち、蓋杯内面に残る同心円紋スタンプ痕は粘土板・粘土紐などをロクロ上に固定するための押圧の痕跡であるとし、これによって蓋杯の粘土塊水挽き技法を否定するに至っている。

蓋杯外面叩き技法当て具説ほか多種多様技法痕跡説（江浦 洋）

筆者は明石市鴨谷池遺跡において検出された須恵器窯灰原出土資料中検討の際、同心円紋スタンプを有する蓋杯の外面に叩き調整を施したもののが少なからず存在することに着目し、同心円紋スタンプの押捺が叩き調整の際の当て具によって生じたものも存在する可能性を指摘した¹⁵⁾。また、これと同時に地域性と時代性を考証すべく全国150個所前後の遺跡から出土した類例資料の集成を行った。その結果、兵庫県相生市小丸古墳群1号墳・3号墳出土の杯蓋¹⁶⁾、福岡県福岡市広石古墳群III・1号墳北側流路出土の杯身¹⁷⁾、京都府園部町曾我谷遺跡旧河道出土の杯身¹⁸⁾等では、内面には同心円紋スタンプが観察されるのに対して外面はいずれも回転ヘラ削りを施さないものが存在することを確認した。このような類例の存在は、蓋杯内面の同心円紋スタンプがヘラ削りの際に用いられた同心円紋当て具によって生じた痕跡であるとする見方と、先に記した叩き調整の際の当て具の痕跡であるとする見方のいずれをも否定することとなる。また、筆者の管見によれば、白石氏の指摘するような事例はむしろ少数派である可能性が高く、同心円紋スタンプが回転ナデを切る事例が大勢を占めるものと判断する。とくに、すべての出土資料を観察した須恵器窯L-1に関していえば、すべての資料において例外なく回転ナデ調整の後に同心円紋スタンプが押圧されている。

また、同心円紋スタンプを残す須恵器では蓋杯のみならず、高杯や高杯蓋にも見られるなど、脚部やつまみを接合する際、口縁端部を保護するために同心円紋当て具を用いた可能性も考え、蓋杯の同心円紋スタンプについては単一の技法の痕跡として一律に捉えることは困難であり、多種多様な技法の痕跡として残されたものである可能性が高いものと判断している。

もちろん、この場合においては地域差、時期差を考慮すべきことは自明の事実であり、同一時期、同一地域においても工人間での相違が存在していることも考慮すべき問題であるといえる。

しかしながら、須恵器窯L-1出土蓋杯に限ってみれば、本文中においても記したように蓋杯に残る同心円紋スタンプはいずれも中心部付近とやや場所をずらして2回の押捺を行うという点が共通しており、これは同心円紋スタンプの押捺の意味を考える上で重要な所見であるといえる。

また、IV調査区の須恵器窯P-1の窯体床面の一括資料ではヘラ記号と同心円紋スタンプの押捺に相關関係があり、工人によって同心円紋スタンプの押捺を行うグループと行わないグループの存在が示唆

される点は重要である。この事実は須恵器窯L-1出土の須恵器群においても同様であり、同心円紋スタンプを有する蓋杯は蓋杯全体の1%（口縁残存度）に満たない数値を示すのみである。

逆にいえば、このような事実は同心円紋スタンプの押捺が蓋杯の製作過程において必要不可欠な技法であった可能性を否定するものもある。しかし、成形途上において何らかの変形が生じた須恵器のみにこの同心円紋スタンプの押捺が行われたという可能性も否定できないが、当該痕跡を有する蓋杯とその痕跡をまったく認めない蓋杯には形態面での明確な差は認め難いのも事実である。

あるいは、ヘラ記号と同様に製作工程とは何らの関係もなく押捺された場合の存在も可能性として考慮しておく必要性があるのかもしれない。

ここでは、明解な回答を用意することはできないが、上記のような所見から須恵器窯L-1出土の同心円紋スタンプを有する蓋杯に限っていえば、シッタの代用や叩き調整の当て具などといった製作工程上において押捺された可能性はきわめて低いものと判断せざるをえない状況であるといえる。

c. 口縁端部に刻み目状調整を有する杯蓋の検討

これまでに記してきたように口縁端部に刻み目状の調整を有する杯蓋が少なからず出土する点も須恵器窯L-1の特徴である。この点についても概要報告の段階において分類を行い、この調整が杯蓋に限定されていることから「口縁部の成形に関してこの技法が不可欠なものであったとは考えることができない」と考え、「成形技法の一工程であると考えるよりは、むしろ装飾的な意味をもって成された」ものとしている²⁰。

今回の検討においては、出土した全資料から該当する須恵器蓋杯をすべて観察したが、当窯の場合においては例外なく杯蓋のみに見られる特徴であった。

ただし、1点ずつではあるが、土師遺跡SD014出土杯身²¹、丈六太池遺跡SK104出土碗²²の実測図には口縁部外面に刻み目状調整が表現されている。大局的には杯蓋や高杯蓋をはじめとする蓋類の口縁部に特徴的な技法であるということは搖るぎないが、「杯蓋をはじめとする蓋に限定的な技法であり、装飾的な意味をもつ」とした概要報告段階の見解には訂正の必要があろう。

なお、後述するように須恵器窯P-1から出土した須恵器には形状などの特徴から同一人が製作したと考えられる2つの須恵器杯蓋の一方にのみ口縁刻み目が認められることが明らかとなつており、先に示した同心円紋スタンプと同様に杯蓋の調整技法として必要不可欠なものであった可能性が低いことを示唆している。このことは、口縁部に刻み目状の調整を有する蓋杯が全体の1割に満たないという事實とも呼応している。

結果的に口縁端部を対象として臨機に行われる特徴的な成形技法の一種として認識しておくことが穩当であると考える。ただし、現段階において当該技法がどのような状況下で残されたものであるのか、という点については説得力のある見解を提示しない。

しかしながら、このような特徴をもつ蓋杯等を生産していた須恵器窯は陶邑窯跡群においても確認できるが、むしろその北側と東側に展開する周辺地域に分布が集中している点が看取される。

また、消費地では一須賀古墳群のように、かなりの比率で当該特徴を有する蓋類が出土するものが確認される点は示唆的であり、当該期の須恵器生産における需要と供給の関係を検討する手掛かりとしてはかなり有効な特徴であるといえる（表6）。

この点については、最後に須恵器窯P-1において出土している異形杯²³を含めて検討を行うので、ここでは略述するにとどめる。

V-1-表6 大阪府下における口縁端部に刻み目状調整を有する須恵器一覧表

所在地	遺跡名	性格	出土遺構	器種	文献
豊中市	桜井谷窯跡群	生産地	2-17層跡排水溝	杯蓋	『桜井谷窯跡群2-17層跡』 1982 小路東跡発掘調査会
堺市	陶邑窯跡群	生産地	TK44-1号窯	杯蓋	『陶邑窯跡』 1982 研究文化財センター
			MT85号窯跡	杯蓋	『須恵器大成』 1981 角川書店
			TK217号窯跡	杯蓋	『須恵器大成』 1981 角川書店
	日置莊遺跡	生産地	須恵器窯P-1	杯蓋	本著
			須恵器窯P-1・2灰原	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第32号 1992 堀市教育委員会
	日置莊西町遺跡	生産地	須恵器窯灰原	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第32号 1992 堀市教育委員会
			第1号窯 灰原	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第47号 1994 堀市教育委員会
	丈六大池遺跡	生産地	C2地区 灰原	杯蓋・高杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会
			C2地区 SK051	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会
			C2地区 SK080	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会
			C2地区 SK104	鶴	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会
			C2地区 SK124	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会
大阪狭山市	今熊1号窯	生産地	第1次焼成床面	杯蓋	『大阪狭山市遺跡発掘調査概要報告書』 4 1994 大阪狭山市教育委員会
			焼成部搅乱层	杯蓋	『大阪狭山市教育委員会』 1992 大阪狭山市教育委員会
池尻新池南窯	生産地	中層灰原	杯蓋	『池尻新池南窯発掘調査報告書』 1992 大阪狭山市教育委員会	
			杯蓋	『三田遺跡』 1986 松原市教育委員会	
堺市	桶ヶ野ヶ池窯跡	生産地	杯蓋	『三田遺跡』 1986 松原市教育委員会	
			桶ヶ野ヶ池窯跡	包含層	『南河内千早遺跡発掘調査報告』 1994 大阪府教育委員会
	藤谷南遺跡	消費地	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会	
			杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会	
	扇器・小角田遺跡	消費地	SK155	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第3号 1990 堀市教育委員会
			SD015	杯蓋	『南河内・大庭寺遺跡』 1990 大阪府教育委員会、近畿大学環境文化財研究会
	扇器・大庭寺遺跡	消費地	375 OS	杯蓋	『南河内・大庭寺遺跡』 1990 大阪府教育委員会、近畿大学環境文化財研究会
			B地包含層	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第30号 1988 堀市教育委員会
	土師遺跡	消費地	SD014	杯身	『堺市文化財調査概要報告』 第27号 1992 堀市教育委員会
			埋没层	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第27号 1992 堀市教育委員会
	深井津池遺跡	消費地	SAE28	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第47号 1994 堀市教育委員会
			自然河川	杯蓋	『堺市文化財調査概要報告』 第47号 1994 堀市教育委員会
堺市・松原市	東上野芝蓮跡	消費地	SK005	杯蓋	『堺市文化財調査報告書』 第10集 1982 堀市教育委員会
			包含層	杯蓋	『堺市文化財調査報告書』 第10集 1982 堀市教育委員会
堺市・松原市	新金岡更池遺跡	消費地	包含層	杯蓋	本報告 1993年度 大阪文化財センター調査
			SD28	杯蓋	『大和川今池遺跡発掘調査概要』 1988 大阪府教育委員会
美原町	大井遺跡	消費地	SK55	杯蓋	『大井遺跡発掘調査概要』 1989 大阪府教育委員会
			包含層	杯蓋	『大井遺跡発掘調査概要』 1989 大阪府教育委員会
柏原市	高井田横穴群	消費地	3-11号壙	杯蓋	『高井田横穴群』 1992 柏原市教育委員会
			房1	杯蓋	『柏原市所在道路発掘調査報告』 1983年度 1984 柏原市教育委員会
富田林市	喜志北遺跡	消費地	房2	杯蓋	『柏原市所在道路発掘調査報告』 1983年度 1984 柏原市教育委員会
			包含層(第6号)	杯蓋	『喜志北遺跡発掘調査報告』 1994 大阪府教育委員会
河南町・太子町	一須賀古墳群	消費地	中野遺跡	杯蓋	『中野遺跡発掘調査概要』 1983 大阪府教育委員会
			A9号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			B3号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			D5号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			O4号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			WA7号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			WA12号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			WA14号壙	高杯蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			WA21号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
			I7号壙	盃蓋	『一須賀古墳群資料目録』 土器編(土器四) 1992 大阪府教育委員会
河内長野市	一須賀・集室古墳群	消費地	O4号壙	盃蓋	『一須賀・集室古墳群・集室地区的調査』 1984年 大阪府教育委員会
			A9号壙	盃蓋	『一須賀・集室古墳群・集室地区的調査』 1984年 大阪府教育委員会
大阪市	神山丘神道跡	消費地	3号壙	盃蓋	『神山丘神道跡発掘調査報告』 1992 大阪府教育委員会
			6号壙	盃蓋	『神山丘神道跡発掘調査報告』 1992 大阪府教育委員会
河南町	箕谷寺遺跡	消費地	SX02	盃蓋	『箕谷寺遺跡発掘調査報告』 1987 大阪府教育委員会
			31号壙	盃蓋	『箕谷寺遺跡発掘調査報告』 1987 大阪府教育委員会
河内長野市	三日市遺跡	消費地	42号壙	高杯蓋	『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 1988 三日市遺跡発掘調査会
			SK114	盃蓋	『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1988 三日市遺跡発掘調査会
八尾市	鳥居子形城	消費地	10号壙周溝	高杯蓋	『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1994 三日市遺跡発掘調査会
			堅穴住居2	盃蓋	『河内長野市鳥居子形城』 1990 河内長野市遺跡発掘調査会
大阪市	鈴ヶ池遺跡	消費地	SP-01	盃蓋	『鈴ヶ池遺跡(その3)』 1986 大阪府教育委員会、近畿大学環境文化センター
			NR-1	盃蓋	『八尾市文化財調査委員会会報』 1987 八尾市文化財調査研究会
			NR2001(自然流路)	盃蓋	『久宝寺北(その1-3)』 1987 大阪府教育委員会、近畿大学環境文化センター
八尾市	鬼井遺跡	消費地	鬼井(非專用)	盃蓋	『鬼井』 1983 大阪府教育委員会、近畿大学環境文化センター
			鬼井北遺跡	盃蓋	『鬼井北(その2)』 1986 大阪府教育委員会、近畿大学環境文化センター
八尾市	美園遺跡	消費地	C地区古墳時代中後期包含層	盃蓋	『美園』 1985 大阪府教育委員会、近畿大学環境文化センター

第3節 IV調査区須恵器窯P-1の基礎的検討

1. 遺構の概要と分析の前提

須恵器窯P-1は、IV調査区P地区で検出した開析谷の西側に造営されており、南側にある埴輪窯P-1とは約17mの距離を隔てている。

また、当該窯の北側で行った堺市教育委員会の調査では、複数の須恵器窯跡と埴輪窯跡が確認されている。

当該須恵器窯は燃焼部と焼成部の一部を残すのみで、遺存状態はかならずしも良好とはいえないが、確認された2面の床面のうちの床面Iからは、ほぼ原位置を保った状態の須恵器を検出している。

とくに床面Iからは異なるヘラ記号をもつ蓋杯が一定の規則性をもって検出されており、窯詰め段階における工人グループ間の床面の占有関係の状況を看取することが可能である。

床面Iから検出した須恵器については後述するが、それ以外に前面の谷部に展開する灰原からはコンテナにして300杯の須恵器が出土している。灰原出土資料については数量的な検討等は加えられていないが、蓋杯が過半数を占めており、そのほかの器種では壺と短頭壺が目立つようである。

なお、当該窯に関しては筆者は調査担当外であることに加えて、時間的制約から出土資料を充分に検討することはできない。したがって、以下では比較的良好な状態で出土した一括性の高い床面Iの須恵器群を限定的に分析の対象としていることをあらかじめ断つておく。

また、床面Iにおいて検出した須恵器は、調査段階においていざれも個別に番号を付して取り上げられているが、不幸にしてそれを記載した図面が行方不明となっている。今回の分析では概要報告および調査時に撮影された写真と実物とを照合することから作業をはじめ、遺物のほとんどを特定することができた。しかし、誠に遺憾ながらD類のヘラ記号をもつ蓋杯などは最後までその出土位置を明確にすることはできず、結果的に以下の分析対象としては、一級資料から除外せざるをえない状況となった。

なお、以下の分析では須恵器窯L-1で行った数量的検討を当該窯にも適用し、さらにはヘラ記号と細部の製作技法および法量の検討によって陶工とそのグループを抽出し、須恵器生産工人集団の構造把握のための一助とする。

2. 須恵器窯P-1床面I出土遺物の基礎分析

先記のように当該窯出土の須恵器としては一括性の高い床面I出土資料のみを検討の対象とする。

床面Iからは破片数にして1,237点、重量にして264.16kgの須恵器が出土している。出土した須恵器にはヘラ記号によって工人の特定が可能な資料も含まれており、そのすべてを観察してデータ化を行った。

なお、観察のポイントおよびそれに基づく分類については基本的に須恵器窯L-1出土資料の分析作業と大きく異なるものではないので、ここでは省略する。

A 床面I出土須恵器の器種構成

床面Iから出土した須恵器は、蓋杯・壺・高杯蓋・壺蓋・瓶である。窯体の遺存状態がかならずしも良好とはいえないという点を勘案しても、図10に示したようにバラエティーに富んだ器種構成を示す灰原出土資料との差は歴然としている。

灰原出土資料を含めた器種構成は、当該期の須恵器窯の様相と大きくかわるものではないが、直径20cmをこえる大型の蓋杯が2点出土しているほか、皿状を呈する異形杯が出土している。次項では床面I

を対象とした分析を行うので、灰原から出土した異形杯については、ここで略述しておく。

a. 異形杯の検討

須恵器窯P-1灰原出土の異形杯は図10の上段に示したものである。形状は杯身の立ち上がり部分を欠いたような皿状を呈する。外面には回転ヘラ削り、底部内面中央には一定方向ナゲが施される。基本的な成形、調整は杯身の底体部の造作と共に通している。ただし、口縁部の内面部分は回転ヘラ削り調整である。

立ち上がり部分を故意に削り取った杯身と解することも可能であるが、図10の中、下段に示したように一須賀古墳群²⁹⁾や高井田横穴群³⁰⁾などの消費地においても類似した形態を呈する須恵器が出土することから、当該形状をもって製品として条件を満たしていたものと判断する。

なお、この異形杯はきわめて希有な器種であるが故に、後述するように生産地と消費地の関係を類推する上で重要な手掛かりとなるものと考える。

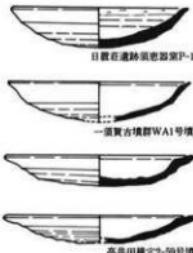
B 床面I出土須恵器の分類

当該須恵器窯出土資料については、分析の対象を床面I出土資料に限定したために灰原出土資料を含めた各器種毎の形態差などの検討は行っていない。

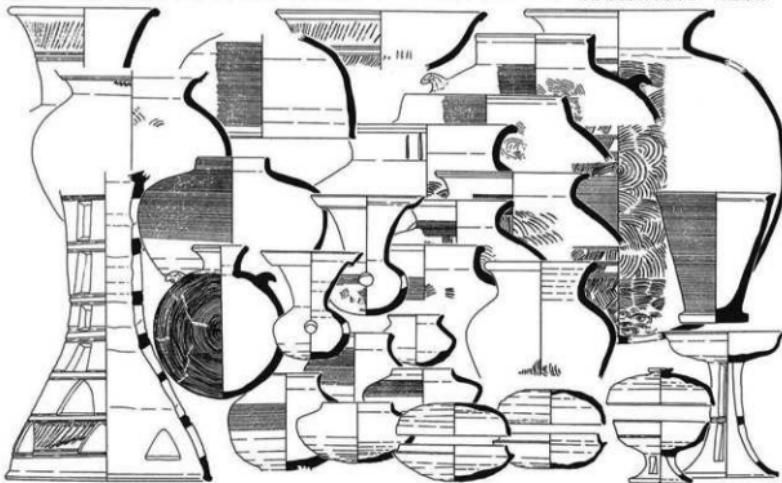
床面I出土須恵器は後述するように少量の甕などを除く大半が蓋杯であることを特徴としている。多くの部分で須恵器窯L-1と重複するが、とくに蓋杯に限って、製作技法について補足しておくことにしたい。

a. 製作技法による須恵器蓋杯の分類

蓋杯に残された痕跡については須恵器窯L-1と共通する部分が多く、外面にヘラ記号を有するもの、内面に同心円紋スタンプを有するもの、杯



V-1-図10 異形杯
(各報告所収図を一部改変)



V-1-図11 須恵器窯P-1出土須恵器の器種構成

蓋では口縁端部外面に刻み目状の調整を有するものが少量ながら確認される(図12)。大局的には図6に示した須恵器窯L-1出土蓋杯の属性分類と共通する部分が多いが、一部で異なる部分もみられるので略記しておくことにしたい。

同心円紋スタンプを有する蓋杯 当該窯から出土した蓋杯にみられる同心円紋スタンプは須恵器窯L-1と類似するものであり(A類)、そのほとんどが中心部付近に2回の押捺を行つるものである。

ヘラ記号を有する蓋杯 当該窯出土の蓋杯にみられるヘラ記号は一部を除いて須恵器窯L-1と共に共通しており、その特徴については図6に示した通りである。ただし、当該窯ではE・F・H類は欠落しており、これに対して鳥足形(I類)のヘラ記号をもつ一群が確認できる。

また、これらのヘラ記号を有する蓋杯は、後述するように床面において一定の規則性をもつた状態で出土している。

口縁端部に刻み目状の調整を有する蓋杯 須恵器窯L-1と同様にわずかではあるが、杯蓋の口縁端部に刻み目状の調整を施すものが認められる。ハケ調整に類似する技法によるもの(a類)と叩き調整に類似する技法(b類)の両者が確認できる点など、須恵器窯L-1の状況と酷似する。

b. 焼成方法による須恵器蓋杯の分類

須恵器窯L-1出土遺物の分析に際して、杯身に杯蓋をかぶせた状態で焼成したもの(A類)と杯身、杯蓋に関わらず、口縁部を上方にむけて重ねて焼成したもの(B類)に分類した。須恵器窯P-1床面Iから出土した蓋杯については、1点を除くすべてがA類による焼成方法をとっている。なお、すべて

を観察したわけではないが、灰原から出土したものは少なからずB類とした焼成方法をとったものも含まれている。

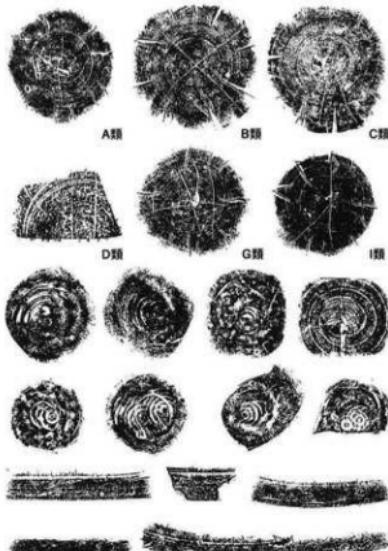
ただし、床面Iに限れば、最終的に残された蓋杯の焼成方法は明らかにA類に偏重しており、これは異なるヘラ記号をもつた蓋杯が規則性をもって累積されている状況と関連している可能性が高いものと考える。

C 床面I出土須恵器の数量的検討

須恵器窯P-1の床面Iから出土した須恵器は、上記の分類を基軸としてすべてを対象として観察を行い、破片数、重量、口縁残存度のカウントを行った(表7)。

ただし、先述の通り、当該窯においては床面の一部が遺存していたのみであり、以下に掲げる数値は、かならずしも一度に焼成されていた須恵器の全体像を示すものではないことを前提として認識しておく必要がある。

それぞれの計測方法については先述した須恵器窯L-1出土須恵器の計測方法と同様であり、こ



V-1-図12 須恵器窯P-1出土須恵器拓影

(上—ヘラ記号、中—内面同心円紋スタンプ、下—口縁端部刻み目) こでは省略する。

なお、灰原出土資料を含めた計測は行っていないが、その量は300コンテナ前後であり、須恵器窯L-1から出土した須恵器を凌駕している。

a. 破片数

床面Iから出土した須恵器は破片数で1,237点を数え、その94%を蓋杯、残りの6%を甕などで占めている。須恵器窯L-1の場合と同様に一部で有蓋高杯の杯部を蓋杯としてカウントしている可能性もある。しかし、床面I出土の須恵器の場合には高杯の脚部が1点も含まれておらず、その可能性は低いものと判断される。したがって、破片数の計測においても全体に占める蓋杯の割合が圧倒的に多いということは明らかである。

窯体の一部が遺存していたのみであるとはいへ、灰原資料にみられるバラエティーに富んだ器種の破片すら認められない点は示唆的であり、蓋杯と少量の甕を限定的に窯詰めして焼成していた場合の存在をも示唆するものである。

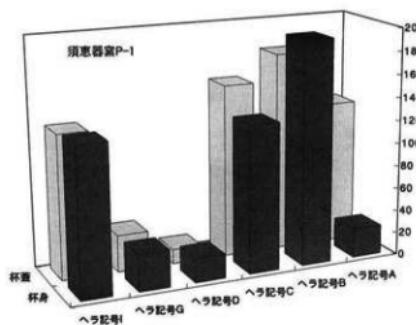
b. 重量

出土した須恵器の総重量は428.71kgを測るが、そのうちの95%を蓋杯が占めている。須恵器窯L-1および小阪須恵器窯における重量計測では1個体の重量で他器種を凌駕する甕が大きな部分を占めていたが、当該窯ではその数がきわめて少ないとあって、破片数と同様に1割以下の数値を示しているにすぎない。

c. 口縁残存度

口縁残存度の計測については、先に記した方法を用いており、残存度32をもって計算上の1個体となる。器種構成をみると蓋杯が99%を占めており、その内訳は杯身が45%、杯蓋が55%であり、ほぼ均衡を保っている。したがって、甕などの他器種はあわせても1%であり、全体からすればわずかな部分を占めるのみである。

残念ながら、当該窯の場合は灰原出土資料の分析を行って



V-1-図13 蓋杯のヘラ記号

V-1-表7 須恵器窯P-1床面I
出土須恵器集計表

器種	技術的特徴	破片数	重量(g)	口縁残存度
杯蓋	通常口縁部	309	75830	1170
	通常天井部	26	5420	
	口縫込み目x	7	5840	81.5
	口縫込み目y	0	2340	30.5
	同心内輪波アガ	4	8820	69
	ヘラ記号A	9	15560	125.5
	ヘラ記号B	6	10660	113
	ヘラ記号C	4	10570	119
	ヘラ記号D	2	2280	12.5
	ヘラ記号E	1	2500	32
杯身	ヘラ記号I	3	7920	96
	ヘラ記号不明	5	5910	72.5
	ヘラB+3アガ	2	4540	64
	ヘラC+3アガ	1	2600	32
	ヘラリ+3アガ	2	5590	60.5
	ヘラ記号B	0	0	
	ヘラ記号D	0	0	
	ヘラ記号E	0	0	
	ヘラ記号F	0	0	
	ヘラ記号G	0	0	
不明窯	全計	389	188240	2078
	通常口縁部	144	96840	1025.5
	通常天井部	63	8660	
	同心内輪波アガ	5	9520	78
	ヘラ記号A	6	5800	25.5
	ヘラ記号B	5	10860	108
	ヘラ記号C	3	8310	36
	ヘラ記号D	2	2900	21
	ヘラ記号E	1	2660	32
	ヘラ記号I	4	10460	128
不明窯	ヘラ記号不明	3	4210	45
	ヘラB+3アガ	3	7480	88.5
	ヘラC+3アガ	1	2760	32
	ヘラリ+3アガ	0	0	
	ヘラ記号B	0	0	
	ヘラ記号D	0	0	
	ヘラ記号E	0	0	
	ヘラ記号F	0	0	
	ヘラ記号G	0	0	
	ヘラ記号H	1	280	
高杯蓋	ヘラ記号I	369	46450	
	ヘラ記号不明	1	940	
	全計	537	72860	
	全計	1	590	0
	口縫部	3	260	7.5
	脚部	46	7110	0
	全計	48	7370	7.5
	全計	13	1490	14
	溶接資料	8	9990	34
	全計	1237	428710	3811

おらず、先に検討を行った小阪須恵器窯灰原出土資料および須恵器窯L-1出土資料との単純な比較はできない。

現状でみる限りにおいては、床面Iの最終段階における須恵器の焼成は、蓋杯主体であった蓋然性が高いものであるといえる。ただし、灰原からは床面Iにみられない多様な器種が出土していることは第IV部の報告に示された通りである。

結果として、当該窯では多様な須恵器が生産されていたにも関わらず、床面Iに残された須恵器はその大半が蓋杯であるという事実が明らかとなった。

可能性としては、特定の器種毎を選定して焼成するような生産体制の存在が示唆されるとともに、さらには削平されて遺存していない部分において他器種が焼成されていたと考えた場合には、焼成部内において器種毎の置き分けが行われていたことになる。

筆者は前者の可能性が高いものと憶測するが、後者の可能性も無くしも非ずである。

d. 数量的検討の展望

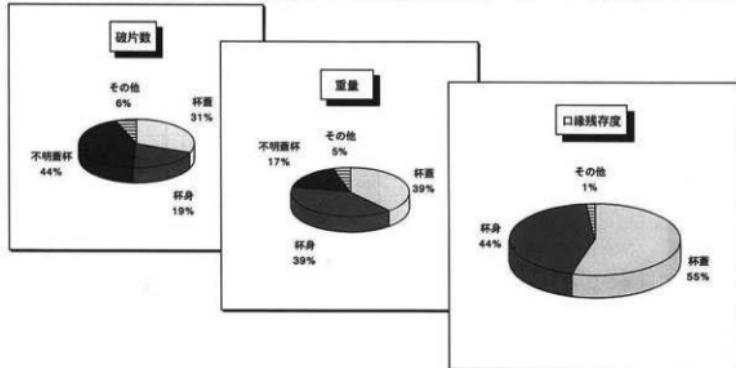
須恵器窯L-1の分析において、灰原出土資料における破片数と個体数の関係について検討を行った。しかしながら、これらはあくまでも灰原出土資料を対象として参考値を提示したものである。ちなみに、完形品を多く含む窯体内出土資料である須恵器窯P-1の場合、計算上、蓋杯1点は平均して9.9片前後に破碎していることになる。参考程度に数値を挙げておくならば、当該窯の床面I出土資料では蓋杯破片数に0.101を乗することによって得られる値が蓋杯の最低個体数に近いものといえる。

当然の結果ではあるが、灰原出土資料と窯体内資料とでは、その状況に大きな差異があり、単純な比較は困難であるといえる。今後の資料の増加を待って、再考しなければならない課題である。

D 須恵器窯P-1床面Iと出土須恵器の検討

以上、須恵器窯P-1床面Iから出土した須恵器の数量計測を基軸として若干の検討を行った。結果として、床面Iに残された須恵器はほぼ蓋杯に限られるということが明らかとなった。

したがって、以下の検討も須恵器窯L-1と同様に蓋杯を対象とする。なお、先述のように床面I出土の須恵器は同一のヘラ記号を有する蓋杯が一定のまとまりをもって窯詰めされており、ここではヘラ記号を基軸として分析を行い、陶工の組織などの須恵器生産構造の一端についても言及してみたい。



V-1-図14 須恵器窯P-1床面I出土須恵器の器種構成

a. 出土状況

須恵器窯P-1 床面I から出土した須恵器蓋杯は完形のものが多く、厳密には原位置を保っているとはいえないものの、相対的な位置関係については、ほぼ当時の状況を物語っているものと考えている。とくに、埋没状況をみると、焼成部から燃焼部に向かって主軸方向、すなわち前後に平行移動している可能性は高いものの、左右方向への移動はきわめて低いものと考える。

したがって、厳密には窯詰め時の原位置を保ってはいないものの、窯詰め段階の配置を検証することも可能であると判断する。

とくに、杯蓋と杯身は蓋と身をセットとして焼成することを基本としており、その多くにヘラ記号を施したものが多いという点が特徴的である。

その出土状況については図15に示した通りであり、これを一瞥しても分かるように同一のヘラ記号を有する蓋杯が一定のまとまりをもって整然と窯詰めされている状況を看取することが可能である。

さらにこれを詳細にみると、同一ヘラ記号を有する蓋杯は床面主軸に幅40~50cmの通路ともとれる空

V-1-表8 須恵器窯P-1 床面I 出土のヘラ記号蓋杯一覧表 (図16, 17)

図 番号	分 類	器種	本報告 図番号	式 報 図番号	杯蓋 口径	杯身 口径	器高	杯身 受部径	底体部 高	口 縁 形 態	同心円 紋(ヨンガ)	内面一定 方向ナデ 刻み	口縁 質	備 考
1	A-1群	杯蓋	未掲載	図33-24	14.8	—	4.4	—	—	内傾する凹面	なし	あり	なし	
2	A-1群	杯蓋	未掲載	図33-26	15.2	—	4.6	—	—	内傾する凹面	なし	あり	なし	
3	A-2群	杯蓋	未掲載	図33-13	—	—	3.7	—	—	内傾する凹面	なし	なし	あり	
4	A-2群	杯蓋	未掲載	図33-25	15.6	—	3.9	—	—	内傾する凹面	なし	なし	なし	
5	A-3群	杯蓋	図94-15	図34-5	14.0	—	4.0	—	—	内傾する段	なし	あり	なし	6とセット
6	A-3群	杯身	図94-16	図34-6	—	12.3	4.8	14.2	3.2	統い	なし	あり	—	5とセット
7	B-1群	杯蓋	図94-11	図31-4	14.0	—	4.0	—	—	丸い	あり	なし	なし	8とセット
8	B-1群	杯身	図94-12	図31-5	—	13.3	4.2	14.6	3.6	統い	あり	なし	—	7とセット
9	B-1群	杯蓋	図94-5	図34-14	13.7	—	4.2	—	—	丸い	あり	あり	なし	10とセット
10	B-1群	杯身	図94-6	図34-15	—	12.5	4.4	14.0	3.4	統い	あり	なし	—	9とセット
11	B-1群	杯蓋	図94-25	図31-2	14.6	—	4.5	—	—	丸い	なし	なし	なし	12とセット
12	B-1群	杯身	図94-26	図31-3	—	12.9	4.4	14.5	3.4	統い	なし	なし	—	11とセット
13	B-1群	杯蓋	未掲載	図31-1	13.6	—	4.2	—	—	丸い	なし	あり	なし	
14	B-3群	杯身	未掲載	未掲載	—	12.0	4.6	13.9	3.2	統い	なし	あり	—	
15	B-2群	杯身	未掲載	未掲載	—	13.0	4.5	15.3	3.1	統い	あり	あり	なし	27と重なる
16	D-1群	杯蓋	未掲載	未掲載	14.0	—	4.1	—	—	内傾する段	なし	あり	なし	
17	D-2群	杯蓋	未掲載	未掲載	14.4	—	4.5	—	—	丸い	なし	なし	なし	
18	D-2群	杯身	未掲載	未掲載	—	12.6	4.6	15.0	3.5	統い	なし	あり	—	
19	C-1群	杯蓋	図94-30	図32-14	14.4	—	3.5	—	—	觀察不能	觀察不能	なし	なし	20と溶着
20	C-1群	杯身	図94-30	図32-15	—	不明	不明	15.3	3.0	—	觀察不能	なし	—	19と溶着
21	C-1群	杯蓋	未掲載	未掲載	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	22と溶着
22	C-1群	杯身	未掲載	未掲載	—	3.7	—	—	—	—	—	—	—	21と溶着
23	C-1群	杯蓋	図94-27	図32-20	14.5	—	3.7	—	—	内傾する凹面	あり	あり	なし	24とセット
24	C-1群	杯身	図94-28	図32-21	—	12.7	3.9	14.7	2.8	統い	あり	あり	—	23とセット
25	C-2群	杯蓋	図94-31	図32-18	15.6	—	3.5	—	—	—	—	—	—	26と溶着
26	C-2群	杯身	図94-31	図32-19	—	不明	不明	15.6	2.8	—	—	—	—	25と溶着
27	C-3群	杯蓋	未掲載	未掲載	—	3.1	—	—	—	—	—	—	—	27と重なる
28	I-1群	杯蓋	図94-17	図31-10	14.0	—	5.2	—	—	丸い	なし	あり	なし	29とセット
29	I-1群	杯身	図94-18	図31-11	—	12.6	4.0	14.4	3.2	統い	なし	あり	—	28とセット
30	I-1群	杯蓋	図94-9	図34-3	13.7	—	4.0	—	—	丸い	なし	あり	なし	31とセット
31	I-1群	杯身	図94-10	図34-4	—	12.6	4.2	14.1	2.9	統い	なし	あり	—	30とセット
32	I-2群	杯蓋	図94-23	図34-1	14.2	—	4.7	—	—	内傾する段	なし	あり	—	33とセット
33	I-2群	杯身	図94-24	図34-2	—	11.8	4.5	14.2	3.3	統い	なし	なし	—	32とセット
34	I-3群	杯蓋	図94-7	図31-8	13.8	—	4.2	—	—	内傾する段	なし	あり	あり	35とセット
35	I-3群	杯身	図94-8	図31-9	—	12.2	4.3	13.3	3.4	統い	なし	あり	—	34とセット
36	I-3群	杯蓋	図94-29	図32-12	13.6	—	4.8	—	—	—	—	—	—	37と溶着
37	I-3群	杯身	図94-29	図32-13	—	不明	不明	14.2	3.5	—	—	—	—	36と溶着
38	G-1群	杯身	図94-13	図32-22	13.8	—	4.5	—	—	内傾する段	なし	なし	なし	39とセット
39	G-1群	杯身	図94-14	図32-23	—	13.2	4.5	14.4	3.5	統い	なし	あり	—	38とセット

間を挟んで左右両側に一定のまとまりをもって窯詰めされている状況を看取することができる。ここでは、とくに蓋杯が集中して出土した部分を須恵器蓋杯のまとまりごとに4地区に分割し、それぞれの状況を概観しておくことにする。

N E区ではヘラ記号I類の蓋杯が完形で3セット（他に完形が2セットあるが、原位置不明）が出土しており、そのうちの2セットは近接し、1セットはやや距離を置いている。なお、これらはいずれも杯身を上にした状態で出土している。これ以外では西寄りでヘラ記号G類の蓋杯が完形で1セット出土しており、これも杯身を上にした状態を呈している。

このほか、ここからはヘラ記号A類の杯蓋が2点、無記号の蓋杯が数点出土しているが、いずれも破片ないしは一部を欠損しており、さらにはセットで焼成されたものも皆無である。

N W区ではヘラ記号B類の蓋杯が完形で3セット（他に完形が1セットあるが、原位置不明）が出土しており、うち2セットは近接するが、1セットはやや距離をおいている。なお、これらはN E区におけるヘラ記号I類の蓋杯と同様にいずれも杯身を上にした状態で出土している。

このほか、ヘラ記号A類やC類の杯蓋等が出土しているが、その多くは破片ないしは一部を欠損しており、さらにはセットで焼成された状況も見い出しづらいものである。

S E区ではヘラ記号C類の蓋杯が完形で4セットが近接して並んだ状態で出土している。そのうちの北端の1セットのみが杯身を上にして出土している以外はいずれも杯蓋を上にしている。その配列はやや円弧を描いており、さらに上下に重なった状態で出土した部分もあり、桜井谷窯跡群2-23号窯跡で検出された蓋杯の窯詰め方法に類似した状況を呈していた可能性も示唆される。

S W区では無記号の蓋杯が完形で2セット出土している。いずれも杯身を上にしており、S E区のヘラ記号C類蓋杯の3セット以外はすべてが杯身を上にする点が共通している。

ここからは他に蓋杯および甕の破片が出土しているが、完形およびセット焼成のものは見い出せない。以上が床面Iにおける蓋杯の出土状況である。なお、当該床面から出土した須恵器蓋杯にはD類としたヘラ記号を有する蓋杯の破片が出土しているが、残念ながら原位置を特定することができない。

ただし、蓋と身がセットで焼成されていることが確実な完形品のみを一級資料とし、焼き台として転用されていた可能性もある破片資料を除外した場合、N E区にはI類、N W区にはB類、S E区にはC類、S W区からは無記号の蓋杯のみが出土しており、きわめて意図的な配置をとることが看取されるのである。

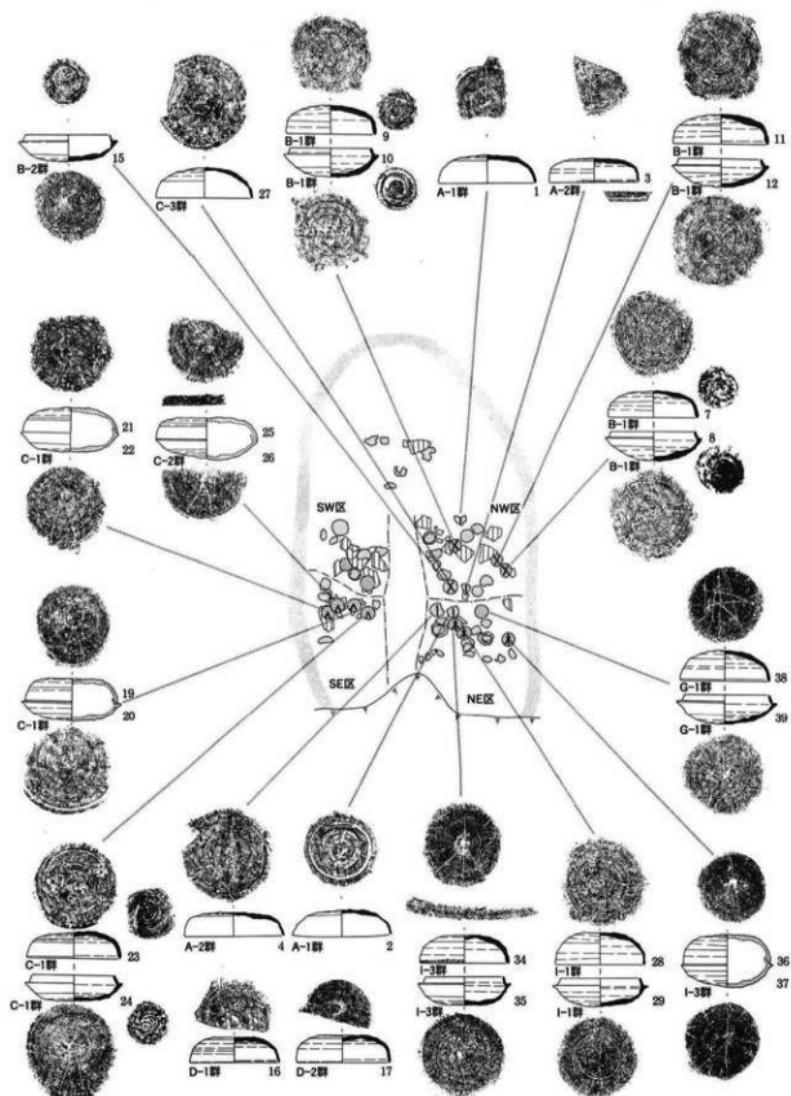
以上、蓋杯の出土状況から同一ヘラ記号を有する蓋杯が規則性をもって窯詰めされていた可能性が明らかとなった。ここで、一步進めて同一ヘラ記号を有する蓋杯が同一工人の手によるものか、あるいは同一工人グループによるものであるのかという問題を検証していくことにしたい。

b. ヘラ記号を有する蓋杯の検討

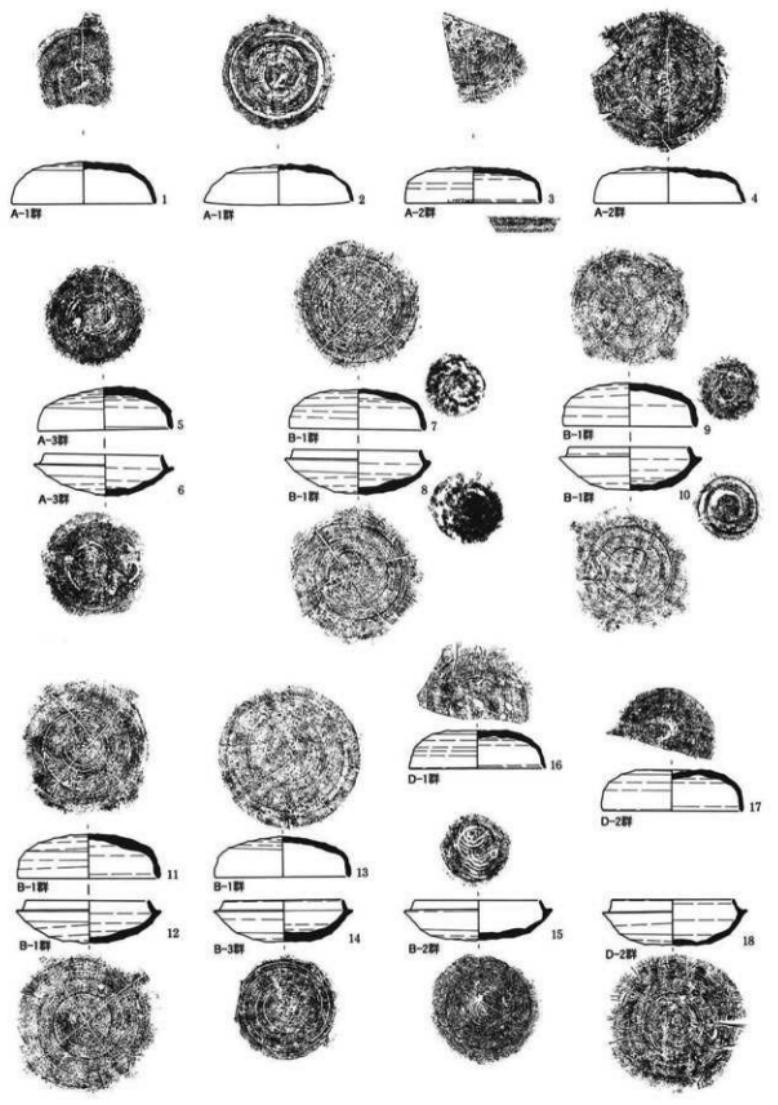
以下では同一ヘラ記号を有する蓋杯を組上にあげて、細部の技法的特徴等を検証し、可能な限り工人の実態にせまってみたい。

ただし、その前提としてヘラ記号を有する蓋杯のうちでも床面上における位置が特定できる資料を中心に検討を行うことにしたい。したがって、ヘラ記号D類は破片数にして5点の出土を確認しているものの原位置を特定できない資料であり、他の資料とは一線を画することとなる。

以下、分析の主たる対象とするのは表8に示した器形や技法的特徴を抽出することが可能な39点の蓋杯であるが、他の破片資料についても同様の観察作業を行っている。



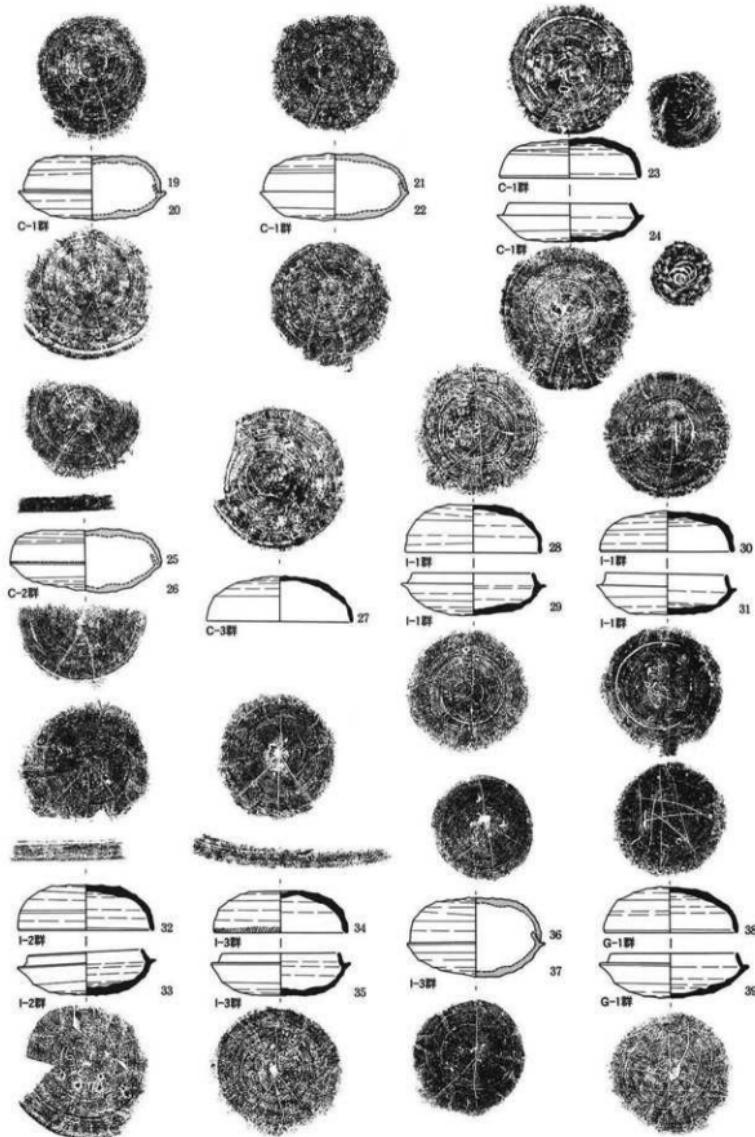
V-1-図15 須恵器窯P-1床面I須恵器出土状況



※杯蓋と杯身を線で結んだものはセット

0 (1:5) 20cm

V-1-図16 須恵器窯P-1床面I出土のヘラ記号蓋杯(1)



V-1-図17 須恵器窯P-1床面I出土のヘラ記号蓋杯(2)

分析にあたっては、全体の器形や口縁端部²⁰などの形態的特徴のほかに、内面の同心円紋スタンプの有無と当て具の異同、内面の一定方向ナデの有無および幅、杯蓋に関しては口縁端部の刻み目状調整の有無、ヘラ記号の筆順や施紋具の先端形状や幅などの属性を観察のポイントとして、実物を相互に比較した。表ではとくに、その特徴が顯著に表れる幾つかの項目のみを提示した。

なお、同一工人によって製作された蓋杯の同定に関しては上記の諸点を総合的に観察した結果に基づくものであり、かなり確度の高いものと考えるが、これらの属性については多分に主観的かつ恣意的な資料操作に陥るとの所しも免れない。したがって、ここでは客観的データとして、杯蓋に関しては口径と器高、杯身に関しては受部径と底底部高の計測値を比較のためのデータとして採用した。なお、本来であれば、杯身の場合も杯蓋と同様に器高のデータが重要であると考えるが、8点の資料で蓋と溶着しており、器高が不明であり、底底部高の計測値の比較を緩用している。

以下、ヘラ記号毎に蓋杯の特徴を簡潔に記述していくことにする。

A群 ヘラ記号A類をもつ蓋杯の一群である。杯蓋でみると全体的に半球状の器形を呈するA-1群(図16-1,2)と扁平な天井部をもつA-2群(3,4)、稜が比較的はっきりとしているA-3群(5)に細分される。5・6はセットであり、他群に比してヘラ記号が極端に短いという特徴をもつ。また、これらの法量をみると、各群はまとまっているが、他群とは抵触しないという状況を看取することができる。

したがって、ヘラ記号A類を有する蓋杯A群は3工人によって構成されていたものと判断される。なお、A群では内面の同心円紋スタンプはみられない。以下では、A類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループA」とする。

B群 ヘラ記号B類をもつ蓋杯の一群である。細部の比較検討により、セットで出土した蓋杯(7~12)は同一工人の手によるものであると判断する(B-1群)。とくに、これらの蓋杯では厚く丸い口縁端部が特徴的であり、しかも法量も1cm以内の僅差でまとまており、容易に同工品と認定しうるものである。ただし、内面の同心円紋スタンプは7~10の2セットにのみ認められ、同一工人の手になる蓋杯でもその押捺がなされる場合となされない場合が存在していたことになる。ちなみに、これらの蓋杯に用いられた当て具は同一の工具であることが看取される。

そのほか、セットではないがB-2群、B-3群とした杯身が出土しており、先のB-1群とは細部の特徴が異なる。また、B-2群には内面に同心円紋スタンプが押捺されるが、その当て具はB-1群のものとは明瞭に異なる。

したがって、ヘラ記号B類を有する蓋杯は、3工人によって生産されていたものと判断される。以下では、B類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループB」とする。

C群 ヘラ記号C類をもつ蓋杯の一群である。溶着資料を含むために細部不明の資料もあるが、器形や細部の特徴、さらには法量が僅差でまとまるなどから、セットで出土した蓋杯のうちの図17~19~24は同一工人の手によるものと判断される(C-1群)。ちなみに、C-1群ではヘラ記号の筆順がいずれも同一であることが確認できる。

そのほか、口径がやや大きく扁平な器形を有し、口縁に刻み目状の調整をもつC-2群、セットではないが、ヘラ記号が特徴的なC-3群を抽出することが可能である。

したがって、ヘラ記号C類を有する蓋杯は、A・B群と同様に3工人によって生産されていたものと判断される。以下では、C類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループC」とする。

D群 ヘラ記号D類をもつ蓋杯一群であるが、先述のように床面Iに存在していたことは確かであるが、原位置は不明である。しかも、他群とは異なり、セットでの出土は認められないものである。

杯蓋では口縁端部の形態差によって細分することが可能であり、それぞれをD-1群(16)、D-2群(17)とした。なお、18の杯身は厳密にはいずれかとセットになるのか、あるいは別の群を構成するのかは不明であるが、力の無い浅いヘラ記号がきわめて酷似している点、法量の対応を評価してD-2群と判断している。ただし、これに関しては他群における工人の同定とは異なり、直接的根拠に欠ける。

以下では、D類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループD」とする。

G群 ヘラ記号G類をもつ蓋杯の一群である。完形の1セット(38,39)のほかに、破片2点出土している。破片資料はいずれも口縁端部が残存しておらず、完形資料と同一工人の手によるものか否かは、にわかに判断できない。ただし、当群は他例に比して出土点数が少ないのは明らかであり、ヘラ記号がきわめて複雑である点などを勘案するならば、1工人のみである可能性が高いものと判断する。

単独工人である可能性も高いが、以下では、G類のヘラ記号を用いる工人を「工人グループG」とする。

I群 鳥足形のヘラ記号であるI類をもつ蓋杯の一群である。

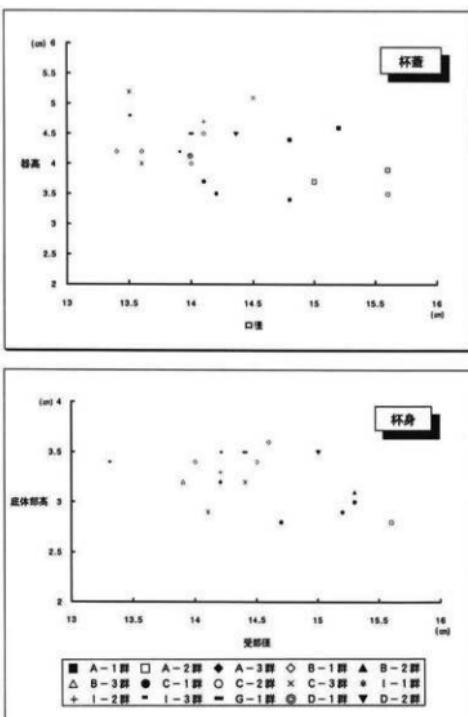
杯蓋での比較では口縁端部を丸く成形するI-1群(28,30)と内傾する段をもつI-2群(32)、I-3群(34)に細分が可能である。B群とともに全体にやや小振りな蓋杯であることを特徴とし、A群と同様に内面の同心円紋スタンプはまったく認められない。なお、ヘラ記号の筆順はすべてが同じである。

したがって、ヘラ記号I類を有する蓋杯は、A・B・C群と同様に3工人によって生産されていたものと判断される。

以下では、I類のヘラ記号を共有する工人の集まりを「工人グループI」とする。

以上、同一ヘラ記号をもつ蓋杯を多角的に比較検討することによって、かなりの確度をもって須恵器生産の最小単位である工人レベルまでの追求が可能であることが明らかとなった。

これを簡単にまとめておくと、須恵器窯P-1床面I出土のヘラ記号を有する蓋杯に関しては、以下の事象を抽出する



V-1-図18 床面I出土ヘラ記号蓋杯の法量分布

ことが可能である。

- ①同一人が複数のヘラ記号を用いることはない。
- ②ヘラ記号を用いている人が無記号の蓋杯を製作することはない。
- ③3人前後の人が同一のヘラ記号を共有してグループを構成することが多い。ただし、D群およびG群などのように他群に比して明らかに工人数が少ない場合がある。
- ④形態的特徴もさることながら、同一人が製作した蓋杯は、大きさが一定である。
- ⑤窯詰めに際しては同一工人グループが製作した蓋杯は意識的にまとめられているが、同一工人製作の須恵器をまとめようとする意識は認められない。
- ⑥須恵器窯P-1を共有していた工人のうち、同一ヘラ記号を共有する工人グループが6グループ存在し、それを構成する工人は最低でも15人を確認できる。

以上が、須恵器窯P-1床面I出土須恵器のうち、ヘラ記号を有する蓋杯の検討によって得られた事象である。ただし、野上氏がMT206-I号窯の検討²⁰⁾において示した「窯の中心的な工人グループは、本来他者の製品と区別する必要のない、本窯を主体的に管理する中心グループであり、無記号のものにその主張がある」という指摘は傾聴に値する。

須恵器窯P-1床面I出土蓋杯では、ヘラ記号を有する蓋杯が多いとはいえる、それでも全体に占める無記号の蓋杯は61%（口縁残存度）で過半数を超えており、

以下では、無記号の蓋杯の状況についても簡単に触れておくことにしたい。

c. 無記号の蓋杯の検討

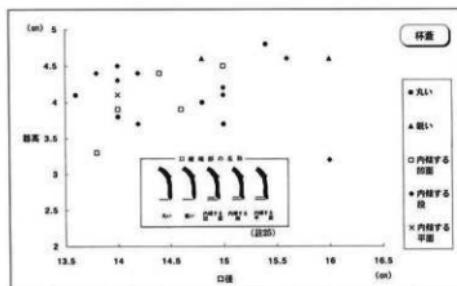
無記号の蓋杯においては、基本的にヘラ記号を有する蓋杯の分析と同様の諸属性を観察することによって比較検討を行う。

ここでは、ヘラ記号を有する蓋杯の分類において有効であった口縁端部の形態と法量の関係について検討を行う。なお、検討に際しては口縁端部に形態差が顕著な蓋杯を対象とし、基本的に完形に復元される22点を分析の対象とし、歪みを生じているものと小片を分析の対象から外した。

ヘラ記号という有効な手掛かりがなく、同一工人の製作した無記号の蓋杯の抽出は困難である。しかしながら、口縁部形態の明確な差によっても最低で5群に分けることができ、図19に示したように同形態の口縁部でありながら、法量に大きなばらつきが認められ、さらなる細分の可能性が高いものといえる。細部技法等の属性の客観的データを個別に提示して比較検討を行う余裕はないが、口縁部と同様に

顕著な形態差として表出する稜の形態差をも勘案し、筆者が実物を対照しながら行った分類作業では、最低でも15群に分けることが可能である。

これはあくまでも、同一工人が基本的に、ほぼ同大、同形態の口縁端部や稜を作り出すことを前提としたものであり、同一工人がまったく形態的特徴を異にする蓋杯を製作した場合には成立しない。しかしながら、先のヘラ記号を有する蓋杯の検討によって、同一工人はかなり高



V-1-1 図19 床面I出土無記号蓋杯の法量分布

い精度で同大、同形態の蓋杯を製作した可能性が高いものと判断している。

したがって、無記号の蓋杯は形態、法量、技法的特徴によって最低15群に分けられることから、無記号の蓋杯を製作していた工人数は15人以上であったものと憶測する。

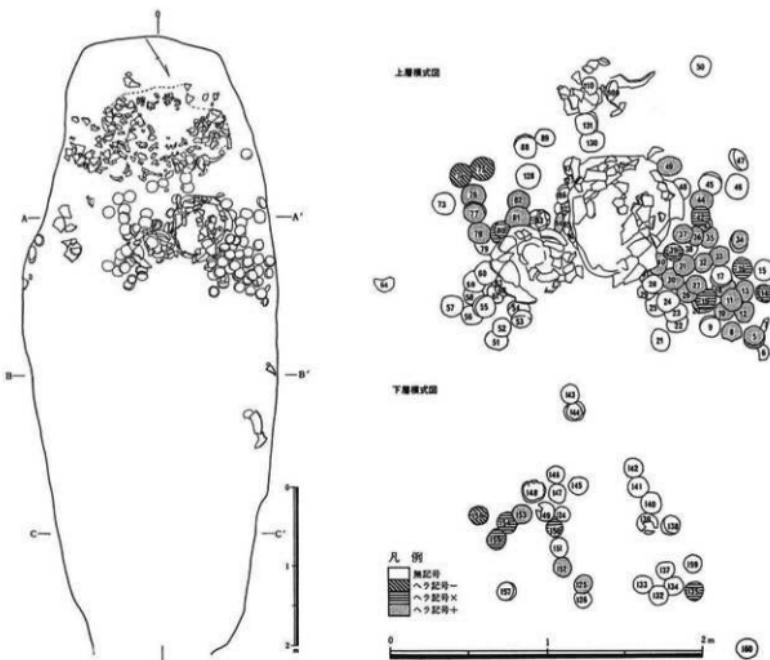
ここでは、本窯を主体的に管理する中心的な工人グループであった無記号蓋杯の製作工人グループを仮に「工人グループ乙」としておく。

3. 陶邑窯跡群におけるヘラ記号資料

陶邑窯跡群におけるヘラ記号については、田辺昭三²⁷⁾、中村 浩²⁸⁾、野上丈助²⁹⁾各氏の検討がある。ここでは、ヘラ記号をもつ蓋杯がほぼ原位置を保って多数出土しているMT206-I号窯の状況について中村、野上両氏の論考を参考にして概観するとともに、須恵器窯P-1床面Iの状況との比較を試みたい。

なお、ヘラ記号のもつ意味については、中村氏が「窯詰め」および「窯出し」時に生産者が、類似製品の区別のために使用した記号であるという見解を示している。先に示した須恵器窯P-1における蓋杯の状況を勘案しても、この指摘は的確で正鶴を得たものであり、異論のないところである。

中村氏はさらにMT206-I号窯において窯詰め時の原位置を保って遺存していた160セットの蓋杯中



V-1-図20 MT206-I号窯窯体内的須恵器出土状況
(左図は註30文献所収、右図は註26文献所収)

に「-」のヘラ記号3セット、「+」のヘラ記号39セット、「×」のヘラ記号12セットを抽出して検討を行っている。

その配置については、「“ヘラ記号”別の分布は必ずしも整然たる状況とはいえない」としながらも、「漠然とはしているが、その配置に一定の法則が存在した可能性は十分感受しうる」との指摘を行っている。また、「ヘラ記号」を有する蓋杯については、「細部手法を観察した結果、記号毎のまとまりと異なる記号間の手法差を看取した。この手法差とは、口縁部などに表われる、いわゆる作りぐせなどの同一製作者によって生じる差異ではなく、明らかに製作者の差によって生じるものと考えてよいもの」としている。結果的に「記号差=手法差となることから、同一窯、同一床面にあっては、異なる手法を有する同一器種の製品が焼成されていたこととなる。言い換えれば、本窯については異なる工人あるいは工人群が同時焼成を行っていたという事実が指摘しうる」とし、窯の使用（操業）にあたっては、共にあるいは共同使用という関係が存在していた可能性を指摘している。

なお、野上氏はこれを受けて「中村が無記号のものを除外して論を進めたり、細部技法のちがいについて必ずしも明確に示さなかった点に不満が残る」とし、「ヘラ記号3種のものの特徴、無記号のものの手法的分類こそ、工人の抽出を前提として示すべきであった」との指摘を行っている。また、当該窯の窯体内出土土器は『陶邑IV』³⁰⁾に掲載されているが、確かに野上氏が指摘するように、数種に分類はなされているものの、ヘラ記号と蓋杯の形態的特徴の関係をこの報告書から抽出して検討することはできない。

また、野上氏は時期別のヘラ記号の出現頻度を分析し、そのピークがII～III段階にあることとし、奈良時代後期のIV・3段階に縮少することを指摘し、これが労働編成が急激に変化したことによるものであるとしている。さらに、氏はII段階のMT200-I号窯ではヘラ記号が「14種あり、この点は同窯出土の高杯が透かしの有無、形状によって14形態に分類されること無縁でない」とし、同じくII段階の「TK43-I号窯」のヘラ記号は22種確認され、蓋杯における個体差は、蓋36、身27に分類できるようである」としている。そのほか、III・3～IV・2段階のTK316号窯では、26種のヘラ記号の存在を指摘し、III・3段階におけるヘラ記号の急激な減少を指摘している。

MT200-I号窯、TK43-I号窯、TK316号窯とともに灰原出土資料を含むものであるが、II～III段階においては、1基の窯に関わる工人がかなり多数であったことを示唆している。これは須恵器窯P-1床面Iを共有していた工人が7グループ30人以上であったという推定とも呼応している。

資料的制約や筆者の力量不足によって、検討不十分に終始しているが、須恵器窯P-1床面I出土蓋杯は、中村氏が指摘した複数工人による窯の共有あるいは共同使用という事象をきわめて具体的に補完しうる資料であるといえる。

4. 須恵器窯P-1をめぐる工人組織

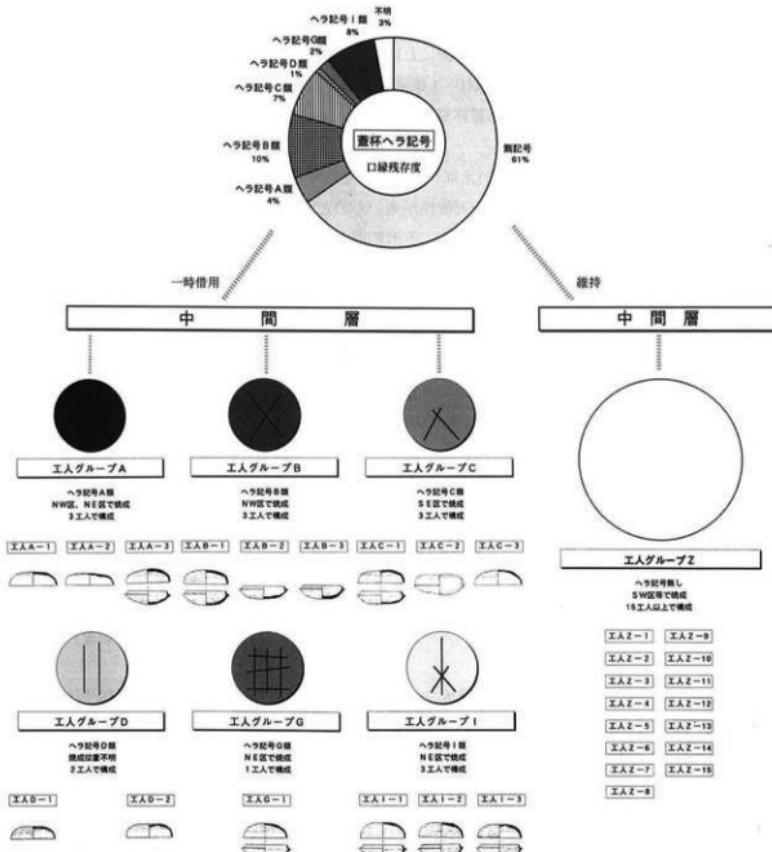
以上、須恵器窯P-1床面Iから出土した須恵器の検討を行ってきた。とくにヘラ記号を手掛かりとして同一工人によって製作された蓋杯を抽出し、結果として同一ヘラ記号を記す蓋杯は、ヘラ記号を共有する工人グループによるものであるという事実を指摘した。また、あわせて無記号の蓋杯の比較検討を行い、これも多数の工人によるものであることを指摘した。

単独の窯跡資料であり、時期別の変遷等については検討を加えることはできないが、ヘラ記号がピークをむかえる6世紀代の須恵器窯のモデルとして須恵器窯P-1床面Iを共有していた工人の組織構造について検討を加えておくことにしたい。

ヘラ記号を有する蓋杯については、すでに各個に検討を加えてきたように複数の工人が同一ヘラ記号を共有してグループを構成していることが明らかとなった。ただし、わずかに遺存した床面からの出土資料という点での制約と限界は依然として存在している。しかしながら、推定される工人グループの構成人員は出土量の多寡と呼応しており、ほぼ当時の実態を示しているのではないかと考えている。

さらに、出土量が比較的多いA・B・C・Iの各群では3人を1単位として工人グループを構成していることが看取される点は重要である。

須恵器窯P-1 床面Ⅰ 共有工人集団



V-1-図21 須恵器窯P-1 床面Ⅰ 共有工人の構成推定図

また、数量的検討によって無記号の蓋杯が過半数を占めるという事実は明らかであり、野上氏が指摘するように窯を主体的に使用する工人グループは、他の蓋杯と区別する必要がない無記号蓋杯の製作工人グループであり、先述のように15人以上の工人がその製作に関与していた可能性が高い。

なお、ヘラ記号を記した蓋杯を製作していた工人グループは、3人以下の工人で組織されており、窯詰めに際しても意図的に他グループの製品と区別しようとしている状況を看取することができる。また、再三にわたって述べているように須恵器窯P-1では焼成部の一部が遺存していたのみであるが、ヘラ記号を有する蓋杯の比率が高く、40%に近い数値を呈している。ちなみに、須恵器窯L-1では灰原出土資料であるが、蓋杯のうち、ヘラ記号を有する蓋杯の占める割合は4%に満たない。

これが、そのまま両窯跡をめぐる工人集団の特徴となる可能性もあるが、須恵器窯P-1の場合には灰原出土資料の検討を行っておらず、即断はできない。

しかしながら、先に掲げたMT206-I号窯においても、窯詰め状態で検出された蓋杯に占めるヘラ記号を有する割合は34%であり、須恵器窯P-1床面Iの状況と大差がない。したがって、須恵器窯P-1の場合には、とくにヘラ記号を有する蓋杯が多く窯詰めされていた部分が、偶然に削平を免れて遺存した可能性が高いものと判断する。

結果的に、須恵器窯P-1に関していえば、ヘラ記号を有する蓋杯を製作していた工人集団は窯詰めに際して、製品を意図的にまとめていた可能性が高いものと考えうる。

なお、図21では中村氏が提示した「窯をめぐる形態模式想定図」³¹⁾のうち、第3形態の概念にこれまでの検討で推定した須恵器窯P-1床面Iを共有する工人集団を当てはめている。

資料面での制約があるが、遺存していた須恵器蓋杯のみの検討においても30人以上の工人が床面Iに関与していたことが知られる。

また、すでに述べてきたように床面Iを共有する工人集団は、大きく二分することが可能である。

一方は無記号の蓋杯を製作する工人集団である。ここでは工人グループとして一括しているが、それを構成する工人は15人以上と多く、実際の組織としては複数の工人グループに細分されている可能性もある。

ただし、無記号の蓋杯については、諸先学が指摘するように、他の工人グループが製作した類似製品との区別が必要とされない製品であり、その製作工人集団は当窯を主体的に使用していた工人集団であるといえる。

また、他方はヘラ記号を記した蓋杯を製作する工人集団である。これについては既述の通り、ヘラ記号を手掛かりとした工人の特定を行い、ヘラ記号を共有する6工人グループと、それを構成する15工人を抽出した。なお、ヘラ記号を共有する工人グループには3人を1単位としているものが多い点は留意される。

また、各工人グループは複数の工人で構成されてはいるものの、製作される蓋杯の形状や技法的な特徴は同一グループ毎においては、大局的には共通する部分が少なくない。その紐帯関係については、家族や師弟関係であるのか否かという点は、にわかには判断できない。しかしながら、上記のように製作される蓋杯が似通っているという点を勘案するならば、ヘラ記号を共有する工人グループは強い紐帶によって結びついていた可能性が高いものといえる。

以上、須恵器窯P-1床面Iを共有する工人集団の組織構造について検討を加えた。その内容については先述の通りであるが、1基の窯に関わる工人が予想以上に多いという結論に至った。

この事実は、当該期における群集墳において須恵器を用いた葬送儀礼が盛行することによる需要の拡大と陶邑窯跡群を離れた周辺地域にまで新たに須恵器窯造営が広がっていくことと無縁ではない。

以下では、この点についての憶説を提示して向後の課題としておきたい。

第4節 結語

1. 陶邑窯跡群の拡大とその背景

II期の後半段階における須恵器窯の新たな出現については、すでに野上氏が天野川主谷を例にとって検討を加えている。詳細はここでは省かせていただくが、群集墳の造営とそれに伴う須恵器の急激な増産の背景に明確な王権の意図の存在を指摘している³⁰⁾。

天野川主谷におよんだ近年の発掘調査は、当該地に新たに造営された須恵器窯が、野上氏の予想していたようにII期の後半、すなわち群集墳の盛行期に平行するものであることや群集墳形成の廃止段階で操業を中止していることを明らかにしている。同様に日置荘遺跡の調査において検出した須恵器窯もその周辺で検出される須恵器窯群とともに天野川主谷における操業と盛衰をともにしている。

当該期における須恵器窯の造営は陶邑窯跡群の東側の天野川主谷に顕著であるが、日置荘遺跡をはじめとする北側へも大きく広がりをみせている。とくに、本稿で検討を行った口縁端部に刻み目状調整を施した杯蓋は、図22に示したように群集墳盛行期に陶邑周辺部に新造された須恵器窯からかなりの割合で確認される点は重要である。

また、陶邑窯跡群においては、管見にのぼる範囲でこのような技法的特徴を有する蓋杯は石津川以西のTK、MT地区に見られるのみであり、群集墳盛行に伴う陶邑周辺部における新規の須恵器生産には、この両地域の工人が派遣や指導という形で深く関与していた可能性が示唆されるのである。

また、本稿では須恵器窯P-1の検討を行い、床面Iを共有していた工人が最低でも7グループ30人であったことを指摘した。群集墳の造営に伴う須恵器の需要拡大は須恵器窯を急増させることとなった。しかし、このためには須恵器の生産に伴う薪の伐採、粘土の採掘、製品の運搬・搬出や何よりも多量の須恵器生産を可能とする工人的な新たな養成や編成が必要であったことはいうまでもない。

本稿で検討を加えた須恵器窯L-1や深井畑山窯跡群などは、必ずしも須恵器窯造営に適した谷地形を選ぶことなく、非常に浅い支谷に造営している状況が看取される。もちろん、その背景には薪や粘土、運搬の便などの諸条件が考えられるが、最も大きな要因は、須恵器の増産に伴う人員の確保が第一義的目的ではなかったかと憶測する。

現段階では、具体的な事例を挙げることはできないが、陶邑窯跡群から北側の比較的平坦な地形を有する地域へと須恵器窯の分布が広がっていくのは、人員確保のために意図的に既存の集落付近へ造営したためであると考えるのである。

いずれにしても、広範に広がる当該期の須恵器窯の分布は、結果的に急激な須恵器の増産に対応することができたことと、それに伴う工人の増員等の再編成が円滑に進められたことを示している。加えて、蓋杯製作に関する技法が共通することは先述の通りであり、新造須恵器工房への工人の派遣、養成が一元的に行われたことを示唆している。

とくに日置荘遺跡須恵器窯P-1の場合には、大型の円筒埴輪等を焼成する埴輪窯P-1と時期的にも地理的にも近接しており、やはりその背景には組織的な権力の存在が示唆されるのである。

2. 需要と供給に関する予察

群集墳盛行期に陶邑周辺部に新造された須恵器窯で生産された蓋類の口縁端部に刻み目状の調整を有するものが多く、製作技法に共通する点を指摘した。

管見にのぼる大阪府下の類例については表6に記した通りである。

陶邑窯跡群では石津川以西のMT地区やTK地区に所在する数基の須恵器窯からの出土が確認されるが、須恵器窯全体に対してはわずかな部分を占めるのみである。それに対して陶邑窯跡群の北側および東側に6世紀に入って新造される須恵器窯での出土は顕著であり、桜井谷2-17窯跡の排水溝で出土した蓋杯が気に掛るが、大局的にみた場合、時期的にも地域的にかなり限定できる技法的特徴であると判断する。

消費地側の出土資料としては、その分布が陶邑窯跡群近郊に限られたものではなく、遠くは長崎県対馬の下ガヤノキ遺跡での出土が認められるほか、全国各地でその類例が散見される。

表6および図22には管見にのぼる範囲で消費地側の出土資料を含めて表示している。生産地については先に記した通りである。

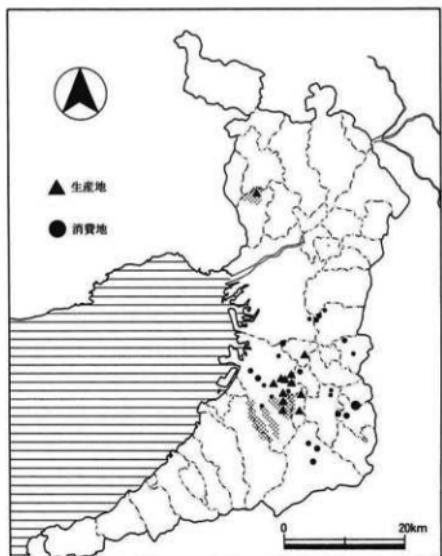
とくに留意される事例としては陶邑窯跡群の東側に展開する一須賀古墳群をはじめとする周辺の古墳群が特筆される。一須賀古墳群ではB3号墳などから口縁端部に刻み目状の調整を有する杯蓋が出土しており、数点のみが出土する他遺跡と比して際立った存在である。

また、出土した蓋杯全体に占める口縁刻み目状調整を有する杯蓋の割合は須恵器窯L-1で7.8%（口縁残存度）という数値を示しているが、一須賀古墳群（A-F,I,K,L,O,Q,WA支群）におけるその構成比の比率は8.3%³³⁾であり、総数に大きな差があるために単純には比較できないものの、非常に近似した数値を示している点は留意される。

さらに、数量的検討によって焼成されている須恵器の器種構成が蓋杯に偏重している点を指摘したが、この点も看過できるものではなく、当該期の群集墳中の古墳の副葬品、供献品に須恵器蓋杯がかなりの量を占めているのに対して壺が僅少であるという事実とも呼応しているのである。

また、先に異形杯とした須恵器が須恵器窯P-1から出土しているのは先述の通りであるが、その類例を探索すると、いずれも口縁端部に刻み目状調整を有する蓋杯を出土している一須賀古墳群と高井田横穴群に類例を見い出すことができるという事実がある。

他の須恵器窯における分析を欠いている段階においては、憶測の域を出るものでは



V-1-図22 口縁端部に刻み目を有する須恵器の分布

ないが、生産地と消費地における器種構成比や特徴的な器形や技法をもつ須恵器の検討によって、これまで漠然と陶邑産とされていた須恵器群の生産地が、考古学的にさらに限定できる可能性を指摘しておきたい。

本稿では、その可能性の一つとして陶邑北側周辺部の須恵器窯群と一須賀古墳群との関連を指摘したが、これ以外には個別具体的な需要と供給の関係については明示しえない。また、実物を相互に比較するといった基礎的な検証を経ていない点でも問題も多いことは自認している。

今回は特徴的な蓋杯口縁端部の刻み目状調整と異形杯に限って検討を加えたが、今後は特徴的なヘラ記号の比較²⁰⁾や内面の同心円紋スタンプによる工具の同定²¹⁾などを行うことによって、純粹に考古学的に生産地と消費地を点と点で結ぶことも夢ではないと考える。

実際、陶邑窯跡群ほど大きくはないが、福岡県小郡市では丸又窯跡群の調査でヘラ記号や技法的特徴から複数の窯を使用する工人が特定され、さらには、そこで生産された須恵器が三国丘陵の古墳や住居から出土することも確認されているのである²²⁾。

以上、日置莊遺跡で検出した須恵器窯2基の基礎的分析から6世紀代における陶邑周辺部の須恵器生産について検討を加えた。

時間的な制約から検討不十分に終始しており、事例や重要文献の遗漏も多いのではないかと危惧する。また、後段の検討では膨大な数の須恵器窯とそこで生産された大量の須恵器中のわずかな部分をピント的に検討した点で、いさか心もとない部分も少なくない。

筆者は自然科学による胎土分析の有効性を否定するものではない。しかし、多分にそれに頼っている自らへの警鐘の意味も込めて、本稿では基礎的な考古学的検討を試みた次第である。

なお、本稿をまとめる過程で調査担当の入江正則氏および整理担当の森屋美佐子氏には多大な協力を得るとともに、中西靖人、芝野圭之助、一瀬和夫各氏には分析に際して多くのご教示を賜わった。深謝。

註

- 1) 大阪府教育委員会が1986年度に刊行した『大阪府文化財分布図』では、須恵器窯P-1を包括して陶邑窯跡群の範囲が示されているが、1991年度刊行の『大阪府文化財分布図』ではその範囲が図1の範囲にせばめられている。
大阪府教育委員会 1986・1991『大阪府文化財分布図』
- 2) 日置莊遺跡の調査時に筆者らが確認した須恵器窯跡であり、前掲註1の『大阪府文化財分布図』1991では劍池西窯跡という名称が与えられている。なお、採集遺物の一部は以下の文献に掲載されている。
大阪府教育委員会・大阪文化財センター『日置莊遺跡(その5)』 1989
- 3) 帛市教育委員会『日置莊遺跡発掘調査報告書』(『堺市文化財調査報告』第52集) 1991
- 4) 共通する特徴として胴部中央に穿孔を有するものである。用途は不明であるが、穿孔位置が一定していない上に調整が粗雑であり、製品として生産されたものではない可能性も高い。
- 5) 類似する須恵器としては兵庫県加東郡社町上三草古墳群出土のものがある。ただし、当該土器は2個所に穿孔を有する点で当窯出土のものとは異なる。山田邦和氏にご教示を得た。
- 6) 器種名称および各部位の呼称については田辺昭三氏、中村 浩氏をはじめとする諸先学の研究成果に準拠している。
- 7) 江浦 洋「同心円文スタンプを有する須恵器蓋杯の製作技術」『鶴谷池遺跡』 1986 明石市教育委員会・同志社大学考古学研究室
- 8) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター『小阪遺跡』 1992
- 9) 少路窯跡遺跡調査団『桜井谷窯跡群2-17窯跡』 1982
なお、本窯の略称はTN 2-17であるが、これは陶邑窯跡群における谷山池地区の略称と混同する恐れがあり、本稿ではあえて用いていない。

- 10) 田辺昭三「須恵器の製作技術」『須恵器大成』 1981 角川書店
- 11) 植野浩三「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』第2号 1983 奈良大学
- 12) 八賀 晋「須恵器」『日本の美術』No.170 1980 至文堂
- 13) 中村 浩「須恵器の製作手法」『陶邑 I』 1976 大阪府教育委員会
- 14) 白石耕治「6、7世紀の須恵器の編年と製作技法—陶邑古窯跡群谷山池地区を例として—」『考古学研究』141 1988 考古学研究会
- 15) 前掲註7
- 16) 小丸古墳群調査団 『小丸古墳群』 1985
- 17) 福岡市教育委員会 『広石古墳群』 1977
- 18) 園部町教育委員会 『曾我谷遺跡発掘調査概要』 1977
- 19) 江浦 洋「古墳時代窯跡出土須恵器の技法的特徴」『日置莊遺跡（その3）』 1988 大阪府教育委員会・
（財）大阪文化財センター
- 20) 堺市教育委員会 『堺市文化財調査報告』第50集 1990
- 21) 堺市教育委員会 『堺市文化財調査概要報告』第3冊 1990
- 22) 杯形の立ち上がり部を欠いたような形状を呈する須恵器である。本来であれば、適当な名称を付すべきであるが、ここでは便宜的に異形杯と仮称しておく。
- 23) 図10には下記の文献に掲載されている実測図を天地を逆転して掲載している。一瀬和夫氏のご教示によれば、日置莊遺跡須恵器窯P-1出土のものは、成形の手法が異なっており、似て非なるものである可能性も残る。しかしながら、筆者は高井田横穴群出土例とともに口縁端部が外上方にのびる特徴などの共通する点を評価する立場をとりたい。なお、事実誤認の責はすべて筆者にある。
- 大阪府教育委員会 『一須賀古墳群資料目録 I 土器編（実測図）』 1992
- 24) 柏原市教育委員会 『高井田横穴群IV』 1992
- 25) 表8、図19に示した口縁端部の形態別の名称については『陶邑 V』第44図に準拠している。
- 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 『陶邑 V』 1982
- 26) 野上丈助「高藏寺地区・陶器山地区出土のヘラ記号とその意義」『陶邑 V』 1982 大阪府教育委員会・
（財）大阪文化財センター
- 27) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』 1966 平安学園考古学クラブ
- 28) 中村 浩「ヘラ記号について—工人組織検討の一資料として」『陶邑・堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要』 1970 大阪府企業局・大阪府教育委員会
中村 浩「須恵器生産に関する一試考—和泉陶邑窯における陶工組織について—」『考古学雑誌』63-1
1977 日本考古学会
- 29) 前掲註26
- 30) 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 『陶邑 IV』 1979
- 31) 中村 浩「須恵器生産に関する一試考—和泉陶邑窯における陶工組織について—」『考古学雑誌』63-1
1977 日本考古学会
- 32) 野上丈助「高藏寺地区・陶器山地区須恵器操業の推移について」『陶邑 V』 1982 大阪府教育委員会・
（財）大阪文化財センター
- 33) 一瀬和夫氏のご教示によれば、前掲註23文献には、実測可能な遺物すべてを網羅して掲載しているとのことであり、そこから出土点数や構成比を算出することも可能であると考える。
- 34) とくに須恵器窯P-1床面Iで出土した蓋杯I群などは、ヘラ記号が非常に特徴的であり、今後の調査で消費地を特定しうる可能性も皆無ではない。
- 35) 須恵器窯P-1床面Iの蓋杯B-1群は、同一一人の手によるものであり、当然のことながら同一の当て具を用いて同心円紋スタンプの押捺を行っている。第III部の図III-27に掲載した須恵器窯L-1出土の蓋杯に残された同心円紋當て具も細部の検討によって1~3が同一工具によるものであり、同様に4と5も同一工具によるものであることが容易に判別できる。ヘラ記号、口縁端部刻み目とともに消費地における產地同定の決定打となる可能性を秘めている。
- 36) 宮田浩之氏をはじめとする小郡市埋蔵文化財センター各位のご教示を得た。
小郡市埋蔵文化財調査センター 『特別展 古の陶工たち』 1994

第2章 日置莊遺跡IV調査区出土埴輪 の基礎分析

森屋美佐子

第1節 はじめに

日置莊遺跡のIV調査区から出土した埴輪は、本文でも述べたように、埴輪窯P-1出土の埴輪およびその灰原等のものである。当調査区出土の埴輪には、様々な特徴が見い出せたので、以下に、円筒埴輪について詳細を記述していく。

第2節 分類基準

本文でも述べたように、円筒埴輪の個体確認は接合後口縁部を含む破片、底部を含む破片および体部が2段以上あるものを1点として数えた。

なお、個体確認は、埴輪窯等遺構出土のものの総てを対象としているが、灰原から出土したものは任意である。

1. 数量

埴輪は、窯から約120コンテナ、灰原等から300コンテナの計420コンテナ分が出土した。これらの数量は、復元前の埴輪片としてのものである。

その中で、円筒埴輪がほとんどを占め、形象埴輪は灰原からコンテナにして6杯出土しているに過ぎない。

埴輪は、出土時の保存処理が不適切であったため、厚みのあるものは自重でサイクロ状にひび割れていたり、粘土化しているものが多量にあり、接合・復元可能なものに関しては石化剤¹⁾を使用し強度を補強した。

V-2-表1 IV調査区出土埴輪数量表

遺構名	個体確認			その他		計	
	口縁部	体部	底部	口縁部片	底部片		
埴輪窯P-1	床面I	10	10	10	61	4	95
	焼き口付近	2	4	9	80	22	117
	床面II	7	7	6	5	18	43
	床面III	21	15	17	95	50	198
灰原	>28	>16	>14	>52	>23	>133	
埴輪溜まりP-1	4	3	0	2	0	9	
埴輪転用井戸P-1	-	-	1	-	-	1	
計	≥72	≥55	≥57	≥295	≥117	≥596	

※完形のものは、口縁部に含まれる

表1に示す様に、個体確認できたもののに他に、口縁部や底部の破片についても数値化した。灰原については、總てについて接合作業を行うことは困難を極めたので、特徴あるものやある程度復元できるものを対象に数量化および図化したにとどまる。

2. 円筒埴輪の諸特徴

N調査区出土の円筒埴輪の特徴は、おおよそ、表2に示す通りであるが、以下に諸特徴を列記する。

(1) 大きさ：大きさは、大きく3種に分類できる。

- a. 口径約40cm前後、器高約90cm前後の大型
- b. 口径約60cm前後のいわゆる「日置莊西町窯」系の特大型
- c. 口径約20cmの小型

ほとんどの円筒埴輪が大型で占められ、特大型は埴輪窯P-1の床面II・IIIから各1点ずつと、灰原から数点出土している。小型のものにいたっては、灰原から1点出土するのみである。

(2) 口縁部形態：口縁部の形態は、大きくは3種に分類でき、さらに口縁端部を3種に分類できる。

- a. 外 反 ----- i. 端部が凹面をもつ
- |----- ii. 端部が平坦面をもつ
- |----- iii. 端部が丸みをもつ
- b. 逆L字形 ----- i. 上端部が平坦面をもつ
- c. 直 口 ----- i. 端部が凹面をもつ
- |----- ii. 端部が平坦面をもつ
- |----- iii. 端部が丸みをもつ

(3) 体部形態：体部の形態は大きく3種に分類できる。

- a. 寸胴形
- b. 下ぶくれ形
- c. ラッパ形

体部形態については、約1/2以上残存しているものが対象となった。

(4) 調整方法：外面と内面により、多少異なる。

- 外面 ----- a. タテハケの一次調整のみ
- b. 二次調整 ----- i. ヨコハケA種
- |--- ii. ハケ各種
- |--- iii. ナデ
- 内面 ----- a. ナナメハケ
- |--- b. タテハケ
- |--- c. ヨコハケ
- |--- d. 指ナデ・ナデ
- |--- e. 板状工具痕

ハケの原体は、内外面共に同一原体で施されるものであり、重なりがあるために細く見えるものがある。

外面のハケは、10~15cm前後と短く、凸帯を挟んで施されるものが多く、わずかに粘土を引っ張っており、生乾きの時点での施されている。

内面の調整は、主に、手の届く範囲で変化しており、口縁部付近にヨコハケないしは横方向のナデを施すものがほとんどを占める。なお、1種類の調整のみを使用している場合や数種類の調整を用いている場合があり、様々な組み合わせがある。

また、底側部外面は、ほとんどのものが成形時のナデで終わっているが、中には、指ナデによる調整がタテハケ後付加されているものがある。

(5) 凸帯の種類：凸帯の種類は、大きくは3種類に分類できる。

- a. 断面M字形・三角形
- b. 断面山形・方形
- c. 断面方形・円形

a種の凸帯の形状は見掛け上分類できるが、実際には、同一凸帯で一方でM字形をし、一方で三角形をしているものや、同一埴輪でも2者を用いているものがある。

この種の凸帯は、基本的に凸帯の上・下および凸帯上の3方にヨコナデを施すことに共通点が認められる。

b種の凸帯は、方形の凸帯が拡大したものを含み、凸帯としては一番大きなものが施される。凸帯の上・下および凸帯上に指押さえを残すものが多い。

c種の凸帯は、a種の凸帯と同様に凸帯の上・下および凸帯上の3方にヨコナデを施すが、丁寧さに欠け、とくに、凸帯の上・下のヨコナデが部分的に施される場合が多い。

(6) 凸帯下描き線：凸帯を施す際に下描き線を施す場合と無い場合があり、3種に分類できる。

- a. 無し
- b. 指ナデ
- c. ヘラ描き

凸帯下の下描き線の種類・有無は、先の凸帯形状と関連しており、a種凸帯には下描き線が施されることなく、凸帯のみが剥がれ落ちている例が少ないと、凸帯が剥がれている場合は体部も同時に抉られていることが多いことからも、接合が丁寧に行われていることがわかる。しかし、下描き線が施されないために、凸帯の間隔が不統一なものが多い。

b種凸帯は、指ナデによる下描き線が施されることが多く、凸帯の間隔も一番広いものである。しかしながら、下描き線を施すものの、その描き方はいい加減なもので波うっているものが多くを占める。

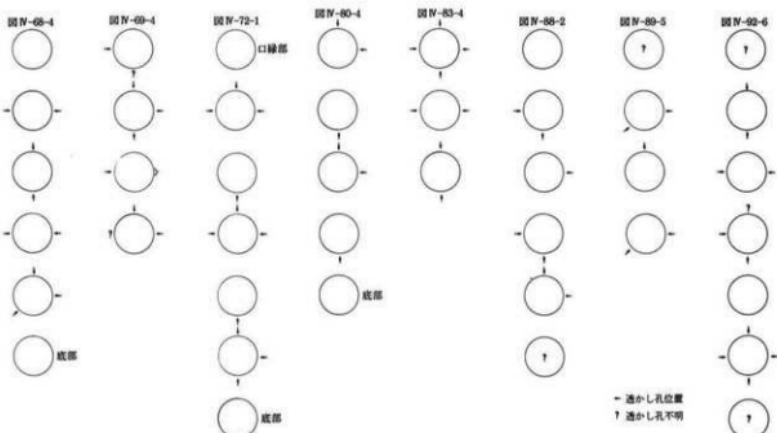
c種の凸帯は、ヘラ描き線を施しているものが多く、ほぼ等間隔に凸帯が施されることや、凸帯のみが剥がれていることがままあることから、凸帯位置を気にはしているものの凸帯の接合が安易に行われていたことが想定できる。

(7) 透かし：円形ないしは椭円形の透かしがあり、その穿ち方で3種に分類できる。

V-2-表2 IV調査区出土円筒埴輪の基礎分析表

諸 特 徴	造 構 名							小 計	
	埴 輪 置 P-1				灰 原	埴 輪 留まり P-1	埴 輪 伝 用 井戸 P-1		
	床 面 I	焚き口付近	床 面 II	床 面 III					
口: 外 反	39	78	12	36	37	4	-	206	
縁: 逆 L 字	2	1	3	1	0	0	-	7	
形: 直 口	1	3	3	77	32	2	-	118	
体: 寸 刻 形	12	4	10	28	18	0	1	73	
部: 下ぶくれ形	0	0	3	0	8	0	0	11	
意: ラッパ形	0	0	0	4	2	3	0	9	
外: 第1次: タテハケ	67	117	43	192	113	9	1	542	
面: 第2次: ヨコハケ A	0	0	2	1	6	0	0	9	
調: 整: ハケ各種	0	0	0	0	10	0	0	10	
整: ナデ	0	0	1	0	2	0	0	3	
内: ナメハケ	41	60	16	10	6	1	0	134	
面: タテハケ	11	8	4	39	23	2	1	88	
調: ヨコハケ	18	30	7	18	24	3	0	100	
整: 指ナデ・ナデ	8	25	28	133	72	4	1	271	
整: 板状工具痕	0	0	4	9	2	0	0	15	
底側面調整: 指ナデ	0	1	1	2	15	0	0	19	
凸: 断面M字形・三角形	38	13	19	12	15	4	0	101	
形: 断面山形・方形	0	0	4	0	28	0	0	32	
状: 断面方形・円形	0	2	3	38	32	2	1	78	
凸: 無し	38	15	23	12	39	6	1	134	
带: 指ナデ	0	0	3	0	18	0	0	21	
下: 指描線	0	0	0	38	8	0	0	46	
口: 短切痕	8	2	6	4	4	3	-	27	
縁: 等間隔	0	0	1	10	5	0	-	16	
凸: 横凹凸幅	0	0	0	3	8	2	-	13	
最: 低 位 置	8	14	8	15	14	-	0	59	
下: 等間隔	6	14	18	52	8	-	0	98	
凸: 高 位 置	0	1	0	0	15	-	1	17	
透: 円形: 2個1対	18	7	3	24	31	2	0	85	
か: 3個1対	0	0	0	0	2	0	1	3	
し: 孔: 不定位置	0	0	2	2	4	1	0	9	

※調整等、1個体の埴輪に数種類のものが施されている場合、その種類全てをカウントしている。



V-2-1 日置莊遺跡IV調査区埴輪窯P-1出土の円筒埴輪の透かし位置

a. 2個1対交互

b. 3個1対交互

c. 不定位置

ほとんどの円筒埴輪の透かしが2個1対に施されるなかで、不定位置に施されるものが若干あり、図1に示す通りである。

(8) 成形技法：成形技法については、円筒状のものを作るという点では総てに共通するものがある。

まず、底部を幅広の粘土帯で横に数枚重ねながら作り、幅2～3cm程の粘土紐を巻き上げていく。粘土紐は、5～6本を積み上げた段階で再度成形を加え、大体、6単位で1本の埴輪を作成している。

埴輪窯P-1床面Iの段階では、ほぼ、粘土紐帶の1単位毎に外面に凸帯を施す。床面II以降では、内面に、粘土紐の雜ぎ目を顕著に残しているものが多い。

全体的に、器壁の厚さは、口縁部が薄く、下へいく程分厚くなる。場合によっては、底部の外面にもう1本粘土帯を重ね足すものがある。

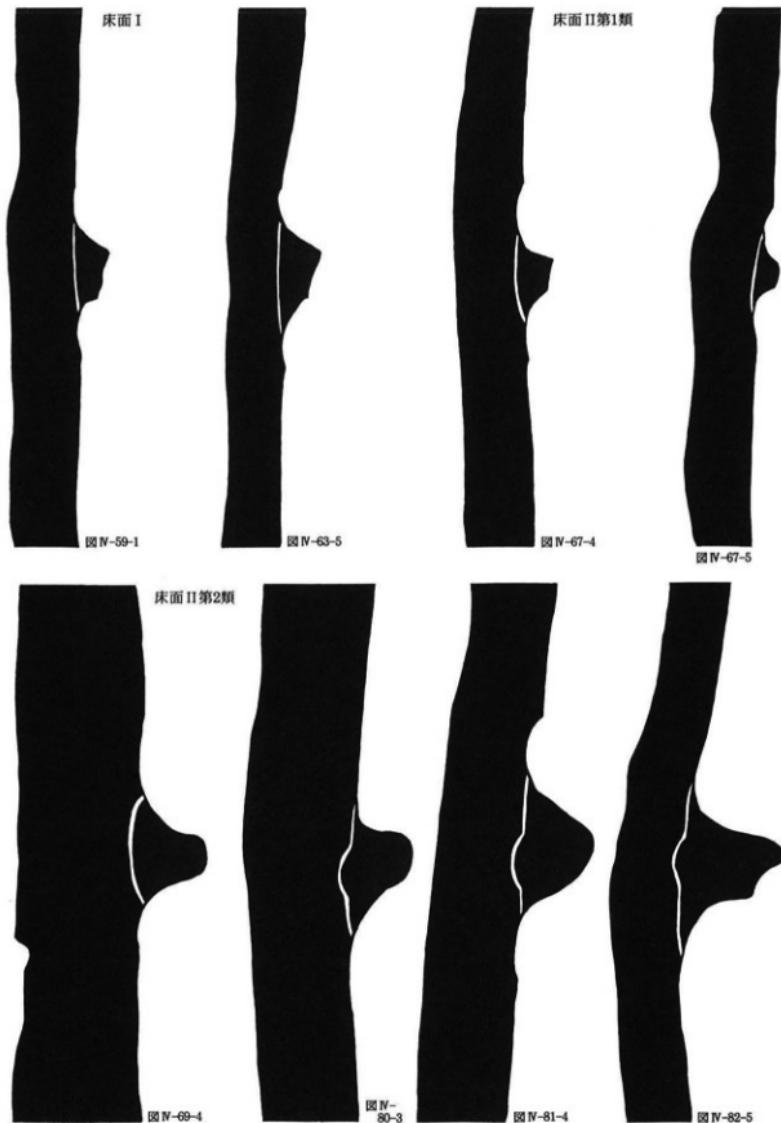
底端部に木の葉压痕やヘラ状圧痕が残るもの多量にあることからも、底部から口縁部にかけて作られたことがわかる。なお、体部外面のタテハケが生乾きの状態で施されており、短期間で作られた様子がうかがわれる。

第3節 分類結果

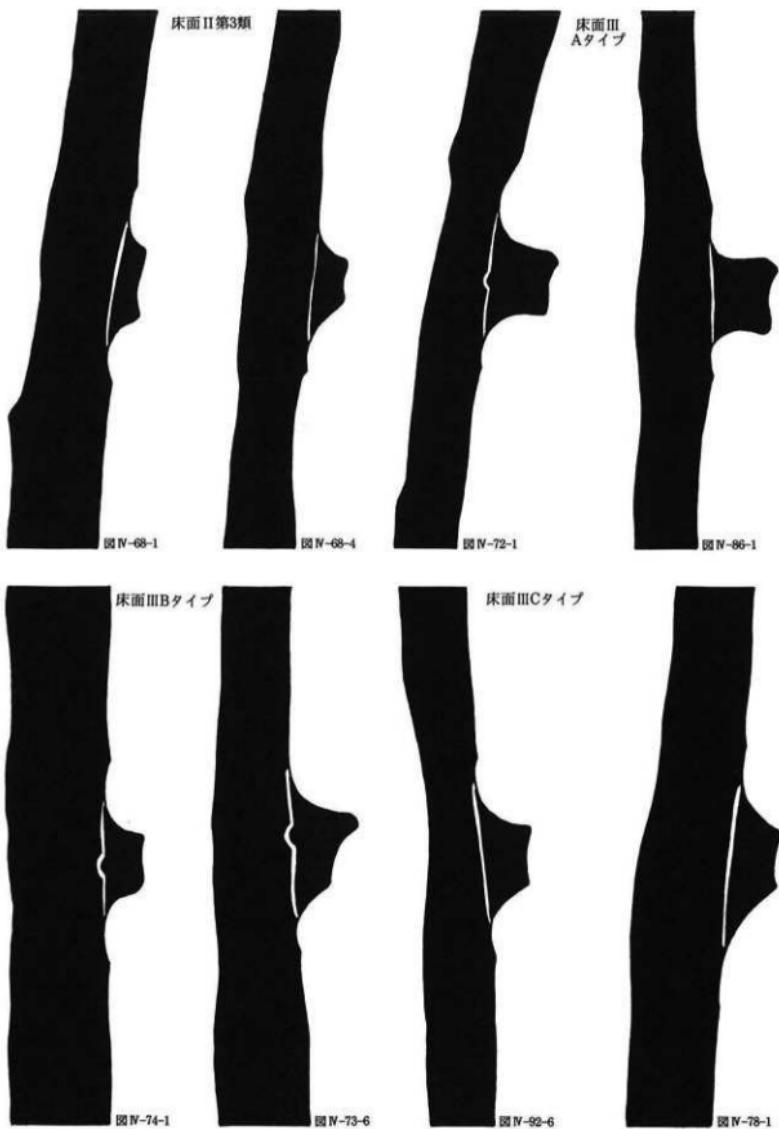
前述した、円筒埴輪の分類に沿って、埴輪窯P-1床面出土や灰原出土の円筒埴輪を見ていくと、以下の様な特徴が表出される。

1. 塩輪窯P-1出土埴輪の諸特徴

床面により特徴に差異が認められることから、床面ごとに記述する。



V-2-図2 日置荘遺跡IV調査区埴輪窯P-1出土円筒埴輪断面図1 (縮1/1)



V-2-図3 日置莊遺跡IV調査区埴輪窯P-1出土円筒埴輪断面図2 (縮1/1)

(1) 墳輪窯P-1床面I出土埴輪の諸特徴

- a. 口縁部形態は1点のみ直口のものが含まれるが、残存状況から後からの混入とみられる。それを除くと、ほとんどのものが外反するタイプであり、2点のみ逆L字形がある。外反する口縁端部は、凹面をもつものがほとんどを占める。体部形態は寸胴形のみが出土する。
 - b. 調整は、外面タテハケの一次調整のみで、内面にナナメハケを施すものが大半を占める。
 - c. 凸帯は、a種凸帯であり、凸帯下の下描き線は施されない。そのためか凸帯の間隔が一定していないものが多い。口縁部下の凸帯位置は、体部の凸帯の間隔よりも幅狭いもので、最下段の凸帯位置はほぼ等間隔で施されるものと低位置に施されるものとで二分される。
 - d. 透かしは、円形のものが2個1対で交互に穿たれる。
 - e. 器壁の厚みは、体部で平均1cm前後と薄く、底部の厚みが倍程にやや分厚くなる。
- 粘土紐の繼ぎ目は、ほとんどのものが消されているが5~6本単位でつなぎ合わされた部分の継ぎ目が内面に顕著に残っている。

(2) 墳輪窯P-1床面I焚き口付近出土埴輪の諸特徴

小破片が多く、図示できるものが少ないため定かではないが、床面I出土のものと特徴を異にするものがあるため、別記した。しかしながら、大半は、床面I出土埴輪の特徴を有しており、他に床面II出土埴輪の特徴をもつものが混在している。

(3) 墳輪窯P-1床面II出土埴輪の諸特徴

- 床面II出土埴輪は、量的には一番少ないものであるが、大きな差異のある埴輪が出土している。
- まず、第1類の埴輪は、床面I出土のものとあまり差異の無い埴輪の一群である。その特徴は、以下の様になる。
- a. 口縁部形態は、短く外反する。外反する口縁端部は凹面をもつものが1点のみあり、他は面をもつものがある。体部形態は、寸胴形である。
 - b. 調整は、外面タテハケの一次調整後部分的に二次調整としてA種ヨコハケを施すものがあり、内面にタテハケおよびナナメハケを施す。
 - c. 凸帯は、a種凸帯であるが、床面I出土のものと比較してやや小さなものが多い。凸帯下の下描き線は施されない。口縁部下の凸帯位置は、床面Iと同様に幅狭く施される。
 - d. 透かしは、円形のものが2個1対交互に穿たれる。
 - e. 器壁の厚みは、体部で平均1.5cm前後とやや分厚くなる。粘土紐の継ぎ目は、床面Iと同様である。

次に、第2類の埴輪は、3点のみのため定かではないが、特徴は、以下の通りである。

- a. 口縁部形態は、1点のみの出土であるが、外反し口縁端部が凹面をもち、内方がわずかに立ち上がり内面に強いヨコナデが施される。体部形態は不明であるが、灰原出土のものから類推すると下ぶくれ形になると思われる。
- b. 調整は、外面にタテハケ後二次調整としてA種ヨコハケおよび指ナデを付加するものがあり、内面に粗い幅広のナデおよび指ナデを施し、粘土が引っ張られている。

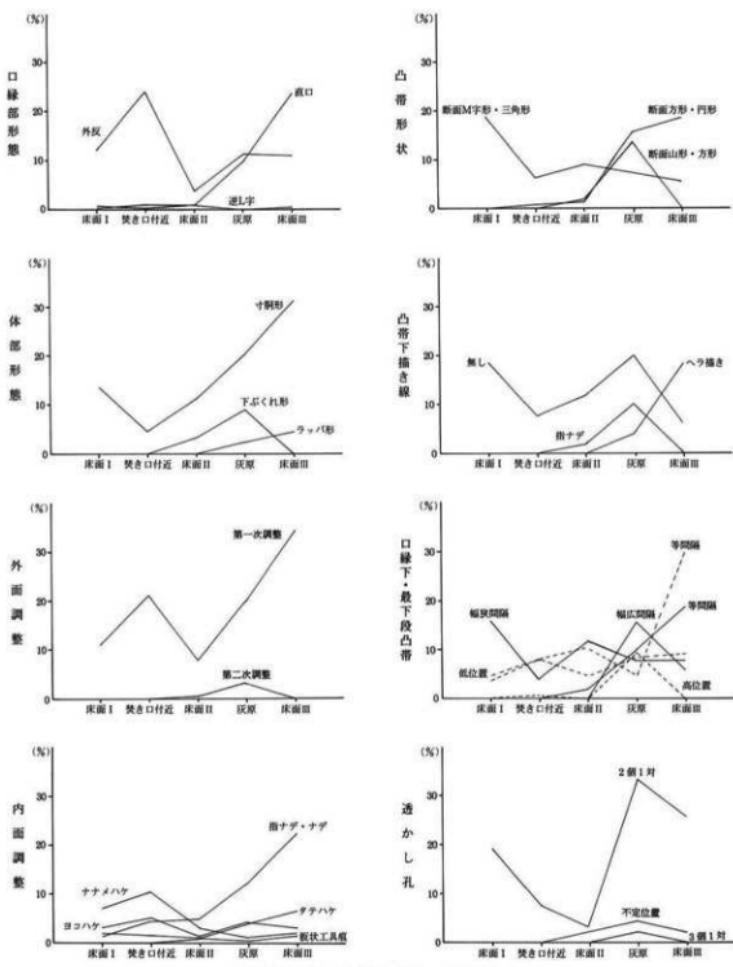


表2を基に、それぞれの特徴を出現率で表している

V-2-図4 日置荘遺跡IV調査区埴輪窯P-1出土円筒埴輪の諸特徴出現頻度

- c. 凸帯は、b種凸帯が施され、凸帯下に指ナデによる下描き線が施される。凸帯の間隔が約18cmと幅広いものである。
- d. 透かしは、円形で2個1対を交互に穿っているものと、図1（図IV-69-4）の様に不定位置のものがある。
- e. 器壁の厚みは、体部で平均2.5cm前後を測り、分厚いものである。粘土紐の織ぎ目は、内面に顯著に残っているものや外面に残っているものがある。

さらに、第3類の埴輪は、内面の調整や凸帯等が第1類の埴輪と異なる一群である。

- a. 口縁部形態は、逆L字形が1点のみ出土している。体部は、寸胴形である。
- b. 調整は、外面タテハケ、内面口縁部付近ヨコハケないしは指ナデ、以下指ナデおよび板状工具痕を残す。外面底側部にタテハケ後指ナデを付加するものがある。
- c. 凸帯は、c種凸帯を施し、凸帯下の下描き線は施されない。口縁部下の凸帯位置は、いずれも幅狭く、最下段の凸帯が等間隔のものが低位置のものの約2倍出土している。
- d. 透かしは、円形で2個1対を交互に穿っているものと、図1（図IV-68-4）の様に不定位置のものがある。
- e. 器壁の厚みは、体部で平均1.8cm前後とやや分厚いものである。粘土紐の織ぎ目は、床面Iと同様である。

なお、特大型埴輪が1点出土している。

全体の長さの約1/3が残存していると思われる。

- a. 口縁部は、逆L字形をしているが、凸帯を貼り付けたものではなく、口縁端部下に強いヨコナデを施すことにより凸帯を付けたように見せ掛けている。上端部は面をもち、内方にわずかにつまみだされる。体部形態は寸胴形と思われる。
- b. 調整は、外面にタテハケの一次調整のみ、内面に口縁部付近ヨコハケ、以下、指ナデ・板状工具痕を残している。
- c. 凸帯は、a種凸帯で断面三角形をしている。凸帯の間隔は、口縁部にいくほどやや幅狭くなる。凸帯下に下描き線は、施されない。
- d. 透かしは、円形のものが2個1対交互に穿たれる。
- e. 器壁の厚みは、約2cmを測る。

(4) 墓輪窯P-1床面III出土埴輪の諸特徴

床面IIIから出土した埴輪は完形になるものが2点あり、大きくは大型が3種、特大型が1点出土している。

まず、Aタイプは、体形がラッパ形のものである。

- a. 口縁部は、斜め外方へわずかに開き、口縁端部は丸みをもつ。体部はラッパ形で口径が底径の約1.5倍を測る。
- b. 調整は、外面に一次調整のタテハケを施し、内面の口縁部付近にヨコハケおよび指ナデ、体部にタテハケおよび指ナデを施す。

c. 凸帯は、c種凸帯で、凸帯下に下描き沈線を施す。口縁部下の凸帯は幅広いもので、以下最下段の凸帯まで等間隔に施される。

d. 透かしは、図1(図IV-72-1)の様に不定位置に穿たれるものがある。

e. 器壁の厚みは、1.5cmとやや分厚いもので、底部内面に粘土紐の繩目を顯著に残す。

次に、Bタイプは全体形が寸胴形のもので、前者と調整・凸帯等変わらないものがある。 .

a. 口縁部がわずかに外反するものと、直口のものがあり、前者は口縁端部が丸みをもち、後者は、口縁端部が丸みをもつもの、面をもつもの、凹面をもつものがある。

口縁部が逆L字状のものが1点出土しているが、口縁端部のみの出土で全容は不明である。

b. 調整は、外面がタテハケの一次調整を施すのみで、内面にタテハケ・指ナデ・板状工具痕を單一で用いたり組み合わせて用いたりと様々である。

c. 凸帯はc種凸帯を用い、凸帯幅が1cm程のものと2cm程のものがあり、凸帯下に下描き沈線が施される。凸帯の間隔はほぼ均質で、直口のものに口縁部下の凸帯位置が幅狭いものがある。

d. 透かしは、円形で2個1対が交互に穿たれている。この種の埴輪にヘラ描き紋が施されるものがある。

e. 器壁の厚みは、2cm前後とやや分厚く、内面に粘土紐の繩目を顯著に残すものがある。

Cタイプには、全体形が定かではないが、寸胴形で、調整・凸帯等に差異のある一群がある。

a. 口縁部がわずかに外反し、口縁端部が凹面をもつものが1点のみある。

b. 調整は、外面にタテハケ後ヨコハケを部分的に施すものがあり、内面にヨコハケないしはナナメハケを施している。

c. 凸帯は、a種凸帯で床面Iの凸帯と比較するとやや幅広くなるものが多い。凸帯下に下描き線は施されず、凸帯の間隔が均一でない。最下段の凸帯位置は底部近くに施される。

d. 透かしは、円形で2個1対が交互に穿たれる。

e. 器壁の厚みは、他の埴輪と変わらない。

これらの埴輪は、特大型の埴輪の特徴と口縁部形態が違うだけで、他は同様のものである。

特大型の埴輪は、1点のみ出土しており、全体の約2/3が残存している。

a. 口縁部は、幅広い段状で上端部が凹面をもつ。

b. 調整は、口縁部外面にA種ヨコハケ、以下タテハケを施し、内面にヨコハケおよびナナメハケを施す。

c. 凸帯は、a種凸帯でやや幅広くなり、凸帯下に下描き線は施されない。

d. 透かしは、円形で2個1対が交互に穿たれる。

e. 器壁の厚みは、他の埴輪と変わらない。

この埴輪は、本来、ヒレが付くと思われるが、退化してしまっているようだ。

2. 灰原出土埴輪の諸特徴

本文でも述べた様に、埴輪窯P-1の床面出土埴輪と比較すると、各床面出土埴輪と同様の埴輪以外

に窯からは出土していない種類の埴輪があることがわかる。ここではそれらの埴輪について記述し、さらに、床面出土埴輪を補足するものについて述べる。

まず、埴輪窯から出土していない埴輪の一群には、2種類あり、次の様な特徴が見られる。

第1類は、以下のようなになる。

- a. 口縁部は、斜め外方にわずかに開き口縁端部は凹面をなす。口縁部破片のみの出土で、全体形は不明であるが、下ぶくれ形になると思われる。
- b. 調整は、外面縦・横・斜め方向のハケを乱雑に施し、内面指ナデを施す。
- c. 凸帯はb種凸帯を施し、凸帯下の下描き線は指ナデを施すものがほとんどである。
- d. 透かし孔の穿ち方は不明である。
- e. 器壁の厚みは、1.5cm前後で、外面に粘土紐の継ぎ目を残すものがある。

第2類は、以下のようなになる。

- a. 口縁部は、短く外反し、端部が丸みをもつ。体部は上半部のみ残存しているため、全体形は不明である。
- b. 調整は、外面にタテハケ後指ナデおよび指押さえを口縁部付近に付加し、内面に指ナデを施す。内外面に粘土紐の継ぎ目を残す。
- c. 凸帯は、b種凸帯を施し、凸帯下の下描き線に指ナデを施すが、真っ直ぐには施されず、歪んだものが多い。凸帯の間隔も不統一である。
- d. 透かしは、円形で2個1対交互に穿つものがある。
- e. 器壁の厚みは前者と同様である。

以上の2種の埴輪の特徴から、大きくは、器壁の厚みが違うものの、調整、凸帯の形状・付け方等床面II出土埴輪の第2類の埴輪と共通するものである。

次に、床面II出土埴輪の第2類の埴輪を補足するものがある。

- a. 口縁部は、短く外反し口径30cm前後と小さく、口縁部だけを見ると、一見小型の埴輪のように見えるが器高90cm前後と大型になると思われるもので、端部が丸みをもつ。体部は、底部が最大径をもつ下ぶくれ形である。
- b. 調整は、外面にタテハケを施すものと指ナデを施すものがあり、内面に口縁部付近ヨコハケないしは指ナデを施し、以下指ナデを施している。この種の埴輪に、底側部外面に縦および斜め方向の指ナデを付加するものがある。
- c. 凸帯は、b種凸帯で凸帯下に指ナデによる下描き線を施し、凸帯の接合時に指押さえを施すものが多い。
- d. 透かしは、残存状況が悪く定かなものが少ないが、図1(図IV-80-4)の様に不定位置に穿たれるものがある。
- e. 器壁の厚みは、2.5cm前後と厚みがあり、体部を支えるために底部にいく程厚みを増し、「ハ」の字状になっている。

灰原出土の埴輪は、本文でも述べたように、埴輪窯P-1から搔きだされたものであることから、当然床面出土のものと同様のものが多量に含まれている。これらの埴輪のうちで、床面I出土埴輪と共に

の埴輪が一番少量であり、1点のみ、灰原と接合するものがあった。

灰原から多量に出土している円筒埴輪は、床面IIおよびIIIと共に通るもので、その出土量はほぼ二分するものと思われる。

第4節　まとめ

以上、IV調査区出土の円筒埴輪の諸特徴を述べてきた。それらを、埴輪窯P-1の床面に対応させてみると、埴輪が出土する床面が3枚確認されており、少なくとも、3時期にわたって埴輪が焼成されていたことがわかっている。さらに、諸特徴の差異から、大型の円筒埴輪が10種類、特大型が2種類、小型が1種類に分類された。これらの埴輪をその共通点と違いから、時期差に置き換えるならば、少なくとも、5時期に区分されると考えられる。それは、以下のようになる。

- 第1期 墓輪窯P-1床面I出土埴輪
- 第2期 墓輪窯P-1床面II出土第1類埴輪
- 第3期 墓輪窯P-1床面II出土第2類埴輪
- 第4期 墓輪窯P-1床面II出土第3類埴輪
- 第5期 墓輪窯P-1床面III出土埴輪

第1期の床面I出土埴輪には、形態的には、外反する口縁部をもつAタイプのものと逆L字形の口縁部をもつBタイプの埴輪がある。しかしながら、口縁部形態が違うだけで両者ともに調整技法、凸帯の形状・付け方等共通点が多く、同時に作成されていたと思われる。

床面II出土埴輪には、大型の埴輪が3種類出土しており、それらの違いが大きいことから、個体差というよりは時期差を表していると考えられる。それらを、前後の床面Iおよび床面III出土埴輪と比較するならば、次のようなことがわかる。

第2期の床面II出土の第1類の埴輪は、第1期の床面I出土埴輪と形態・調整等さほど変化がない。まず、口縁端部が凹面をもつものから平坦面をもつものが多くなり、口縁部の外反がやや緩くなる傾向にある。次に、器壁がやや分厚くなり、凸帯がa種凸帯ではあるがやや小ぶりになることから、円筒埴輪の退化現象が第1期と比較して第2期のものに見られる。それらから、時期差はあるものの連続性が認められるものである。

第3期の床面II出土の第2類の埴輪は、他の埴輪と比較して共通性に乏しく、突然変異のような埴輪で、円筒埴輪がどういったものか理解していない者が作ったように見受けられる。かろうじて、共通性を見い出すならば、器高および円筒状のものに凸帯を付すという行為に象徴されよう。

器壁の厚みが2.5cmと分厚く、底部が上半部を支えるためにはより分厚くなり、その重みで体部下半が下ぶくれになり、上半部がより細く作られている。

その製作技法等から、床面II出土の第2類の埴輪とはほぼ同時期に、灰原出土の窯からは出土していない一群が作られたと考えられる。

第4期の床面II出土第3類の埴輪は、一見、第2期の埴輪と同様である。しかしながら、その諸特徴

が第2期の埴輪よりは第5期の埴輪に類似性が認められることから、この時期に当てはまるものといえよう。それは、凸帯の形状が第5期の床面Ⅲ出土の埴輪のc種凸帯に似ており、第5期の埴輪の凸帯よりは凸帯の上・下および凸帯上に丁寧にヨコナデを施していることと、内面の調整に板状工具痕が残っており、同様の調整が第5期の埴輪にも見られることから、床面Ⅲより先行するものといえる。

第4期の埴輪は、第3期の埴輪と比較して、形態的には円筒埴輪を意識して作られたものであり、第3期の段階で形骸化してしまった埴輪が先祖帰りを起こしたものである。特大型の埴輪も内面の調整等からこの時期に属すと考えられる。これは、床面Ⅲ出土のものと接合することからもいえる。

第5期の床面Ⅲ出土の埴輪は、大型の埴輪に3タイプあるが、A・Bタイプは、形態に差異があるものの調整・凸帯等類似しており、時期差ではなく個体差と考えられる。

Cタイプについては、特大型の「日置莊西町窯系」埴輪に類似する特徴を備えており、その系譜からも前述の埴輪と時期差のないものと思われる。

以上、IV調査区出土の円筒埴輪の時期差について見てきたが、第1期と第2期および第4期と第5期では連続性が認められた。しかし、第2期と第3期の埴輪の差異が大きいことから、第2期と第3期の間に、なお、空白期があると考えられる。

IV調査区出土の円筒埴輪を5時期に区分できたが、その年代を比定するならば、須恵器窯P-1出土の須恵器がMT85の後半とすれば、遺構の切り合い関係からその開始時期は、同時期ないしはそれより少し遅れた段階と考えられる。すなわち、6世紀後半に位置するとと思われ、この段階での良好な一括性とその細部の推移を知ることができた。特に、その最終段階は、埴輪の消滅する時期に近いことからも、その典型例として扱うことができる。

以上、日置莊遺跡IV調査区出土の円筒埴輪について述べた。埴輪の終末を考える上で貴重な資料と考えられる。今後、古墳や窯から出土する資料が追加されることにより、これら埴輪の位置付けが確実なものになるとと考えられる。

この文を書くに当たって、数々のご教示を頂いた、一瀬和夫氏に感謝の意を表します。

註

- 1) 埴輪の強度の補強には、当センターの保存処理技師の山口誠治の指導の基に、石材強化剤OHに15分間浸し、2週間乾燥させた後、再度前述の方法を繰り返した。また、大型破片で容器に入らないものは石材強化液水剤Hを塗布し、2週間乾燥させた後、同じ作業を再度行った。なお、埴輪のひび割れを防止するために、内面にガーゼを当て、エポキシ樹脂系接着剤で補強した。



V-2-図5 日置莊遺跡IV調査区埴輪窯P-1出土埴輪実測図

第3章 日置荘遺跡出土瓦の分析

市本 芳三

日置荘遺跡を特徴づける遺物として、I・II調査区から出土した多量の瓦がある。平安時代末から室町時代（12～16世紀）にあたり、南河内から和泉地域の南部大阪における指標となる一群である。

ここでは各瓦の製作技法、紋様を検討し、その変遷を考えたい。その上で日置荘遺跡における時間的変化や瓦の種類ごとの出土分布より、当遺跡の瓦出土からみた景観の復原を試みた。

平安時代以降の瓦研究については平安京に関する、『平安京古瓦図録』¹⁾や上原真人氏の論考²⁾等があり、大和では法隆寺における昭和資財帳³⁾作成に伴うもの、山崎信二氏の論考⁴⁾、薬師寺発掘調査報告書⁵⁾の論考等がある。また、他の各地域でも分析⁶⁾が行われている。

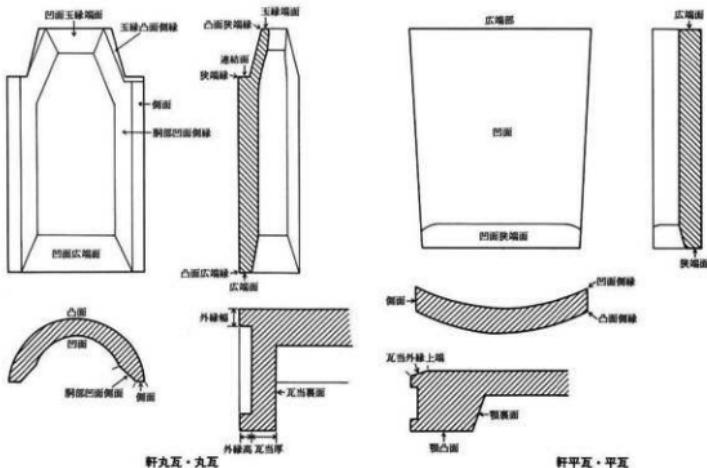
第1節 製作技法

紋様からの変遷の他、出土瓦を観察することにより、製作技法を復原し、工程の順に沿って説明する。なお、各部位の名称は図1に示した。

1. 軒丸瓦・丸瓦の製作技法

(1) 粘土板の切断方法

粘土塊からの切断方法には、いわゆる「糸切り法」と「コピキ法」が知られており、丸瓦では凹面にこの痕跡が観察される。糸切り法は糸を張った弓状工具を使用し、必要な厚み分を切り取る方法であり、斜め方向の緩弧線の筋が残存する（写II-74-11'）。コピキ法は鉄線を張った張力の大きい工具を平行



V-3-図1 瓦の部位名称

移動して切り取る方法であり、丸瓦の長軸に対して垂直方向に筋が残存するが、当遺跡の対象とした中世瓦にはみられない。

また、これらの方法以外に粘土紐を積み上げた技法をみる丸瓦（写II-88-7）も存在する。

（2）模骨

粘土板を模骨に巻き付けて成形を行う。模骨の形態は、本瓦葺丸瓦の場合は上部を截頭円錐形にした円柱形であり、丸瓦長軸断面の凹面側において玉縁連結部分に段ができる。行基葺丸瓦の場合は上下の径に差がある截頭円錐形の円柱であり、丸瓦長軸断面の凹面側は基本的に直線をなす。しかしながら、行基葺丸瓦の形態でありながら、凹面の玉縁連結部分に段を有するもの（図II-197-1）があり、本瓦葺丸瓦用の模骨を使用しているものも存在することが考えられる。

（3）凸面の繩叩き痕とナデ・磨き調整

粘土板を模骨に巻き付けて凸面を叩き締める時に繩を巻いた叩き工具を使用する。叩き締めた後、ナデ調整を行うので、繩目はほとんど残存しない。

また、後述するように14世紀に入ると縦位に丁寧なナデ・磨き調整を行うため、繩目は全く見えない。繩を巻き付けない板状叩き工具の存在も考えられる。

粘土円筒に成形された後、2分割されるのであるが、古代の例では、凸面または凹面からヘラや鎌で切る例、糸切りする例がある¹⁾が、当遺跡の出土瓦からはその痕跡は明瞭ではない。

（4）凹面の布目痕

模骨と粘土板との脱着を容易にするために布筒を模骨に被せるので凹面に布目が残存する。縦糸、横糸がそれぞれ、3cm内に25~30本前後の細かいものと15~20本前後の粗いものがある。

布筒は布の左右を完全に綴じ合わせる必要がないようである²⁾（写II-88-4）。

写真I-120-8には布端が観察される。布上部を折り込むが、内部に紐を通している。

（5）凹面の吊り紐痕（図2）

凹面に破線状やループ状に垂らした紐痕がみられる。これは丸瓦と模骨の脱着時に上部から引っ張り上げるためのものと考えられたり、粘土板の布袋への密着力を高めるためのものとも考えられている。

写真II-88-6は吊り紐が玉縁の上部へのびており、紐が布袋の外へでていることが考えられる。丸瓦と模骨の脱着を容易にする性格を推定させる資料である。

吊り紐は2段にわたるもの（写II-88-2,3）が基本であり、4段のものもみられる。また、紐の圧痕内に布目痕がみられる個所とみられない個所があり、紐が布の内側と外側に刺縫いされていることが観察される。以下のように分類した。

A類-刺縫いを単位として紐圧痕が横方向にみられる（写II-88-1）。

B類-刺縫いを単位として紐を弱く垂らす（写II-88-3）。

C類-刺縫いを単位として紐を強く垂らす（写II-88-2）。

D類-刺縫いを単位として紐を強く垂らす。山部分をループ状に回転させる（写II-88-5）。

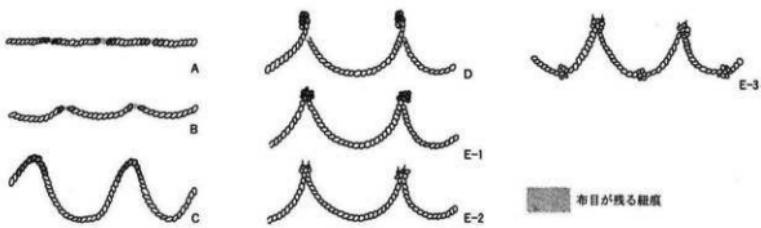
E類-刺縫いを単位として紐を強く垂らす。山部分に結び目をつくる。

E-1類…山部分の結び目に布筒との縫いつけ痕がない。

E-2類…山部分の結び目に布筒との縫いつけ痕がみられる（写I-119-4”）。

E-3類…E-1類の谷部分にも結び目がみられる。

谷の結び目から下部にE-1類が連なる例（写I-120-9）もある。



V-3-図2 丸瓦凹面吊り紐模式図

また、凹面の玉縁連結部分から上部に細い紐の刺繻い痕が3~5段みられるものがある（写I-119-4''）。模骨と布筒の接着を高めるため、或いは布筒の補強と考えられる。

写真II-88-1は吊り紐A類であるが、吊り紐が縦位に垂れ下がっている可能性がある資料である。

(6) 凹面の内叩き痕

凹面を叩いて成形する丸瓦が存在する。玉縁連結部分にこの痕跡は観察され、A・B類がある。

A類—工具の端部で叩いたと考えられる豆粒状内叩き圧痕（写II-89-1）。

B類—工具の側面で叩いたと考えられる棒状内叩き圧痕（写II-89-2,3）。

A・B類共に凹面両側縁側に叩き痕がみられる。A類はB類の初源的な形態と考えられる。

(7) 各部の面取り（図3 丸瓦観察ポイント）

側面 凹面側において玉縁から胴部にかけて面取り（A）するもの（側面断面1~4類）と、しないもの（側面断面5類）がある。さらに、面取りするものには凹面側、凸面側の両縁辺を丸くナデ調整を行うもの（側面断面1~3類）がある。

広端縁 凹面側を面取り（B）する。さらに、凹面側、凸面側の両縁辺を丸くナデ調整を行うもの（広端部断面1~4類）がある。

胴部凸面狭端縁 縁辺を丸くナデ調整を行うものがある。

玉縁凹面端部 面取り（C）するものがある。さらに、凹面側、凸面側の両縁辺を丸くナデ調整を行うもの（玉縁端部断面1~4類）がある。

玉縁凸面側縁 面取りするものとしないものがあり、するものには胴部狭端まで及ぶもの（2類、写II-87-6,7）と及ばないものの（1類）がある。

(8) 瓦当と丸瓦の接合法

丸瓦先端が瓦当面近くまで達するもの（A類、写II-89-4,5）と、瓦当裏面にとどまるもの（B類、写II-89-7）がある。B類には丸瓦端部にキザミをつけるもの（写II-89-9）とつけないもの（写II-89-8）がある。

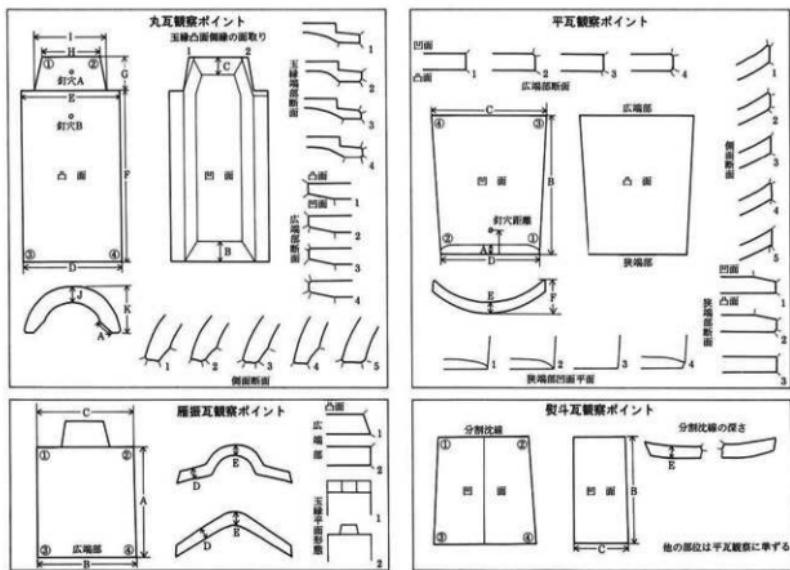
(9) 瓦当部の技法

瓦当面の離れ砂 瓦范と粘土が離れやすいように砂を撒くものがある。

瓦当外縁の面取り 外縁の外端・内端の縁辺を面取りするものがある。

瓦当范 巴紋様の中央に凸点が観察されるものがある。巴紋様を描く時のコンパス痕である。

瓦当范の向きは一定したものではない。E型式の観察によれば最高45°の傾きをもつものが存在する。しかしながら、180°天地が逆のものもなく、おおよその天地は意識していたと考えられる。



V-3-図3 瓦観察表・観察ポイント（①～④は個体位置）

(10) 滑り止め

凹面の玉縁連結部に仕切りが付随した丸瓦がある。これは軒平瓦、平瓦の滑り止めと組み合って丸瓦を固定するためのものである。

A類—仕切り状のもの（写I-120-1'）。

B類—玉縁部分全面が埋まるもの（写I-120-2）。

接合方法は丸瓦凹面に刻み目を施す（写I-120-6,7）。

(11) 釘穴

釘穴は玉縁部（A類、写I-121-3）或いは胴部（B類、写I-121-2,2'）に空けるものがある。穿孔方向は凸面から凹面方向である。形態は円形である。

(12) 刻印

凸面玉縁連結面にスタンプ紋が押されている。外径0.8cmの円形のもの（写I-119-4''）、台形型に凸線が3本（写I-121-1''）、半円形の原体を180°回転させて円形としたもの、釘を利用した一辺0.5cmの方形の穴（写I-119-3''）がみられる。写真I-121-1''の同様の形態のものが平瓦（写I-123-6''）、雁振瓦（写I-125-6'）にもある。

2. 軒平瓦・平瓦の製作技法

(1) 粘土板の切断方法

粘土塊からの切断方法は、丸瓦と同様に「糸切り法」と「コピキ法」が知られている。糸切り法は斜め方向の緩弧線の筋が残存する。凹凸面にかかわらず残存する場合（写I-121-5,5'）がある。コピキ法は垂直方向に筋が残存するが、当遺跡の対象とした中世瓦にはみられない。

(2) 凸面の繩叩き・格子紋叩き・無紋叩き・離れ砂

凸型台に粘土板を置き、叩き締める時に繩を巻いた叩き工具、格子の紋様を彫り込んだ叩き工具、紋様のない板状工具を使用する。また、後述する凹型台使用時の離れ砂が凸面に付着している。図II-200-1,2（写II-91-9,92-1）から繩叩き、格子叩きの原体幅が確認できる。

(3) 凸面の弧状圧痕（写I-122-4',123-6,写II-91-1',2',8）

広端部或いは狭端部に弧状の圧痕がみられるものがある。乾燥時に立て掛けた時の痕跡¹¹⁾と推定されたり、凹型台に瓦を載せる時に目安として瓦を台の端部に接触させる過程における圧痕¹²⁾とも考えられている。後者の可能性が高いであろう。

(4) 側縁凸面側の粘土バリ（写II-92-2）

粘土が凹型台からはみ出した痕跡であり、凹型台の使用が指摘できる瓦である。

(5) 凹凸面の端部・側面にみられる凸線（写I-123-3,4）

写真I-123-3の凹面側面には内側1.7cmにまっすぐのびた凸線がみられる。写真I-123-4は端面から内側に2.1cm、側面からは1.3cmにわざかな凸線が観察される。凹型台の本体に付随する添え木の痕跡と考えられる¹³⁾。

(6) 四面の布目痕・離れ砂、ナデ・磨き調整

凸型台と粘土板の脱着を容易にするために布を敷く。布端の始末に布を折り込んだもの（写II-90-5）がみられる。

写真II-90-6の狭端部には布目を残した紐痕がある。凸型台に紐を端面方向に置き、その上に布を被せているが、布と紐を縫い付けているのか、または、布端の始末によるものか、性格は不明である。

凹面に布目痕がみられず、離れ砂が付着している瓦がある。

凹面を丁寧にナデ・磨き調整を行っている瓦がある。凹型台の使用が考えられる。

(7) 凹面の叩き痕

凹面成形時の叩き痕がみられる平瓦がある。幅2.3cm以上を測る角材状の側面を用いて叩く例（図II-200-3,7、写II-91-5,6）がある。圧痕は平行した規則性のあるものではないので、古代平瓦にみられるいわゆる模骨の痕跡ではない。その他に、幅約3mmの細かい線状の窪みの痕跡（図II-200-4、写II-91-3,7）がみられる。

(8) 凹面の圧痕（写II-90-3,4,7,8）

広端部・狭端部に、横方向の圧痕が1～2条観察される。写真II-90-3は紐の圧痕であり、凸型台に布を置き、その上に紐を置いていることが想定される。紐は2本である。

(9) 各部の面取り（図3 平瓦観察ポイント）

側面 側面を垂直に削り落とすもの（側面断面3類）。凹凸面の各縁辺をナデ調整するもの（側面断面1・2類）があり、また、凹型台使用によるパリが観察されるもの（側面断面4・5類）もある。

広端部 凹凸面の各縁辺をナデ調整するもの（広端部断面1～4類）がある。

狭端部 凹面側を面取りするもの（狭端部凹面平面1～4類）がある。また、凸面の縁辺をナデ調整するもの（狭端部断面2類）がある。さらに側面との角を垂直に切り落とすもの（4類、写I-123-1）がある。

(10) 瓦当部と平瓦の接合法

平瓦広端面が瓦当面に達し、凸面側に頸部分の粘土を付着させる。頸裏面から平瓦凸面にかけての調整は頸形態により相違があり、ナデ調整が頸部分におさまらず、平瓦広端部まで達するものがある。

接合面の調整には格子の刻み目（写I-116-10'）、平行ス線（写II-80-4,7）、刺突（写II-80-5）がみられる。

(11) 頸形態（図4）

頸形態は以下のA～Hに分類できる。

A類-頸凸面は幅広であり、頸凸面と頸裏面、頸裏面と平瓦面はそれぞれ鋭角を呈する。頸裏面のナデ調整は横方向である。

B類-頸凸面は幅広であり、頸凸面と頸裏面は屈曲する。頸裏面と平瓦面は曲線を呈し、連続した縦方向のナデ調整である（B-1類）。また、頸裏面と平瓦面のナデ調整が横方向のもの（B-2類）もみられる。

C類-頸凸面は幅広である（C-1類）。頸凸面と頸裏面、頸裏面と平瓦面共に曲線を呈する。頸裏面と平瓦面は連続した縦方向のナデ調整である。頸凸面の幅がやや狭いものがある（C-2類）。

D類-頸は明瞭ではなく、平瓦面と直線をなす。頸裏面のナデ調整の方向で頸は確認でき、頸裏面と平瓦面は連続した縦方向のナデ調整である（D-1類）。頸裏面のナデ調整が横方向のものもある（D-2類）。

E類-頸凸面の幅は狭く、頸凸面と頸裏面と平瓦は曲線を呈する。頸裏面と平瓦は連続した縦方向のナデ調整である。

F類-頸凸面の幅は狭い。頸凸面と頸裏面は屈曲する。頸裏面と平瓦面は曲線を呈し、連続した縦方向のナデ調整である（F-1類）。頸裏面のナデ調整が横方向のものもある（F-2類）。

G類—頸凸面の幅が狭い。頸凸面と頸裏面は屈曲し、頸裏面と平瓦面は鈍角を呈する。頸裏面は横方向のナデ調整である。

H類—頸凸面の幅は狭い。頸凸面と頸裏面、頸裏面と平瓦面は直角を呈し、頸裏面は横方向のナデ調整である。

(12) 瓦当部の技法

瓦当外縁の凹面側に面取りを行うものがある。また、頸凸面と頸裏面の縁辺を約2mm幅で面取りするもの（図I-190-10,18）がある。

瓦当面に離れ砂があるものがある。

(13) 滑り止め

軒丸瓦・丸瓦との固定の工夫である。軒平瓦の凹面側、両側面に垂直にのびた鱗状の突起を付着する。図I-190-10,12のように瓦当面より約2/3までのびる。狭端部の片側のみ鱗が付着する平瓦（図I-196-1）もある。また、この滑り止めのある軒平瓦に続く平瓦として狭端部両側面を切り落とした平瓦（図I-196-2）がある。

(14) 釘穴

軒平瓦の狭端側にみられる。円形と四角形（写II-92-4）があり、穿孔方向は凹面側からと凸面側からがある。写II-92-3のように凹面側に直径約3.0cmの盛り上がりがみられ、凸型台に円形の釘穴穿孔作業用の穴の存在が考えられる。また、滑り止めのある平瓦（図I-196-1）にも穿孔している。

(15) 刻印

台形型凹みの中に凸線が3本みられるもの（写I-123-6）、釘による四角穴（写I-123-7）、櫛状工具による3本沈線（写I-123-8）がみられる。

3. 道具瓦の製作技法

(1) 烏衾瓦・雁振瓦

粘土板の切断方法

前述の丸瓦、平瓦と同様である。凹面に糸切りの痕跡がみられる。

凸面の調整

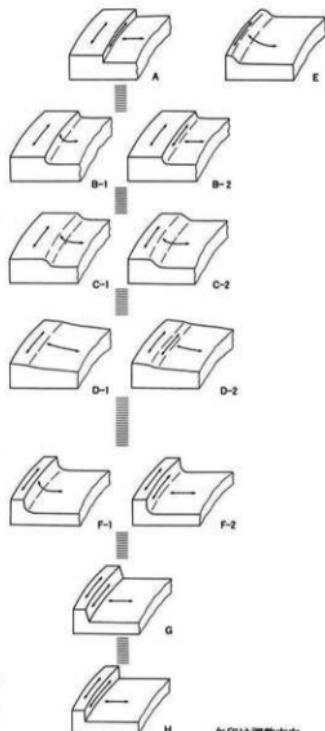
基本的にナデ調整であるが、布目が残存するものがあり、凹型台による製作が考えられる。

凹面の調整

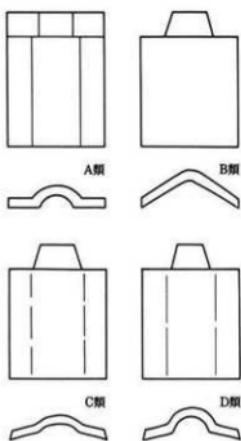
鱗部分に丸瓦の凹面で観察される吊り紐状の圧痕（写I-125-8）が観察されるものがある。

刻印

台形型凹みの中に凸線が3本のもの（写I-125-6）、釘による四角穴（写I-125-5）がみられる。



V-3-図4 軒平瓦頸形態模式図



分類(図5)

形態により、A～D類に分類できる。

A類—中央に丸瓦状のものを置き、両側に鰯が水平に付着し、凸面側は屈曲する。玉縁は胴部と同じ幅を有しており、丸瓦の玉縁と同様の形態を有する。

B類—横方向の断面が「く」の字形を呈する。

C類—A類の胴部形態を呈するが、鰯部分が外側に下がり、丸瓦部と鰯部分は曲線をなす。

D類—C類の胴部形態をとるが、丸瓦部と鰯部分は屈曲する。

(2) 煙斗瓦

平瓦の製作技法と基本的に同一である。平瓦側面方向中央に焼成前に分割線を刻み、焼成後に分割するもの(A類)と、焼成前に分割したもの(B類)がある。焼成前の分割線は凹面側に刻むものと凸面側に刻むものがある。

(3) 塙

V-3-図5 雁振瓦分類模式図 表面の調整と形態によりA～D類に分類できる(図I-198)。

A類—両面共に離れ砂が付着し、仕上げは粗い。厚みは約2.0cmを測り、薄い。隅部分に穿孔がみられる。平面形態は不明である。

B類—表面と側面をナデ調整し、裏面は未調整である。厚み約3.0cm、1辺の長さが約27.0cmを測り、平面形態が27.0cm×16.5cmのものをB-1類、27.0cm×25.5cm以上のものをB-2類とする。

C類—表面及び側面をナデ調整し、裏面は未調整である。厚さ約4.0cmを測り、短辺は斜めに切り落とし、平面形態が台形あるいは平行四辺形を呈するものと思われる。

D類—表面、側面をナデ調整し、裏面は未調整である。長辺側が外反する。厚さ約2.7cmを測る。

第2節 変遷

前述した製作技法の他、軒瓦の紋様、他遺跡出土瓦の様相を加え、変遷を試みる(図6～9)。

1. 軒丸瓦

(1) 平安時代後期(12世紀)

A～J型式をあてる。前代から続く蓮華紋の他、五輪塔紋、三鈷杵紋、宝塔紋、仏像紋、梵字紋等がみられる。

A-1型式は平安宮朝堂院小安殿跡推定地と東福寺三門からも出土している。『平安京古瓦図録』では平安時代中期Ⅲ期(1016～1058)の年代が示されているが、12世紀まで下るものと考えたい。

C-2型式の外縁は幅が狭く、A～J型式の中では古い段階のものと考えられる。

E型式は中房部分に梵字を配する蓮華紋である。梵字の形態変化により、その先後関係を推定することができる。E-1,E-3,E-4は梵字が文字として中房部分に配されているが、E-2は梵字が紋様に変化しており、明らかにE-2は後出するものであることがわかる。また、E-2と同紋である瓦が堺市堺環濠都市遺跡、松原市觀音寺遺跡から出土しており、これらを含めてのE型式の変遷が考えられる。

瓦当部の離れ砂はE-1型式にすでにみられる。

(2) 平安時代末～鎌倉時代初頭(12世紀末～13世紀初頭)

K-1～6, 47～49型式があたり、この時期以降、巴紋が主となる。巴紋の出現時期は12世紀前半、普及年代は12世紀中葉以降と考えられている¹³⁾。

紋様の隆起は大きく、断面形態が四角形を呈する。外縁幅は狭く、低いもの(K-2～4)がみられる。

(3) 鎌倉時代前半(13世紀前半)

K-7～14, 50～58型式をあてる。

外縁は幅があり、高さもある。紋様の隆起は前代より低くなり、断面形態は半円形である。巴頭部は尖り、連なる。巴の尾は長くのび、圓線と連なる。珠紋は大きい。

(4) 鎌倉時代後半(13世紀後半)

K-15～34, 59～73型式をあてる。

外縁の幅と高さがほぼ同じとなる。紋様の隆起は小さい。巴頭部は尖るものと、やや丸みを帯びるものがある。巴の尾は長くのびる。珠紋は前代より小さい。瓦当面に離れ砂が付着したものが増加する。

(5) 室町時代前期(14世紀)

K-35～43, 74～78型式をあてる。

外縁は幅があり、高さは低くなる。紋様の隆起は小さい。巴頭部はやや丸みを帯び、尾は圓線と独立している場合が多い。

K-40は玉縁凸面側縁の面取りが胴部狭端まで及ぶ(図II-191-4)。

(6) 室町時代中期(15世紀)

K-44, 79～88型式をあてる。

外縁に幅があり、高さはさらに低くなる。紋様の隆起は小さい。巴頭部は丸みを帯び、くびれを有するものがみられる。尾は圓線と独立する場合が多い。珠紋帶外の圓線ではなく、珠紋数は減少する。

K-82の凹面玉縁部分に滑り止めA類がみられる(図I-188-1)。

(7) 室町時代後期(16世紀)

K-45, 46, 89～93型式をあてる。

外縁は幅があり、高さは低い。珠紋数はさらに減少し、間隔が開く。巴頭部は丸みを帯び、くびれを有するものがみられる。尾は短い。

(8) 外縁高、幅の法量変化

以上のような変遷がみられ、各時代ごとの外縁の高さ、幅の様相を図10-1に表した。

外縁幅は、12～13世紀初頭では7～12mm、13世紀では9～18mm、14世紀では15～21mm、15世紀では14～20mm、16世紀では18～22mmに範囲がみられ、時代が下るにつれて、幅広となる傾向がみられる。

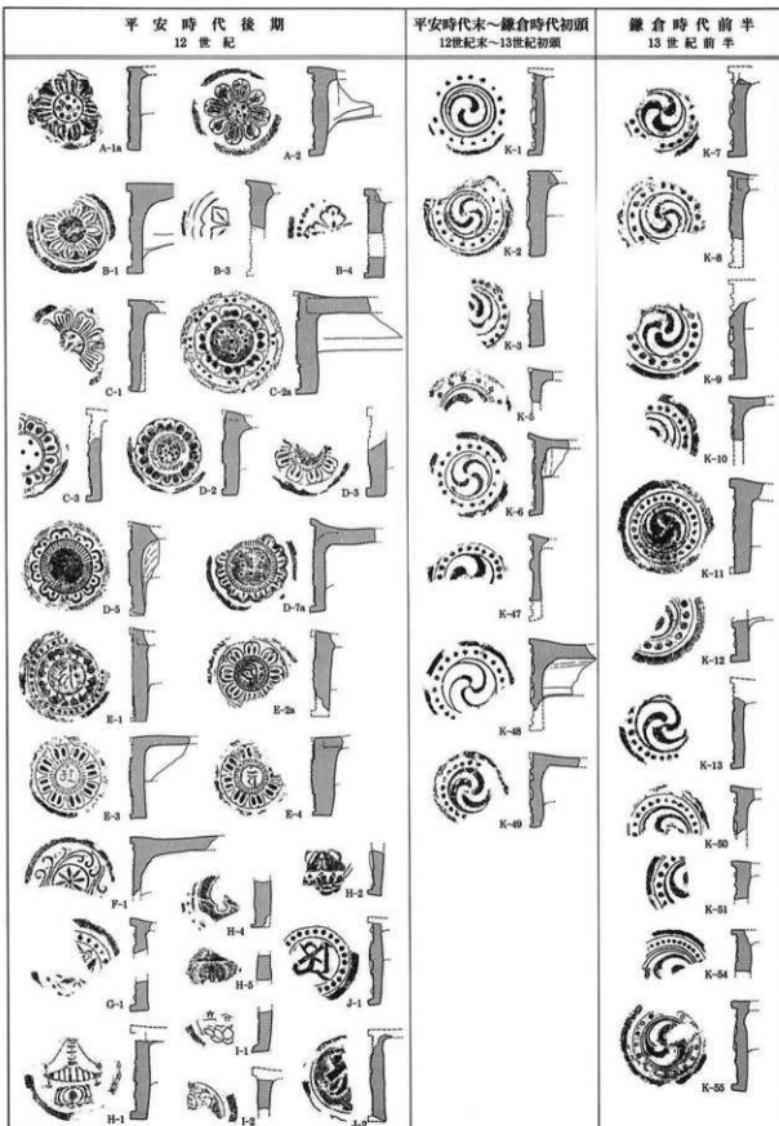
外縁高は、13世紀に7～15mmの高さを有するが、14世紀には5～10mm、15世紀には7～12mmの範囲となり、高さが減少する傾向をみる。

2. 軒平瓦

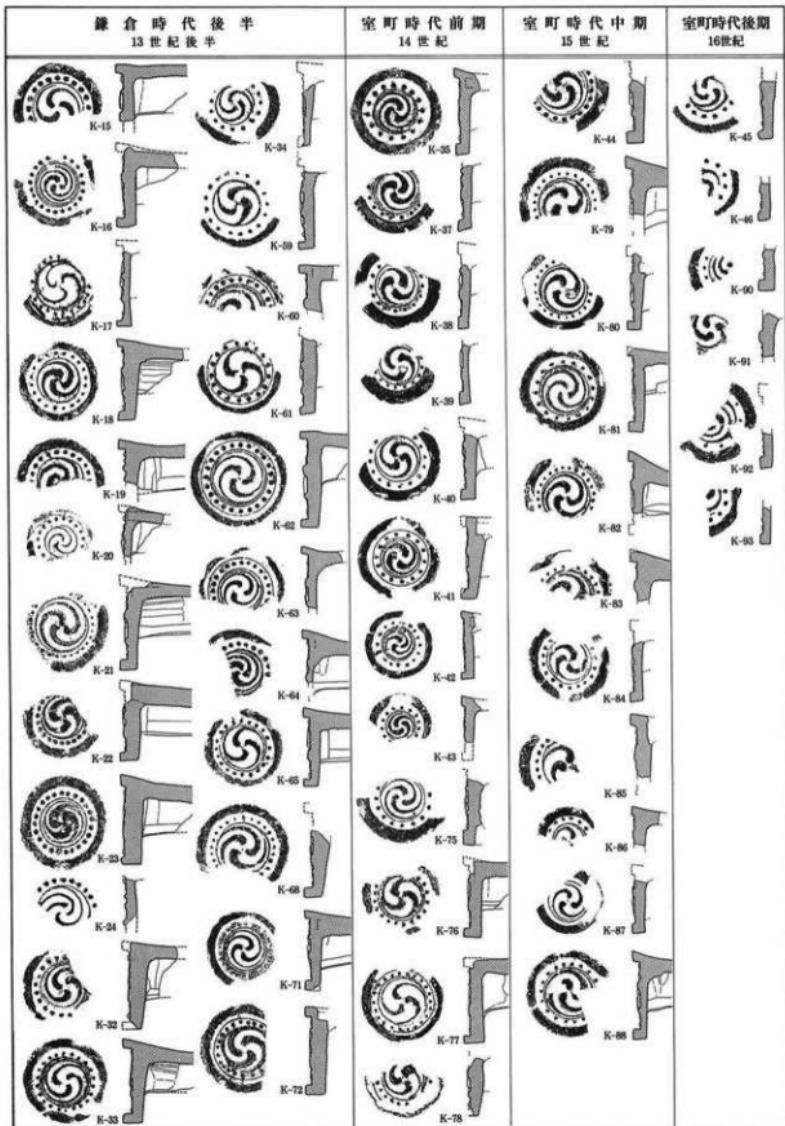
(1) 平安時代後期(12世紀)

A-1、B-1, 2, C-1～3, D-1～4, E-1, G-1, 2, I-1, 2, J-1～7, N-1～3, R-1型式をあてる。頭形態はA～D類である。紋様は唐草紋である。

J型式は中心飾りに梵字を配する唐草紋であり、軒丸瓦のE型式と組み合う。軒丸瓦と同様に梵字の変化によりJ-1→J-4, 5→J-6, 7とJ-2→J-3の先後関係が推定される。また、頭形態はA→B→C→

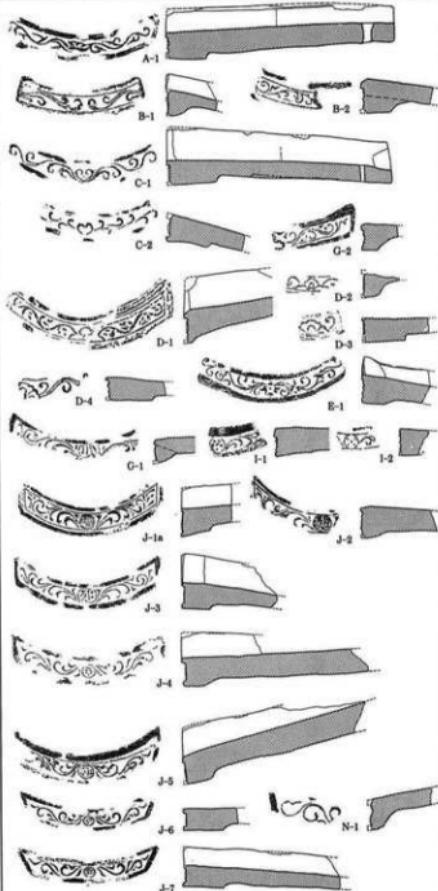


V-3-図6 軒丸瓦変遷図(1)

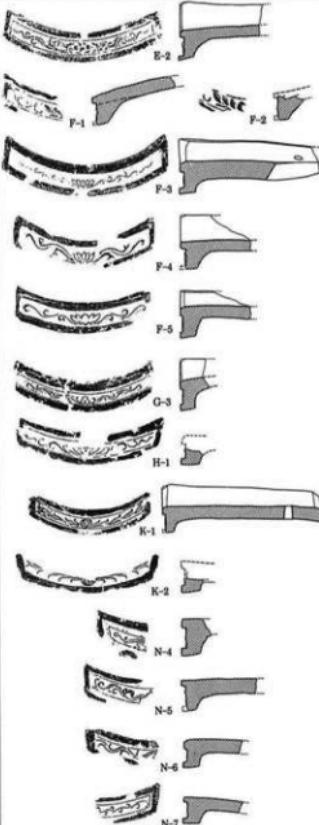


V-3-図7 軒丸瓦変遷図(2)

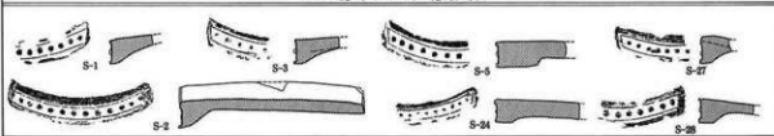
平安時代後期
12世紀



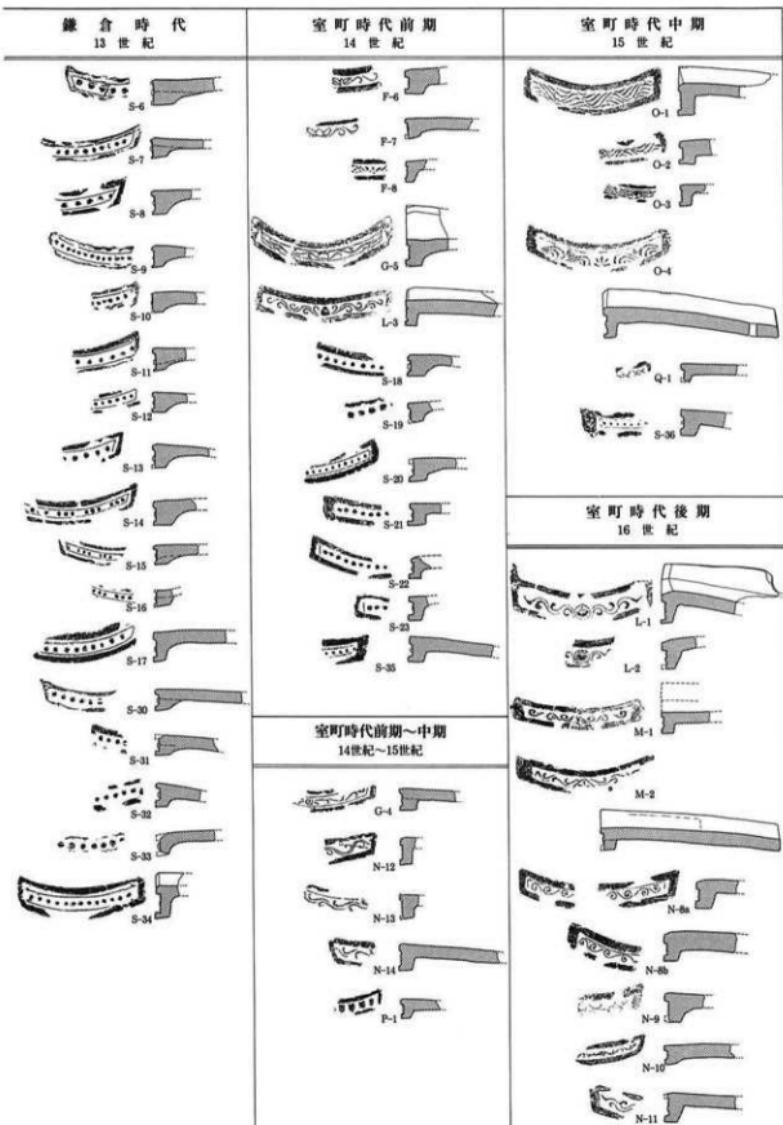
鎌倉時代
13世紀



平安時代末～鎌倉時代初頭
12世紀末～13世紀初頭



V-3-図8 軒平瓦変遷図(1)



V-3-図9 軒平瓦変遷図(2)

Dの変化が漸移的ながらも考えられる。

瓦当部の離れ砂はC-1型式にすでにみられる。

平瓦部はいずれも凸面に縄叩き痕、凹面に布目痕がみられるものである。凸面は頸の成形時に伴ってナデ消している場合が多い。

(2) 平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀初頭）

S-1～5,24～28型式があたり、連珠紋である。軒丸瓦の巴紋と組み合う。珠紋は大きく、上下に圈線を配する。頸形態、平瓦部の様相は12世紀代のものと同様である。

(3) 鎌倉時代（13世紀）

F-1～5,G-3,H-1,K-1,2,N-4～7,S-6～17,29～34型式をあてる。唐草紋は全体に細く仕上げられており、巻き込みは小さい。頸形態はE類である。

平瓦部は凹凸面ともに離れ砂が付着し、瓦当面の離れ砂の付着も増加する傾向がみられる。

F型式は中心飾りに蓮華を配する唐草紋である。F-1,2の蓮華は隆起しており、F-3～6は線画である。F-3の紋様は繊細である。F-5の蓮華は外形線のみであり、室町時代前期のF-6,7,8の蓮華は三葉の簡略な形態となる。このようにF型式は1・2→3→4→5→6・7→8の先後関係が想定されよう。

F-5型式の頸形態はF類であり、時期は室町時代に下る可能性もある。

(4) 室町時代前期（14世紀）

F-6～8,L-3,S-18～23,35型式をあてる。頸形態はH類であり、G類が若干みられる。瓦当幅は狭い。

F型式は前述のように紋様の変遷をたどることができる。

平瓦部の凸面は離れ砂が付着しており、頸部分貼り付け時に平瓦部凸面の途中までナデ調整を行う。凹面はナデ調整を行っている。平瓦部は室町時代を通じて同様の手法である。

G-4,12～14,P-1型式の中心飾りは不明であり、14～15世紀の時代幅を考えておく。

(5) 室町時代中期（15世紀）

O-1～4,Q-1,S-36型式をあてる。頸形態はH類である。

瓦当幅は狭い。L-1型式は側縁に滑り止めが付着しており、15～16世紀の時代幅をあてる。

(6) 室町時代後期（16世紀）

L-2,M-1,2,N-8～11型式をあてる。頸形態はH類である。瓦当幅は狭い。

(7) 外縁幅、平瓦部厚の法量変化

以上のような変遷がみられ、外縁幅、平瓦部厚について時代ごとの様相を図11-1～4に表した。

上下・左右の外縁幅（図11-1～3）は共に、時代が下るにつれて幅広となる傾向がみられる。左右幅は12世紀では5～10mm、13世紀では6～13mm、14世紀では7～12mm、15世紀では7～14mm、16世紀では15～20mmのおよその範囲がみられる。

平瓦部厚（図11-4）は漸移的ながらも、薄くなる傾向が読み取れる。

3. 丸瓦

(1) 平安時代後期～鎌倉時代初頭（12世紀）

行基葺丸瓦と本瓦葺丸瓦が混在する。行基葺丸瓦は胴部側面の狭端側を大きく面取りするもの（図I-192-1,II-197-1）としないもの（図II-197-2）がある。本瓦葺丸瓦は玉縁部端部のすばまりが小さい傾向があり、胴部凹面側縁・凹面玉縁端面の面取り幅は狭い。凹面の布目痕は粗い。凸面の縄叩きは基本的にナデ消すが若干残る（図I-192-2）。

(2) 鎌倉時代（13世紀）

この時期以降本瓦葺丸瓦のみとなる。玉縁部端部はやすぼまり、凹面胴部側縁・凹面玉縁端面・凹面広端面の各面取り幅はやや広くなる（図I-192-3, II-197-3）傾向を有する。凹面に吊り紐痕を有するものが出現し、A～C類がみられる。凸面の繩叩きはナデ消す。

(3) 室町時代前期～中期（14～15世紀）

玉縁端部はやすぼまり、胴部凹面側縁・凹面玉縁端面・凹面広端面の面取り幅がより広くなる傾向がみられる。玉縁側面は凹面側縁と凸面玉縁側縁の面取りにより、幅はほとんどみられなくなっている（図I-192-4）。凹面には吊り紐痕を有し、D～F類がみられる。凸面は丁寧にナデ調整を行う。側面の凹面側、凸面側の両縁辺を丸くナデ調整をしたり、広端部・玉縁端部の縁辺に2mm前後の面取りを行うものもみられる。滑り止めの機能を有した丸瓦は15世紀以降にあたると考えられる。

(4) 室町時代後期（15世紀後半～16世紀）

室町時代前期～中期と同様であるが、凸面は丁寧なナデ・磨き調整を行う。凹面に滑り止めの仕切りを設けたり（図I-193）、吊り紐痕の他に内叩きがみられる。内叩きはA類（写II-89-1）が初期型と考えられ、次にB類（写II-89-2）が現れる。叩く位置も初期は両側縁であるが、17世紀に近づくと凹面全面にみられる。凹面の布目痕は粘土と模骨が密着不良のため、ほとんど残存しない。

(5) 各部位法量変化

以上のような変遷がみられるが、資料の大部分が破片であり、整理作業における観察表の記述からの分類は遺構別出土瓦一覧、各部位法量グラフ（図10）のように1～5類の時代別分類を明示した。

1類～12世紀 行基葺。2類～12～13世紀 本瓦葺。凸面のナデケシが十分ではなく、一部分に繩目が残存したり、ナデケシが粗い。凹面に吊り紐、内叩きはない。3類～14～16世紀 凸面は丁寧にナデ・磨きがされており、凹面に吊り紐が存在するものもある。4類～13～16世紀 2・3類の不明瞭のもの。5類～15～16世紀 凸面は丁寧にナデ・磨き調整がされており、凹面に内叩きがあるもの。

図10の法量グラフから、以下の各部位の変遷が認められた。

胴部長（F）と玉縁長（G）の比（図10-2）は2類よりも3類がのがる傾向があり、胴部長（F）と胴部幅（E）の比（図10-3）は2類よりも3類が縦長の傾向がみられる。玉縁端部幅（H）と玉縁連結部幅（I）の比（図10-4）は2類より3類が差が大きく、すばまりが大きいことが認められる。

胴部凹面側縁幅（A）（図10-5）では2類が10～18mm、3類が15～25mmをピークとし、1類も資料数が少數ではあるが、10～16mmにみられる。面取り幅が漸移的に拡大していることが読み取れる。

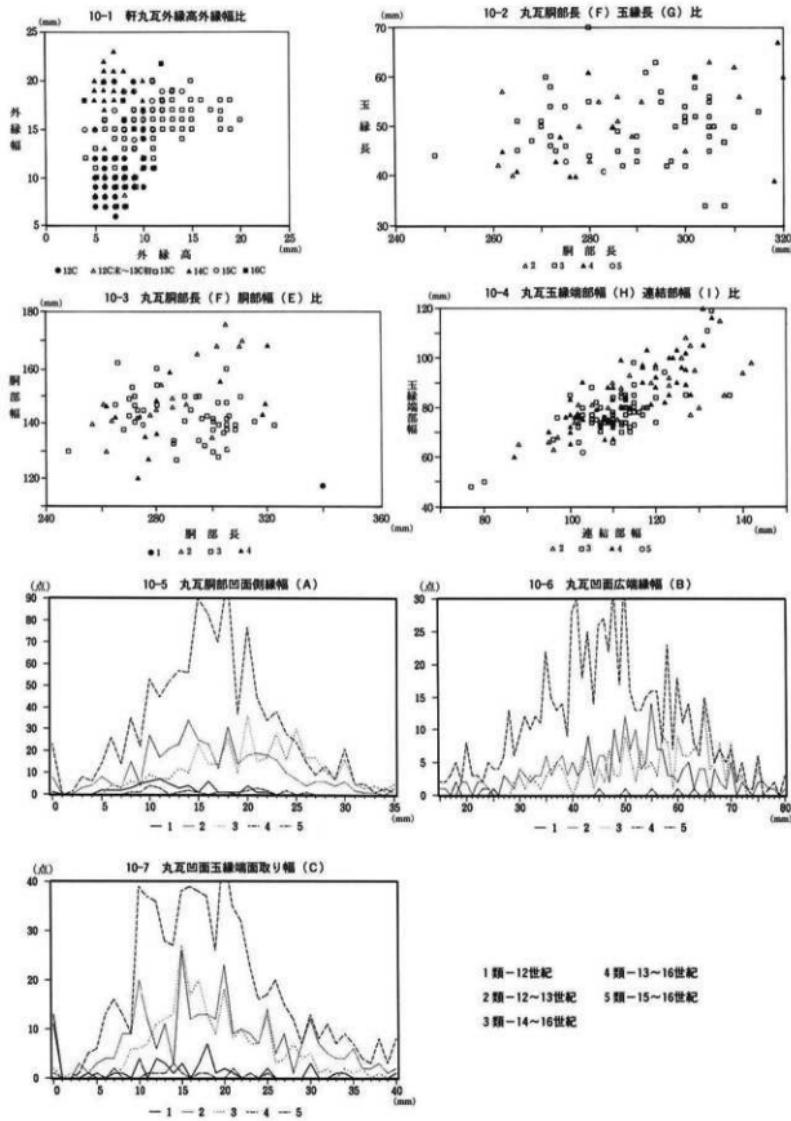
凹面広端縁幅（B）（図10-6）では2類が43～55mm、3類が50～65mmをピークとし、凹面玉縁端面取り幅（C）では2類が10～20mm、3類が15～20mmをピークとし、胴部凹面側縁幅（A）と同様、面取り幅が拡大していることがわかる。

凹面玉縁端面取り幅（C）（図10-7）では1類が10～18mmにピークをもち、他はおおよそ10～25mmの範囲であり、行基葺式の面取り幅が狭いことが認められる。

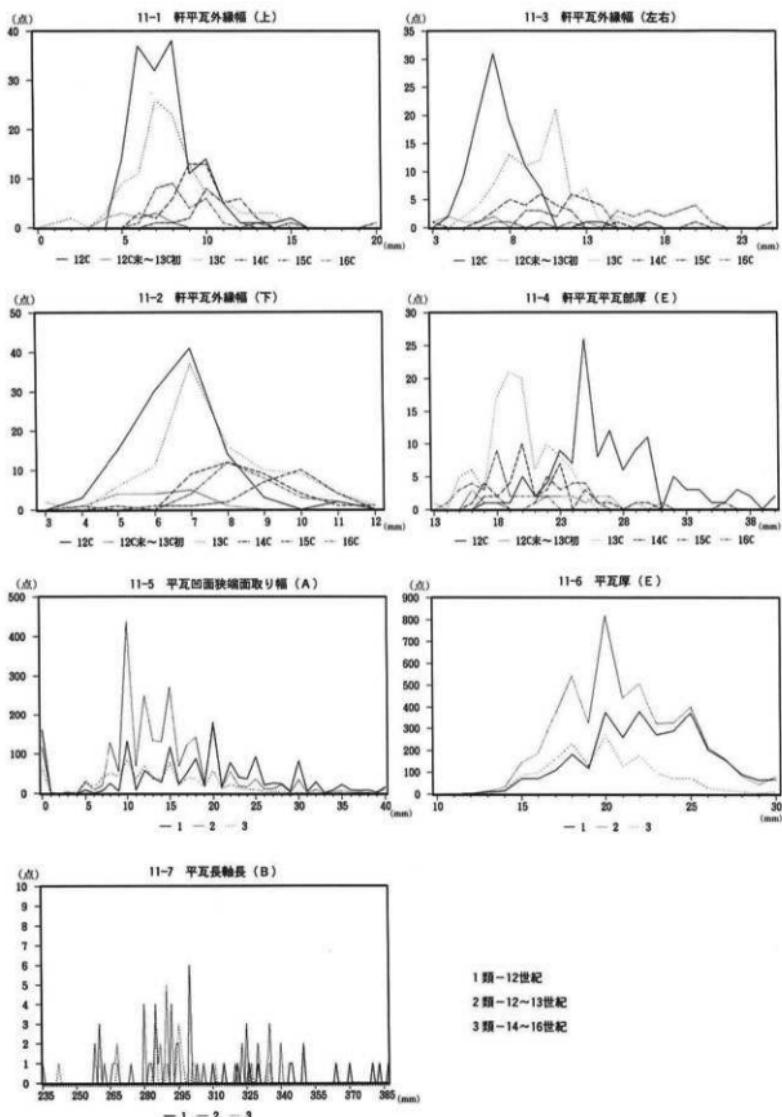
4. 平瓦

(1) 平安時代後期～鎌倉時代初頭（12世紀）

凸面に繩叩き痕がみられ、凹面には布目痕がみられる。凹凸面共に離れ砂が付着しているものがある。凹面の布目痕の上に2次的な叩き痕をもつものがあり、凸型台において成形を行った後に2次調整のために凹型台を使用したことが推定される。



V-3-図10 軒丸瓦・丸瓦各部位の法量変化



V-3-図11 軒平瓦・平瓦各部位の法量変化

(2) 鎌倉時代(13世紀)

凸面は叩き目がないものと、格子叩きをもつものがある。無紋の叩き工具の使用も考えられる。凹凸各面に離れ砂が付着している。

(3) 室町時代(14~16世紀)

凸面は叩き目なく、離れ砂が付着する。凹面はナデ・磨き調整を行う。側面の両側縁を丸くなれるものが多い。滑り止めの機能を有した平瓦は15世紀以降にあたると考えられる。

(4) 各部位法量の変遷

遺構別出土瓦一覧、各部位法量グラフ(図11)において、以上の(1)~(3)の時期をそれぞれ1~3類として表した。

平瓦厚(E)(図11-6)は1類が20~25mm、2類が18~25mm、3類が17~22mmにピークがあり、縮小拡大の変化はあまりみられないが、3類においてピーク幅が狭くなってしまっており、均一化したものへ近づいていることがわかる。

凹面狭端面取り幅(A)(図11-5)は1類が10~30mm、2類が8~18mm、3類が8~22mmにピークがあり、1類の中に面取り幅の広いものがあることが読み取れる。

長軸長(B)の法量(図11-7)は1類が310~385mm、2類が235~340mm、3類が242~335mmの幅で存在しており、1類から2・3類への縮小傾向がわかる。

5. 雁振瓦(図5)

雁振瓦は鎌倉時代後期(13世紀後半)頃に出現しており、A類がその時期にあたる。B~D類は室町時代(14~16世紀)にあたると考えられる。

6. 埼(図I-198)

A類が鎌倉時代(13世紀)、B~D類が室町時代(14~16世紀)にあたると考えられる。各時期の丸瓦、平瓦と同様の特徴を有しており、A類には離れ砂が付着しており、B~D類は丁寧なミガキ調整を行っている。

7. 鬼瓦

(1) 平安時代末~鎌倉時代(12~13世紀)

写I-126-1~4,6,I-94-1~3,7,8をあてる。本体の粘土板に目、鼻などの面相をつくり出す。I-126-1~3,I-94-1,2の裏面には割り取りがないので、やや古い時期にあたると思われる。

(2) 室町時代(14~16世紀)

写I-126-5,7~9,I-94-4~6をあてる。面相は立体的であり、裏面は大きく割り取る。II-94-6の裏面には側張りがある。I-126-8は頭部に輪宝があり、15~16世紀のものと考えられる。

第3節 日置荘遺跡出土瓦の分布

1. 出土量の計測方法

出土遺物は国土座標を採用した10mグリッドで取り上げを行っており、このグリッドごとの種類別・時期別の分布図を作成した。

種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、鳥食瓦、雁振瓦、熨斗瓦について行った。

ただし、平瓦には、熨斗瓦として使用したものも含まれており、熨斗瓦の出土量、分布状況は精度がやや低いものとなっている。また、隅切り瓦の中には平瓦を打ち欠きしているものも存在しているが、

平瓦として計測されている。打ち欠きについては他種類の道具瓦に関しても同様のことが考えられる。

時期は軒丸瓦に関しては、12・13・14・15・16世紀のそれぞれと全出土のもの、軒平瓦は12・13・14・15・16世紀（14～15世紀の分布図には14・15世紀それに確定できる瓦は含まれていない）と全出土のもの、丸瓦は1～5類（12・12～13・14～16・13～16・15～16世紀）と全出土のもの、平瓦は1～3類（12・13・14～16世紀）と全出土のもの、鬼瓦、雁振瓦、埠は全出土量の分布図を作成した。

個体数の計測方法は、従来から様々な方法がなされてきた¹³⁾。側面長計測法、端面長計測法、面積計測法、重量計測法、破片数計測法、四隅計測法等があり、いずれも一長一短がある。今回は限られた時間に多量の瓦をより有効に処理するため、丸瓦、平瓦、雁振瓦、埠に関しては四隅計測法を用いた。

軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦に関してはすべて接合作業を行ったので、破片数を個体数として表している。

四隅計測法は瓦の隅数を数え、隅数4点で瓦1枚とし、1隅を0.25枚と表現した。また、広端部、狭端部それぞれの右隅、左隅を認定し、総隅数から求めた数量との比較を行った（表1）。

丸瓦においてはI調査区では個体位置2と4の差は358-317=41、II調査区では個体位置2と3の差は523-445=78の隅数の開きがみられる。広端部側（個体位置3・4）あるいは玉縁側（個体位置1・2）の各2隅の差は18、16、40、6であり、開きは縮小している。2隅が残存している破片の存在が多いいためと思われる。また、個体位置1・2の点数が多いのは本来、軒丸瓦としての破片も含まれているためであると考えられる。

平瓦においてはI調査区では837-808=29、II調査区では1791-1692=99の隅数の開きがみられる。

計測にあたっては図3上の表を作成し、各部位の観察、計測を行った。また、軒丸瓦と軒平瓦は1個体ごとのカードを作成し、各部位の計測、観察、個体数の計測を行った。

また、上記の四隅計測法とは別に重量計測法による出土重量の数値（表2）も提示する。丸瓦完形品の平均重量は2102.5g（完形品資料点数48）、平瓦完形品の平均重量は2782.0g（完形品資料点数10）であり、総重量から丸瓦2073.3点、平瓦3784.5点の数値を得ることができた。

2. 分布状況

V-3-表1 四隅計測法による出土数量

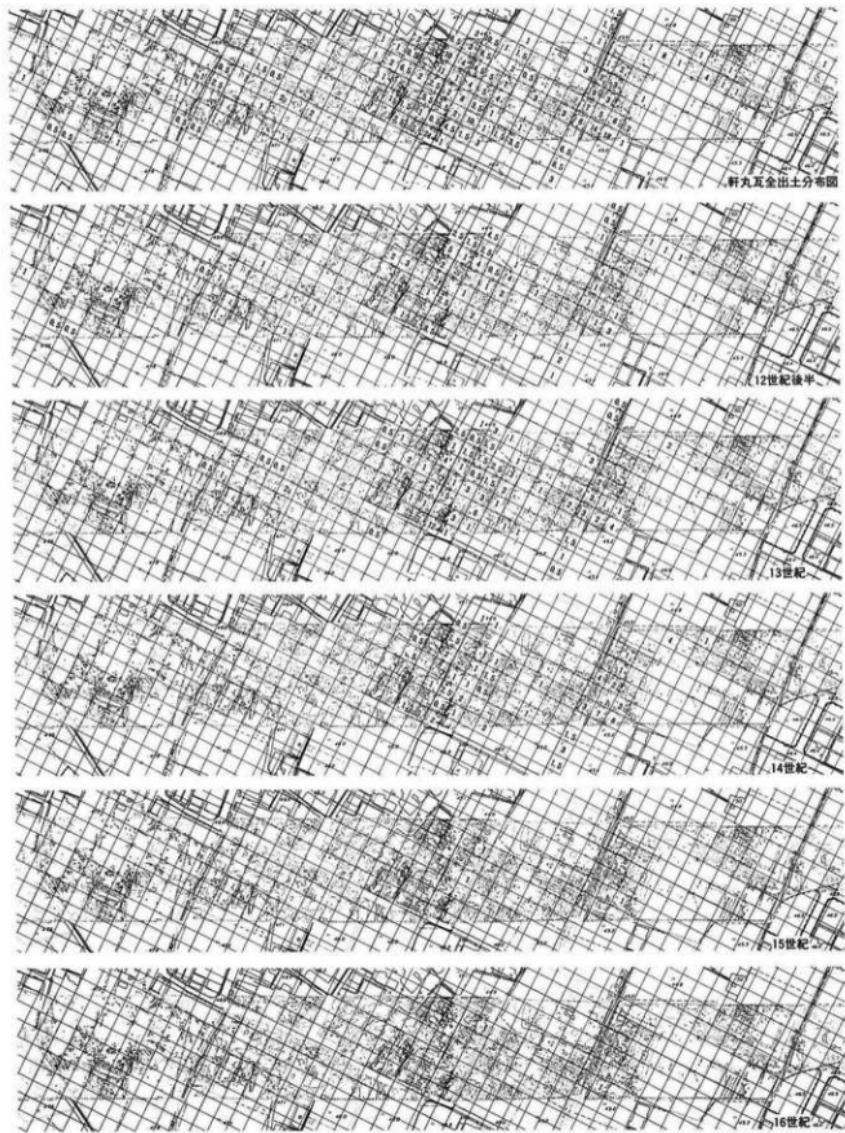
I・II調査区各種の瓦の出土分布図（図12～20・22）を提示し、その特徴を明らかにしたい。

出土量は軒丸瓦612点、軒平瓦613点、丸瓦（完形想定枚数）812.5枚、平瓦（完形想定枚数）2564.25枚、鬼瓦90点、鳥糞瓦・雁振瓦95.5枚、熨斗瓦75枚、埠150枚（表I-2、II-3）である。遺構別の出土量の一覧表、分布図の作成にあたっては、10mグリッドを援用しているが、グリッドが2カ所にわたって取り上げ

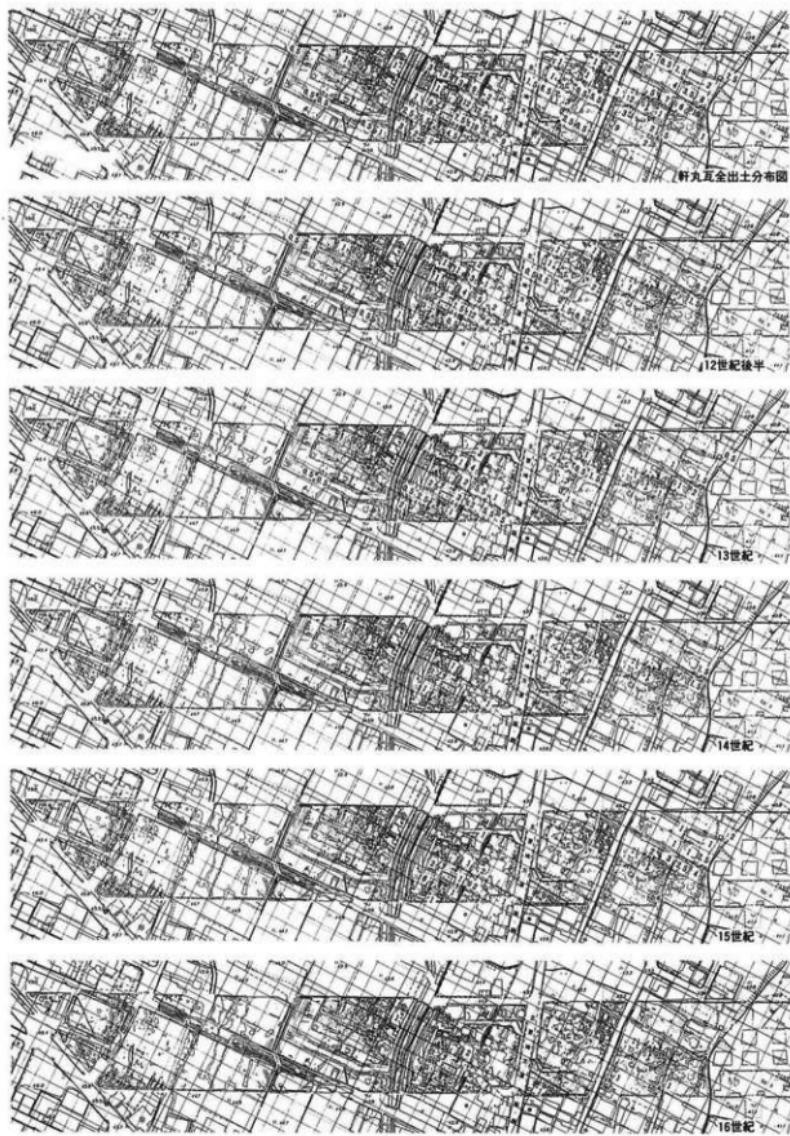
	丸 瓦		平 瓦	
	I 調査区	II 調査区	I 調査区	II 調査区
資料点数	1222	1666	3191	6771
個体位置1	340	483	832	1722
個体位置2	358	523	837	1739
個体位置3	333	445	808	1791
個体位置4	317	451	835	1692
完形想定枚数	337	475.5	828.25	1736

V-3-表2 出土瓦重量（単位：kg）

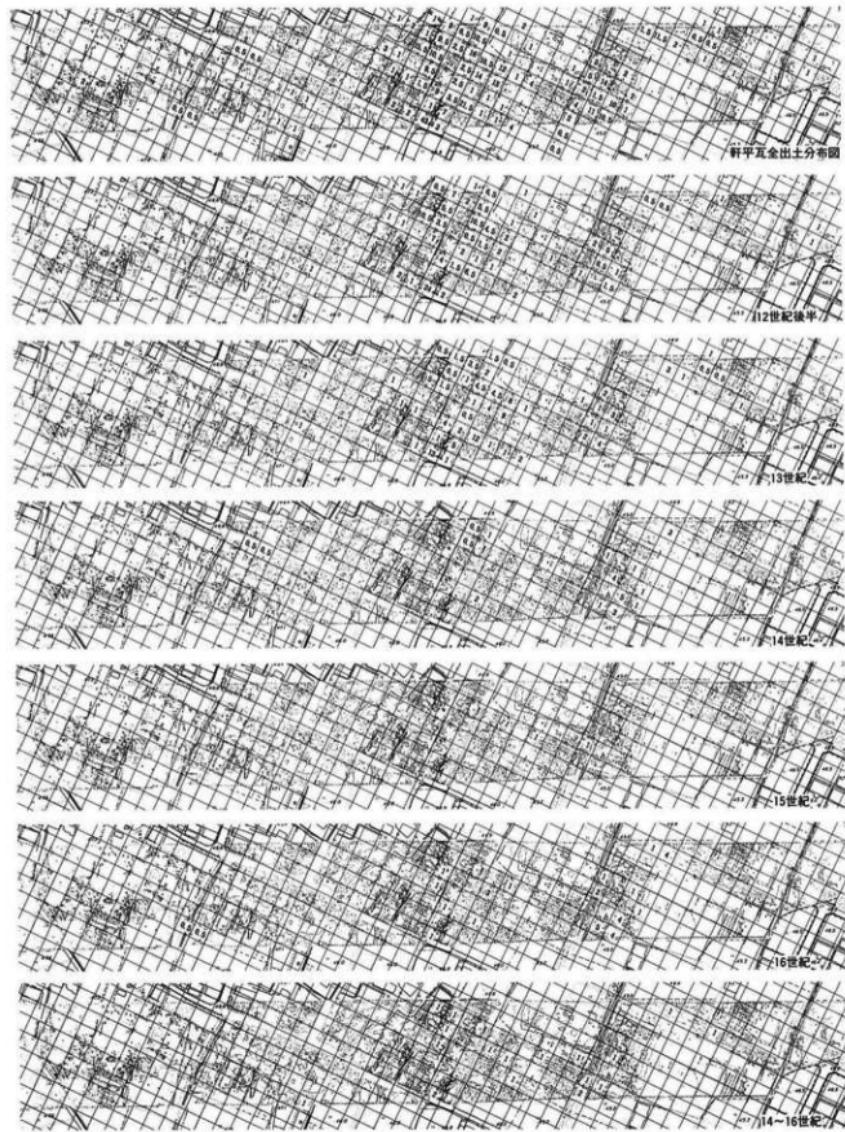
	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	鬼瓦	雁振瓦	熨斗瓦	埠	合計
I 調査区	108.14	112.39	1626.30	3235.76	22.66	164.27	15.06	68.30	5352.88
II 調査区	128.63	237.87	2732.77	7292.81	27.53	154.46	26.83	1.88	10602.78
合計	236.77	350.26	4359.07	10528.57	50.19	318.73	41.89	70.18	15955.66



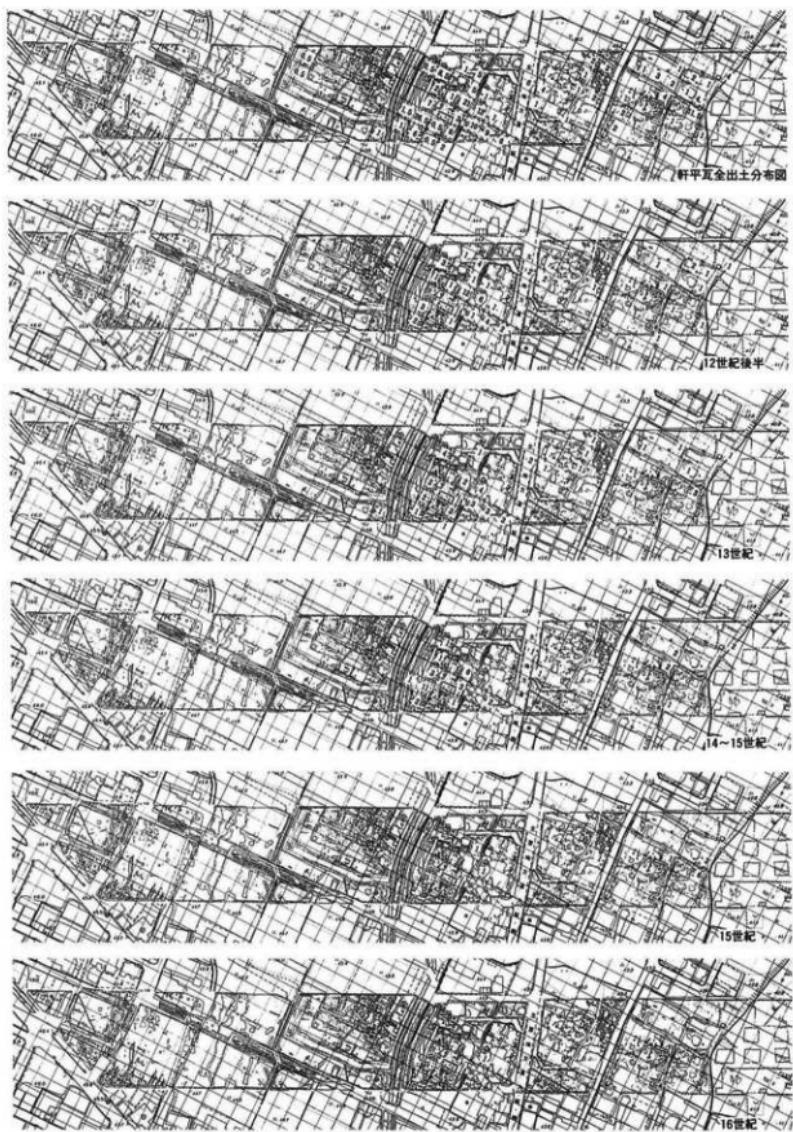
V-3-図12 II調査区軒九瓦分布図



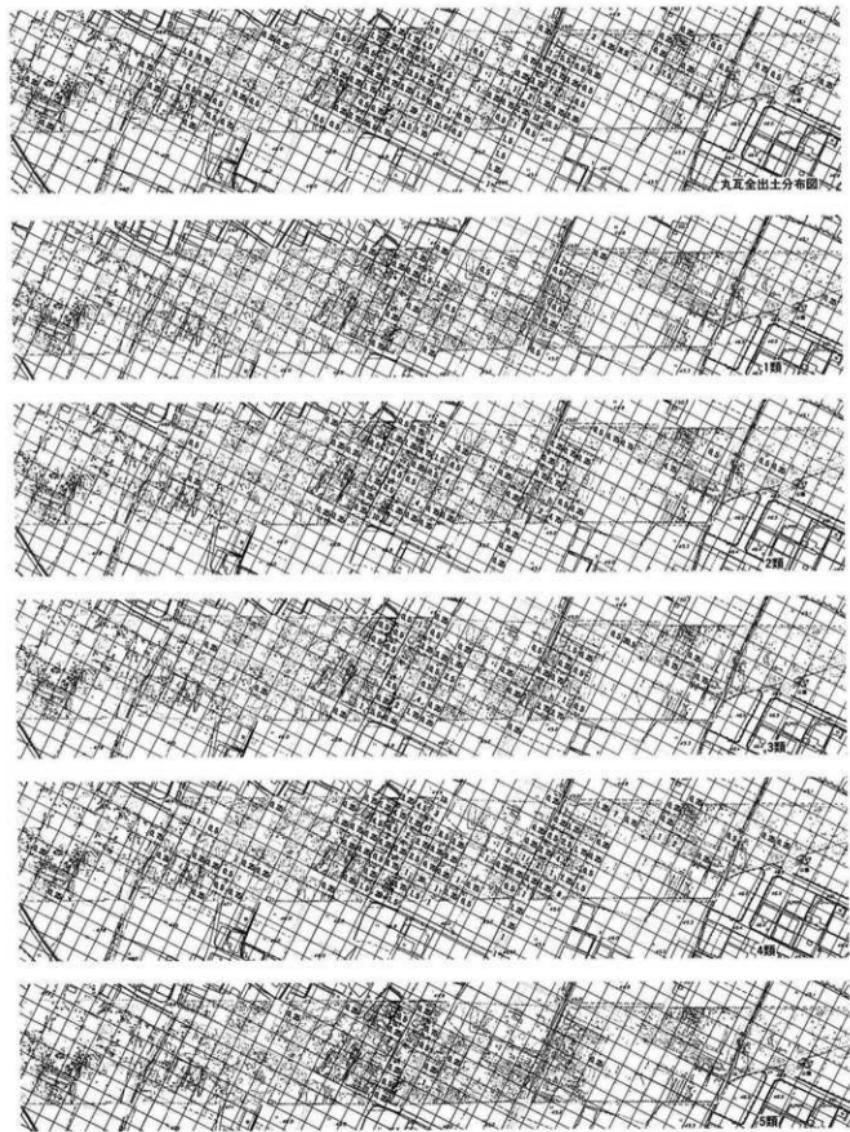
V-3-図13 I調査区軒丸瓦分布図



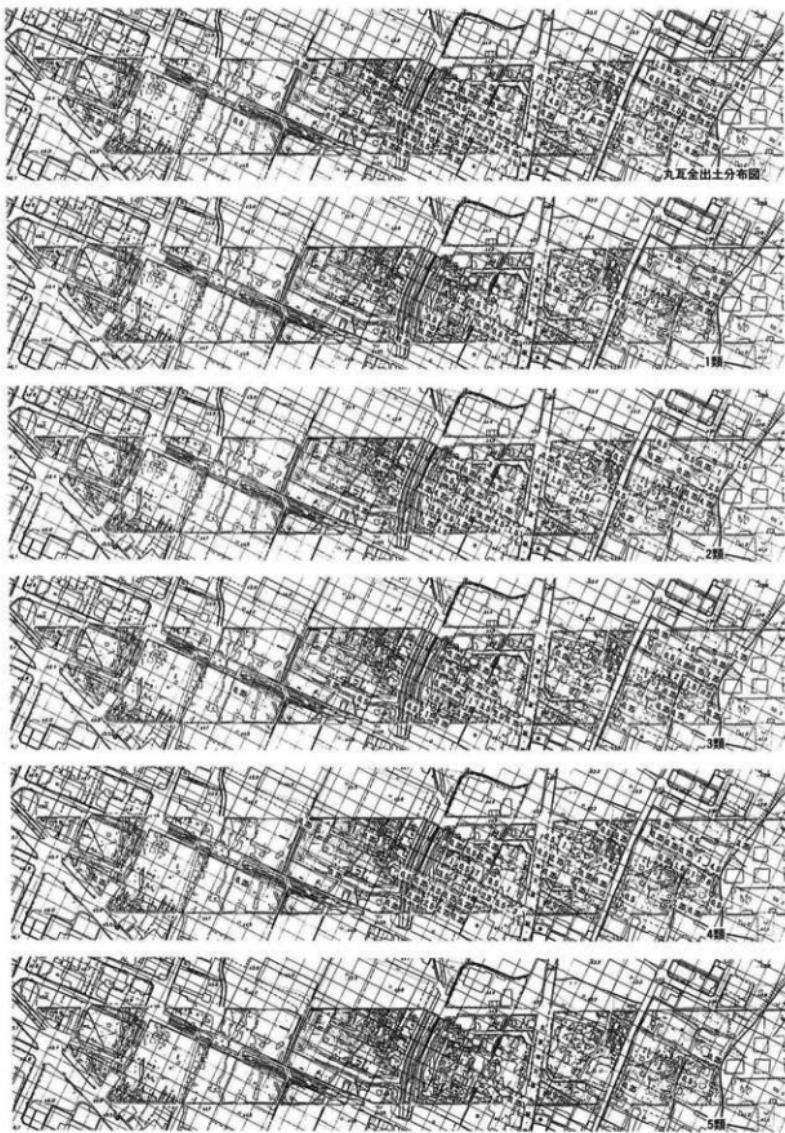
V-3-図14 II調査区軒平瓦分布図



V-3-I 調査区軒平瓦分布図



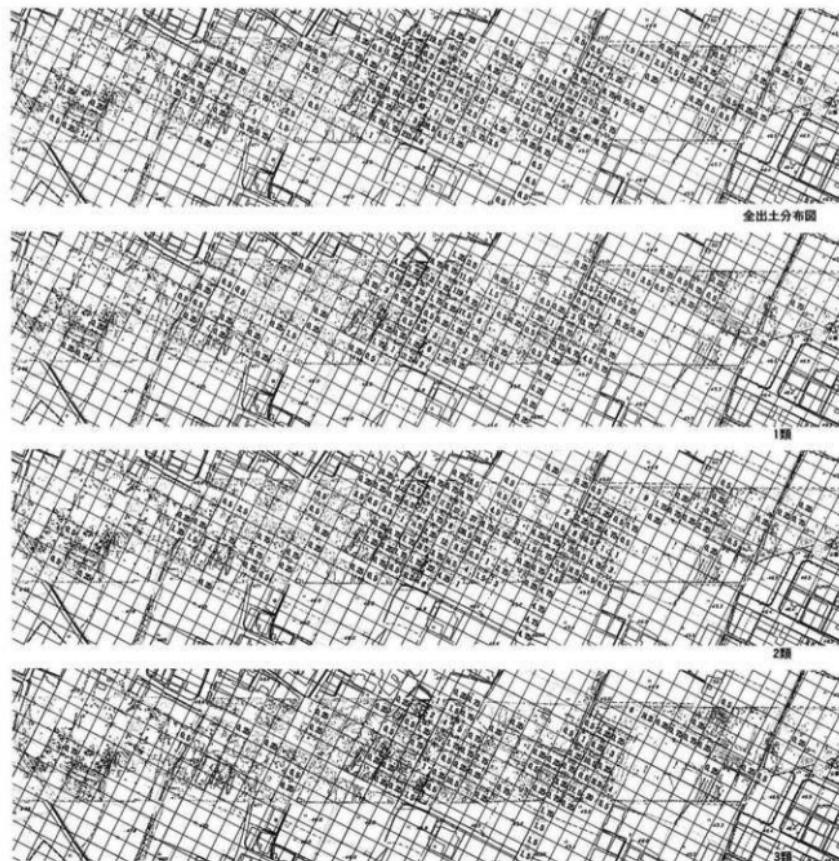
V-3-図16 II調査区丸瓦分布図



V-3-図17 I 調査区丸瓦分布図

を行っているものは軒瓦・鬼瓦は0.5点ずつに、丸瓦・平瓦・雁振瓦の一隅(0.25枚)は0.125枚ずつに分割し、それぞれの区画に表示した。なお、各種瓦の全量出土分布図には時期が不確定のものも含めたものであり、各時期ごとの分布図の総量とは異なっている。

瓦は各地域からの搬入、再利用が考えられるものである。出土瓦は12~16世紀の時期に属しているが、個々の時期の建物が存在していたわけではなく、また、使用可能の瓦の再利用、再々利用も考えられ、ある地点で使用された瓦のすべてがその地点から出土するとは限らない。このような制約があるが、およそその傾向をつかむことができるものと考えられる。



V-3-図18 II調査区平瓦分布図

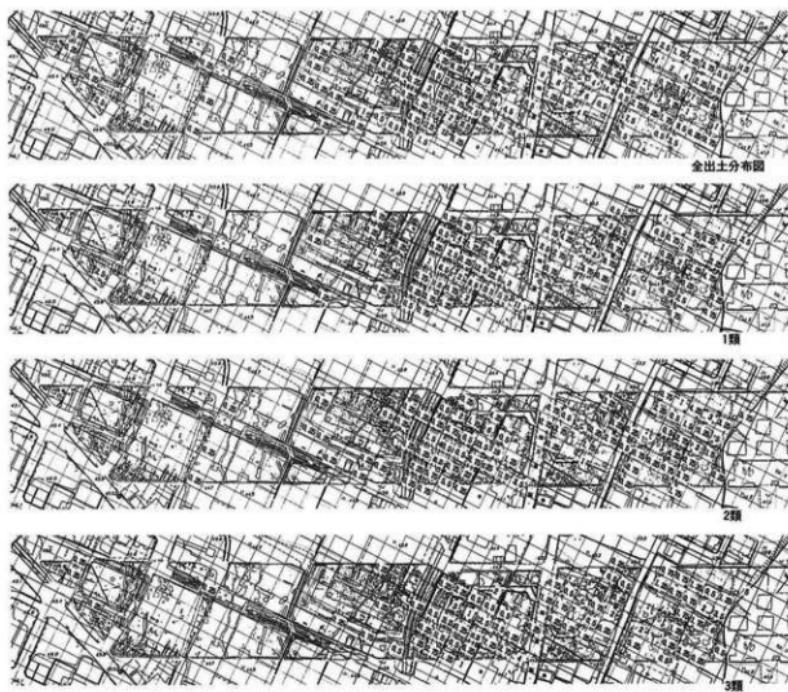
(1) I 調査区

瓦はA地区東部の溝A-1・2、A地区西部の溝A-10、土坑A-103、B地区東部の溝B-1・4・7・11・38、土器溜まりB-1を中心として出土している。B地区城館跡とその西側のC地区からの出土量は非常に少量である。時期別では軒丸瓦は14・16世紀が少量である。また、A地区西部の溝A-10、土坑A-103付近の軒丸瓦は時期不確定のものが多く、様相は明瞭ではない。軒平瓦は16世紀のものが2点のみの出土である。軒丸瓦、軒平瓦のそれぞれをA地区東部、A地区西部、B地区東部の3地区に分けて、時期別の出土量の比率を検討した(図21)。A地区東部において15世紀の比率が明らかに高いことが認められる。また、B地区東部の15世紀軒丸瓦の出土点数は18点を数える。

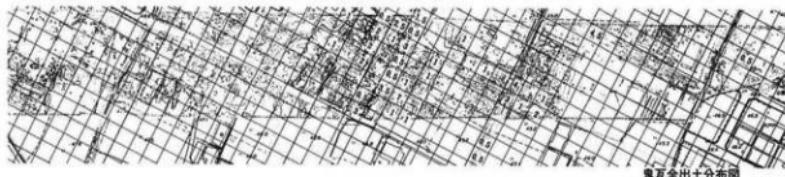
丸瓦・平瓦・雁振瓦の出土分布は軒瓦と同様である。雁振瓦はA地区東部の出土量が若干少ない。時期別では軒瓦のように詳細な分割が不可能だったので、状況を明らかにすることはできない。

鬼瓦は他の瓦と比較して、A地区東部、西部の出土量は少なく、B地区東部の溝B-1・4・11から集中してみられる。

埠においても同様の分布傾向がみられ、B地区東部からは146点の出土を数え、溝B-4から溝B-10・11周辺に集中して出土している。この地区には埠を使用した建物の存在が考えられる。A地区からの出



V-3-19 1調査区平瓦分布図



鬼瓦全出土分布図



雁振瓦全出土分布図



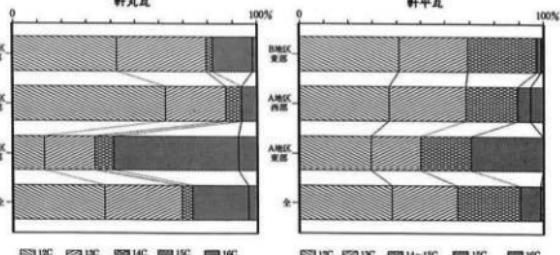
熨斗瓦全出土分布図

V-3-図20 II調査区鬼瓦・雁振瓦・熨斗瓦分布図

土は14点であり、少量である。

熨斗瓦は小片の場合、認識が困難なため、図22の分布図ではすべての数量が示されていない。あくまで熨斗瓦として認識したものであり、平瓦として扱われた資料もあると思われる。鬼瓦、埠と同様、B地区東部に集中しており、A地区からは出土していない。

軒丸瓦



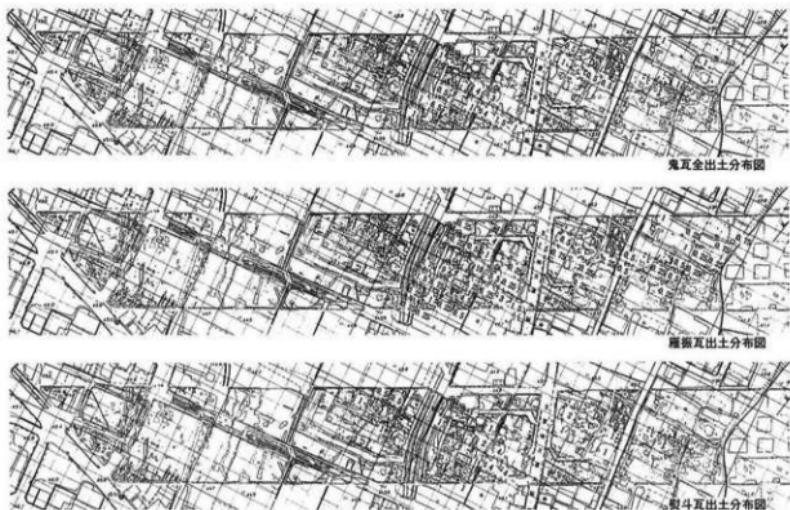
V-3-図21 I調査区軒丸瓦地区別出土量比率

V-3-表3 I調査区軒丸瓦地区別出土比率

地 区	全(不確定点数)	率(点数、カッコ内は%)				
		12c	13c	14~15c	15c	16c
B地区東部	158(38)	47(42.3)	41(36.9)	3(2.7)	18(16.2)	2(1.8)
A地区西側	26(10)	10(62.5)	4(25.0)	1(6.3)	0(0)	1(6.3)
A地区東部	87(46)	5(12.8)	8(20.3)	3(7.7)	20(51.3)	3(7.7)
全 体	363(97)	62(37.3)	53(31.9)	7(4.2)	38(22.9)	6(3.6)
地 区	全(不確定点数)	率(点数、カッコ内は%)				
		12c	13c	14~15c	15c	16c
B地区東部	136(29)	44(41.1)	30(28.0)	30(28.0)	2(1.9)	1(6.9)
A地区西側	26(1)	7(36.8)	6(31.6)	4(21.1)	1(5.3)	1(5.3)
A地区東部	41(7)	10(29.4)	7(20.5)	7(20.5)	10(29.4)	0(0)
全 体	197(37)	61(38.1)	43(26.9)	41(25.6)	13(8.1)	2(1.3)

(2) II調査区

各区画ごとの軒丸・軒平瓦の時期別比率表(図23)、軒丸・軒平・出土点数表(表4)を作成した。比率グラフのうち、区画1・4～7、14・15・16は比較



V-3-図22 I調査区鬼瓦・雁振瓦・熨斗瓦分布図

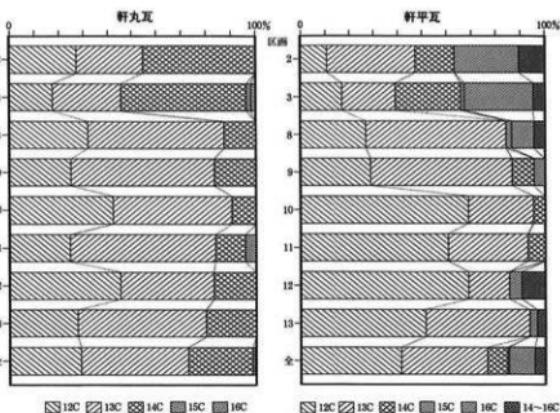
的出土量が少なく、除外している。区画1・15・16からの出土は皆無に等しい。

軒丸瓦では区画2・3は14世紀の比率が大きく、区画10・12は12世紀の比率が大きい。軒平瓦では区画2・3は16世紀の比率が他区画より大きく、区画10～13は12世紀が50%以上を占めている。

丸瓦・平瓦・雁振瓦の分布も軒瓦と同様のものを示す。鬼瓦は区画3・8・9に集中し、熨斗瓦は区画8・11に集中してみられる。塙の出土は少量である。

以上のような状況がみられるが、12・13世紀の瓦は搬入品と考えられ、14世紀において、II調査区では瓦葺建物が建てられたと考えられる。

図23にみられるように軒丸瓦と軒平瓦の各時代に比率の差異がみられるが、13世紀以前と13世紀以後の比率をみれば、ほぼ同様の比率が認められ、前記の12・13世紀瓦の搬入と14世紀の瓦葺建物の存在が推定される。



V-3-図23 II調査区軒瓦時期別出土量比率

V-3-表4 II調査区軒瓦地区別出土比率

区画	年号	式	II区(点数、カッコ内は%)				年号	式	II区(点数、カッコ内は%)			
			12c	13c	14c	15c			12c	13c	14c	15c
1	1 (1)	0	0	0	0	0	2 (0)	2 (100)	0	0	0	0
2	18 (7)	3 (27.3)	3 (27.3)	5 (45.5)	0	0	20 (1)	2 (10.5)	7 (36.8)	3 (15.8)	0	5 (26.3)
3	30 (23)	16 (17.5)	16 (28.1)	29 (50.0)	1 (1.8)	1 (1.8)	68 (4)	11 (17.2)	14 (21.9)	17 (26.6)	1 (1.6)	18 (28.1)
4	18 (5)	4 (30.0)	3 (22.2)	6 (48.2)	0	0	3 (1)	0	0	0	0	2 (100)
5	12.5 (3.5)	3 (23.3)	6 (66.7)	0	0	0	5.5 (1)	3 (66.7)	1.5 (33.3)	0	0	0
6	7.5 (1.5)	1 (16.7)	3 (50.0)	2 (33.3)	0	0	7 (1)	1 (16.7)	1 (16.7)	0	1 (16.7)	0
7	5 (2)	1 (33.3)	2 (66.7)	0	0	0	6 (1)	2 (40.0)	3 (60.0)	0	0	0
8	25.5 (2)	7.5 (31.9)	13 (55.3)	3 (12.4)	0	0	31.5 (7)	12 (27.0)	25 (57.3)	0	1 (2.2)	4 (9.0)
9	15.5 (2.5)	3 (25.0)	7 (58.3)	2 (16.7)	0	0	26 (2.5)	6 (58.9)	13 (57.8)	2 (8.9)	0	1 (4.4)
10	30.5 (4.5)	11 (42.3)	12.5 (48.1)	2.5 (8.6)	0	0	36 (4)	22 (68.8)	8.5 (26.6)	1.5 (4.7)	0	0
11	33.5 (9)	6 (24.3)	14.5 (59.2)	3 (12.2)	1 (4.1)	0	23.5 (2)	13 (60.5)	7 (32.6)	1.5 (7.0)	0	0
12	34.5 (8)	12 (45.3)	10 (37.7)	4.5 (17.0)	0	0	49 (7.5)	28.5 (68.7)	7 (16.9)	0	0	2 (4.8)
13	47.5 (7.5)	11 (27.5)	21 (52.5)	8 (20.0)	0	0	66.5 (5)	31.5 (51.2)	26 (42.3)	0	0	2 (3.3)
14	16 (8)	2 (25.0)	4 (50.0)	2 (25.0)	0	0	6.5 (1.5)	3 (60.0)	2 (40.0)	0	0	0
15	10 (3)	2.5 (35.7)	4.5 (44.3)	0	0	0	4 (0)	2 (50.0)	0	1 (25.0)	0	1 (25.0)
16	0 (0)	0	0	0	0	0	0 (0)	0	0	0	0	0
全	355 (88.5)	77 (28.0)	119.5 (44.8)	67 (25.1)	2 (0.8)	1 (0.4)	374.5 (39.5)	139.5 (41.6)	115.5 (34.5)	26 (7.8)	3 (0.9)	33 (9.9)
												18 (5.4)

(3) 2次火熱瓦

出土瓦には2次的な火熱を受けた瓦が多く観察される。後述する萩原神社社記の焼失記事の関連もあり、各瓦の観察表において2次火熱の有無の項目を設けたが、時期別における比率には特徴がなく、また、分布状況においても変化はみられない。2次火熱の瓦の出土状況から社記に合致する良好な結果を得ることはできなかった。

(4) 小結

I調査区では満A-1・2と南側、満B-1・4・7・11から集中して瓦が出土している。城館跡西側のB地区東部地区には「寺山」の字名があり、また、仏頭、護摩壇などの瓦器製の仏具関係品も出土している。

基壇を有するような建物跡は検出されていないが、掘立柱建物或いは小規模礎石を有した建物が考えられ、この2か所に坊院のような形態の寺院関連施設の存在が推定される。また、これらの溝はII調査区において検出されたような区画の溝の一部と考えられる。

II調査区ではE地区西側・F地区西側・G地区から多量に瓦が出土している。区画4には「妙光院」の字名が残り、瓦器製の仏具関係品が出土している。I調査区と同様な建物跡の存在が考えられ、寺院関連施設の存在が推定される。

両調査区共に12・13世紀瓦は搬入品であり、I調査区では15世紀、II調査区では14世紀において瓦を使用した建物が建てられたと考えられる。

第4節 まとめ

1. 軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ (図24)

日置荘遺跡からは多種多様の軒瓦が出土しており、その組み合わせを出土遺構から復原するには困難である。その中で軒丸E型式と軒平J型式は梵字が紋様の中に取り入れられ、セット関係が推定できる。

軒丸E-1と軒平J-1は紋様化しており、それぞれ対応した組み合わせが考えられる。

軒丸D-2と軒平E-1は播磨系にみられる紋様であり、組み合わせが考えられ、軒丸D-7aと軒平C-1も組み合うであろう。

巴紋軒丸瓦と組み合う軒平瓦の確定は困難である。出土点数や紋様、焼成の状況から軒丸K-33と軒平F-4、軒丸K-38と軒平L-3、軒丸K-48と軒平S-24、軒丸K-79と軒平O-



V-3-図24 軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ

1の組み合わせの可能性を考えておきたい。

2. 瓦からみた日置莊遺跡

(1) 「河内 萩原寺考」と日置莊遺跡出土瓦

本報告書に再掲載された「日置莊町誌」の「河内 萩原寺考」において、藤澤一夫氏は萩原神社境内出土瓦と日置莊原寺町出土瓦の関係について、萩原神社社記をもとに論考されている。

社記によれば萩原神社社域に六寺院が存在していたが、正慶元年(1332)に、観音院は西村へ、正福寺は北村へ、积迦院は丈六村へ、地蔵院は高松村へ移転したと記されている。

藤澤氏は、萩原神社に奈良時代或いは平安時代後期創建の萩原寺が存在し、正慶元年の焼失により、周辺の村々へ六寺院が移転したと考えた。その一つの大聖寺の跡が原寺村南東(G調査区)での瓦採取地であり、この寺院が萩原寺の法燈を繼いだと考えている。

前述したように、日置莊遺跡出土瓦には12~16世紀の時期の瓦がみられるが、12・13世紀の瓦に関しては搬入品である可能性を推定した。よって藤澤氏の論に沿って本遺跡出土瓦のありかたを考えるならば、12・13世紀の瓦は萩原寺からの搬入品であり、14世紀以降の瓦は正慶元年焼失による移転に伴う採用瓦と考えられるのである。

日置莊遺跡出土瓦には2次的な火熱を受けた瓦が多くみられる。上記の論の可能性より12・13世紀の瓦に多量の火熱を受けたものが存在していれば、萩原神社社記を裏付けるものとなると推定し、前述したように2次火熱瓦の出土状況の確認を試みたが、良好な結果を得ることはできなかった。

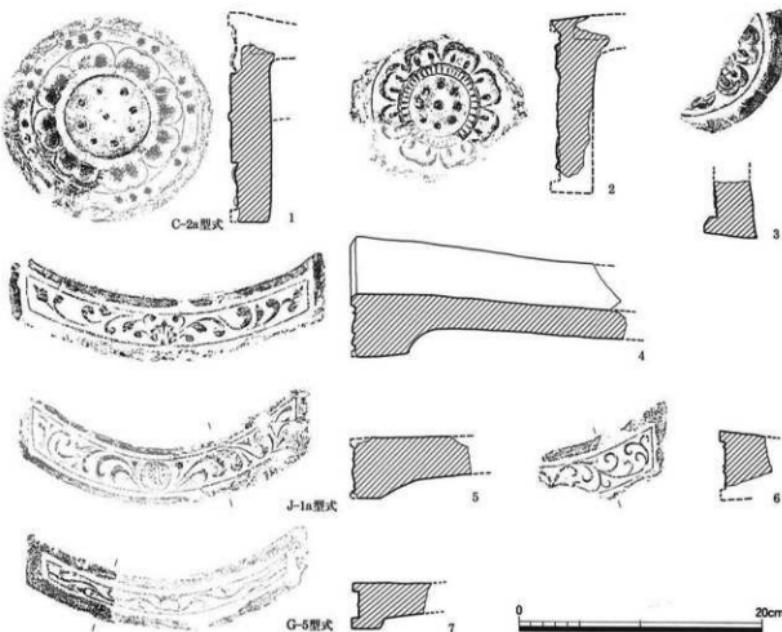
しかしながら、後述する萩原神社境内出土瓦には、軒丸C-2a、軒丸D、軒平J-1a、軒平G-5型式がみられ、両者は無関係とは考えられない。

(2) 萩原神社出土瓦 (図25)

萩原神社はII調査区の北西方向にG地区から約600mに位置(カラー図版10)しており、前述した「河内 萩原寺考」からもわかるように密接な関係をもっている。

現萩原神社境内からは平安時代後期の瓦が出土しており、調査期間中、萩原神社所有瓦を実測する機会を得ることができた。なお、図25-1,2,4,5は「河内 萩原寺考」において記述され、「日置莊町誌」の巻頭図版に掲載されたものである。

1は日置莊遺跡軒丸C-2a型式と同范である。2は日置莊遺跡軒丸D型式の雄蕊帶を有する複弁蓮華



V-3-図25 萩原神社境内出土瓦

紋であり、D-7型式に類似している。3の全体像は不明であるが、雄蕊帯を有する複弁蓮華紋と考えられる。4は日置莊遺跡軒平E-1型式に類似する。2点出土している。5の唐草は第2単位以降、左右の紋様が異なる。日置莊遺跡軒平J-1a型式と同范である。6の唐草は枝葉が多くのびている。7は日置莊遺跡軒平G-5型式と同范である。

(3) 周辺遺跡出土軒瓦との同範・同紋・同系関係

表5は本遺跡出土軒瓦との同範・同紋・同系関係（瓦を実見し、同範と確認したものを同範、同範と考えられるものを同紋、近似しているものを同系とする）である。

軒平D-1型式は堺市鶴田池東遺跡の生産遺跡から出土している。その分布範囲は堺市、貝塚市の限られた範囲であり、また、複数の供給先を有していたことがわかる。

軒丸E型式と軒平J型式は前述したように組み合わせが考えられるものであり、他遺跡においても両者が出土している。これらの梵字を有した軒瓦の分布は藤井寺市から堺市の範囲に認められ、南河内地域を特色づける紋様のひとつであることが指摘できる。

軒丸D-2型式、軒平A-1、E-1型式は播磨地方にみられる紋様である。龜井北遺跡から出土している軒丸D-2型式は、同範であり、范傷の状況から日置莊遺跡出土瓦のほうが新しいことが認められる。

(4) 結語

遺構・土器の分析により、12~16世紀の村落の状況が明らかにされ、その中で14世紀には階層性の整っ

V-3-表5 日置莊遺跡出土軒瓦同范・同紋・同系関係表

式名	關係	道 路	所 在 地	備 考 文 紙	式名	關係	道 路	所 在 地	備 考 文 紙
軒丸A-1a 同款	平安宮御院院内小御院指定地	京都市上京区	1	軒丸A-1 同系 国府道跡	藤井寺市	21			
軒丸A-1a 同款	東福寺三門	京都市東山区	2	軒丸A-1 同系 はさみ山道跡	藤井寺市野中	22			
軒丸A-1 同系	海神社	堺市	3	軒丸A-1 同系 大祓道跡	堺市大祓町	23			
軒丸A-2 同款	大野寺跡	堺市土塔町	3	軒丸A-2 同系 海会寺跡	泉南市佐世大森代	24			
軒丸B-1 同系	神於寺跡	岸和田市神於町	4	軒丸B-5 同系 泉原神社境内	堺市立藏在寺町 泉原寺跡	6			
軒丸B-1 同系	鳳鳴寺跡	堺市	3	軒丸B-5 同系 善道院道跡	大阪市平野区 鳳鳴堂跡	25			
軒丸C-1 同款	塩穴寺跡	堺市石津北町	5	軒丸E-5 同系 千眼寺跡(光明院道跡)	八尾市官町	7			
軒丸C-2 同款	高麗寺社境内	堺市立藏在寺町	6	軒丸E-5 同系 法勝寺跡	京都市	26			
軒丸C-3 同款	千眼寺跡(光明院道跡)	八尾市宮町	7	軒丸J-2 同款 大泉寺跡	松原市	14			
軒丸C-3 同款	金性寺跡	八尾市高町	8	軒丸J-1 同款 新金岡地跡	堺市立金岡町	27			
軒丸C-3 同款	若江道跡	大阪市若江南町	9	軒丸C-2 同款 古市道跡	羽曳野市古市	28			
軒丸D-2 同款	龜井山道跡	八尾市北龜井町	10	軒丸D-1 同款 高麗城跡	羽曳野市吉市	29			
軒丸D-2 同款	重の道道跡	岸和田市高山町	4	軒丸D-1 同款 改め堂寺跡	貝塚市改め堂	30, 31			
軒丸D-2 同款	はさみ山道跡	藤井寺市野中	11, 12	軒丸D-1 同款 近畿堂寺跡	貝塚市島中	32			
軒丸D-2 同系	海神社	堺市	3	軒丸D-1 同系 仏光寺跡	堺市立西町	33			
軒丸D-5 同系	大祓道跡	高石市西敷石	13	軒丸D-1 同系 鶴田池東道跡	堺市淀水	34			
軒丸D-7 同款	はさみ山道跡	藤井寺市野中	12	軒丸D-1 同款 桐木下道跡	堺市淀水	35			
軒丸E-1 同款	間2丁目道跡	松原市岡	14	軒丸E-1 同款 はさみ山道跡	藤井寺市野中	12			
軒丸E-1 同款	野中寺跡	羽曳野市野中上	5	軒丸E-1 同系 鳥ノ巣・昌中・近畿堂寺跡	貝塚市島中	33			
軒丸E-1 同系	觀音寺道跡	松原市西大屋・立原	15	軒丸E-6a 同款 はさみ山道跡	藤井寺市野中	22			
軒丸E-3 同系	古宮跡	藤井寺市	16	軒丸E-2 同款 觀音寺跡	松原市西大屋・立原	18			
軒丸E-2 同系	觀音寺道跡	松原市西大屋・立原	15	軒丸E-2 同款 はさみ山道跡	藤井寺市野中	36			
軒丸E-2 同系	瑞應院市道跡	堺市立之町	17	軒丸E-2 同款 多治通北荒神社	堺市立治	4			
軒丸E-2 同系	保井寺跡	堺市立之町	18	軒丸J-3 同款 野中寺	羽曳野市野中上	6			
軒丸E-2 同系	多治通北荒神社	堺市立治山台	3	軒丸E-4 同款 はさみ山道跡	藤井寺市野中	22			
軒丸E-2 同系	龍藏寺社境内道跡	富田林市本部	19	軒丸E-2 同款 觀音寺跡	松原市西大屋・立原	15			
軒丸E-2 同系	西天王寺	大阪市天王寺区	20	軒丸J-6 同款 關2丁目道跡	松原市岡	14			

た村落が形成されたことが示されている。瓦からの分析の結果、12~16世紀の時期の瓦であることが明らかになったが、12~13世紀の瓦は再利用のものと推定でき、II調査区では14世紀、I調査区では15世紀に瓦葺建物（寺院関連施設）がみられると考えられる。

つまり、14世紀には、II調査区では1町規模の区画2を中心とする屋敷地に、区画3・4・8~14の寺院関連施設を有した区画が存在していたと想定される。15~16世紀には、II調査区の区画2の規模が縮少し、区画15が出現する。区画2・15には瓦葺建物は存在せず、前代と同様に寺院関連施設を有した区画3・4・8~14が引き続き、存在する。そして、16世紀の補修瓦の使用で終了する。

I調査区では15世紀に入り、溝A-2とその南側、溝A-10と土坑A-103付近、B地区東部の溝B-1・溝B-51の東側に瓦葺建物（寺院関連施設）の存在が認められる。そして、II調査区同様に、16世紀の補修瓦の使用で終了する。

中世瓦の特徴の一つとして多様な紋様の瓦が出土することを挙げることができる。その中で、生産地の追求は1か所にとどまった。各瓦の同一紋様の出土分布は南河内、和泉地域に限定できるものであり、この地域を特色づける瓦として示すことができるものと考えられる。

註

- 1) 平安博物館編 『平安京古瓦図録』 1977 雄山閣
- 2) 上原真人 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14合併号』 1976 元興寺文化財研究所考古学研究室
- 3) 1. 小林謙一・佐川正敏 「法隆寺出土瓦の調査追録Ⅱ 平安時代～近世の軒丸瓦」『伊阿留衣 法隆寺昭和賁財帳調査概報10』 1989 小学館
2. 法隆寺昭和賁財帳調査委員会 「昭和賁財帳」法隆寺の瓦室 瓦』 1992 小学館
- 4) 山崎啓二 「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集第1号 奈良國立文化財研究所学報(第38冊)』 1980 奈良國立文化財研究所
- 5) 奈良國立文化財研究所 「藤原寺発掘調査報告書」 1987
- 6) 推原一・丹治治明 「推原における瓦生産・紹興・魚住業を中心に」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』 1987 日本中世土器研究会
2. 田中幸大 「推原で活躍した窯町・桃山時代の瓦工集団」『今里幾次先生古墳記念 藤原考古学論叢』 1990 今里幾次先生古墳記念論文集刊行会
- 丹波・3. 里内知巳 「11・12世紀における丹波地方の瓦生産」『同志社大学考古学シリーズⅡ 考古学と移住・移動』 1985 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 尾張・4. 紫垣勇夫 「尾張における平安末期の瓦生産—その分布と史的背景—」『愛知県陶磁資料館研究紀要Ⅰ』 1982 愛知県陶磁資料館

- 福岡一・栗原和彦 「福岡平野における中世瓦礫の需要について—箱崎遺跡出土瓦の検討—」『横山浩一先生退官記念論文集』 1989
- 周防一・東安和二三 「周防国府出土の東寺瓦」『角田文斬博士古墳記念論文集』 1983 角田文斬博士古墳記念事業会
- 健倉一・京 廣志 「鎌倉における瓦の様式—鎌倉時代の瓦当文様を中心にして—」『仏教芸術 164号』 1986 毎日新聞社
- 関東一・小林康幸 「関東地方における中世瓦の一樣相—中世市町鎌倉と周辺地域にみる系譜性を中心として—」『神奈川考古年会』 1989 神奈川考古年会
- 7) 大阪 市 「研究ノート 丸瓦の製作技術」
『研究論集』奈良国立文化財研究所学報(第49回) 1991 奈良国立文化財研究所
- 8) 住7と同様
- 9) 森田克行 「浜津 高麗城」 1984 高麗城市教育委員会
- 10) 上原真人 「平瓦製作技術の変遷—近世造瓦技術の成立の前提—」
『今里殿先生古墳記念 濱商考古学論叢』 1990 今里殿先生古墳記念論文集刊行会
- 11) 海南市立歴史民俗資料館 「かわら」テーマ展(1993) の展示品にて実見
- 12) 1. 高橋英久二 「平安時代後期の地方瓦窯と京都への供給」『京都考古 12号』 1975 京都考古刊行会
2. 近藤義一 「瓦からみた平安」 1985
- 13) 1. 五十川伸央 「平安の瓦の数量計測方法の分析—生産跡出土瓦の場合—」
『京都大学構内遺跡調査研究報告 昭和55年度』 1986 京都大学埋蔵文化財研究センター
2. 宇野隆夫 「第6章 2遺物 (1)考査の方法」『丹波周山窯址』 1982 京都大学文部省考古学研究室

参考文献

- 市本芳三 「浜川泉における古代末・中世瓦の様相—市立浜川泉遺跡出土瓦を中心に—」
『研究紀要vol.1—大阪文化財センター研究助成報告書—』 1993 大阪文化財センター
- 宇野隆夫 「食器計量の意義と方法」『昭和歴史民俗博物館研究報告』第40集 1992 国立歴史民俗博物館
- 佐原 真 「瓦片巻作刀」『考古学雑誌 58号 2号』 1972 日本考古学会
- 藤沢典彦 「中・近世瓦の研究—元興寺瓦—」 1983

表5 文獻

- 1 平成博物館編 「平安京古瓦図録」 1977 雄山閣
- 2 高橋英久二 「東福寺の創建と大様建築」『瓦瓦図考』 1989 ミネルヴァ書房
- 3 近藤康司 横仲一郎 「小谷方明所蔵瓦について」『浜河泉文化資料』41号 1990 浜河泉文庫
- 4 『境内出土遺物図録 玉谷所蔵資料』岸和田市史記要第2号 1976 岸和田市
- 5 石田廣作 「飛鳥時代寺院址の研究」 1936 第一書房
- 6 「飛鳥遺跡 (その2) —調査の概要—」 1988 大阪文化財センター
- 7 「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」昭和56・57年度 1983 大阪八尾市文化財調査研究会
- 8 「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」平成元年度 1989 大阪八尾市文化財調査研究会
- 9 「西の口・鬼塚・若江遺跡の調査—平成4年度—」 1993 東大阪市教育委員会
- 10 「猪井北 (その3)」 1986 大阪文化財センター
- 11 「狹川遺跡・鞋里遺跡発掘調査概要」 1978 大阪府教育委員会
- 12 「吉川渠遺跡群発掘調査報告書」 1993 鹿児島市教育委員会
- 13 「大園遺跡発掘調査概要2」 1976 大園遺跡調査会
- 14 「狹川2丁目所在跡発掘調査概要報告書」 1993 大阪府教育委員会
- 15 市本芳三 「「鏡音寺」出土瓦の梵字を有する瓦について」『大阪文化財研究』第7号 1994 大阪文化財センター
- 16 「大坂川改修とともに発見された奈良開拓群Ⅵ」 1992 大阪府教育委員会
- 17 「堺環状都市遺跡発掘調査概要—1号車庫之町の所在 (SKT133) —」 1986 大阪府教育委員会
- 18 「古瓦百選 常楽寺美術所蔵」 1975 常楽寺美術館 尤希社出版
- 19 「越前神社 (水郡宮) 境内遺跡発掘調査概要」 1985 大阪府教育委員会
- 20 「御天王寺・食堂跡」 1986 大谷女子大学
- 21 「市野遺跡発掘調査概要 II」 1979 大阪府教育委員会
- 22 「昭和57年度 はさみ山遺跡発掘調査概要」 1983 大阪府教育委員会
- 23 「大仙遺跡発掘調査概要 II」 1979 大阪府教育委員会
- 24 「南寺寺遺跡」 1987 泉南市教育委員会
- 25 「堺喜連市営住宅建設に伴う喜連東遺跡発掘調査 (KR89-2) 現地説明会資料」 1989 大阪市文化財協会
- 26 石田廣一 「法勝寺の瓦に就いて」『日本史研究』第4号 1947 日本史研究会
- 27 「新金岡更地跡発掘調査概要報告—NKA6.5.6地点の調査—」 1991 市立浜川泉遺跡調査会
- 28 「市道跡群Ⅱ」 1991 羽曳野市教育委員会
- 29 「高麗城址発掘調査概要 VI」 1988 大阪府教育委員会
- 30 「浜堂寺高寺跡 (正福寺) 発掘調査概要」『貝塚市遺跡群発掘調査概要 IV』 1982 貝塚市教育委員会
- 31 「貝塚市遺跡群発掘調査概要 V」 1983 貝塚市教育委員会
- 32 「福ノ浜・島中・近畿堂遺跡地説明会資料」 1988 大阪府教育委員会
- 33 「御の宮遺跡発掘調査報告—光寺跡—VOL.1」 1977 堺市教育委員会
- 34 「西瀬蔵・鶴田池東遺跡発掘調査概要」 1980 大阪府教育委員会
- 35 「府道松原泉大津線遺跡発掘調査報告書！」 1984 大阪文化財センター
- 36 「狹山遺跡・鞋里遺跡発掘調査概要」 1978 大阪府教育委員会

第4章 平安時代以降の遺物について

鶴柄 俊夫

第1節 はじめに

日置荘遺跡を性格付ける特徴の1点が、奈良時代以降の連続する集落の変遷に求められるように、平安時代以降の遺物についても、その分布はI～III調査区を中心とした地域で検討されることになる。遺構の概要としては、III調査区に限定してみえる奈良・平安時代の集落および、II・III調査区に展開する中世村落であり、出土する資料についても、奈良・平安時代の土師器・須恵器資料以降、中世前期においては、食膳具（和泉型瓦器椀・輸入磁器）、調理具（東播系擂鉢）、貯蔵具（東播系甕・常滑窯甕）のセット、後期においては食膳具（国産・輸入陶磁器）、調理具（瓦器擂鉢・瓦器釜・備前窯擂鉢）、貯蔵具（瓦器甕・備前窯甕）のセットといった、西日本に通有な傾向をうかがうことができる。もっとも当遺跡の場合、それ以外で特徴的な資料をみることもでき、それらが、遺跡とそこから復原される村落の性格を特定する大きな手がかりとなっている。以下、この点を中心に遺物変遷図と出土分布図の説明を行おう。

なおII調査区の瓦以外の遺物の総重量は、約2トンであった。

第2節 時期別検討

1. 9～11世紀

土師器皿・杯・鉢・釜、黒色土器杯・椀・鉢・須恵器高台付き杯・瓶子および初現期の瓦器椀がみられる。残存する遺構との関係ではIII調査区に限定した遺物をみるとことになるが、東播系須恵器碗を通り、底部外面に糸切り痕を残す須恵器杯・石帯など9・10世紀の資料および黒色土器碗を指標とする11世紀の資料などはI・II調査区でも包含層およびA地区土坑などから検出されている。

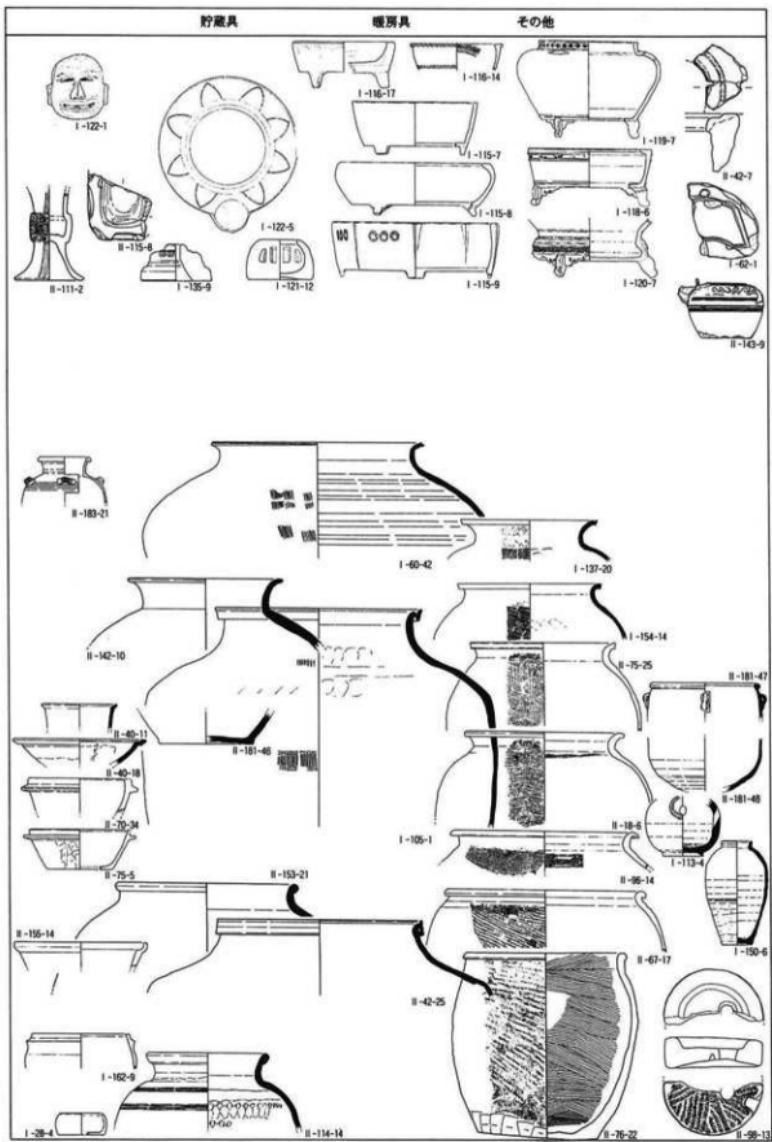
器種構成としては全般に食膳具が多いものとなっているが、9世紀の資料であるK地区溝、10世紀の資料であるL地区土坑からはそれぞれ煮炊具（鉢・甕）と杯・皿のセットが確認され、この時期の状況を補うものとなっている。またIII調査区の井戸L-4からは黒色土器碗と和泉型瓦器が共伴して出土し、両者の過渡期を示す資料となる。なおI調査区で出土した器類は包含層出土であり、出土状況からの時期の推定はできないが、無紋の形式から平安時代後期～末期とされており、この時期または12世紀代に含まれることになる。

2. 12～13世紀

瓦器碗・皿・鉢・足釜、白磁碗・四耳壺・合子、青磁碗・皿・梅瓶、東播系甕・擂鉢・椀、瀬戸内東部系甕、土師器釜、常滑甕、備前窯甕がみられる。出土分布は、III調査区で墓に供獻された青磁碗の2例を除きほぼI・II調査区に限定される。機能分類によれば、食膳具が瓦器碗・皿、白磁碗、青磁碗、調理具が東播系擂鉢、煮炊具が土師器釜、貯蔵具が常滑甕、東播系甕、特殊品として白磁四耳壺・合子・梅瓶がみられる。なお白磁四耳壺はII調査区、合子・梅瓶はI調査区を主な分布としている。この時期の大きな特徴と言えるのが瀬戸内東部系須恵器甕の存在である。ここでは十瓶山窯・亀山窯などに類似した技法をもちながら両者に属さない資料を総称しているが、いずれも外面に斜方向の平行条線叩きを

	食器	調理具	煮炊具
900	H-49-2 H-49-5 H-49-9 H-70-25 H-70-22	H-153-3	
1000	H-87-5 H-73-3	H-49-12	H-74-8 H-180-19
1100	H-73-5 I-180-18 I-47-5 I-56-9		I-47-5 I-131-8
1200	H-95-8 I-105-9 H-95-15 I-103-6 I-99-4 I-112-28 I-103-10	H-183-18 I-180-10 H-82-16 I-112-1 I-187-2 I-135-7 H-68-15 H-73-15 I-163-15 I-167-4 I-162-13 I-111-14 I-112-21 I-111-4 I-31-11 H-94-12 I-28-6	
1300			I-94-5 I-144-20 I-154-7 I-75-13 I-152-22 I-75-23 I-67-14
1400			
1500			

V - 4 - 図 1 平安時代以降の遺物変遷図(1)

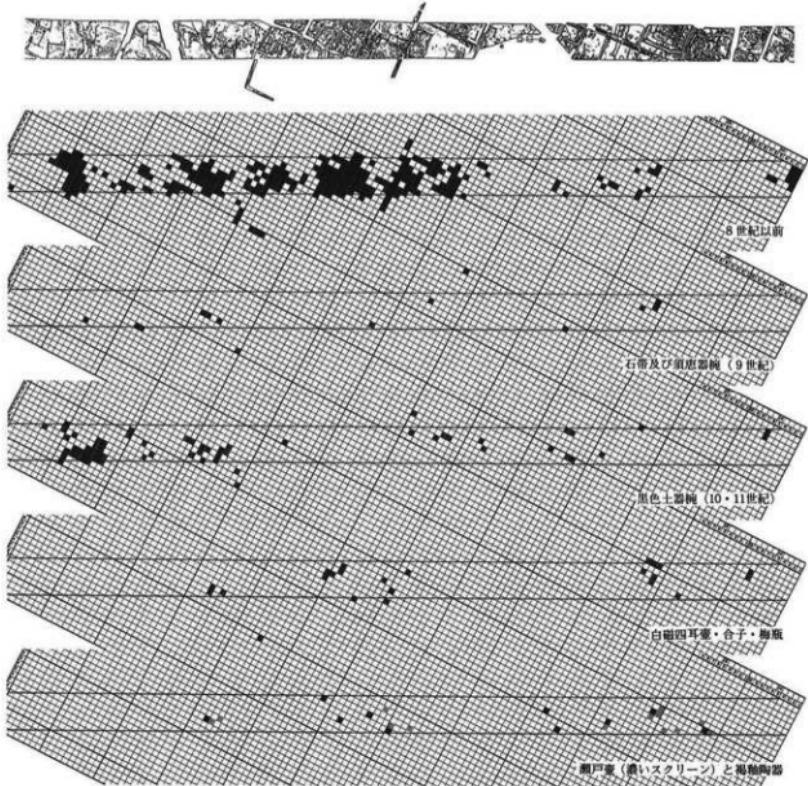


V-4-2 平安時代以降の遺物変遷図(2)

施した壺である。胎土は緻密で色調は灰色を呈する。調整は内面がナデ、外面は叩きの後にナデ調整が施されている。また底部外面には糸切り状の痕跡が残る。平底で外面に斜方向の長い単位の叩きを施した製品はやはり十瓶山窯の特徴と共通するが、胎土・外面の叩き調整・底部際外面の外反する形状などは上記の特徴とは相入れず、むしろ岡山側の胎土に類似した特徴も考えられ、鎌山窯である可能性も指摘されている¹⁾。畿内各地での出土数を希少とするものであり、今後和泉沿岸地域における出土分布との比較が必要である。

青磁碗は割花紋・蓮弁紋共に出土している。なおI調査区におけるその比率は1:3である。瓦器足釜は三脚の付いた釜型土器であり近江・京都から瀬戸内沿岸部を中心に分布する。和泉内陸部においてはやはりあまり見ることのない製品であり、I・II調査区共に拠点的に出土する傾向がある。

また常滑焼は、共伴する資料としては時期の後出する場合が多いものの、12世紀代の特徴を持つもの



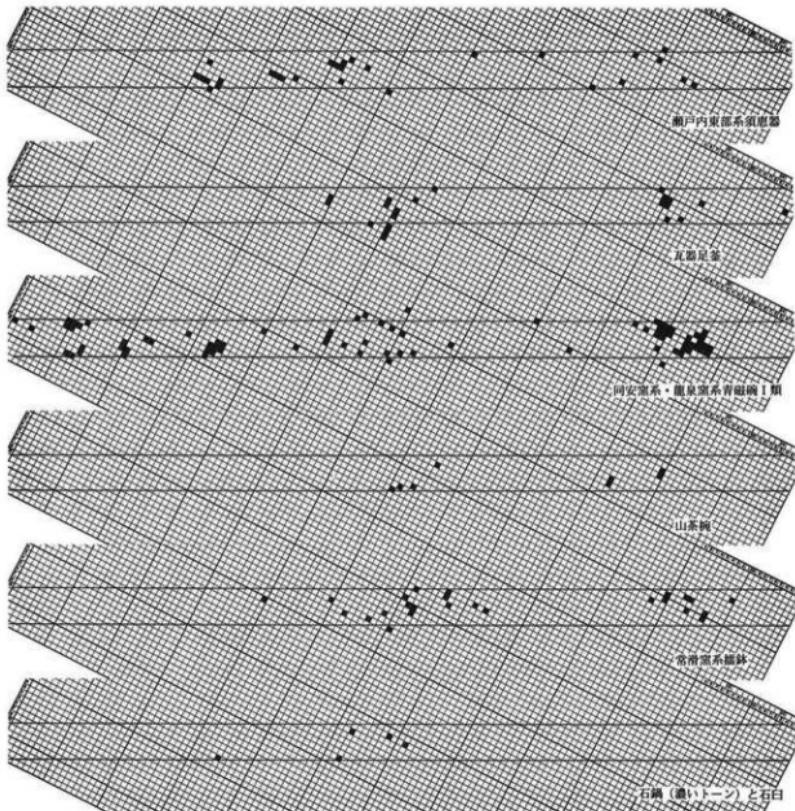
V-4-図3 遺物の出土分布図(1)

が多くみられる。

土製品の釜については、土師器釜が口縁部の内湾を強め、端部の屈曲を縮小させる傾向で、14世紀には縁帶状の形態をとり、消滅する。代わって瓦質焼成の釜が13世紀後葉頃に口縁部の屈曲が縮小して玉縁状になる直前の形態で出現し、次代へつながるものとなる。

3. 14世紀

瓦器椀・皿・鉢、青磁碗・皿、白磁碗・皿、山茶碗、東播系擂鉢、常滑窯系擂鉢、備前窯擂鉢、土師器釜、瓦器釜・甕・擂鉢、石鍋、常滑窯甕がみられる。前代の特徴を示す要素の一つが瀬戸内東部系須恵器甕に代表される西との連絡であるとするならば、この時期の特徴は東海の諸窯の製品に代表される東との連絡である。山茶碗は東濃の製品を代表として I・II 調査区とも拠点的な分布を示す。常滑窯系擂鉢は山茶碗より広い分布域で I・II 調査区に分布する。なお石鍋は II 調査区から多く出土している。

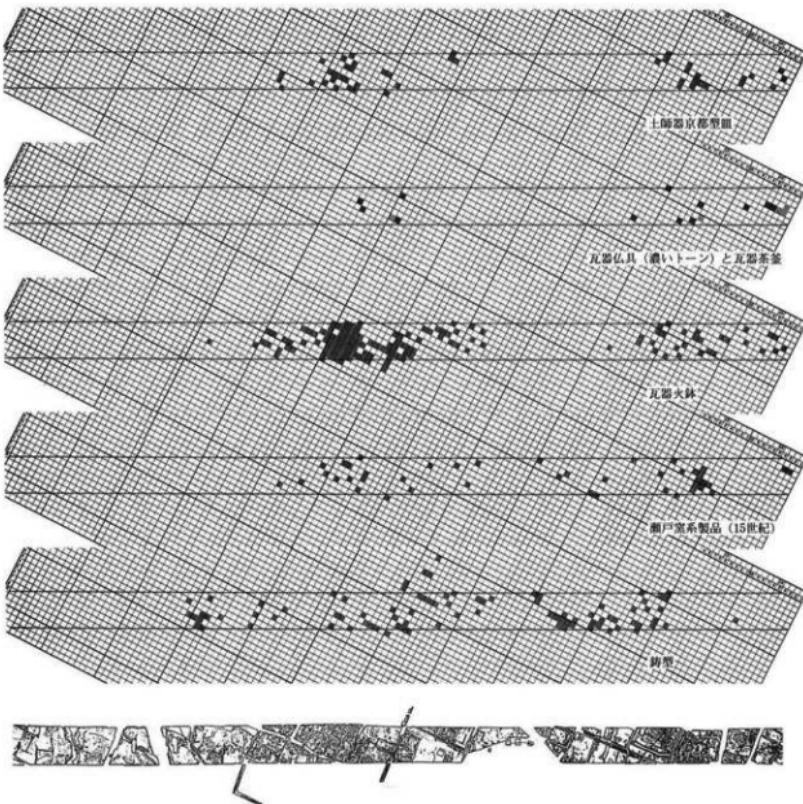


V-4-図4 遺物の出土分布図(2)

日置荘遺跡の集落跡に比定される村落の一つに、平安時代後期から中世前期にかけて活躍した鋳造工人の村がある。今回の調査ではその検討に資する関連遺構（鋳造溶解炉基部・鋳造土坑）、遺物（鋳型、スラグ、羽口など）も検出されているが、金属製品についても2点出土している。いずれも鉄瓶でありこの時期に該当する。

この時期以降、和泉ではいわゆる瓦質焼成の中・大型品（釜・甕）が量・種共に盛興する。一方瓦器椀は高台を失い、出土状況にも完形のまま井戸に一括廃棄されたものが知られるようになる。この対照的な現象については以前にも触れたことがあるが、両者の関係を産地推定も考慮に入れた生産の部分で検討するために、本報告では別章で胎土分析を行っている。今回はそれを総括するにいたらなかったが、連続する周辺地域の整理と並行して、稿を改めることにしたい。

なお詳細な時期は不明であるが、瀬戸窯壺と褐釉壺がみられる。I・II調査区共に比較的広い分布を



V-4-図5 遺物の出土分布図(3)

示している。

4. 15~16世紀中頃

青磁碗・中薫花生け、中国製染付碗・皿・天目碗、瀬戸窯灰釉平椀・灰釉皿に代表される小型品および卸皿・手付き片口・折縁深皿・水注、瓦器釜・鍋・甕・擂鉢・茶釜・火鉢、土師器京都型皿、備前窯擂鉢・壺・甕、常滑窯甕、石臼も出土している。瀬戸窯小型品はI・II調査区をほぼ均一に分布するものであり、おおむねこの時期の日常品として普及していたものとみることができよう。

この時期の資料を特徴付けるのは瓦器火鉢である。II調査区のG地区を中心に、I調査区でもB地区で拠点的な分布を示している。種類はI調査区の項でも述べているように、器形・装飾など多様である。同様に瓦器製品の仏具関係品を多くみることもできる。I調査区では仏頭・護摩壇、II調査区では花瓶・硯、両調査区を通じて灯明台の出土をみている。文献を援用した機能・用途別の整理が課題である。京都型皿はおよそ12世紀を第1次のいわゆる中世京都文化の伝播とした時の第2次の伝播にあたる。式三献に代表される儀礼の用具として京都型の皿が用いられたとするならば、その分布が集中するところは、村落の中でもより儀礼などの機会が多かった場所となる。分布はこの時期以前の資料も含んでいるが、おおむねI・II調査区のそれぞれ1カ所に集中する地区のあることがわかる。石臼はII調査区の出土である。

また16世紀後半以降およびその他の資料としては、土師器擂磨型鍋・盤、土師器壺（胞衣壺？）、瀬戸美濃窯小型品（菊皿）、肥前系陶器小型品、備前窯製品および近世陶磁器であり、別に漆器椀が2点出土している。

なおI調査区で瓦器仏頭が出土しているが、同じ瓦器製品では草戸千軒町遺跡での出土が知られる。またII調査区出土の瓦器覗にに関しては、泉北丘陵内の瓦窯から同じ瓦器覗の出土をみることができ²⁾、別に岡山県百間川米田遺跡井戸125で鎌倉期の陶器覗の出土が知られている³⁾。

註

- 1) 銀柄俊夫 1993 「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集
- 2) 中村 浩 1985 「古代末期窯業生産の一形態—堺市美木多瓦窯跡群を中心として—」『古代窯業史の研究』柏書房
- 3) 岡山県教育委員会 1989 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74

第5章 II調査区の景観復原

鋤柄 俊夫
亀井 聰

第1節 屋敷地配置の変遷

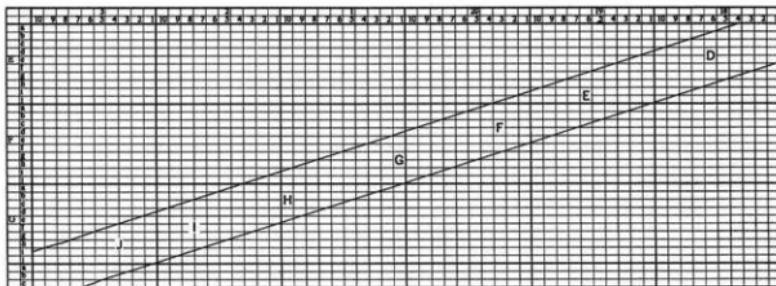
これまでにみてきたように、日置莊遺跡の各地点で検出された遺物と遺構群は、いずれもそこに中世を連続と続いた村落があったことを示している。しかしここで記録された遺構の状況は、多くが16世紀中頃と推定されるこれらの村落の最終的な景観であり、これをたどるだけでは日置莊村落本来の姿を復原することはできない。必要な作業は、この錯綜する中世後期の村落景観の裏に隠された13・14世紀およびそれ以前の状況を復原し、古代以来の開発と村落の変遷を示すことである。

一方河川・谷部などを除く立地において、多くの遺物はたとえ時期の異なった資料が混濁した状態で出土したとしても、それは、それ以前にあった生活遺構が、度重なる景観の変更により削除されたり整地層となつた後に包含された結果であり、決して無意味な混入などではないはずである。それはむしろ必要な手続きを経ることにより、それぞれの時代においてどのような規模の屋地がどのように配置されていたのかを物語る要素を内在していると換言できるものである。

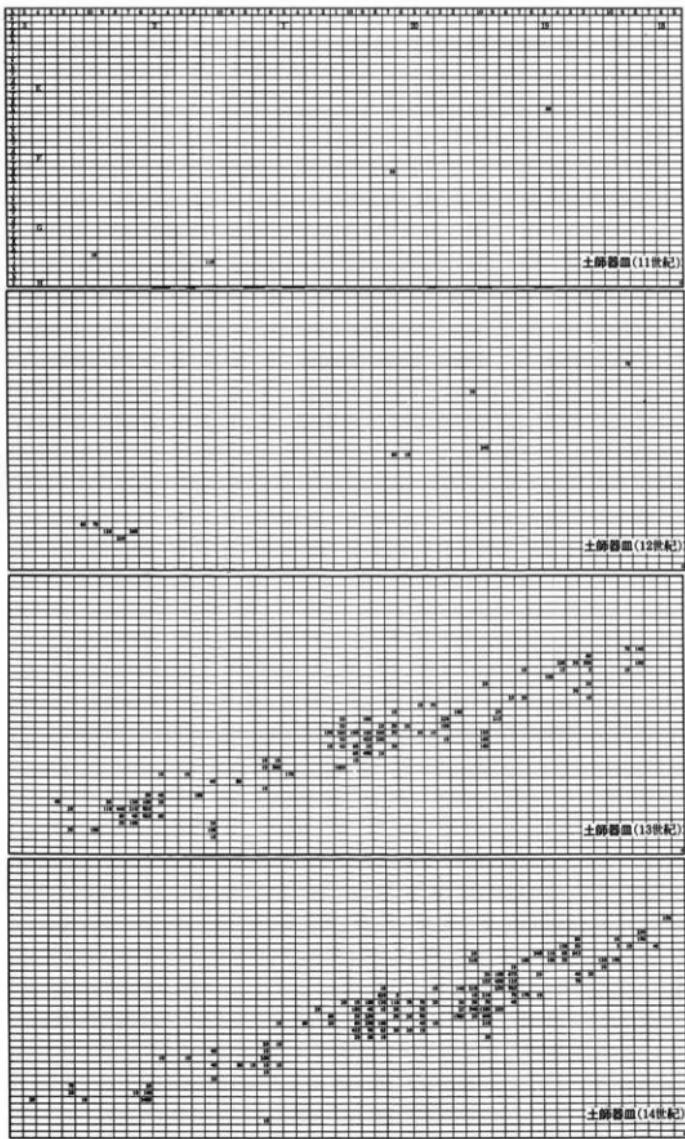
そこでここではじめに、基本的な遺物の不可避的移動距離を10m以下と仮定することによって、包含層も含めた遺物の時期別種類別分布図を作成することにした。しかしこの作業では出土遺物の状況は集合するドットのゾーンとして表現されるものの、連続する屋地の分離を必要とする今回の作業において、小規模な屋地の場合は、それらがより大型の屋地に含まれた出土状況を示すだけに終わってしまう可能性もある。

そこでこの問題を解決するために、さらにこの作業に追加する形で、時期毎に種類別資料の定量的整理も行うこととした。中世を通じて無作為的な遺物の移動があったとしても、かつてあった任意の屋地の中心地を推定させるかたちで遺物の量の傾向が示される可能性を考えたのである。

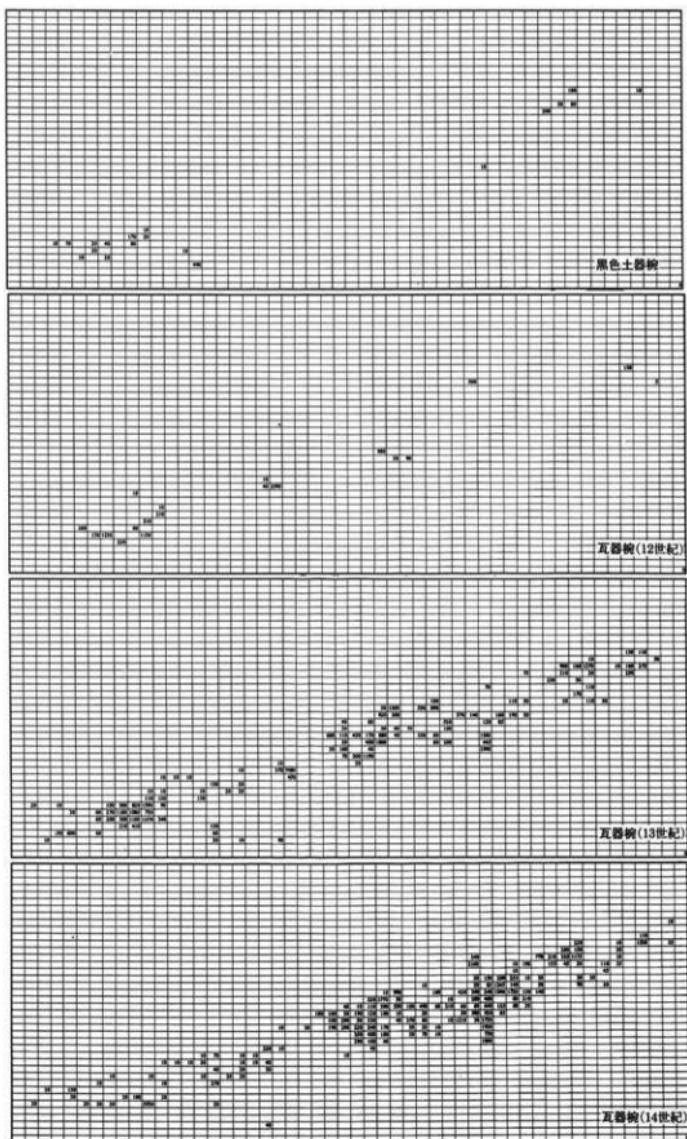
計測は、対象としている遺跡と遺物が、消滅・廃棄を前提としている消費遺跡出土の中・大型品であ



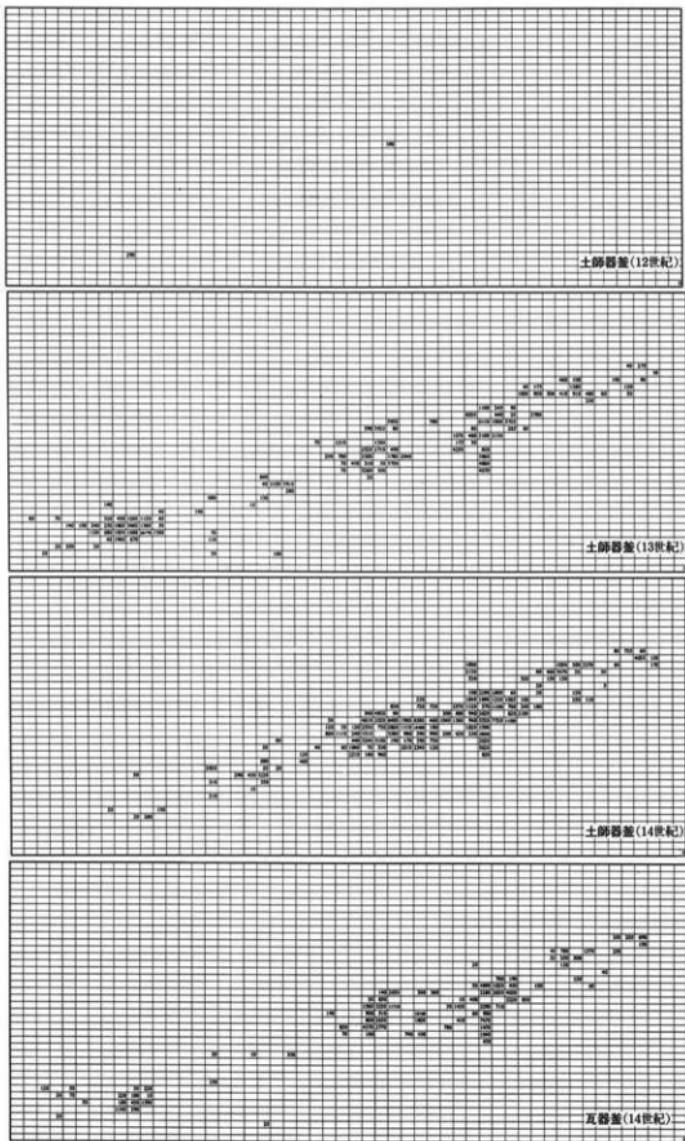
V-5-図1 重量集計用の10m方眼と調査区の位置



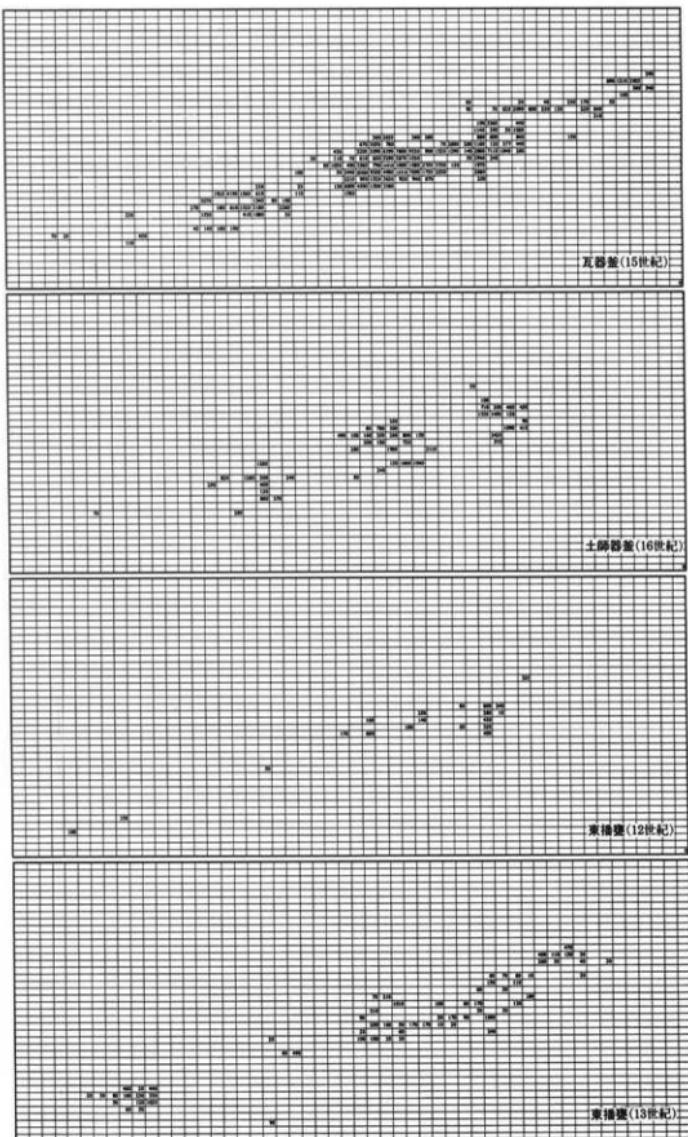
V-5-図2 10m方眼による遺物の重量集計(1)



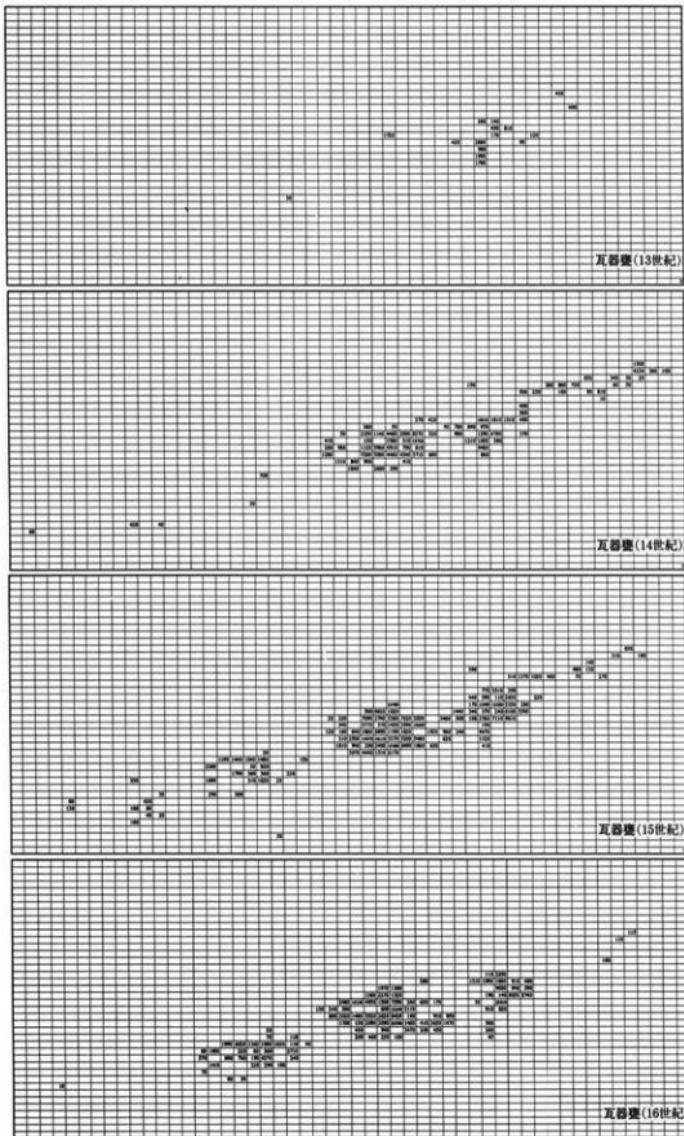
V-5-図3 10m方眼による遺物の重量集計(2)



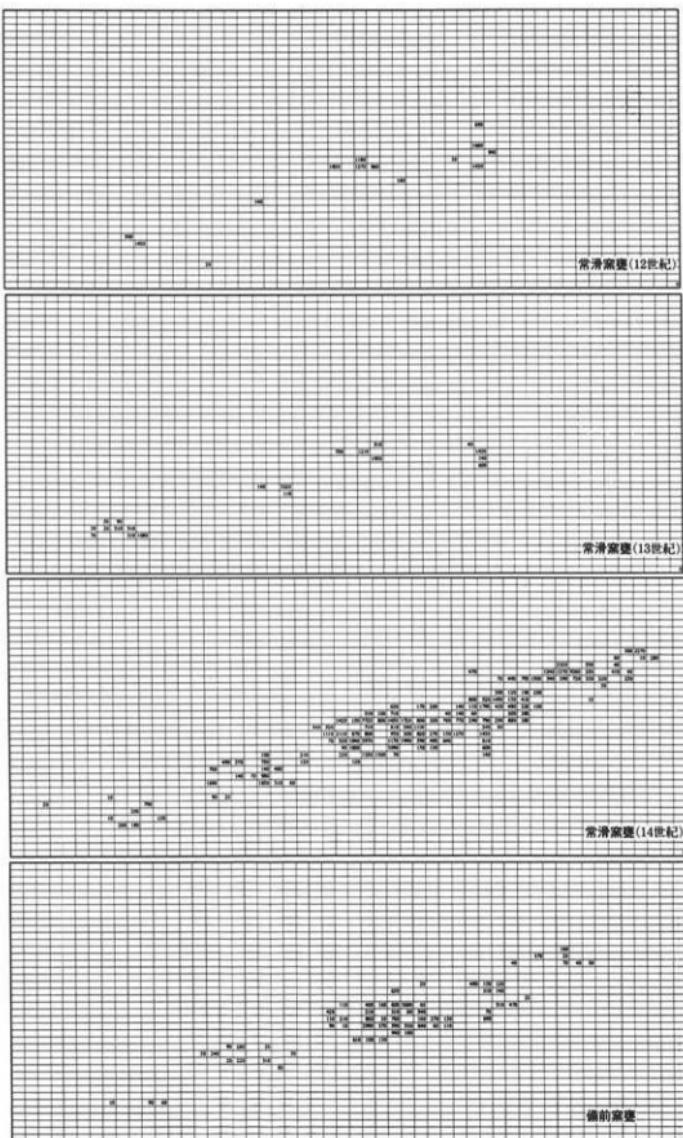
V-5-図4 10m方眼による遺物の重量集計(3)



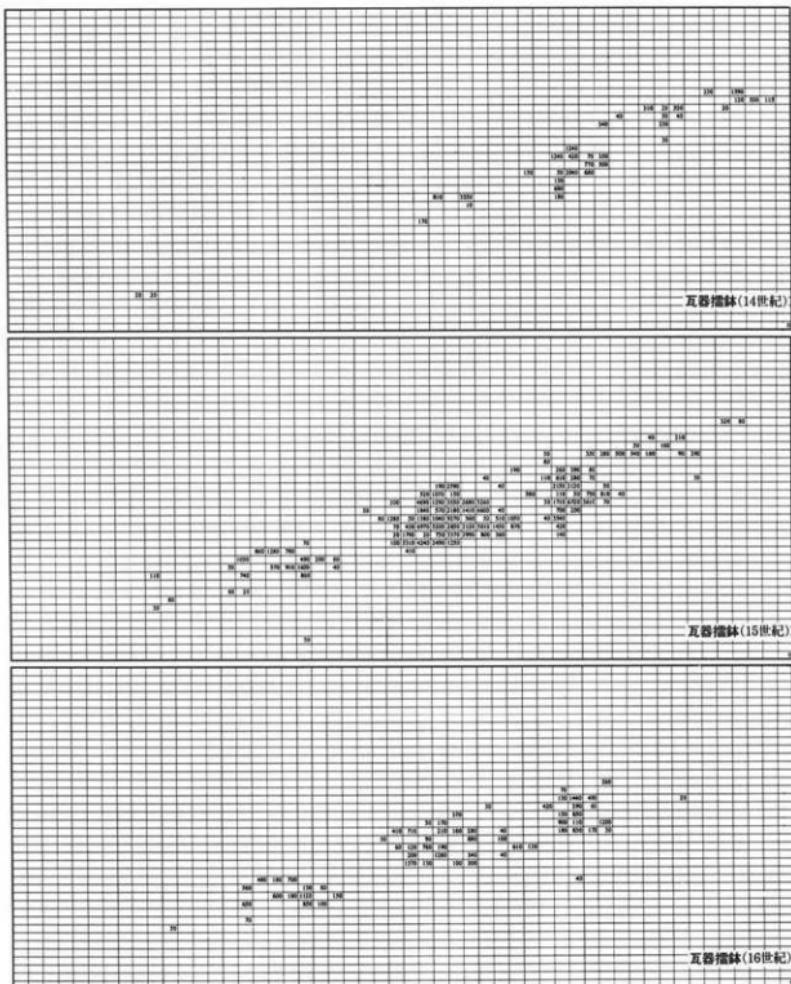
V-5-図5 10m方眼による遺物の重量集計(4)



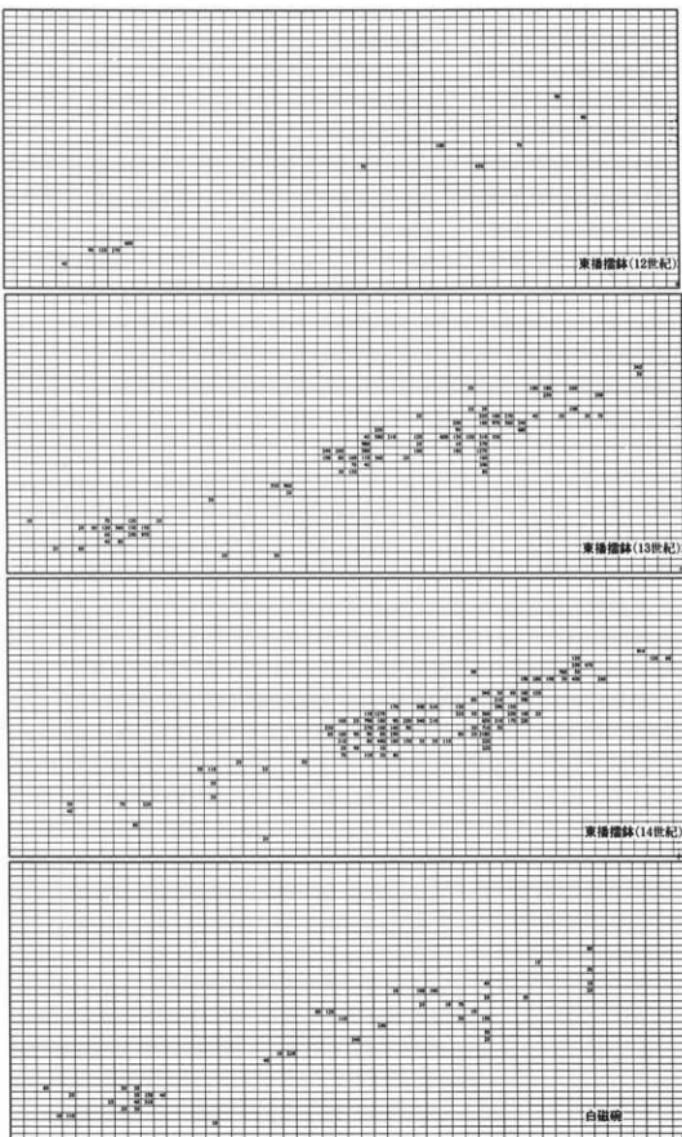
V-5-図6 10m方眼による遺物の重量集計(5)



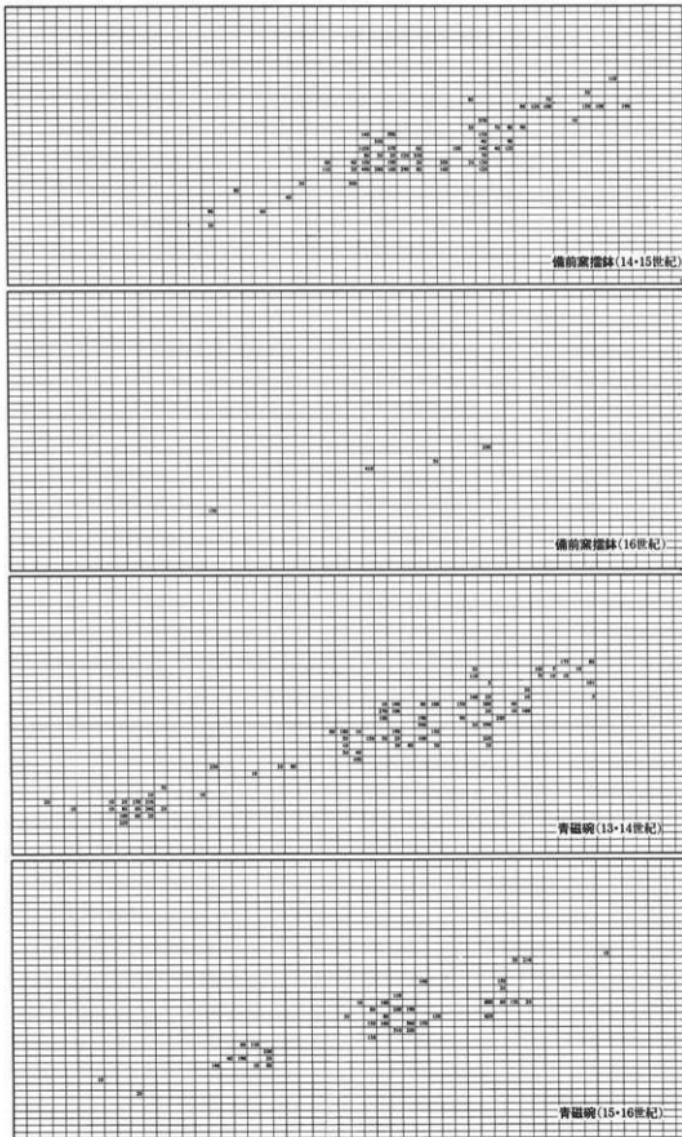
V-5-図7 10m方眼による遺物の重量集計(6)



V - 5 - 図 8 10m方眼による遺物の重量集計(7)



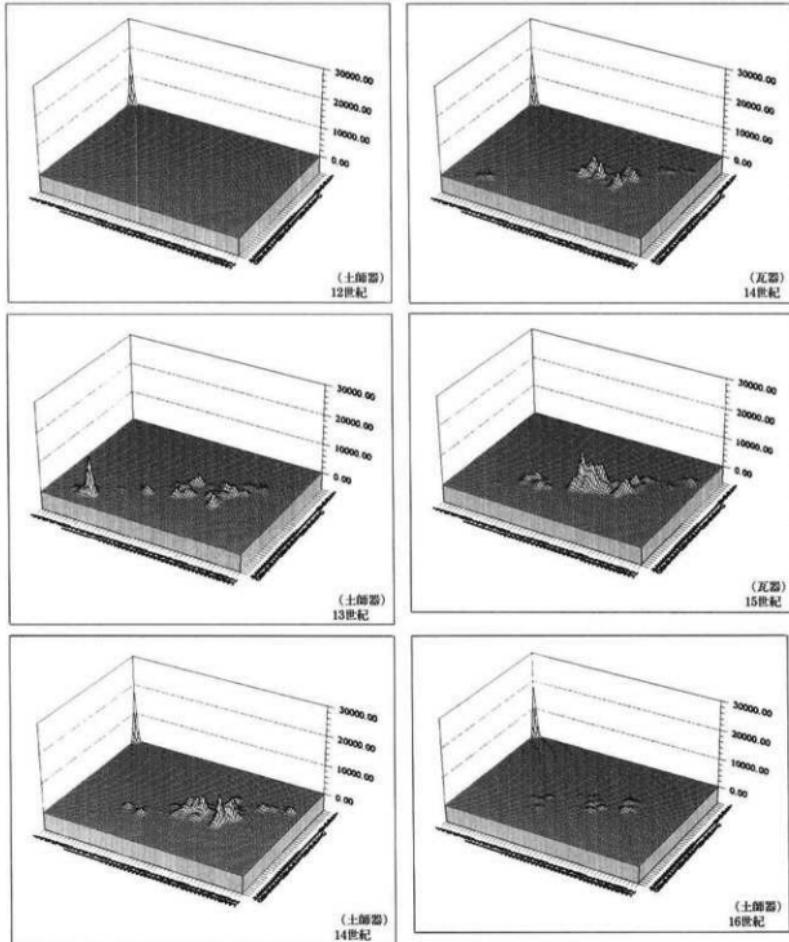
V-5-図9 10m方眼による遺物の重量集計(8)



V - 5 - 図10 10m方眼による遺物の重量集計(9)

るため、口縁部計測・破片数計測ではなく、重量集計を優先的なものとした。計測した資料はII調査区出土の全てにおよんでいるが、分析の対象は機能を一義とした以下の分類により、時期区分は11~16世紀の間でおおむね1世紀単位とした。分類は次の通りである。碗・皿（黒色土器、瓦器）、釜（土師器・瓦器）、甕（東播・瓦器・常滑・備前）、擂鉢（瓦器・東播系・備前窯）。

このうち生活具として最も鋭敏な指標となる釜を代表させることにより時期別重量の空間変移を図11に示した。集落の中心が12世紀におけるI地区の優位から13・14世紀においてD・E地区へ変わってい

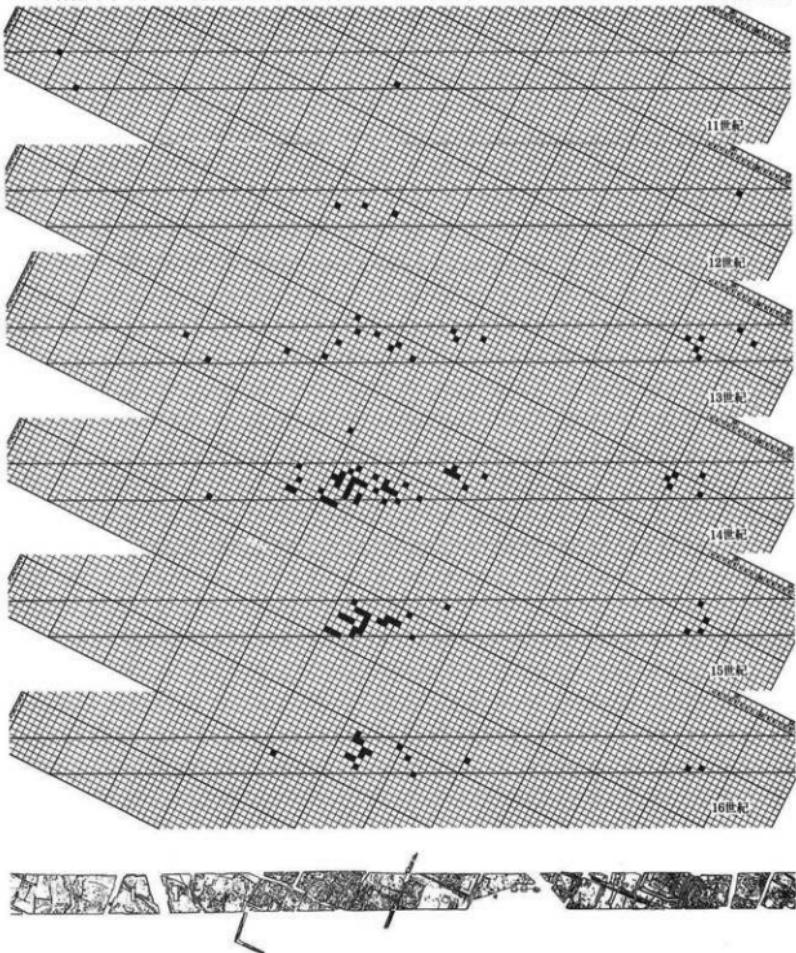


V-5-図11 土釜の重量にみる分布の変遷（右上隅がD地区、左下隅がJ地区）

くことがわかる。

次にこの資料から各時期における屋地の配置と規模を復原しなければならない。ここでは10m方眼の時期別種類別重量図からそれぞれのケースでピークとなるポイントとゾーンを抽出し、それらを時期毎に重ね合わせた時に整理される単位を調整した時、それがもっとも当時の屋地単位にふさわしいものであると推定した。

この作業のうち、12世紀以前と15世紀以降については残存する遺構との関連で比較的容易に復原でき



V-5-図12 井戸分布図

ることがわかった。問題は13世紀代の状況である。出土遺物のピークポイントは低レベルで比較的分散的であり、さらに遺構は後代の開発により不明である。このような分離の曖昧な状況を整理するもっとも初步的な方法は、これまで行ってきたような資料の普遍的かつ総括的な把握ではなく、たとえば各屋地にひとつずつしかないようなものを個別的にとりあげる方法である。ここではその一例として失われた遺構群のなかでも削平されにくい井戸に注目することとした（図12）。さらにそれらに対し、14世紀以降の遺物を含まないか、あるいはより新しい時期の遺物が共に取り上げられている場合でも、量・器種構成・時代差などからその中心が13世紀代と考えられる場合、といった条件を付与した。13・14世紀の屋地規模と範囲の復原は、これらの分布図と遺物重量のピークポイントの関係による推定である。

以上の作業により復原されたのが図13・14である。時期は11世紀・12世紀～13世紀前半・13世紀後半～14世紀前半・14世紀代・15世紀前半～中葉・15世紀後半～16世紀前半に区分される。

11・12世紀の景観は基本的に変わらない。原則的に条里を単位とする形で集落が点在する。規模は1町程度であろう。

13世紀はそれまでの集落規模が縮小する一方で、屋地の集合がみられる。規模はおおむね1/6町であり調査区内で12カ所推定される集落の内、7区画の集落が集合している。

14世紀はE地区の北に1町規模の溝で区画された屋敷地がおかれ、その南に1/6町規模の屋敷地がならび和泉と大和を結ぶ東西道路に面して1/20町規模および1/8町規模程度の屋地が配置される。なお1町規模の屋敷地は土塁をもっていた可能性がある。核となる屋敷地を中心としてまとまった村落の形を復原することができる。このうち中心の屋敷地に南面する部分で、1/6町規模の屋敷地に東面する部分は空閑地であるが、さらにその東側には更ヶ池という溜池のあったことが知られている。その築造時期について、今回の調査でも明らかにすることはできなかったが、空閑地の意味をここにおくことも可能ではないかと考える。

15世紀においても基本的にこの状況は変わらない。ただし前代に核とされていた1町規模の屋敷地は溝の西半部を埋めて規模を縮小し、一方H地区には同規模に近い新たな屋敷地ができる。中心屋敷地は縮小または分散する。

16世紀以降この状況が進展する形で中心的な屋敷地は失われ、遺物量分布の中心は近世より続く現在の村落の中心により近い位置へ移動していくのである。

第2節 14世紀におけるII調査区村落の存在形態

これまで整理してきたようにII調査区は条里単位でみられた集落配置が13世紀には部分的な集合化をみせ、14世紀に入るとその地区を中心として階層性の整った村落が形成されることになった。この村落はその領域線上に溜め池を配していた可能性があり、丹南地域における中世後期村落のひとつのモデルになるものといえるかもしれない。そこで、ここではその点をさらに明らかにするために14世紀に代表させて、この村落の状況を詳しく見ていくことにする。

方法は主に遺物の整理となるが、最初に前項で集計した10m方眼の時期別種類別重量を、推定する屋地区画単位に再集計し、屋地単位で個体数を算出する作業が必要となる（表1）。そしてその産地別器種別構成を整理することにより屋地毎の生活様相の違いを示し、この村落の社会的存在について接近してみたい。

1. 出土資料の個体数分析

前項までの重量データを個体数に換算するためには、各器種の個体重量が必要となってくる。ここでは、個体重量の導き方とそれによって得られた時期別種類別個体重量の一覧を呈示し、本稿における分析の方法を明確にする。

数量分析とは出土遺物を数量化し、これを分析することであるが、この数値化に伴う手段は総じて計量と呼ばれている。この計量には様々な方法があり、詳しい解説は宇野隆夫氏が行っている。これを参考に、以下に簡単な紹介を行ってみる。

従来から最も多く用いられてきた計量方法としては、破片数による計算方法がある。この計算方法の利点は、大量の資料操作を少ない労力でしかも短時間に見える点である。しかし、宇野氏も述べられているように、法量の大きなものや軟質なものは多数の破片に割れるため、個体を対象とする本来の意味での実数分析や比率分析には向かないことがある。

これに対して個体識別法や口縁部計測法は、個体を計量の基本としているため、個々の資料や環境に左右されることがなく、分析にとっては有効な手段といえよう。しかし、個体識別法では接合という莫大な労力を必要とする点において、大量の遺物に対してはやや不向きであると考えられる。また、口縁部計測法では口縁部以外の破片や識別困難なものは省略されてしまうという欠点をもっている。

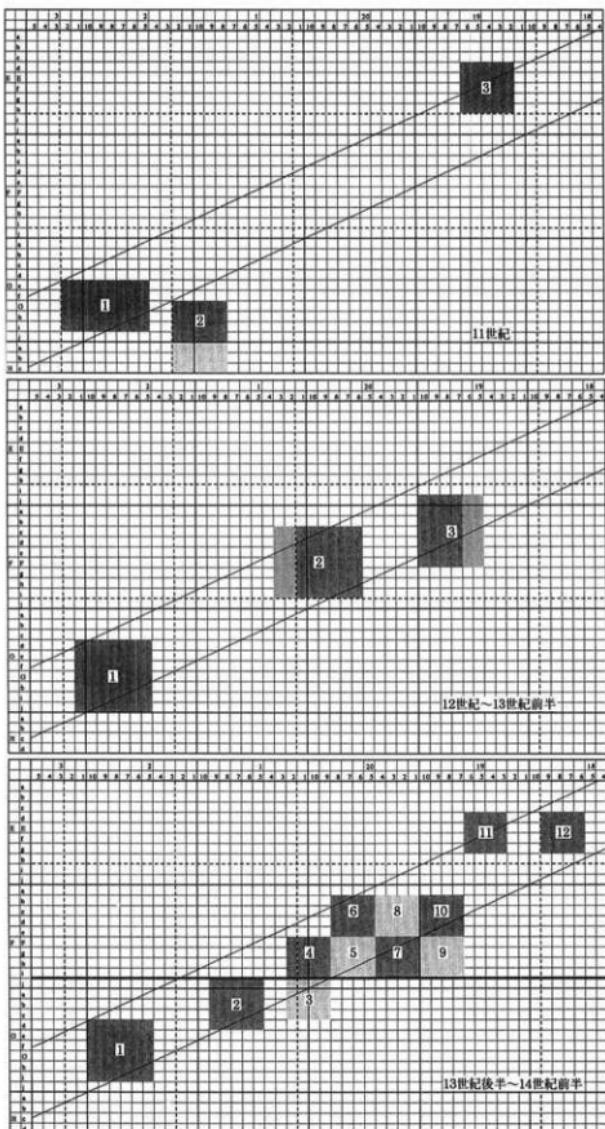
重量計測法はすべての資料を分類し、その重量を計る方法であり、効率よく数値化することが可能な点において優れている。個体数の復原に際しても、個体の平均重量から導くことが可能である。ただし、個々の資料の特徴が軽視されるおそれがあり、また個体数復原に必要な平均重量の収集が難しいという欠点がある。

これ以外にも瓦等でよく用いられる特定部分計算法などがある。いずれも一長一短があり、分析する側の目的に応じて使い分ける必要があるだろう。可能であるならば、報告する際も複数の計量方法によるデータの呈示を行えば、後世に再検討や資料操作が可能であり、より親切と思われる。

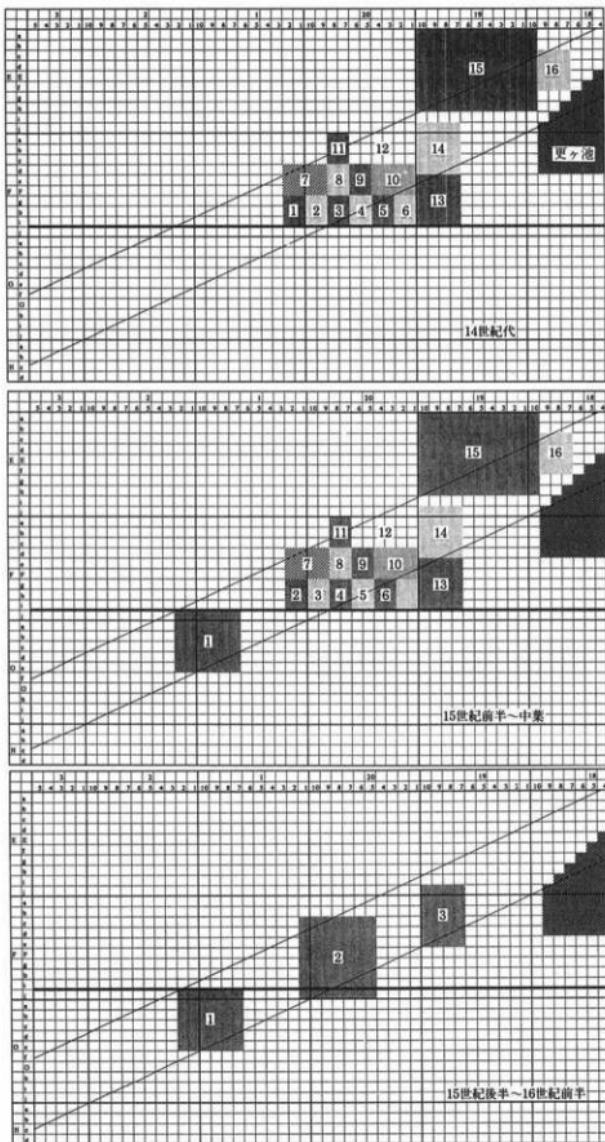
今回対象とする資料は膨大な量であることから、大量処理が可能な計量法が必要となってくる。一方、軟質なものから硬質なものが混在する中世資料であるため、破片数計算法はそのままデータとして使用すると大きな誤差を生じてしまう可能性が高い。これに対処する形として、宇野氏は破片数から個体数に換算する係数を算出された。これは過去の膨大なデータから、種類別器種別の破碎率を求め、1個体あたりの平均破片数を導き出したものである。しかし、遺物の破碎率はそのものの特質以外に、それが廃棄された時点以降の地形・地質や気候といった環境にも影響される。これは宇野氏も考慮されており、消費遺跡・消費遺跡包含層・生産遺跡の3つに区分して計算を行っている。本遺跡は上記のうちの消費遺跡に該当すると思われる。しかし、低湿地や洪積地では完形品の出土率が一般に高いと考えられ、今回の資料もこれに該当する可能性があるため、十分注意しなければならない。これに対して口縁部計測法は誤差を生じにくくと考えられるが、口縁部を伴わない特殊品の存在は無視される傾向がある。その点、重量計測法は環境に左右されることはなく、また資料を幅広く利用することが可能である。

このような経過と、全体的な流れの中での資料の把握と特殊品に注目するという目的から、今回の分析では重量計測法を採用することにした。ただし、本稿の目的は各屋地の器種組成であり、個体数に換算する作業を行わなくてはならない。

重量を個体数に換算するためには、個体別平均重量が必要となってくる。分類した遺物のすべてが完形品で手に入れば、それぞれの重量を計ることで容易に抽出することができる。しかし、そのような資



V-5-図13 II調査区の集落変遷(1)



V - 5 - 図14 II調査区の集落変遷(2)

V-5-表1 屋地(区画)別重量集計

12世纪

13世纪

卷之三

料はごく一部であり、接合作業によっても完形品となる可能性は少ない。これが実測図上の完形品となると資料は一挙に増加するが、これはそのままの状態では重量データとはなり得ないため、図面から重量の近似値を算出しなくてはならない。図面からは体積の計算が可能であり、これは比重によって重量への変換ができる。この方法によって身近に遺物がなくても、およその検討を行うことができる。

しかし、体積は重量と同様に、時間的な変化を伴うものであり、また種類・器種に異なる数値を示すものであり、その上に時期を含めた少なくとも3つの視点からみた変化の把握が必要となる。ここではまず上記の3点による体積変遷表を作成する。

体積の算出の方法であるが、参考となり得る土器に関する体積計算の研究はほとんどみられない。一方、これに対して土器の容積はその使用等の研究において、先学の貴重な成果が報告されている。これらの方法は土器容積の分析から遺跡の性格や社会性の復原を行うために、早い段階から研究が行われてきた。容積の算出は主に繩紋・弥生式土器の研究において発達し、それらは実測図を用いて個々の資料を立体として数値化を行っている。この方法は土器の体積を求める上において非常に参考すべき点が多い。とくに本稿の分析の対象とする中世の大型土器が完形品として入手にくいため、実測図に頼らざるを得ないという点において非常に有効である。基本的には体積も容積も球面を中心とする円柱・円錐体の数値化であり、容積の計算を応用することによって導き出すことが可能である。つまり土器の体積は外面の容積（外積）から容積を引いたものとして考える。

土器容積の研究については、藤井明夫氏の優れた研究がある。氏はこれまで行われてきた容積研究の紹介を行い、新たにコンピューターを用いたプログラムを製作されている。氏の論文を参考としながら、簡単に紹介を行ってみよう。

容積の計算方法の出発点は基本的にみな同じで、土器の口縁部に平行して等間隔に輪切りを行う。この輪切りによって得られた円柱・円錐台の体積を求め、これの総和を容積の近似値とした。この輪切りの設定において、諸氏に若干の差異があり、これが計算による容積の求め方の差となって表れている（図15）。都出比呂志氏は口縁端面から1cm間隔の円柱の総和を容積の近似値とした。藤村東男氏は口縁端面から1cm間隔の輪切りにおける上端と下端の平均値を求め、この平均値を半径とする円柱の総和とした。佐原真氏は土器底部から4mmまたは8mm間隔の輪切りの、となりあう上下測点を上下底とする円錐台の総和を容積とした。断面平均法は藤村氏の方法に近く、となりあう輪切り断面の面積の平均を求め、これを上底とする高さ1cmの円柱の総和とする。

藤井氏はそれぞれの方法によって半球形の体積を求めており、この中で真値に対して最も誤差の少ないものは断面平均法となっている。藤井氏が提唱された方法は擬似公式による計算を断面平均法で補っており、上記の方法よりも誤差が大幅に減少されている。擬似公式とは、数値積分に用いられるシンプソンの公式を体積計算にあてはめたもので、古墳等の計算に用いられるらしい。基本的には口縁端面から5mm間隔の輪切りを設定し、となりあう3つの測点を通る放物線に囲まれた面積から土器の容積の近似を求めていている。この方法は3つの点を利用するため、測点は奇数でなければならず、深さに余りが生じることもある。これを補う形として、残りの部分を2mm間隔の擬似公式、さらに余った部分は1mm間隔の断面平均法で計算している。

藤井氏の方法は確かに正確であり、コンピューターを利用して簡単に計算できることは非常に優れている。当初はこれを利用してみたが、大量の資料を計算する上で入力したデータの保存・訂正ができないことはやや不便であった。

今回の分析で用いた方法は、藤村氏のものに近く、土器を水平に5mm間隔で輪切りにし、測点の上下半径の平均を円柱の半径として体積を求め、内面の総和を容積、外面の総和を外積とする。この容積と外積の差を土器の体積とする（図15）。

羽釜や甕、椀の高台等の複雑な形状に対応するため、輪切りの間隔は5mmを基本としながら可変的なものとし、突出部はリング状の別個体として加算する。これによって誤差の割合は体積の真値の1%以下となり、十分に使用に耐え得ると考え、採用することにした。

時期毎の各遺物体積の計算方法としては、まず各器種の編年作業を行い、各時期において残存の良好な、あるいは代表的形態をもつ遺物を数点ピックアップし、上記に基づいて主に実測図上で計測したものである。総計90点ほどである。計測した遺物は各時期毎に平均値を算出し、これをその時期の指標的な体積としたものである。

土師器・瓦器皿については完形品資料の入手が比較的可能であり、あえて体積の計算は行わずに重量を直接計量している。

瓦器椀は11~14世紀までを対象としており、11世紀と14世紀は型式的に前後に振り分けることが可能であるが、12世紀と13世紀の区分が困難であった。そこで、まず当該期の資料を全て計測し、従来の編年基準に加えて、体積・重量・口径・器高・口径／器高指數などの属性を用いて分析し、4段階に区分することにした。暗文や調整などの属性は無視してしまったが、形態から検証した結果、ほぼ適正に分類された。

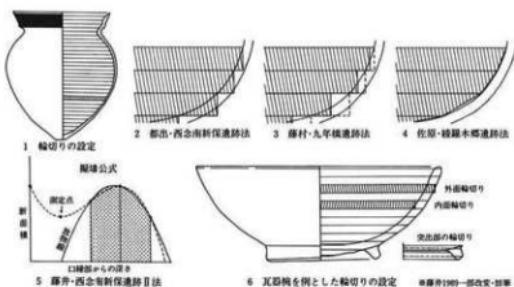
土師器・瓦器・陶磁器類の羽釜や甕などの大型品は完形で出土することは非常に稀であり、実測図上でも完形に復元されるものが少ない。この様な点から、各種の遺物の口径データを集積し、各時期の口径ヒストограмからそれを代表する口径を導き、完形品の相似形として計算したものである。その結果、羽釜については13世紀が鉢下径30cm、以下同様に14世紀は土師器30cm・瓦器26cm、15世紀は30cm、16世紀は26cmとなる。また甕は全時期を通して口径の平均を32cmとして計算した。

本遺跡出土の11~16世紀の主な遺物の体積は表2のようになる。このように計算した体積も、このままで定量分析の資料として利用することはできない。本項の目的とする重量編年表を作成するためには、各種の比重データが必要となってくる。

比重については、その計測上、資料が完形品である必要はなく、重量とそのものの体積が求められれば、計算によって導き出すことが可能である。各資料の比重算出の方法は、資料を水中に埋没させ、あ

らかじめ計っておいた重量をその増加量（体積）で割るものである。ただし、土器は水を浸透するものであり、これによる誤差を減少させるため、あらかじめ水に浸しておいてから行った。さらに計測は1つの資料に対して3回繰り返した。完形品に関しては前述の方法に基づく体積も対象としている。

このような比重についても時期・種類・器種毎の差異が存在すると



V-5-1 図15 土器の容積・体積の計測方法模式図

考えられ、各種の遺物について計測を行った。しかし、残念ながら資料点数の少なさや時間的制約のため、このうちの時間的な変化については無視することにする。ここでの目的は各時期の重量算出であり、体積においてその変化を捉えておけば、比重の変化はさほど必要ではなく、ここでは種類についてのみの差異に重点を置くこととする。

本遺跡出土の遺物のうち、比重の異なるグループは、表3のとおりである。

データとして有効に利用する上で資料を大別すると、低火度焼成の土器、還元工程の入る須恵器をはじめとする陶器類、完全に融解が行われる磁器の3種に分類された。それぞれの比重は土器が 1.826 g/cm^3 、陶器が 2.106 g/cm^3 、磁器が 2.309 g/cm^3 となる。参考として対象とした資料のうち数点をピックアップし、第四紀地質研究所の井上巖氏に分析していただいたところ、上記の結果とほぼ合致するものとなった（表4）。

これらの比重を基に前述の体積一覧を個体重量に換算した結果、表5となる。

以上、体積と比重から得られた時期別器種別重量により、屋地毎の個体数を算出したものが表1である。出土遺物の総重量では比較することが難しかった器種構成が、これによって個体として同一レベルにおける検討が可能となった。

2. 出土資料の内容構成

前項の整理により、屋地毎の家財道具の内容と数が最少の個体数に近い形で示されたことになる。ここでは、その成果を屋地毎にみていくことによって、規模の差、村落内での配置などの違いとあわせた屋地それぞれの性格にアプローチしてみたい。推定される屋地は、規模においてAグループ:600m²（区画1~6・8・9・11）、Bグループ:1,200m²（区画7・10・12・16）、Cグループ:2,000m²（区画13・14）、Dグループ:12,000m²（区画15）に分けられる。なお、推定される屋地各々の敷地全てが調査されたと考えられるのは区画1~3・8~10・14の屋地である。一方ここで示している数値は、屋地の範囲と無関係にトレンチ調査された生の集計値である。したがって屋地相互を全体として比較する際には、未調査部分の残っている屋地については、それが全敷地の何割にあるかを考慮し、数値の補正をする必要がある。ただしその方法については、発掘された個所が屋地内のどのよう機能を付与された部分であったか判断し、それに見合った補正作業を考えなければならない。しかしながら現状においてはそれらの作業が十分に行われる条件を整えるにいたっていない。したがってここでは全屋地面積と調査面積の比による単純補正を加味しながら、村落全体での屋地相互の

V-5-表2 出土土器の時期別体積一覧

器種(名)	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
土器	197,227					
陶器		19,715	19,315	19,430	19,962	16,900
磁器		1574,748	1565,110	1565,110		
石器	148,657	105,354	71,595	45,014		
瓦			21,900	25,466		
漆器				1416,480	1542,310	1321,770
織物				1329,920	1329,920	1296,410
貝殻			3507,980	6917,780	8657,070	6216,350
鐵器			552,360	827,646		
金銀		3507,980	3507,980			
陶器				6957,520		
青銅			186,660			
白磁		149,685				

V-5-表3 種類別比重（計測分）

土器	土器	1.903
陶器	瓦器	1.797
陶器	須恵器	1.745
磁器		2.309

V-5-表4 種類別比重
(第四紀・井上)

器種	比重	体積	比重	器種
常滑窯	55.10	26.16	2.11	2.110
高麗窯	24.49	12.93	2.06	土器
五島諸島	23.49	11.87	1.58	1.945
高麗窯	22.89	12.39	1.85	
五島諸島	22.66	11.99	1.89	

V-5-表5 出土土器の時期別個体重量一覧

重量(g)	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
土器	287,0965					
陶器		36,0000	36,0000	35,4800	36,4500	30,8000
磁器		2857,6800	2857,6800	2857,6800		
石器	271,4477	192,3764	130,7328	82,1950		
瓦			40,0000	45,5000		
漆器				2586,4925	2816,2941	2413,5520
織物				2428,4339	2428,4339	2356,2887
貝殻			6560,91	12531,8624	11911,470	11251,655
鐵器			1194,1136	1743,0225		
金銀		7577,3450	7577,3450			
陶器				12751,137		
青銅			430,9979			
白磁		345,6227				

状況により、適宜補正を加えて考えていくことにする。なお、屋地の全面積に対する調査面積の比が著しく低いこと、屋地の領域が未確定な要素を残すことなどにより、区画6・10・12の数値については信頼度の低いものとなっている。

さて、Aグループの屋地をみると、土師器皿は1~20までばらつきがみられるが、区画3・8・9の平均は9程度であり、区画1・2の平均も同様な数値を示す。ここではむしろ区画4・5の値の低さと区画11の値の高さに注目しておきたい。瓦器椀は区画8・9が13程度、区画1~5は2を除き6に満たない。総じて道路に面する屋地の方が値が少なく、しかし基本的には皿と椀は1:1に近い比率で持ち合わせている様子がうかがわれる。土釜は区画8・9が11、区画1~5は5程度、東播鉢と甕はおよそ均一で各1程度であるが、甕についてはやはり道沿いの区画が数値の低い状況をみせている。

Bグループの状況は、土師器皿が約20で瓦器椀が約19を示し、比率は1:1に近い。土釜は5程度、播鉢と甕は各1~2を示す。Cグループは土師器皿が100以上、瓦器椀がおおむね90以上で約1:1、土釜が26以上、播鉢が7以上、甕は3を示す。Dグループは土師器皿が66、瓦器椀が74、土釜が7、播鉢が3、甕が3となっているが、調査面積が推定屋敷地の約1/4と考えられるため、単純補正值はそれぞれ300・280・24・12・12となる。

さてこれを基に各グループの面積比との関連をみると、土器椀と皿は最少個体数が10:20:100:300を示している。屋地の面積比は1:2:3:20であるため、A:B:Dの関係はおおむね一致しているものの、Cグループの出土量の著しく多いことがわかる。土釜の最少個体数は5(11):5:26:24であり、面積比と無関係な状況である。播鉢と甕はA・Bグループが1~2であるのに対して、Cグループは7と3以上、Dグループは12程度と推定される。やはり面積比と無関係でなおかつ、A・Bグループに対するC・Dグループといった構造がみえ、あわせてその比は約1:5になっていることがわかる。漆器・陶磁器類の存在に対して、土製の椀・皿が実用品であったかどうかについての疑問が投げかけられている中で、少なくとも播鉢と甕についてはこの時期まだそれが土製品を代替品とする構造にはいたっていない。したがって最低限の生活に必要な家財道具の数量は、播鉢・甕の状況の中に近く示されているものと考えられる。なお、土製煮炊具であるが、鉄製品の存在が当然考慮される環境においてA・BグループとC・Dグループの比は実際の状況を示していると推定される播鉢・甕の比率同様に、おおむね1:5となっている。したがってこの器種についても、鉄製品の存在を考慮してなお、実用の家財道具であった状況が看取される。

さて、Aグループを基準とした場合、面積が2倍規模のBグループは、土製の椀・皿も面積比率同様2倍の消費を示す。しかし生活人數はAグループと同規模である。一方、Cグループは面積がAグループの約3倍であるのに対して、生活人口は5倍、土製椀・皿の消費は10倍にのぼる。A・Bグループに対して面積当りの生活人口比は高く、土製椀・皿の消費も2倍である。またDグループはCグループに対し6倍以上の面積を有しているにもかかわらず生活人口が同規模であるため、その差はAグループの単位人口当りの面積に対して4倍の広さをもつてることになる。また土製椀・皿の消費も、Aグループの単位人口当りの値に対して6倍の数値となっている。余剰空間と余剰生活材に関してAグループとDグループは少なくとも4倍以上の差がみされることになる。

一方、重量個体数分析に反映されない資料については、器種別の出土分布図から検討を加える。このうちこの時期に關係する資料は山茶碗・常滑窯系播鉢・石鍋と石臼・土師器京都型皿の一部・瓦器从具類・瓦器火鉢の一部である。これらの資料から特に偏りの分布と区画との関係をみれば、山茶碗は区画

14・15のC・Dグループ、常滑窯系擂鉢はC・Dグループと区画7以降の東西道路に面さない区画群、土師器京都型皿はDグループでもみられるものの、分布の中心は区画7と2・8にある。瓦器火鉢についても同様な状況がみられ、仏具についてもC・Dグループ以外に区画8での出土をみることができる。

以上、出土資料の最少個体数と分布の偏在傾向から、屋地と推定される区画毎の特徴を整理してきた。個体数分析によって、從来行われてきていた建物の規模と組み合わせ以外に、居住者の区分が、Aグループを基準とした余剰空間と余剰生活材の数値によって表現できたものと考える。例えばC・Dグループは屋地の規模では6倍以上の差があるが、保有している家財道具の傾向は、類似した状況であった。またA・Bグループは、当初みられた土師器皿個体数の不統一性が、区画7を中心とした2・8のグループとそれ以外といった区分に説明され、さらに東西道路に面する群と面しない群でも区分できることが推測された。そして数量処理以外の遺物の分布により、C・Dグループでは東海系などの特定流通品が、区画7を中心とするグループでは仏具・瓦器火鉢の分布に特徴を示している可能性が指摘できるものとなつた。

これらの状況により、この村落は、東西道路に面した群を最小の単位、その4～6倍以上の家財を隔差にもつ区画15を最大の単位として、規模は異なるものの存在形態としては区画15に近似した立場の区画13・14と、中間層としての、東西道路に面さない一群、および火鉢などに特徴を有する区画7を核とした群の5群に分類できるものと考える。

なお、本稿は第2節の1を亀井聰が執筆し、それ以外を鈴柄が執筆した。

参考文献

- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
藤井明夫 1989 「実測図を用いた土器容積の計算方法について」『金沢市西念・南新保遺跡II』金沢市教育委員会
都出比呂志 1982 「畿内第V様式における土器の変革」『考古学論考』平凡社
藤村東男 1981 「土器容量の測定—晩期縄文式土器を例として—」『考古学研究』第28巻3号
佐原真 1976 『弥生土器』至文堂

V-5-表6 比重計測用資料一覧表

No	面種	道林名	出土遺構	時期	口径	器高	重量	体積	容積	比重	推定重量	文献	図面番号
1	瓦器類	日置在道林		11	15.6	6.10	122.68	558.59	224.01	1			
2	黑色土器類	日置在道林		11	15.6	6.30	141.24	545.13	257.90	1			
3	瓦器類	日置在道林		11	15.9	6.75	174.53	567.85	318.88	1			
4	瓦器類	觀音寺道跡	B地区土坑4	13	15.1	5.00	67.14	423.55	122.59	2	B土坑4-2		
5	瓦器類	觀音寺道跡	B地区井戸1	12	14.5	5.15	99.33	410.27	181.38	2	B井戸1-4		
6	瓦器類	觀音寺道跡	B地区井戸2	12	14.8	5.30	70.73	409.25	129.15	2	B井戸1-7		
7	瓦器類	觀音寺道跡	B地区井戸3	12	14.5	3.90	68.10	273.11	124.35	2	B井戸3-2		
8	瓦器類	觀音寺道跡	B地区土坑4	13	14.7	4.70	77.74	375.54	141.95	2	B土坑4-3		
9	瓦器類	觀音寺道跡	E地区井戸1	12	15.9	5.55	99.72	518.97	182.89	2	E井戸1-1		
10	瓦器類	觀音寺道跡	E地区井戸2	12	15.4	5.20	100.82	464.25	184.40	2	E井戸1-2		
11	瓦器類	觀音寺道跡	B地区土坑4	12	15.4	4.85	79.32	449.94	144.83	2	B土坑4-4		
12	瓦器類	觀音寺道跡	B地区井戸2	12	14.9	4.50	85.39	374.81	155.92	2	B井戸2-11		
13	瓦器類	觀音寺道跡	B地区井戸2	13	15.8	4.35	82.05	394.59	140.82	2	B井戸2-12		
14	瓦器類	觀音寺道跡	D地区井戸3	13	13.7	3.35	67.82	224.40	123.84	2	D井戸3-4		
15	瓦器類	觀音寺道跡	D地区井戸2	13	14.6	3.90	63.89	332.21	116.46	2	D井戸2-2		
16	瓦器類	觀音寺道跡	E地区井戸2	13	13.4	3.55	48.02	234.64	87.09	2	E井戸2-1		
17	瓦器類	觀音寺道跡	E地区井戸12	12	14.3	5.45	78.54	428.74	143.41	2	E井戸12-1		
18	瓦器類	觀音寺道跡	B地区井戸1	12	15.0	4.70	60.72	427.17	119.39	2	B井戸1-1		
19	瓦器類	觀音寺道跡	B地区井戸2	12	15.2	4.20	89.45	459.85	164.40	2	B井戸1-6		
20	瓦器類	觀音寺道跡	B地区土坑35	14	11.3	2.75	39.95	127.12	72.91	2	B土坑35-4		
21	瓦器類	觀音寺道跡	E地区土坑35	14	11.4	3.00	43.06	131.82	78.62	2	E土坑35-5		
22	瓦器類	觀音寺道跡	E地区土坑35	14	11.2	3.10	46.23	129.25	84.42	2	E土坑35-1		
23	瓦器類	觀音寺道跡	E地区土坑35	14	11.3	3.20	44.78	143.87	81.76	2	E土坑35-3		
24	瓦器類	觀音寺道跡	D地区井戸6	14	11.5	2.75	44.10	121.62	80.53	2	D井戸6		
25	瓦器類	觀音寺道跡	E地区土坑14	14	11.3	3.20	51.99	139.84	94.92	2	E土坑14-2		
26	黒色土器類	日置在道跡	土坑E-186	11	15.6	6.90	314.0	173.21	564.34	1	E127	516.29	
27	黒色土器類	日置在道跡	土坑E-186	11	15.6	6.90	314.0	173.21	564.34	1	E-184	516.29	
28	瓦器類	日置在道跡	土坑E-442	12	14.4	4.50	147.05	547.50	188.81	2	E-181-10	547.50	
29	瓦器類	日置在道跡	U+T-1755	12	16.0	6.20	208.0	104.29	573.37	1	E-181-4	196.44	
30	瓦器類	日置在道跡	窓口-T	12	16.2	6.20	136.38	600.61	248.88	1	E-181-10	136.38	
31	瓦器類	日置在道跡	E+T-1-3	13	14.8	5.30	104.61	417.26	191.01	1	E-184-12		
32	瓦器類	日置在道跡	E+T-185-15	12	14.8	5.50	179.0	102.48	490.38	1	E-184-12	187.13	
33	瓦器類	日置在道跡	E+T-1-2,7	13	15.4	5.30	96.41	501.46	176.05	1	E-184-11		
34	瓦器類	日置在道跡	E+T-1-86	13	15.2	5.10	104.86	427.87	174.54	1	E-184-10	191.48	
35	瓦器類	日置在道跡	E+T-1-1	13	15.2	4.00	135.0	76.36	371.77	1	E-184-10	140.20	
36	瓦器類	日置在道跡	E土坑1-6	13	15.0	3.30	89.46	380.25	163.25	1	E-184-12	181.25	
37	瓦器類	日置在道跡	E土坑1-153	13	14.6	4.20	82.15	332.82	150.01	1	E-184-8	182.28	
38	瓦器類	日置在道跡	E井戸1-59	13	14.9	4.10	112.6	67.20	327.48	1	E-184-6	122.71	
39	瓦器類	日置在道跡	E土坑1-153	13	15.0	4.30	138.0	89.93	375.61	1	E-184-15	164.21	
40	瓦器類	日置在道跡	E井戸1-52	13	14.3	4.00	136.0	87.33	266.98	1	E-184-4	153.73	
41	瓦器類	日置在道跡	井戸F-52	13	14.5	3.80	189.0	81.85	274.10	1	E-94-5	1.5983	
42	瓦器類	日置在道跡	井戸F-159	13	14.5	3.90	90.50	45.32	281.10	2	E-94-5	2.3035	
43	瓦器類	日置在道跡	井戸F-159	13	14.5	3.60	90.50	48.00	211.00	2	E-94-5	2.3035	
44	瓦器類	日置在道跡	井戸F-159	13	14.5	3.60	111.0	65.39	292.30	1	E-94-13	2.3035	
45	瓦器類	日置在道跡	井戸F-159	13	13.7	3.70	180.5	53.42	253.79	1	E-94-5	1.3282	
46	瓦器類	日置在道跡	井戸F-159	13	13.7	3.70	180.5	56.35	238.59	1	E-94-8	1.3278	
47	瓦器類	日置在道跡	井戸F-159	13	14.3	4.00	111.0	53.75	280.85	1	E-94-15	2.3651	
48	瓦器類	日置在道跡	井戸F-159	13	14.5	3.70	107.4	67.47	269.92	1	E-94-14	1.5917	
49	土師器類	日置在道跡	土坑E-762	13	13.8	4.20	73.98	290.32	135.09	1	E-182-9		
50	土師器類	日置在道跡	土坑E-152	12	14.8	5.50	75.32	329.84	1386.52	1	E-131-8		
51	土師器類	長瀬在道	井戸	12	29.0	25.60	1709.98	15400.70	3220.34	3	E-145		
52	土師器類	日置在道跡	井戸F-14	13	28.6	23.60	1851.60	15879.2	3563.82	4	E-93-22		
53	瓦器類	三日市道跡	14	30.7	16.80	1932.28	8887.58	3528.34	5	E-93-27-133			
54	瓦器類	三日市道跡	14	22.6	19.10	1704.12	7158.87	3111.72	5	E-93-29-142			
55	瓦器類	三日市道跡	14	22.4	17.40	1363.37	5865.35	2489.51	5	E-93-29-141			
56	瓦器類	箕輪路道跡	15	24.8	20.40	1388.81	8418.36	2535.97	6	E-25055			
57	瓦器類	箕輪路道跡	15	19.1	13.60	818.09	3288.24	1493.33	6	E-24745			
58	瓦器類	三日市道跡	15	24.1	20.20	1677.70	7494.91	3062.24	5	E-25135			
59	瓦器類	三日市道跡	15	24.1	20.20	1677.70	7494.91	3062.24	5	E-25135			
60	土師器類	日置在道跡	土坑E-154	13	28.0	15.50	1521.35	171.77	1142.57	1	E-114-13	1142.57	
61	常滑窯	上島市中之島出土地	14	24.0	43.40	6057.51	28318.60	12757.12	7	E-1061			
62	東播磨群	魚住古窯跡群	13	25.6	40.60	3365.31	28063.50	7087.34	8	E-1061-188			
63	東播磨群	魚住古窯跡群	12	22.6	43.00	3836.64	33507.00	8067.33	8	E-1061-189			
64	瓦器類	觀音寺窟	14	32.2	37.10	6917.78	37721.90	12621.87	9	E-93-31-3			
65	瓦器類	那賀郡那賀市	16	35.2	46.20	6216.35	44667.10	11351.96	10	E-1072			
66	土師器類	日置在道跡	土坑E-171	13	29.1	17.00	1512.70	5773.44	2761.57	1	E-182-11		
67	瓦器類	日置在道跡	窓口-197	13	25.0	16.00	1507.80	5692.70	2323.00	1	E-182-11		
68	瓦器類	日置在道跡	窓口-E-55,554	16	26.6	13.50	1048.18	4312.11	1913.98	1	E-58-11		
69	土師器類	日置在道跡	E+T-5323	15	28.4	14.50	1106.97	4193.99	2021.33	1	E-74-5		
70	瓦器類	日置在道跡	土坑F-95	15	31.0	15.80	1552.86	5327.77	2825.52	1	E-114-12		
71	東播磨群	魚住古窯跡群	13	30.0	10.00	523.16	3114.86	1101.78	11	E-3101			
72	東播磨群	魚住古窯跡群	13	25.9	10.45	466.99	2601.88	983.49	11	E-3102			
73	東播磨群	魚住古窯跡群	13	28.2	10.80	533.48	3303.18	1123.50	11	E-3103			
74	東播磨群	魚住古窯跡群	13	29.1	11.00	522.25	3271.54	1099.87	11	E-3108			
75	東播磨群	魚住古窯跡群	13	29.0	10.80	523.14	3141.47	1323.11	11	E-3109			
76	東播磨群	魚住古窯跡群	13	24.6	13.00	1285.80	664.64	981.56	11	E-3110			
77	青磁瓶	日置在道跡	土坑E-46	14	34.6	13.00	2.8167	407.60	1.95-8				
78	青磁瓶	日置在道跡	土坑E-8-1	13	15.9	6.70	425.0	185.10	2.2996	472.40	1	E-95-15	
79	青磁瓶	日置在道跡	土坑E-8-1	13	15.7	7.30	430.0	188.31	2.2835	434.80	1	E-95-7	
80	白磁瓶	大宰府跡	12	15.0	6.10	149.59	466.61	345.62	12	E-202-8			

V-5-表6 文獻

1. 本報告書
2. 鐘柄俊夫 1986 「中世土器・陶磁器の生産と流通」昭和61年度大阪文化財センター文化財講座
『交通・交易・交流』第7回資料 勅大阪文化財センター
3. 勅大阪文化財センター 1978 『長原』
4. 勅大阪文化財センター 1988 『日置莊遺跡(その2)』
5. 三日市遺跡調査会 1986 『三日市遺跡調査概報』
6. 勅大阪府埋蔵文化財協会 1987 『箕土路遺跡』
7. 鐘柄俊夫 1986 「中世信濃における陶磁器の产地構成と流通」『信濃』38-4
8. 兵庫県文化協会 1983 『魚住古窯跡群』
9. 大谷女子大学資料館 1981 『龍泉寺窯』
10. 神市教育委員会 1990 『神市文化財調査報告』第34集
11. 平安博物館 1985 『魚住古窯跡群発掘調査報告書』
12. 横田賢二郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」
『九州歴史資料館研究論集』4

第6章 日置荘遺跡の遺構変遷

鈴柄 俊夫

第1節 はじめに

前章までに整理してきたように、奈良時代以降の日置荘遺跡の特質は、III調査区の奈良時代集落を一つの起源として代表される集落の変遷である。その連續性は遺物の出土分布から知られ、その具体像はII調査区をフィールドとした出土遺物の定量分析を前提とした集落の配置と規模の復原モデルによって明らかにすることができたものと考える。

そこで、このモデルを発展応用させる形で奈良～平安時代が中心とされるIII調査区、B地区の屋敷に代表されるI調査区の状況を再検討し、あわせて日置荘遺跡総体としての村落の構造と変遷の一端に触れてみたい。

第2節 I・III調査区

1. I調査区（図1）

12世紀以降16世紀までの変遷を復原することができた。12世紀代としては遺構は不明であるが、調査区を通じて点在的に遺物がみられている。具体的な遺物としては白磁碗・四耳壺、常滑窯壺、瓦器碗などである。

13世紀は調査区の西端を中心にし、それ以外の場所ではおおむね12世紀の遺物分布を踏襲する形で遺物の分布が認められる。また從来屋敷地内の遺構と考えられていたB地区のピット群と内郭の溝であるが、この屋敷地を囲む大形の溝から13世紀代の遺物がほとんど出土していない点、これに対して外周を囲む溝の内側を土墨跡とみられる部分が巡るが、その部分で時期を遡る遺構がみられる点、屋敷内の内郭的空间であり、まさに居住空間と推定されている屋敷地の西側部分において、確認されていた柱穴の数が多すぎる点、13世紀の遺物が西側を中心とし、14世紀の遺物が東側にほとんど限定できる点、などから、内郭のピット群と溝の一部はこの屋敷地がつくられる以前の建物群の構造の一部であった可能性がある。なお遺物の分布域から推定されるこの時期の集落の規模は、B地区以外で1000m²未満程度である。

14世紀は調査区西端で散在的に遺物の分布がみられるが、これらは前代の名残りであり、基本的には前代までの配置構造と異なりB地区の屋敷を中心とした状況となる。

B地区の屋敷は四周を幅6.5m、深さ1.4mの溝で囲われた、いわゆる城館の景観を呈する。規模は東西が70m、南北の最大長が地中レーダーによる探査で29mと推定され、東辺をせばめた6角形を呈している。

溝の内側の構造は、溝の内側を巡る遺構の少ない周縁部とその内部に分けられ、内部は遺構の状況によりさらに東西の2ブロックに分けられる。

周縁部は溝にそって幅約6.5mの規模でみられ、屋敷地の西辺と南辺を囲っている。14世紀に該当する遺構・遺物はほとんどみられず、位置的にも土墨と考えることが可能であろう。また調査範囲内で溝を渡る施設の痕跡は認められず、平面形状からみても、その出入り口は東に設けられていたものと考え

られるが、やはり土壘と推定される周縁部の状況が、東辺では見られず、これらの推定を傍証するものとしている。

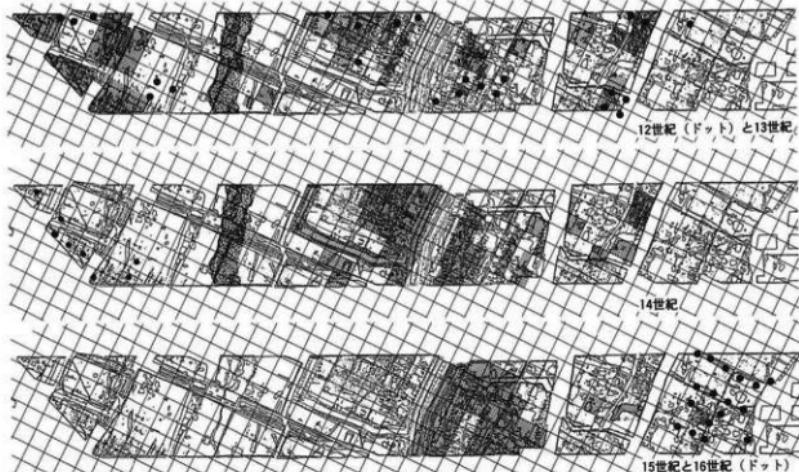
内部の状況であるが、西部はピットを中心とした分布、東部は土坑を中心とした分布となっており、また遺物の分布は東部に偏っている。このうち西部の遺構群についてはその一部を13世紀代集落の施設と推定しているが、結果的にこの時期においてもその立地は踏襲されて、東面を出入り口としてその対極にある位置に居住空間が維持されていたものと考えられる。

一方、東部はその前庭部として作業エリアなどに比定されることになる。ここでの遺構分布の状況は、ピットもみられるものの多数の土坑の配置に特徴付けられる。その形状は隅丸の方形を基本とし、内部にピットを伴うものもあり、規模は一辺3m前後である。このような構造の土坑は、主に東日本においてみられる方形堅穴と称される遺構の特徴に類似するものである。その性格については地下式または半地下式の住居または倉庫などの可能性が指摘されているが、掘立柱建物の配置とこのような堅穴状遺構の配置の分離がこの時期のこの地域においてもみられるとなれば、中世後期の館構造をめぐる汎日本の基準が得られることになるのであろうか。

一方、B地区の屋敷地を出した位置にあたるその東側地区においては、遺構の配置が不明であるが遺物の分布は比較的連続してA地区中央部まで認められている。なかでもこの分布の東端に位置する部分は、鉄製関係の遺構が集中しており、性格の特定できる屋地の配置を示すものとして興味深いものとなっている。

15世紀に入るとB地区の屋敷地が消滅し、当調査区全体での遺物分布の中心はその東側地区にのみ限定されることになる。また同様に16世紀代についてはさらに調査区の東端地区に限定して分布するものになっており、前代までみられた複数の屋地による村落形成の構造がみられないものになっている。

ところで、15世紀代を代表するB地区東部の遺構配置については、後代に連続する遺物の状況がみら



V-6-図1 I調査区の遺物出土分布図

れないと、当然、複数の錯綜する溝のうち最も新しい組み合わせから説明しなければならない。またこの作業を前提とすることにより、この地区の14世紀代の遺構配置についても一定の見通しをたてることができるはずである。詳細な検討は、前章の遺構説明をふまえた後、稿を改めることにしたいが、概要として15世紀代においては、B地区屋敷の東沿いに走る南北方向の溝を軸とした広い範囲での構造、14世紀代は15世紀代に比較して小規模な単位で分離した屋地の配置を推定できるものと仮定しておきたい。

2. III調査区

11世紀以降における当該調査区のデータは極めて少ない。11世紀中葉までの段階で、条里単位に近い区分で集落が配置され、この時期以降は13世紀の墓がみられるにすぎない。検出された建物群は、遺物と建物の軸により複数の群に区分することが可能とされるが、建物の軸による区分は、その集落が官衙の一部であった場合など、明らかに規格性が求められる場合を除き、それがたとえ条里村落であった場合でも、それら全体が条里に規制される景観以上の規範を建物の軸がもっていたのかどうかは必ずしも説得力のある条件とは言いにくい部分がある。ここではむしろこの集落に接する剣池の開発を考慮した村落の性格とそれを前提とした村落内構成員の推定とそれによる建物配置の意味を考える方法が必要ではないかと考える。稿を改めて検討してみたい。

一方、包含層まで拡大した遺物の整理によれば、中央部での各時代の遺物の集中が認められるが、これは南北方向に走る谷部への堆積によるものであり、平安時代以降の状況についてはその上流に中世村落がある条件を与えられたことになる。

第3節 時期別変遷

1. 11世紀以前

8世紀代の状況をみれば、掘立柱建物群に代表される遺構の分布はIII調査区に限定的にみえる。しかし遺物の分布は必ずしも特定的ではなく、I・II調査区を通じてみることができる。I・II調査区でみられる奈良時代以前の遺物を含んだ深い溝などはその傍証になり、特にI調査区ではそれ以前に遡る時期の生活遺構も存在しており、この時期の中心をIII調査区のみにおく必要は特にないものと言える。

さらにこの傾向を補うものとして9世紀代に入り、I調査区からは石帯の出土をみている。律令的規範を前提としたとき、III調査区と同時にこの時期の中心集落をI調査区におくことも可能かもしれない。

このように空間的視点での中心集落の復原は今回のデータからは困難な部分が多いが、編年的整理の上では、遺物の出土分布と概観的イメージにおいて8世紀の遺物量と9~11世紀の遺物量は、減少傾向で大きく異なる点が留意される。例えば9~10世紀を特徴付ける底部糸切りの須恵器椀および瓶子の分布は調査区全体を通じて散在的にみられ、詳細な時期の判定にはいたらないが、10~11世紀を特徴付ける黒色土器椀についても同様な傾向が認められる。しかしそれらの資料が出土分布のカウントにおいて8世紀代の状況から大きく減少していることは明らかであり、この地域における条里村落の変遷が均質でなかった状況を物語る資料となっている。

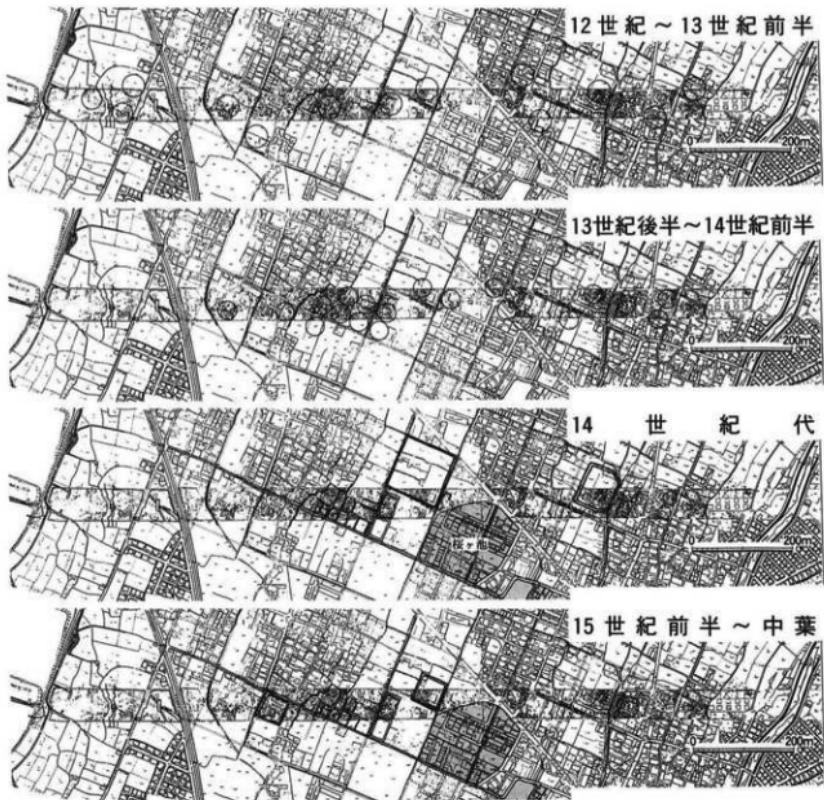
2. 12世紀

前までの遺物の出土状況は具体的な遺構の不明瞭さに関わらず、総体として平均的な景観を示していたものであったが、この時期以降は明らかにI・II調査区に限定的な村落配置を推定させる出土データが示されることになる。

II調査区でのこの時期のあり方は、条里単位に配置された集落の状況であった。一方、I調査区では6カ所において遺物の分布のまとまりが確認できた。これらの資料はいずれも包含層からの出土であり、地形とその後の土地利用によりいくらかの移動を考慮されなければならないものである。しかしそれを前提としてもなおこれら6カ所の群がそれぞれ条里の交差点に近い位置または条里線に近い位置で配されていることが復原できる。ただし東から3番目の群については、この群を条里内に納めた場合、その東の群と併せてこの条里に2つの集落が存在することになる点、自然地形による流路に近接しているところから他の群よりも遺物の移動距離の長い可能性のある点から、より上流にあたる南の条里にその本来の位置を求めてみた。

3. 13世紀

II調査区で復原された集落の配置の特徴は、条里単位を越える形での集落の集合状況であった。先に



V-6-図2 日置荘村落の変遷（○は集落の概略の規模）

述べたようにI調査区においてもその傾向はみられ、前代の集落位置を踏襲するものと、2カ所その関係を越えて集合する状況が認められた。このうちII調査区の集合した集落の個々の規模はおおむね1600m²（約500坪）、集落数は約7である。またI調査区では、西の集合が集落数は約4または5で個々の規模は900m²程度（約300坪）、中央から東よりの集合が集落数は約4または5で個々の規模は900～1600m²（約300～500坪）と考えられる。また集合間の距離はおよそ1町半程度である。

またこの時期の日置荘村落を特徴付けるのは鋳造工人の存在である。すでにII調査区においてはその検討が加えられているが、やはりI調査区でも断片的ではあるが、C地区西端とA地区西端で関係する資料が知られている。さらにII調査区の場合それは非集合の集落であったが、I調査区ではともに集合集落のなかにみられる点で興味深い。

4. 14世紀

II調査区では1町規模と推定される屋敷を中心として複数の面積からなる屋地が階層的な村落景観を示すことになった。規模を繰り返すと12000m²程度（約1町）が1カ所、2000m²程度（約600坪）が2カ所、1200m²程度（約360坪）が2カ所、600m²程度（約180坪）が9カ所である。いずれも屋敷地の境界には溝が巡らされ、なかでも1町規模と推定される屋敷地は幅約3.6mの溝が南辺を出入口として設けられている。またその南に連なる2000m²規模の屋地は東に出入口を持ち、ともに空閑地を通路として共有している。一方これらの西側に配されている600m²規模の屋地は南辺を道路に面し、さらに路地が設けられてその奥に位置する1200m²規模の屋地へつながっている。遺物の内容と定量分析によりそれらが個々特徴的な様相を示している点はすでに述べた。

I調査区ではB地区の大型屋敷を中心とした景観が復原される。発掘で明らかにされた南面及び東西辺の一部の状況及び地下探査調査の成果を基に復原すると、その平面形は四周を条里線からほぼ等間隔で控えた不定形な6角形であり、その意味で規模はほぼ1町に準ずるものと評価できよう。出入口は東に設けられており、II調査区の状況と同様に、出入口から1町の範囲に関連する屋地を配している。これららの規模と構造については資料整理の状況によりII調査区程には復原することができない段階にあるが、おおむね出入口に面する屋地は2000m²規模が2カ所、さらにその東側の屋地は600m²規模が數カ所推定できるものと考える。

なおこれらの村落間の距離は約2町である。

5. 15～16世紀中葉

I調査区ではB地区の屋敷地が消滅し、この時期の集落は1カ所となる。同様にII調査区でも前代において1町規模を持った屋敷地が規模を縮小し、別に同規模の屋敷地が出現する。I調査区の場合は明らかに村落の中心が異動したものであり、隣接する地理的条件においておそらく同様な状況がII調査区の村落に生じたものと考えて大過無いものと言えよう。

例えばII調査区ではE地区の縮小した屋敷地と同規模のH地区屋敷地が出現し、多量の鋳造関係遺物がみられる。これまでの日置荘村落の変遷は、古代以来西から東への移動をひとつの傾向としていた。したがってこの区画はそれに逆行するものであり、その意味でこの区画の居住者は従来の住人と関係の薄い新興の住人に代表される村落移動の原因と言えるかもしれない。

さてこの時期の状況を説明するのに最も適した視点は、近世村落との関係であるが、両者の景観を比べるとそこに村落の根幹に関わる大きな違いをみることができる。それが道路の軸である。既に述べてきたように古代以来、日置荘村落を貫徹した中世の景観は和泉と大和を結ぶ東西道を軸としていた。

そしてこれは単にこの遺跡近辺に限られた状況ではなく、広く丹南において看取される状況でもあった。しかし近世村落の景観は、東西道よりも原寺を縦断する南北道に沿って形成されているのである。中世から近世への転換期を経てかつてのメインストリートは脇道に転化してしまい、当然それに付随していた屋地群とその立地は、村落の中心から周縁へ立場を変えていったのである。この交通路の転換を担った原動力が河内・和泉をめぐる戦国期の社会情勢であったことは想像に難くないが、この問題について詳細に検討を加える余裕は今ここには無い。村落の移動を原因説明的にみる際に、丹南地域で考えられるひとつの可能性としておきたい。

第4節 まとめにかえて

これまでの整理を基に13～15世紀の村落景観について遺物の内容を踏まえたまとめを行う。既に1991年の動向（『史学雑誌』第101編5号）をまとめた中で海老澤褒氏が述べているところであるが、水野章二氏の領域論を待つまでもなく、「從来の中世村落論にもっとも欠けていたのが『村の城』と呼ばれるような小城郭の位置づけ」であった。考古学の分野においてもその状況は変わらず、それらが同時に認識される機会の希なことと、古代から下降する掘立柱建物研究に対して、近世より遡る城館研究の立場の違いもあり、それらはまったく別々のステージで語られることが多いものであった。これは14世紀代を大画期とする歴史観のなかで、結果的には一定の有効性を保ってきていたが、しかしこれが、本来の中世景観の復原に片手落ちであることは言うまでもない。

これに対して千田嘉博・多田暢久・小島道裕氏らは歴史地理の分野では常識的な視点であったこの問題に積極的にアプローチしていった点で大きく評価されている。そしてこの「小城郭に見る『懶構的』景観」について、日置荘遺跡はその形成過程のメカニズムと、複数モデルの存在とあわせて、集村の過程においてもその現象は単に複数の屋敷地が集合するだけではなく、階層差を持った任意の屋敷地が成長していく中でそれを核とした動きがみられた点など、この問題に関してふさわしい資料を提示できたものと考える。

特にII調査区で試みた定量分析をはじめとする作業は、村落を構成した各屋地の個別性を整理し、敷地規模・家財規模・所持品の各属性でそれぞれの格差を示すこととなった。

ところで当遺跡周辺は平安時代末期から鎌倉時代を中心に活躍した「丹南鉄物師」の本拠地として知られている。この鉄物師村落を含めた丹南村落の変遷と移動については既に別稿で考察しているものであるが、なかでも「日置荘」については仁安2年（1167）の藏人所牒で「興福寺領日置荘、雜役免除」の記事とともに、弘長2年（1262）の記事により、当地が金田・長曾根と並ぶ「右方」鉄物師の拠点であったことを知ることができる。丹南鉄物師の存在形態については既に河音能平氏・網野善彦氏らによって詳しい考察が行われているが、この「右方」鉄物師については「丹治」姓の鉄物師のなかにその姿をみることができる。例えば各地に残された梵鐘の銘文によって、河内の住人として承元4年（1210）の則高、建保3年（1215）の国則、同7年（1219）の則後、寛元4年（1246）の国高と国貞・国則ら、建長3年（1251）の国忠、文応元年（1260）の久友の名をみることができる。

一方日置荘村落では13世紀代においてI地区からまとまった形での铸造集落を、B・C地区からもその部分的な遺構を得ている。彼らは数町を隔てながら1町規模の屋敷地を所有するなかで、仏具と日常品を铸造し、定住的な生活をおくっていた。その地理的景観は魂村または小村的であり、社会的位置付けは支配者層であっても規模はそれほど大きなものではなかったものと思われる。考古学の方法によっ

て描き出されるこれらの説明は、かならずしも端的にその存在を明らかにするものではない。しかしそれによって整理される集落の規模・構造・生産力など様々な要素を再構築し、具体像を描いていく中で、次の段階では、その住人の人物像についてもやがて積極的な発言を行わなければならないものと考えている。

以上、限られた条件の中ではあったが、II調査区で行われた遺物のミクロ的な整理にポイントをおいて、中世村落の構造を説明する方法を考えてみた。特に14世紀代の階層的な景観が歴史的にどのような状況を示しているのか興味深いところである。残された多くの課題とあわせて、諸先学よりの多くのご教示・ご叱正をいただき、稿をあらためて考えることにしたい。

小稿は、日置荘遺跡正報告の作成に際し準備された日置荘遺跡全調査区の全遺物データを基にしている。このうち（その1）調査区の資料については整理を担当した森屋美佐子・中村淳穂氏のご協力により一部を除き殆どの資料について実見・評価を与えることができた。（その2）調査区の資料については同市本芳三氏との共同作業により調査を進めた。（その3）調査区の資料については同江浦洋氏の整理成果よりご教示いただいたものである。文末ではあるが、各氏に深く謝意を表するものである。なお、当該遺跡からは土器・陶磁器以外に大量の瓦が出土している。当該村落の構造分析には、遺構と土器・陶磁器を中心とした小稿の成果と合わせて瓦の出土状況の整理が必要である。正報告において市本氏はその瓦についての考察を用意している。合わせてご教示・ご検討いただければ幸いである。

第7章 日置荘遺跡I調査区B地区東部 出土遺物の基礎分析

中村 淳穂

日置荘遺跡I調査区のうち、B地区東部において中世の屋敷跡と考えられる、比較的まとまった遺構と遺物が検出された。ただ、後世の削平により、遺構間の関係が不明な部分もあるため、遺構の検討のみで複数の屋敷地を判別することは容易ではない状況である。一方、区画溝と考えられる溝からは、屋敷廃絶に伴う瓦などの遺物が錯乱した状態で検出されており、搬入品や輸入陶磁器、特殊な瓦質火鉢類が目立つ。この中には、離れた溝出土の遺物の間で、接合するものも多くみることができるが、接合関係はかなり混乱しているほか、遺物の時期差も認められる。そのため、個々の溝出土の遺物の検討においても溝間の関連性ははっきりしない。

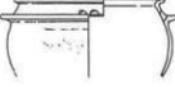
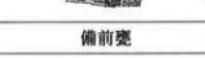
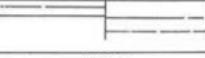
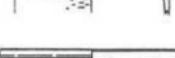
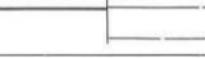
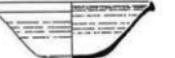
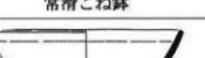
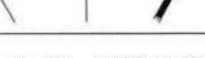
図化した遺物のみでは、各遺構の特徴が十分には表現できないため、この地区における遺構出土遺物の数量分析を試みることとする。遺構によっては遺物の出土量にかなり差があるため、在地の製品と搬入品、輸入品の比率により、遺構の特徴を知ることができると考えた。方法としては、各遺構毎に出土遺物の器種を分類し、それぞれについて計量を行った。なお、瓦類については、市本氏が日置荘遺跡II調査区出土瓦とともに分析を行っているため、そちらを参考にしていただきたい。

各遺物の器種分類は、図1に示す。須恵器・土師器・瓦質土器の甕、羽釜、擂鉢、こね鉢に関しては、口縁部の形状で分類した。瓦器碗は、口径の違いにより大きく2つに分類した。瓦器小皿は、内面に暗文やハケメが残るものとナデ調整のみのものに分類した。土師器皿・小皿は、いわゆる在地のものと京都系のものに大別した。須恵器以外の搬入品の国産陶器では、瀬戸美濃のほか、常滑は甕とこね鉢、備前は甕、壺、擂鉢などがみられる。輸入陶磁器には、青磁、白磁、天目茶碗、陶器などがあるが、破片が多く、復原できるものが少ないため、器形では分類していない。食膳具を除く瓦質土器は、多くの火鉢をはじめ香炉や仏具などもみられ、多種にわたる。

計量は、基本的に接合を行った後の個体数を扱ったが、口縁部による計量作業も一部併用している。この計量結果を表1に示す。遺構出土の遺物のみで、包含層出土の遺物は扱っていない。遺物の総計は4334点にのぼるが、この器種分類に該当しない遺物もあるため、実際の総計はこれを若干上回るものと考えられる。さらにこの結果をもとに、器種別に各遺構からの出土量を図化したものが、図2~5である。溝では出土量全体を扱っているため、溝内における遺物の密集度を表してはいない。

計量結果をもとに、遺構毎に器種構成比をグラフ化したものが図6~7である。器種のみの比率を表現したもので、それぞれの器形分類による比較は細かく、煩雑になるため、ここでは避けている。また、遺構出土全遺物については、12~16世紀の時期幅があるが、この地区全体の傾向をみるために作成した。この中で土師器小皿は、溝B-1や土器溜まりB-1で多量に出土していることから、ここでは比率がかなり大きくなっている。

遺構別のグラフは、全遺構について作成することが基本であるが、出土量の少ないものでは、構成比にかなりのばらつきが認められるため、なるべく出土量の多いもので作成した。さらに、時期別の傾向をみるために、14世紀代の遺構と15世紀以降の遺構から選別した。14世紀代の遺構では溝B-33と土坑B-55を、15世紀以降の遺構では考えられる3区画を代表する溝を選んだ。西半部の方形区画を区画する溝B-1と溝B-11、その北部の溝B-38、東半部南端の溝B-3、溝B-4、溝B-7である。

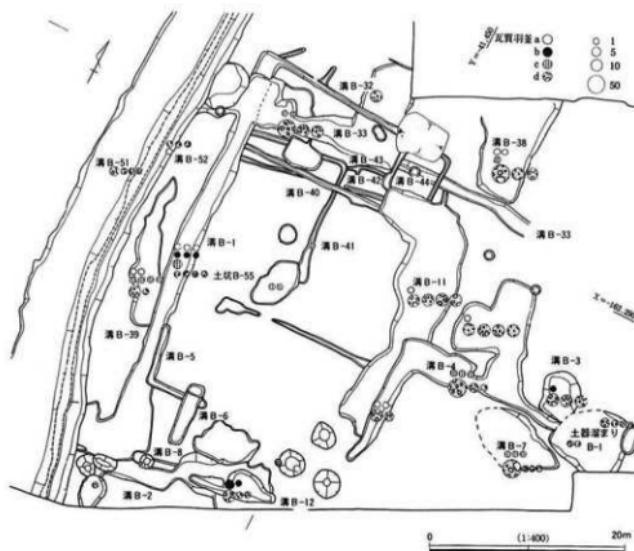
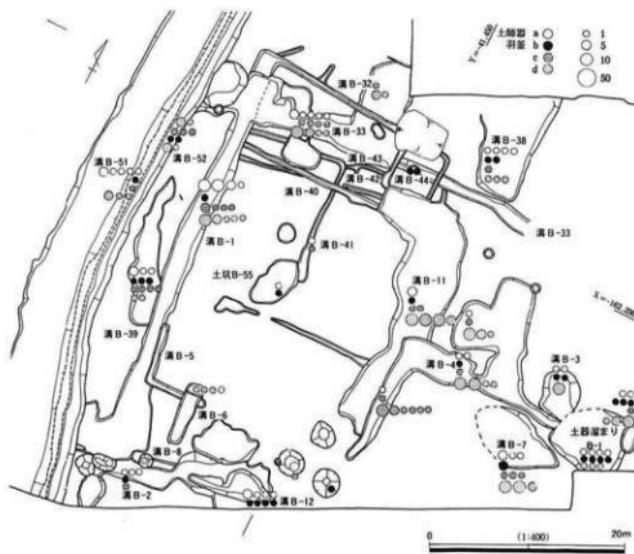
瓦器椀	須恵器・瓦質・土師器甕	瓦質・土師器羽釜	
			
			
a	b	a	
			
	c	b	
			
b	d	c	
備前甕			
瓦器小皿			
	a	b	
a			
			
b	b	d	
土師器皿	瓦質・土師器搗鉢		
			
a	a	a	
			
	b	b	
			
b	c	c	
土師器小皿			
			
a	d	a	
			
a			
			
b	b	b	
常滑こね鉢			
瓦質・土師器羽釜			

V-7-図1 I 調査区B地区東部土器器種分類図

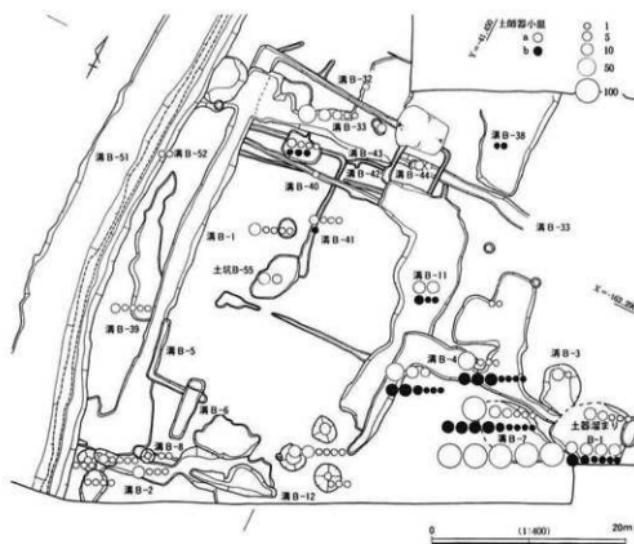
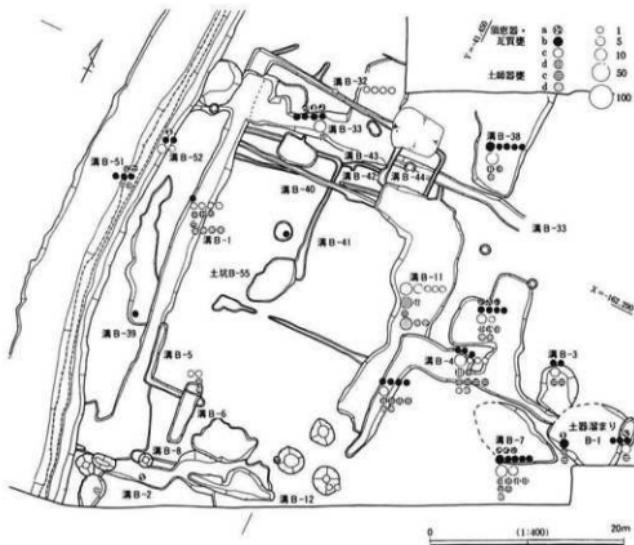
V-7-表1 I 調査区

遺構名	井戸B										溝B																	
	1	2	3	5	7	8	9	10	1	2	3	4	6	7	8	11	12	14	17	32	33	38	39	40	41	44	51	
須恵器壺	1								1																	3		
瓦質壺	a								1		3		3										3				2	
	b								1		2	11	9										4	9	1		3	
	c	2		1					4		5	25	16		18							10	11					
	d								3		13	4	11									2	2					
土師器壺	c			2					1		2	4	2	1													2	
	d								4		6	1	12									1	1					
瓦質羽釜	a								3		3				1								2	2				
	b								3		1				6													
	c	1							5		3		3									2	1	4	1			
	d		1	2					4	30	111	53	40	12							70	70	11				5	
土師器 羽釜	a								26	3	2	4	7	5	8						9	4	7	1	9			
	b	1		2					1	1	2	1	5	2	4						2	3					1	
	c								8	1	3		3	2							4	1	4	1	1			
	d		1	1					18	10	57	1	26	35						17	3	2				7		
瓦質擂鉢	a								1		1																	
	b	3	3	2	2				25		21	68	45	46	16	1	49	52	10	1	12							
	c								1		20	1	26	7			2										2	
土師器 擂鉢	b	1							4		16		5	11								4		1				
	c								3	11	1	9	10								1							
	d								18	10	57	1	26	35						2								
	a								1																			
須恵器 こね鉢	a								1																			
	b	2							2		1	4	1	1	7						5	13	3	1	1			
瓦器鉢									2		1	1	1	1	1											2		
	a								7	2	6	4										1						
土師器皿	b	1							2	1	3	1									7		112	3	9			
	a		1						1	2	3	45	29	10							3							
瓦器小皿	a			3	3				7	24		31									16	3						
	b								2													1						
土師器 小皿	a	3		6	1	5	166	13	11	121	118	2	20	151							67	9	1	8				
	b								11		62	49	7	5							2	1						
常滑	壺a			1																	1							
	壺b								2			2															1	
	こね鉢								1		1																	
備前	壺																				2							
	甕											1																
輸入 陶磁器	壠鉢a										1	1		1														
	壠鉢b										9	3	1										1	1				
青磁		2							19	1	2	23	7	7	1						2	4	5	2		2		
	白磁								8	2	7		2	2	1						2	4	1		1			
天目			1																	1							1	
	陶器											1																
瀬戸美濃																												
瓦質火鉢																												
香炉																												
仏具他																												
合計		15	3	8	9	19	2	12	11	350	27	106	710	3	471	3	288	231	1	1	4	388	205	73	2	24	0	55

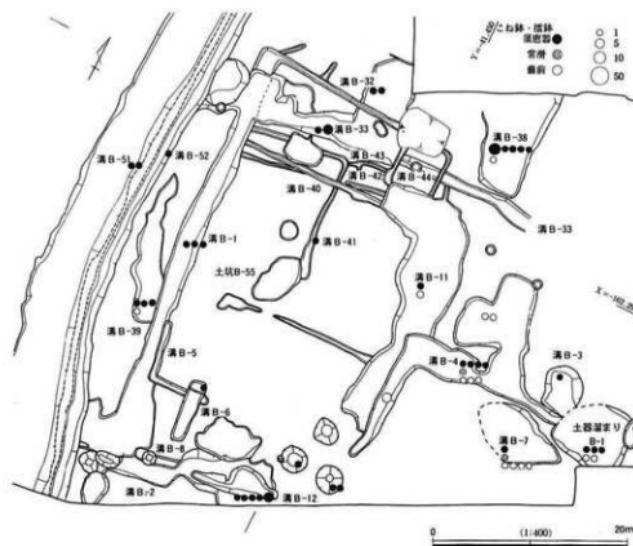
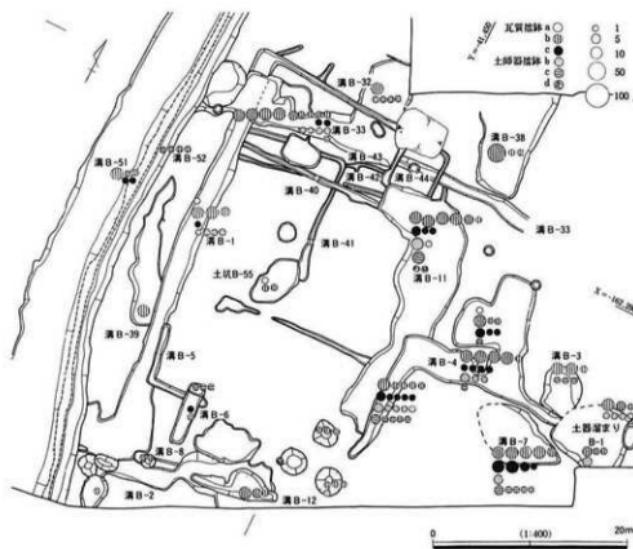
B地区東部土器器種構成表



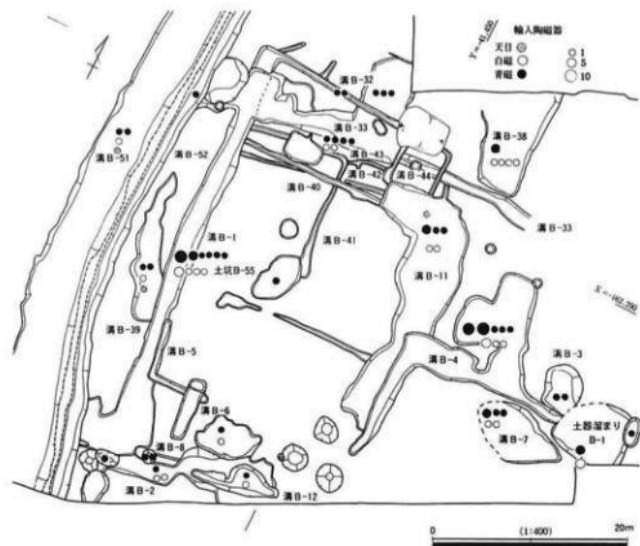
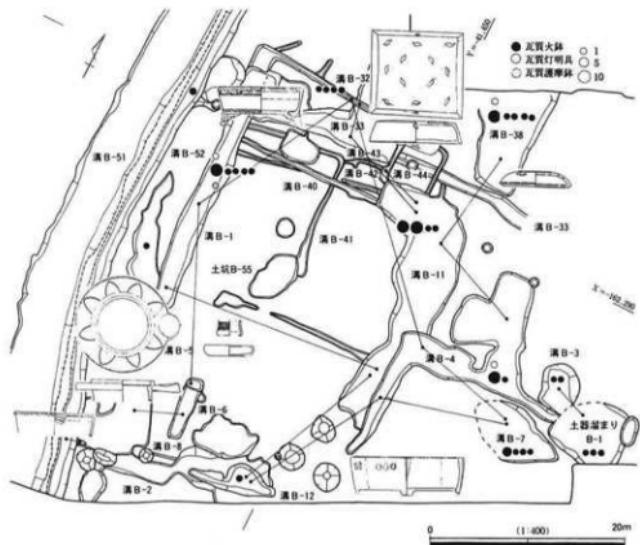
V-7-図2 I調査区B地区東部主要遺構土器分布図(1)



V - 7 - 図 3 I 調査区 B 地区東部主要遺構土器分布図 (2)

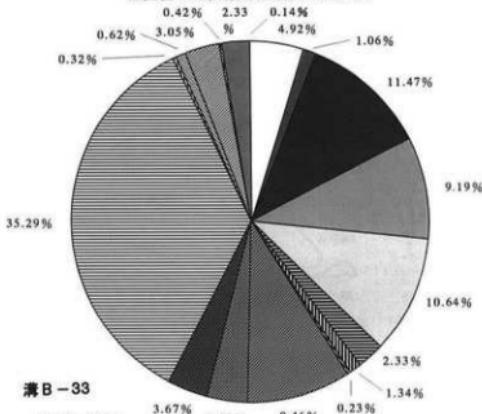


V-7-図4 I調査区B地区東部主要遺構土器分布図(3)

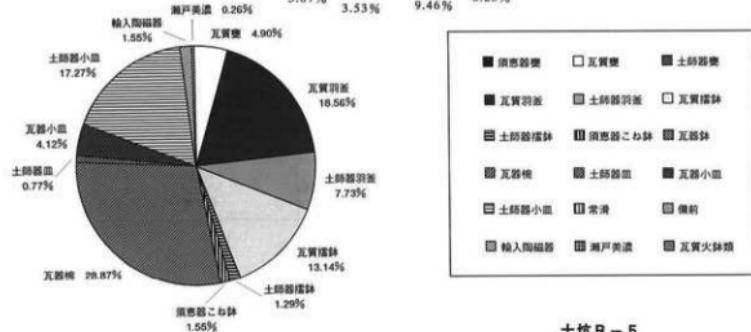


V-7-図5 I調査区B地区東部主要遺構土器分布図(4)

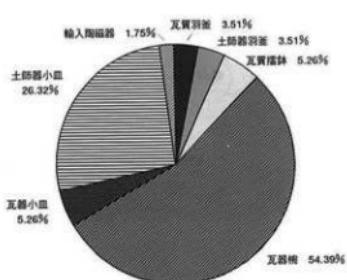
日置在B地区東部遺構出土全遺物



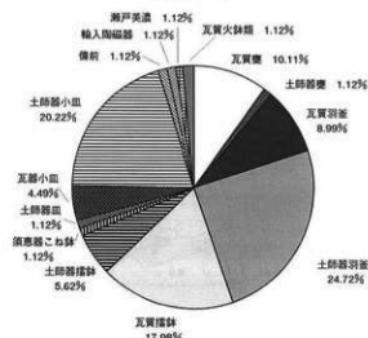
溝B-33



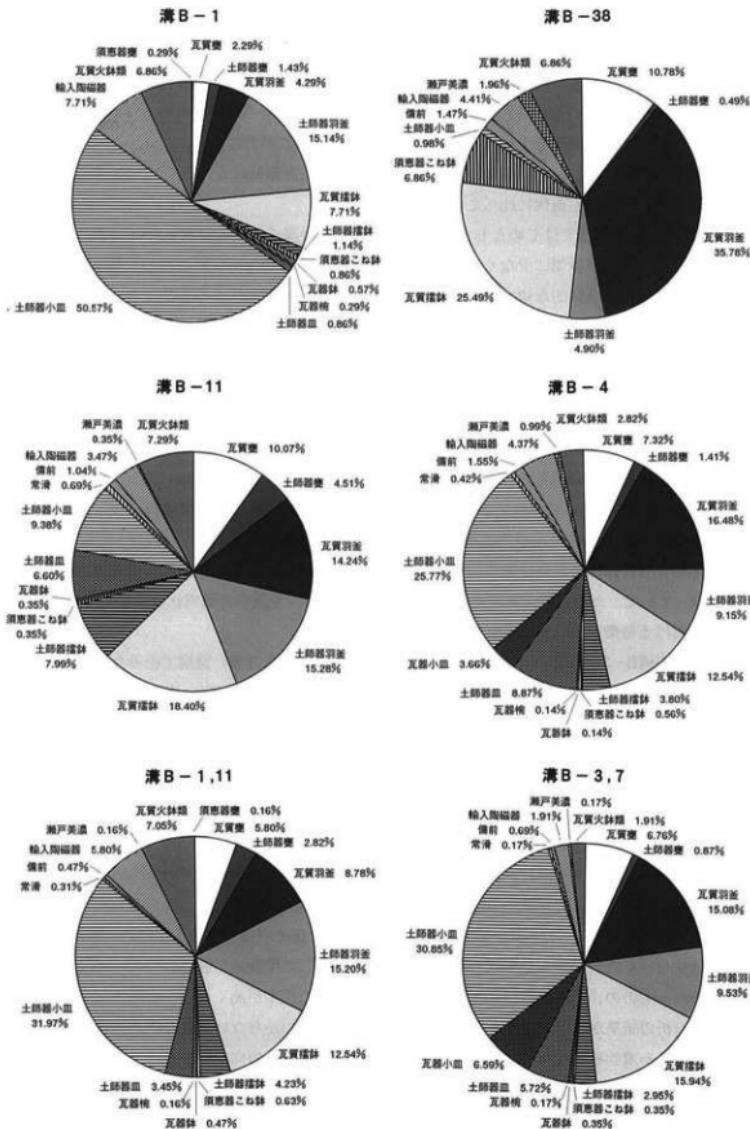
土坑B-55



土坑B-5



V-7-図6 I調査区B地区東部遺構別器種構成比(1)



V-7-図7 I調査区B地区東部遺構別器種構成比(2)

溝B-33では、瓦器碗をはじめとして瓦質製品（甕・羽釜・擂鉢）の比率が高い。搬入品や輸入品はほとんど出土しておらず、在地の土器で占められていることがわかる。土坑B-55では、瓦器碗と土師器小皿の比率が非常に高く、羽釜や擂鉢の比率が少ない。溝B-33と同様に搬入品はほとんどみられず、在地の土器で占められている。14世紀代の傾向として、在地の土器で構成されており、瓦器碗や土師器小皿の比率が高く、他地域からの搬入品はみられないということができる。

15世紀代の土坑B-5では、瓦質製品の比率は高いものの、瓦器碗はなくなり、土師器羽釜の比率が高くなる。また、搬入品も前代に比べてやや多くなる。

溝B-38では、瓦質羽釜をはじめとして、瓦質製品の比率が高く、約7割を占めている。さらに小型品の土師器小皿の比率が極端に少なく、瓦質、土師器を問わず、羽釜や擂鉢などの大型品が8割以上を占めている。これは、全体的な傾向というよりは、なにか特殊な理由によるものと考えられ、他の遺構ではみられない状況である。ただ在地の土器の器種構成は特徴的であるが、前代に比べて搬入品の比率は高くなってきており、着実に増加していることがわかる。

溝B-1と溝B-11は、関連する遺構と考えられるが、溝B-1で土師器小皿が多量に出土しているところから、単独では遺物の器種構成の傾向を知ることが困難な状況であった。そのため、溝B-1と溝B-11の統計をもとにグラフを作成し、この区画における遺物の器種構成を考えることとした。なお、溝B-1の中で土師器小皿の比率が目立つが、それ以外では輸入陶磁器や瓦質火鉢類の比率が高くなっていることが特徴的である。溝B-11単独では、溝B-1と異なり、土師器小皿の比率は低くなっている。甕や羽釜、擂鉢などの大型品の比率が7割近くを占めている。溝B-1よりは輸入陶磁器の比率は低いものの、搬入品や瓦質火鉢類の比率は高くなる。統計では大型品がほぼ半数で、内訳は全遺物の構成比に近いものとなっている。ただ、輸入陶磁器や瓦質火鉢類の比率は、全遺物の構成比よりもかなり高いため、この区画における特徴を表しているものと考えることができる。

東半部南端の溝B-3、溝B-4、溝B-7は、地区内で最も遺物量の多い遺構であるため、15~16世紀の傾向を表すものとして有効な情報を提供するものといえる。溝B-3と溝B-7については、溝B-4との関係ははっきりしないが、同じ区画内の遺構ということでまとめて大過ないものと考える。さらに、遺物の構成比において、両者に大差がないことも証左といえる。溝B-1と溝B-11の統計と比較すると、輸入陶磁器や瓦質火鉢類の比率は低くなるものの、大型品はほぼ半数を占め、建物の構成比は同様の結果がでている。隣接した土器溜まりB-1を含めて、土師器小皿の比率が高いことも当時の特徴を表すものと考えができるようである。

以上の結果から、B地区東部における遺構出土遺物の傾向をまとめると以下のようになる。14世紀代では、瓦器碗が多いほか、瓦質製品の比率が高く、搬入品や輸入陶磁器はほとんどみられない。15世紀代になると、土坑B-5でみられるように瓦器碗がなくなり、甕や羽釜などの大型品の比率が高くなる。また、量は少ないものの、搬入品がみられるようになる。さらに屋敷地の区画溝においては、各区画で特徴はみられるものの、全体の前代より搬入品や輸入陶磁器の比率が高くなるといえる。

この数量分析の結果が、どの程度有効なものかは現時点ではわからないが、日置荘遺跡I調査区のB地区東部における遺物構成比を示すことにより、中世の遺物の傾向をつかもうとしたものである。この比率が一般的なものか、特殊なものは論議の余地があると思われる。各地でいろいろな数量分析がなされており、資料も増えつつある現在、方法としては誤りがあるかもしれないが、ひとつの方法として試行しただけである。今後の中世土器研究の一助となれば、幸いである。